

愛知県博物館協会

40年史

愛知県博物館協会

愛知県博物館協会40年史の発行にあたって

愛知県博物館協会は、お陰をもちまして設立40周年を迎えることができました。

これもひとえに、加盟各館園の皆様方のご理解とご支援の賜物と、ここに厚く御礼を申し上げます。

この10年間を振り返れば、各種研修会などの従来活動に加え、「子どもと博物館研究会」の発足、文部省(現・文部科学省)の委嘱事業である「あいち子ども体験ミュージアム事業」の実施や、加盟館園のモノと人が名古屋市博物館に集った展覧会「いこまい!! 愛知のミュージアム展」の開催、「愛知のミュージアムガイドブック」の発行、協会ホームページの立ち上げなど数々の新規事業が行われました。

現在の加盟館園の数は130館で、10年前、20年前より確実に増えております。しかし、その一方で休館・閉館となる館や協会を退会される館も出ております。博物館界全体を見渡しますと、長く続く不況下での支持母体の財政状態の悪化によって事業・運営費の削減は慢性化し、さらには公の施設の管理運営を民間に委託できる「指定管理者制度」が平成18年度には本格実施されます。

こうした厳しい状況下にあって博物館に関わる者は、何をなすべきなのか、協会にも同じ問いかけをしなければならないでしょう。協会長として、協会の活動のみが一人歩きすることのないよう、皆様とともに考え、行動する組織でありたいと考えております。博物館の現状を踏まえて各種研修会やその他の事業を開催し、これまで以上に多くの皆様のご参加をいただき、さらに活気ある協会活動ができますよう、ご支援、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。



愛知県博物館協会
会長 樋口敬二

祝 辞

岐阜県博物館協会
会長 土野 守



愛知県博物館協会が、発足して
から40周年を迎えられましたこと
を心から御祝い申し上げます。

協会史を拝見しますと、貴協会
は昭和39年1月、愛知県地区博物
館連絡協議会として設立され、そ
の時の加盟団体は徳川美術館、豊橋向山天文台、愛知県
文化会館、市立名古屋科学館、日本モンキーセンターな
ど11施設でした。それが現在、130施設の加盟拡大へと発
展され、それぞれの館・園では国内外の美術品、博物館
資料等の特別展、充実した常設展、徳川氏ゆかりの庭園
など愛知県の秀でた特色を出されています。また、愛知
県内における博物館相互交流活動の熟成、市民文化活動
の総括的推進にも力を入れられている状況を拝見し、こ
こに協会の長年にわたる実績と会員皆様のご努力に敬意
を表するものであります。

岐阜県博物館協会の加盟施設では、本年3月に岐阜市歴
史博物館がボランティア説明員の増強と体験コーナーの
充実、4月には岐阜県美術館の空調設備がリニューアルさ
れました。美濃加茂市の昭和村も東海環状自動車の開
通によりサービスエリアから入館できるようになりました。
また、飛騨にあります歴史民俗資料館や美術館では、
市町村合併イベントなどによりたくさんの観光客を迎え、
国選定重要伝統的建造物群保存地区を核として周辺の農
村文化的空間、大規模な山岳自然景観などが活かされた
博物館として活性化しています。飛騨世界生活文化セン
ターでは、本年4月から新高山市合併記念として「東京国
立博物館巡回展」「合併市町村文化財展」を同時開催し、新
高山市の小学生4年生以上、中学生全学年を招待し、日本
美術の鑑賞をしていただきました。

愛知県と岐阜県は地形や自然風土、歴史的背景が違
いますが、博物館活動の目標は共通でありますし、隣県の
良好なアクセスもあります。今後共、両県博物館協会の
交流が深まり、愛知県博物館協会がますます発展されま
すことを祈念し、お祝いの言葉といたします。

四十歳おめでとうございます

三重県博物館協会
会長 中村 幸昭



年々歳々花合い似たれども、歳々年々人同じからず。月日の流れは早く、愛知県博物館協会が創立されてから40周年を迎えられ、誠におめでとうございます。人間の文化や伝統は尽きることなく継承されてゆくもので、博物館の歴史も先人のためまざる努力の積み重ねを経て、今日を迎えられたと思います。

21世紀は博物館の時代といっても過言ではないでしょう。「博物館」とは読んで字の如く、「博く物を見たり考えたりする館」といえます。自然、人文を問わず、そのレパートリーの広さでは、他の業界の比ではありません。今や環境の世紀といわれ、地球規模での環境保全が叫ばれています。空、陸、海とも、人間を含めた動植物にとってかけがえのない良好な自然が不可欠です。天文学から考古学まで、歴史や文化、芸術などさまざまな分野で、専門的に系統的に展示、研究が行われています。

愛知県は日本列島の真ん中にあり、本年はセントレアの開港や、愛・地球博の開幕など、国家的なプロジェクトが進行し、活性化が見込まれています。30数年前、三重県の博物館は10数館でしたが、現在は55館を数えています。連携を密にするため、愛知と三重の交流話が持ち上がり、当時、博物館明治村の海老沢学芸員をはじめ会員の方々の熱心なお話で両県の交流会がスタート、そして2年後に岐阜も加わり、東海三県の交流会が毎年行われています。

公私立を問わず、厳しい経済環境の中でその運営は苦勞しておられると思います。しかし博物館こそ、文部科学省の提唱する生涯学習教育を担う重要な柱です。体験学習も盛んで、地域の人々と連携し、NPOやボランティアとも共同して、教養を高めるには最適の施設です。自信と誇りをもって、お互いに頑張りましょう。

貴協会のご隆盛と、各館員の皆様の御健康とお幸せをお祈りし、メッセージといたします。

おめでとうございます。

CONTENTS

1. ごあいさつ 会長 名古屋市科学館 館長 樋口 敬二
2. 祝 辞 岐阜県博物館協会 会長 土野 守
三重県博物館協会 会長 中村 幸昭
7. I 愛知県博物館協会のあゆみ 一宮市博物館 久保 禎子
10. ・年表 徳川美術館 並木 昌史
19. II 愛知県博物館協会～10年のあゆみ
20. ・研修会…………… トヨタ博物館 宗沢 清美
26. ・子どもと博物館研究会…………… 徳川美術館 加藤 啓子
28. ・『いこまい!! 愛知のミュージアム展』顛末記… 名古屋市博物館 田中 青樹
30. ・ホームページ研究会…………… 名古屋市博物館 松村 冬樹
32. ・この10年の加盟館
- 切支丹遺跡博物館
 - はるひ美術館
 - 七宝町七宝焼アートヴィレッジ
 - 世界のタイル博物館
 - 高浜市やきものの里かわら美術館
 - 西尾市岩瀬文庫
 - サイクルギャラリー・ヤガミ自転車資料館
 - 尾西市三岸節子記念美術館
37. III これからの博物館
38. これからの博物館への期待
- ・これからの博物館…………… 徳川美術館 館長 徳川義宣
 - ・これからの博物館、10の指標…………… 豊橋市自然史博物館 館長 糸魚川淳二
 - ・40年の成果と期待される役割…………… 博物館明治村 館長 飯田喜四郎
 - ・少年少女よ、やって来い…………… 岡崎市美術博物館 館長 芳賀 徹
 - ・博物館の心理的基盤と将来像…………… 財団法人岩田洗心館 館長 岩田正人
 - ・これからの博物館に思うこと…………… 昭和美術館 副館長 服部昭義
 - ・新しい価値観を生むミュージアム… 鳳来町立鳳来寺山自然科学博物館 館長 横山良哲
47. IV 対談 博物館・美術館の今を語る
48. ・今、美術館を語る
- 愛知県美術館／木本文平、名古屋市美術館／神谷 浩、徳川美術館／小池富雄
取材：高浜市やきものの里かわら美術館／橋本久美、愛知県陶磁資料館／佐藤一信、
愛知県美術館／深山孝彰
54. ・今、美術館を語る
- 名古屋市美術館／山田 諭
取材：刈谷市美術館／松本育子
57. ・子どもたちに実験の楽しさを伝えたい
- 名古屋市科学館／佐伯平二
取材：七宝町七宝焼アートヴィレッジ／小林弘昌
59. ・対話のある博物館づくりを目指して
- 名古屋市博物館／水谷栄太郎
取材：高浜市やきものの里かわら美術館／天野卓哉
62. ・お客様とともに歩む
- 博物館明治村／中野裕子
取材：トヨタ博物館／宗沢清美

66. ・これからの美術館・博物館のあり方
岡崎市美術博物館／荒井信貴
取材：安城市歴史博物館／平岩里張
70. ・博物館人の来し方、行く末
東海市立平洲記念館／立松 彰、日本モンキーセンター／水野礼子
取材：豊橋市自然史博物館／藤原直子
72. ・ハングリーであれ 人が博物館をつくる
豊橋市自然史博物館／松岡啓二
取材：岡崎市美術博物館／浦野加穂子
75. ・鳳来寺山自然科学博物館 開館40周年を迎えて
鳳来町立鳳来寺山自然科学博物館／加藤貞亨
取材：徳川美術館／加藤啓子
78. ・博物館、来し方行く末
常滑市民俗資料館／中野晴久
取材：名古屋市秀吉清正記念館／加藤和俊
80. ・モノにこだわり、モノと人の思いをともに残す
師勝町歴史民俗資料館／市橋芳則
取材：東浦町郷土資料館／楠 美代子
82. ・発信する役割…学芸員がつなぐもの
愛知県陶磁資料館／仲野泰裕
取材：名古屋市博物館／岡村弘子
84. ・地域の人が集まる場所を目指して
武豊町歴史民俗資料館／奥川弘成
取材：一宮市博物館／久保禎子
86. ・田原市博物館 ー開館10周年を迎えてー
田原市博物館／鈴木利昌
取材：渥美町郷土資料館／天野敏規
88. ・企業の美術館として、優れたコレクションで社会に貢献
メナード美術館／村上久美
取材：愛知県美術館／深山孝彰
91. ・神社の博物館 昔・今そして未来へ
熱田神宮宝物館／野村辰美
取材：徳川美術館／並木昌史
94. ・「ミュージアム・マネージメント」の視点をもて
UFJ銀行貨幣資料館／工藤洋久
高浜市やきもの里かわら美術館／天野卓哉
99. V 学芸員奮戦記
- 尾西市三岸節子記念美術館／伊藤和彦
 - 豊田市郷土資料館／伊藤智子
 - 一宮市博物館／土本典生
 - トヨタ博物館／西川 稔
 - 豊橋市自然史博物館／長谷川道明
 - 名古屋市博物館／武藤 真
 - 一宮市博物館／毛受英彦
 - 稲沢市荻須記念美術館／山田美佐子
104. 愛知県博物館協会加盟施設一覧
107. 愛知県博物館協会規約

愛知県博物館協会 のあゆみ

I

- ・愛知県博物館協会のあゆみ
- ・年 表

I

愛知県博物館協会のあゆみ

愛知県博物館協会は、昭和37年6月に開催された神奈川県博物館協会と財団法人日本モンキーセンターとの交換研究会の際に愛知県下の博物館施設の交流が始まったことに端を発し、前身となる連絡協議会の発足へと発展した。昭和39年1月16日、愛知地区博物館連絡協議会結成総会を開催し、加盟館11館で協議会は発足したのである。その10月には現在78号(平成15年3月31日現在)を数える『愛知の博物館』創刊号が発行され、翌年の昭和40年には学芸員の交流誌とも言える『東西南北』の発刊、そして『学術職員研究会』が開かれるようになり、愛知県内の学芸員が集い・学びあう場が生まれたと言える。当初の事務局は豊橋向山天文台で行われ、金子功氏や廣瀬鎮氏の尽力により運営されていった。その後事務局は愛知県文化会館(現在の愛知県美術館)、愛知県陶磁資料館を経て、平成12年度から名古屋市博物館・愛知県美術館・名古屋市科学館・愛知県陶磁資料館4館の間で、2年交替で担うことになっている。

特に、現在の職員研修会の前身となる「学術職員研究会」の名称も、昭和45年には「学芸職員研修会」となり、徐々に学芸員の仕事が認められ定着していく様子が見えてくる。

昭和40年代の活動を見ると、学芸員の資質向上を目指す動き、そして小中学校教諭を招いて実施する「愛博協文化財探勝の会」、そして名鉄メルサ6階通路で開催した「レッツゴーミュージアム」展など、この10年間に実施した「いこまい!!愛知のミュージアム展」や

「子どもと博物館研究会」の活動の理念がすでにこの頃実施されていたことがわかる。

その後、20周年記念事業が始まり、記念誌に採録するために企画された「若手学芸員大いに語る」の対談をきっかけに始まったのが「学芸懇談会」である。昭和58年から始まったこの会合は、奇数月の第3水曜日、仕事を終えた夕方に伏見の中華料理店に集い、話題提供者が提示する学校利用やコンピュータ利用、地域との関わりなど多様な話題を議論し、近況報告するものであった(『東西南北』NO.184)。20年史の中で岩田正人氏が述べている学芸懇の理想と現実と未来像が、大変興味深い。「若手学芸員大いに語る」に登場し、学芸懇談会の常連であったみなさんは今や学芸部長となり、今回の対談においてインタビューを受ける側となっている。

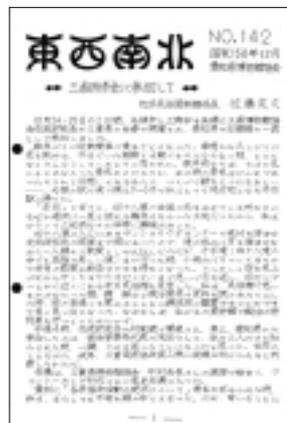
また、博物館が取り扱う分野の多様性に即応するために、昭和58年には歴民部会第1回研修会部門研修会が開かれる。現在、3部門ある部門別研修会も一度に始まったわけではなく、昭和59年に美術部門研修会が始まり、平成元年から自然科学部門研修会が始まって現在に至っている。

これまで述べた事業の中で、現在でも継続しているのは「愛知の博物館」「おでかけガイド」の刊行、「博物館等職員研修会」「部門別研修会」の開催で、「東西南北」「学芸懇談会」「愛博協文化財探勝の会」などは姿を消した。

この10年の間には、平成11年の「子どもと



「愛知の博物館」64号(1996年)



「東西南北」142号(1983年)



博物館研究会」の発足・事業の展開や、平成13年の「ホームページ研究会」の発足および愛知県博物館協会のホームページ公開がある。また、名古屋市博物館を会場として開催した「いこまい!!愛知のミュージアム展」や、加盟館全館を掲載し、書店での販売を可能にしたガイドブックの刊行は画期的であったと思う。「ホームページ研究会」は現在も活動を継続し、公式ホームページの充実にも努めている。「子どもと博物館研究会」については、国庫補助を得て実施した2つの事業の終了により、目指すところはある程度達成したとして愛知県博物館協会内においては休眠した。しかし、学芸員相互の緩やかな連携を残しており、今後、連携をすべき事態が生じた際には即座に対応できる状況である。

加盟館130館となった現在、組織が大きくなってしまったが故に、当初の意気込みが消え成熟を終えた学会のように、愛知県博物館協会は定例化、形骸化してしまったように思う。

最近では、神奈川県博物館協会との関係を知らない世代も多くなり、愛知県博物館協会の役割や意義を問う議論も聞かれる。しかし、人間が一人で生きられないように、それぞれの組織も独りよがりでは存立しえない。高い質の展覧会や普及活動、入館者数などお互い競い合いながらも、いざというときは世間の波に丸となって立ち向かっていけるような組織であって欲しいと思う。「形骸化」からは、何も生まれない。

学問において研究史を軽んじるのが許されないのと同様、組織においてもその設立の経緯や過程を無視して批判することは許されない。どのような経緯で愛知県博物館協会が生まれ、時代の流れとともにさまざまな研究会が生まれ、そして消えていったか。年表を眺めると、その動きや思想が非常に良くわかる。この流れは、全国的な動きにも一致するものであろう。

そして、まだ世間で「博物館」「学芸員」が知られていない時代、自館の仕事をこなしつつ、志を持って協会を取りまとめ、その存在意義を訴えてきた「人」の姿を忘れてはならない。私が学芸員になった17年前、職業を聞かれても「学芸員」とは絶対に言わなかった。説明するのが面倒なくらい、その職種は認知されていなかった。今や資格の保有が何の意味も持たないほど数多にばらまかれ、価値が下がってしまった資格である。苦勞をして、博物館や学芸員を広く普及するために奔走した、感謝しても余りある先駆者は、今何を思っておられるであろうか。

『愛知県博物館協会20年史』にある廣瀬鎮氏の「愛知県博物館協会20年のあゆみ」には、現在の愛博協の組織成立の経緯が述べられている。是非とも「愛知の博物館」「東西南北」「愛知県博物館協会20年史」「愛知県博物館協会30年史」を紐解き、協会のこれからの方向性や役割を考えていきたいものである。

(一宮市博物館学芸員 久保禎子)



『活きている博物館』(2000年)



歴史部門研修会
(平成8年度 於：武豊町
歴史民俗資料館「鉄から
鉄器へ」)

博物館等職員研修会
(平成15年度 於：博物館
明治村「博覧会と博物館」)



昭和37年度～平成5年度までの愛知県博物館協会のあゆみ

年表作成／徳川美術館 学芸員 並木昌史

年月日	事項
昭和37年	
6月28～30日	犬山市の犬山ユースホテルにおいて神奈川県博物館協会と財団法人日本モンキーセンターとの間で交換研究会が開催され、神奈川県博物館協会と愛知県下の博物館施設の交流が始まる。
昭和38年	
9月11日	日本博物館協会より東海地区ブロック会議開催の要望あり、神奈川・静岡・愛知・岐阜・山梨の5県24施設が熱海美術館にて会合、「東海地区博物館連絡協議会」(以下、東海博とす)結成。第1回総会が開催される。
11月20日	神奈川県博物館協会星野直隆事務局長(金沢文庫)より東海博に各県2名の理事選出の要請がある。
12月6日	愛知地区博物館連絡協議会結成委員会を愛知県文化会館において開催。
昭和39年	
1月16日	愛知地区博物館連絡協議会結成総会、加盟11館園にて発足、年会費1口500円。 理事(会長) 徳川美術館 館長 熊沢五六 理事(副会長) 愛知県文化会館 館長 魚住東洋 理事 市立名古屋科学館 事務局長 浅野正徳 理事 豊橋向山天文台 台長 金子 功 理事 日本モンキーセンター学芸次長 廣瀬 鎮
6月25日	愛知地区博物館連絡協議会(以下、愛博連協とす)理事会開催、於愛知県文化会館、4施設参加、加盟館園14施設となる(徳川美術館、愛知県文化会館、設楽町立奥三河郷土館、市立名古屋科学館、犬山自然植物園、鳳来寺山自然科学博物館、東山動物園、東山植物園、蒲郡市竹島水族館、日本モンキーセンター、豊橋向山天文台、常滑市立陶芸研究所、名古屋城管理事務所、渥美フラワーセンター)。
7月3日	昭和39年度愛博連協総会開催、於鳳来寺山自然科学博物館、参加10施設、予算額11,000円。
11月13～14日	東海博昭和39年度総会開催、於市立名古屋科学館(当番愛知県)
10月15日	『愛知の博物館』創刊号発行。
12月3日	愛博連協職員名簿作成、配布。
昭和40年	
2月28日	第1回学術職員研究会(以下、学職研とす)を明治村において開催、「神奈川県博の学芸員研究会10年のあゆみ」(横須賀市立自然科学博物館柴田敏隆)、明治村見学(解説伊藤昭夫)、参加者17名。
4月	『東西南北』創刊号発行(編集、愛博連協事務局、金子功他、印刷:豊橋向山天文台)。
4月30日	理事会開催、於愛知県文化会館。
5月8日	昭和40年度愛博連協総会開催、於日本モンキーセンター、犬山自然植物園。
5月20日	第2回学職研開催、於市立名古屋科学館、「欧米の博物館を訪ねて」(三重大学権野季雄)、参加者14名。
6月7日	東海博昭和40年度総会参加、於久能山東照宮(静岡)。
6月17～18日	第3回学職研開催、於鳳来寺山自然科学博物館(神奈川県博と交換研究会)、「写真応用の展示説明札の製作」(豊橋向山天文台小木曾俊義)、「長篠戦史について」(長篠城歴史保存会会長丸山彰)、参加者14名。
7月26日	第4回学職研開催、於愛知県文化会館、「博物館法における諸問題」(徳川美術館木下稔、日本モンキーセンター廣瀬鎮)、「東北の博物館をみて」(豊橋向山天文台金子功)「第8回新象展」(解説吉川伸)、参加者10名。
9月29日	第5回学職研開催、於市立名古屋科学館、「模写と復元」(徳川美術館櫻井清香)、「昭和40年学芸員研修会伝達講習」(市立名古屋科学館滝本正二、日本モンキーセンター廣瀬鎮)、「徳川家康展」(解説熊沢五六)、参加者9名。
昭和41年	
2月4日	理事会開催、於県文化会館。
3月2日	愛博連協編集委員会開催、「東西南北」に月予定資料、人事、諸活動記録収録。昭和40年度:『愛知の博物館』No.2、3、4;『東西南北』No.1、2、3、4、5、6発行。愛博連協編集委員会設置。
5月14日	昭和41年度総会理事会開催、第6回学職研開催、於蒲郡竹島水族館。三河湾・乃木山・岸間コレクション等見学、参加13施設20名。
5月26～27日	東海博昭和41年度理事会・総会参加、於神奈川県箱根町湯本瀧水苑。施設見学=箱根美術館・箱根自然博物館等。
7月7日	編集委員会開催、於市立名古屋科学館。
7月21日	理事会開催、於県文化会館、出席6名、第15回全国博物館大会準備。
7月28日	第7回学職研開催、於名古屋市農業センター、「施設紹介」(横井弥市)。
8月7日	編集委員会開催、於サンモリッツ、定期刊行物編集。
9月1日	第8回学職研開催、於市立名古屋科学館、「欧米の博物館をみて」(久恒館長)。
9月21日	編集委員会開催、於市立名古屋科学館、第15回全国博物館大会資料作成。

年月日	事項
10月5日	編集委員会開催、於市立名古屋科学館、第15回全国博物館大会資料作成。
10月12日	理事会・第9回学職研開催、於県文化会館、全国大会要項打合せ。
11月16日	理事会開催、於県文化会館、日博協星野事務局長を囲む協議。
昭和42年	
1月10日	理事会開催、於県文化会館、日博協全国大会会員協力依頼他。
1月30日	愛博連協臨時総会開催、於県文化会館、日博協全国大会要項および、役員事務分担、参加者17名。
2月13日	編集委員会開催、於県文化会館、定期刊行物、大会資料。
3月7日	編集委員会開催、於明治村、大会資料。
3月15日	理事会開催、於県文化会館、星野事務局長と大会最終協議、参加者13名。昭和41年度:『愛知の博物館』No.5、6、7、8;『東西南北』No.7、8、9、10発行。新加盟館園:熱田神宮宝物館、犬山城、豊田市郷土資料館。編集委員:金子功、滝本正二、木下稔、成瀬錠一、廣瀬鎮。
4月6日	昭和42年度愛博連協総会・理事会および第10回学職研開催、於名古屋城、参加12施設20名。この折「愛知県博物館協会」(以下、愛博協とす)と名称変更。
4月13日	編集委員会開催、於県文化会館。
4月26日	編集委員会開催、於県文化会館。
5月19日	編集委員会開催、於県文化会館。
5月31日	編集委員会開催、於県文化会館。
6月1日	施設要覧特集号発行。
6月中旬	『東三河博物館施設案内』(24頁、色刷)出版し、管内各学校へ配布。
6月27～30日	第15回全国博物館大会愛知県大会開催、於名古屋市教育館、県文化会館、市立名古屋科学館。県費補助30万円。
6月27日	開会式、記念講演、全体会議、シンポジウム。
6月28日	分科会、研修会。
6月29日	全体会議、閉会式。
6月30日	県下博物館施設見学。
7月21日	編集委員会開催、於名古屋科学館、大会報告書作製他。
8月10日	編集委員会開催、於名古屋科学館、大会報告書他。
9月13日	編集委員会開催、於熱田神宮宝物館、定期刊行物。
10月13～14日	東海博昭和42年度理事会・総会参加、於岐阜県高山市公民館(当番岐阜県)。
11月1日	編集委員会開催、於県文化会館。
11月9日	理事会開催、於県文化会館、昭和43年度事業計画、昭和42年度事業報告。あらたに昭和43年度県費補助(30万円)交付申請を決定。
昭和43年	
2月2日	編集委員会開催、於名古屋科学館。
2月20日	第1回愛博協研究会開催。於華山文庫。華山文庫・東大寺大仏殿瓦場跡等見学他。「渥美町一帯の植物について」「瓦場発掘について」(渥美町高平修一、渡辺美吉)昭和42年度:『愛知の博物館』No.9、10、11;『東西南北』No.11、12、13、14、15、16発行。新加盟館園:豊橋市文化会館郷土資料室、名古屋市蓬左文庫、名古屋市豊清二公顕彰館、小牧市歴史館。
5月30日	昭和43年度愛博協総会・理事会開催、於明治村、参加19施設24名。会則一部改正、全国博物館週間行事として各種の事業計画が組まれる。当年度より各理事館1～2名の実行委員選出をもとめ事業の充実をはかる。役員改選により、以下のとおり新役員がきまる。 理事(会長) 徳川美術館 館長 熊沢五六 理事(副会長) 県文化会館 館長 松尾 信資 理事 市立名古屋科学館 事務局長 浅野 正徳 理事 日本モンキーセンター 所長 宮地伝三郎 理事 豊橋向山天文台 台長 金子 功 理事 鳳来寺山自然科学博物館 館長 夏目 克己 理事 博物館明治村 館長 谷口 吉郎 理事 豊田市郷土資料館 館長 兵藤 才市 理事 名古屋城天守閣管理事務所 所長 佐藤 吉正 理事 熱田神宮宝物館 館長 岡本 健治
6月6～7日	東海博昭和43年度総会参加、於富士山麓河口湖富士急ハイランドホテル(静岡県)。17施設25名参加。
9月3日	実行委員会開催、於県文化会館、文化講演会実施案他。
9月9・30日	パネル巡回展小委員会開催、於県文化会館、製作計画。
10月10～20日	第10回理科展、愛博協・日本モンキーセンターの共催で開催、於市立名古屋科学館。
10月10日～11月30日	愛博協パネル巡回展開催、於市立名古屋科学館、名古屋市教育館、豊田市郷土資料館。
10月14日	愛博協文化講演会開催、於名古屋市教育館、「世界における日本の美術」(谷川徹三、村井国男)。
10月	真福寺文庫(大須文庫)新規加盟。
11月12日	実行委員会開催、於熱田神宮宝物館、定期刊行物。
11月17日	名古屋市内小中高校社会科担当教諭を招待して、愛博協文化財探勝の会開

年月日	事項
12月5～6日	催、徳川美術館・蓬左文庫・豊清二公顕彰館・甚目寺・尾張国分寺取蔵庫・妙興寺、外2施設見学、参加者30名。 県外研修会開催、鎌倉国宝館・葉山観光館・油壺水族館・城ヶ島町立博物館・横須賀市立博物館・記念艦三笠・横浜海洋科学博物館・神奈川県立博物館等見学。参加15施設22名。
昭和44年	
1月28日	第2回愛博協研修会開催、於豊橋向山天文台、展示用説明札製作実技講習会、参加12施設17名。 第3回実行委開催、定期刊行物。
2月12日	実行委員会開催、於県文化会館、昭和44年度事業計画、東海博総会他。
3月1日	理事会開催、於県文化会館、昭和43年度事業報告、昭和44年度事業計画他。昭和43年度：「愛知の博物館」No・12、13：「東西南北」No・17、18、19、20：「第15回全国博物館大会学芸員懇談会記録」発行。新加盟館園：真福寺文庫、加盟24館園となる。
4月24日	昭和44年度愛博協総会・理事会開催、於鳳来寺山自然科学博物館、参加26施設。
4月28日	実行委員会開催、於県文化会館、研修会・定期刊行物・文化財探勝の会他。
5月22～23日	東海博昭和44年度総会開催、於日本モンキーセンター附属博物館・明治村(当番愛知県)。
9月中旬	全国博物館週間にちなみ、「愛知県博物館要図」を県下公立小中学校1,200余校に配布。
9月23日	全国博物館週間行事として、西三河の小中学校教諭47名を招待して、第2回文化財探勝の会開催、華蔵寺・大樹寺・豊田市郷土資料館を見学。
9月25日	実行委員会開催。
10月1～5日	愛博協主催「愛知の博物館展」開催、於名古屋科学館、参加20施設。後援：毎日新聞社、愛知県・名古屋教育委員会。
11月6日	実行委員会開催。
11月26～27日	県外研修会開催、京都国立博物館・京都府立総合資料館・白鶴美術館・明石天文科学館他を見学。参加者11名。
昭和45年	
2月25日	実行委員会開催、於県文化会館。
3月20日	愛博協研修会開催、於名古屋科学館、「メモーションカメラによる見学者行動調査」、「カーネギー博物館の教育活動」(廣瀬鎮)、参加7施設20名。 昭和44年度：壁新聞配布、「愛知県博物館要図」作成し県下公立小中学校(1,200校)へ配布、ガイドブック「愛知の博物館」改訂版を作成し加盟館園等へ配布、「東西南北」No.21～31：「愛知の博物館」No.14、15、16発行。
4月14日	昭和45年度愛博協総会・理事会開催、参加20施設。役員改選。 理事(会長) 徳川美術館 館長 熊沢五六 理事(副会長) 県文化会館 館長 松尾信資 理事 市立名古屋科学館 館長 久恒中陽 理事 日本モンキーセンター 館長 田中利男 理事 博物館明治村 館長 谷口吉郎 理事 豊田市郷土資料館 館長 兵藤才市 理事 鳳来寺山自然科学博物館 館長 夏日克己 理事 熱田神宮宝物館 館長 岡本健治 監事 名古屋城管理事務所 所長 河口武富 監事 切支丹遺蹟博物館 館長 佐藤一
5月19～20日	東海博昭和45年度総会参加、於神奈川県立博物館(当番神奈川県)。
6月11日	理事会開催、於県文化会館、当年度事業分担について協議。
8月28日	実行委員会開催、於県文化会館。
9月2日	実行委員会開催、於県文化会館、「あいちの博物館展」につき打合せ。
10月9～14日	名鉄メルサ6階通路にて「レッツゴーミュージアム」展開催、参加25施設。伊良湖自然科学博物館入会。
12月11日	愛博協第1回学芸員研修会(以下、学職研修とす)開催、於豊田市郷土資料館、「博物館における資料の整理・分類カードについて」(講演)、「欧米の博物館」(名古屋科学館稲月光)、参加4施設11名。
12月	荒木集成館が入会。
昭和46年	
3月20日	愛博協第2回学職研修開催、於常滑市立陶芸研究所、「博物館事務資料をめぐって」(日本モンキーセンター三戸幸久)、「福岡県直方市のサルの石像」(廣瀬鎮)、「照明について」(名古屋科学館三輪克)、「常滑古陶について」(常滑市立陶芸研究所沢田由治)、参加6施設11名。 昭和45年度：壁新聞配布、「愛知県博物館要図」、ガイドブック「愛知の博物館」増刷、「東西南北」No.32～43、「愛知の博物館」No.17発行。 財団法人岩田洗心館入会。
4月	財団法人岩田洗心館入会。
5月28日	昭和46年度愛博協総会・理事会開催、於豊田市立図書館。
6月22～25日	県外研修会開催、北方文化博物館・佐渡博物館・相川郷土博物館・長岡市郷土資料館・長岡市立科学博物館を見学。参加6施設16名。
7月1日	東海博昭和46年度総会参加、於東海大学海洋科学博物館(当番静岡県)。

年月日	事項
8月11日	理事会開催、於県文化会館。ガイドブック「愛知の博物館」作成のため編集委員会を組織する。
8月25日	ガイドブック編集委員会開催、於県文化会館。
12月14日	ガイドブック編集委員会開催、於県文化会館。
昭和47年	
1月21日	ガイドブック編集委員会開催、於県文化会館。
3月8日	愛博協県内研修会(学職研修)開催、於明治村、「資料の整理分類研究」(熱田神宮太田正弘)、「韓国の博物館をめぐって」(金子功)、参加8施設10名。 ガイドブック編集委員会開催、於県文化会館。
3月23日	昭和46年度：「東西南北」No.44～55：「愛知の博物館」No.18発行。
5月24日	昭和47年度愛博協総会・理事会開催、於切支丹遺蹟博物館、参加18施設23名。
7月14日	理事会開催、於県文化会館、当年度事業分担等について。
9月9日	東海博昭和47年度総会参加、於郡上郡明方村中央公民館(当番岐阜県)。シンポジウム「現在の博物館における問題点」他。
10月11日	愛知・岐阜両県博物館協会同学芸員研修会開催、於内藤記念くすり資料館、「台湾国立博物館の展示」(金子功)、「ソヴェト宗教博物館をめぐる焼身自殺、民族自決論」(古田幸平)、「教育活動」(三輪克)、参加15施設22名。
11月26日	愛博協「東三河文化財探勝の会」開催、豊川市三明寺・大原葉業資料館・鳳来町長篠城址史蹟保存館・馬の背岩・鳳来寺山東照宮を見学。参加者中学校教諭その他43名。
昭和48年	
1月23日	愛博協研修会開催、於熱田神宮庁会議室。講演会：「美術の保存と陳列」(奈良国立博物館蔵田蔵)、「正倉院の歴史と宝物」(蔵田蔵)、「正倉院宝物の工芸技術」(荒川浩和)、参加8施設16名。 昭和47年度：壁新聞配布、「東西南北」No.56～67：「愛知の博物館」No.19発行。ガイドブック「愛知の博物館」3,000部増刷。
5月29日	昭和48年度愛博協総会・理事会開催、於博物館明治村。
7月12～13日	東海博昭和48年度総会開催、於愛知県三谷町あゆち荘(当番愛知県)、鳳来寺山自然科学博物館・長篠城址史蹟保存館見学。
9月13～14日	愛博協研修会開催、於東栄町御園天文科学センター、「展示はいかにあるべきか、どんなものが望ましいか、製作の要点は？」(東海地区博物館連絡協議会と共催)。
9月21日	理事会開催、於県文化会館、当年度事業分担について。
11月29日	名古屋タイムズ、加盟館園29館の紹介掲載。
12月14日	東海地区科学施設協議会研究会と共催で学芸員養成研修会開催、於県立図書館視聴覚室。講義：博物館学(廣瀬鎮)、教育原理(滝本正二)、社会教育概論(小堀勉)。9施設29名参加。
昭和49年	
3月10日	文化財探勝の会開催、常滑市立陶芸研究所・野間大坊・岩屋寺・貝殻公園を見学。参加者：名古屋市内小中学校教諭その他38名。 昭和48年度：「愛知県博物館・遺蹟地図」県下中学校に配布。「東西南北」No.68～79；「愛知の博物館」No.20発行。
5月17日	昭和49年度愛博協総会・理事会開催、於田原博物館(華山文庫)。理事補充(会則一部変更)、9館園とする。新たに、理事、御園天文科学センター所長金子功を選任、他は留任。参加18施設23名。
7月8～9日	東海博昭和49年度総会参加、於甲府市紫玉えん(山梨県)富士ビジターセンター見学。
7月30日	実行委員会開催、於県文化会館。
9月30日	理事会開催、於県文化会館。
12月13～14日	第2回学芸員養成研修会開催、於県立図書館視聴覚室。講義：博物館学(柴田敏雄)、教育原理(滝本正二)、社会教育概論(廣瀬鎮)。
昭和50年	
3月16日	文化財探勝の会開催、徳川美術館・明治村を見学。参加者：名古屋・尾張部小中学校教諭その他31名。昭和49年度：県内博物館パンフレット作成、県下博物館案内をホテルに配布。「東西南北」No.80～91；「愛知の博物館」No.21発行。 昭和50年度愛博協総会・理事会開催、於熱田神宮宝物館、愛博協費改訂(規約一部改正)、参加30名。
5月7日	東海博昭和50年度総会参加、於箱根まとい荘(当番神奈川県)、大湧谷自然博物館・箱根神社宝物館等見学。
6月17～18日	実行委員会開催、於県文化会館、当年度事業打合せ等。
6月25日	実行委員会開催、於県文化会館。
7月4日	8月
9月20～21日	「東西南北」No.96より、編集が県文化会館から御園天文科学センターに移管。 愛博協研修会開催、於御園天文科学センター、テーマ：「地域社会と博物館」(日本博物館協会と共催)。

年月日	事項
昭和51年	
1月20日	博物館学セミナー開催、於日本モンキーセンター、「博物館と社会教育の相関」(廣瀬鎮)、「現代学芸員論」(福永重樹)、「自然動物園と教育活動」(水原洋城)、日本モンキーセンターと共催。
1月27日	実行委員会開催、於県文化会館。
2月	「愛知県博物館・史蹟地図」を作成。
2月23～24日	県外研修会開催、鳥羽水族館・海の博物館・ブラジル丸・神宮徴古館・農業館を見学。この折、愛知・三重両県博物館協会交換研究会の話あり。
3月17日	実行委員会開催、於県文化会館。 昭和50年度:「東西南北」No.92～100:「愛知の博物館」No.22発行。「愛知県博物館・史蹟地図」を県下中学校、市町村教委に配布。
5月10日	理事会開催、於県文化会館。
5月28日	昭和51年度愛博協総会開催、於蒲郡フラワーパーク。新役員選出。 顧問 熊沢 五六 理事(会長) 県文化会館 館長 内藤 徹 理事(副会長) 御園天文学センター 所長 金子 功 理事 日本モンキーセンター 所長 四手井鋼英 理事 博物館明治村 館長 谷口 吉郎 理事 市立名古屋科学館 館長 佐藤 知雄 理事 徳川美術館 館長 徳川 義宣 理事 熱田神宮宝物館 館長 岡本 健治 理事 荒木集成館 館長 荒木 実 理事 豊田市郷土資料館 館長 宮川 明男 理事 鳳来寺山自然科学博物館 館長 大原 廣 理事 東海市立平洲記念館 館長 築波 崧 監事 名古屋城天守閣管理事務所 所長 加藤 俊雄 監事 切支丹遺蹟博物館 館長 佐藤よしあき
	また、あらたに実行委員会設置を決定、委員を委嘱する。 御園天文学センター 金子 功 日本モンキーセンター 廣瀬 鎮 市立名古屋科学館 三輪 克 博物館明治村 海老沢立志 徳川美術館 木下 稔 名古屋博物館(仮称) 新海 明敏 事務局 浅壁 勲
6月8～9日	東海博昭和51年度総会参加、於岐阜県博物館(当番岐阜県)。名和昆虫博物館・内藤記念くすり資料館・岐阜県等見学。
7月29日	愛知県文化振興会議参加、於県立図書館視聴覚室、「博物館登録の手続」(日博協今井良雄)、「博物館活動について」(金子功、廣瀬鎮)、「学芸員試験について」(鈴木睦美)。
10月8日	実行委員会開催、於県文化会館。
10月14日	学芸員養成研修会開催、於県立図書館、「博物館学」(三輪克)、「社会教育概論」(廣瀬鎮)、「博物館における業務について」(金子功)。
昭和52年	
2月4日	実行委員会開催、於県文化会館。
2月14～15日	文化財探勝の会(第1回愛知県・三重県博物館協会交換研究会)開催、於名古屋城、「東栄町における文教の里づくり」(金子功)、「盗難体験談」(寺内貞顕)、名古屋市立博物館建設現場見学。 昭和51年度:「東西南北」No.101～103:「愛知の博物館」No.23発行。 ガイドブック『愛知の博物館』県下公立高校、市町村教委配布。
4月	リーフレット「みんなで博物館へ行こう」を作製。
5月20日	昭和52年度愛博協総会・理事会開催、於県文化会館、11施設14名参加。愛知県陶磁資料館・香嵐渓ヘビセンター・ヨコタ南方民族美術館が入会。昭和52年度実行委員は以下のとおり。 御園天文学センター 金子 功 日本モンキーセンター 廣瀬 鎮 市立名古屋科学館 滝本 正二 財団法人荒木集成館 荒木 実 博物館明治村 海老沢立志 名古屋博物館 西田 躬徳 県文化会館 川島 敏一
	愛知県・三重県博物館協会交換研究会(以下、両県交換会とす)を今後も継続することを決定。
6月9～10日	東海博昭和52年度総会参加、於熱川バナナワニ園(当番静岡県)。浜松市美術館・久能山東照宮博物館等見学。
6月24日	実行委員会開催、於県文化会館。
9月19日	実行委員会開催、於県文化会館。
11月4日	理事会開催、於県文化会館、愛博協表彰規程につき協議、マズプロ電工美術館・古橋懐古館が入会。

年月日	事項
11月9～10日	愛知県文化振興会議参加、於奥三河郷土館。講演:「博物館登録指定申請について」、「博物館は何をすることか」、「資料の整理と博物館活動」、「東栄町文化施設の概要」
11月14～15日	第2回両県交換会参加、於鳥羽市海の博物館(当番三重県)、「伊勢神宮の式年遷宮と御装束神宝」(鈴木義一)、「高齢者対象の科学知識普及活動の実践」(滝本正二)、「ジュゴンの飼育法」(中村昭)、ブラジル丸・鳥羽水族館・志摩マリランド・お伊勢まいり資料館・神宮徴古館・農業館を見学。
昭和53年	
1月18日	愛博協表彰規程につき賛否を問い、賛成23加盟館園により成立。
1月24日	両県交換につき打ち合わせ。
2月10日	実行委員会開催、於県文化会館。 昭和52年度:「東西南北」No.104～115:「愛知の博物館」No.24発行、パンフレット「みんなで博物館へ行こう」県下公立中学校、市町村教委へ配布。 5月2日 表彰規程により、表彰選考委員会(第1回理事会)を開催、於県文化会館。 5月10日 昭和53年度愛博協総会・理事会開催、於鳳来寺山自然科学博物館。 表彰:功労賞 徳川美術館 名誉館長 熊沢五六 長篠城址史蹟保存館 館長 丸山 彰 奨励賞 名古屋市東山動物園 指導衛生係長 中村知治
5月19日	役員改選ならびに補充(1館園増員)により、役員留任し、補充理事として名古屋博物館を追加。昭和53年度実行委員については、昭和52年度実行委員の留任と、あらたに御園天文学センターの竹ノ内昭夫を追加決定。また、昭和53年度東海博表彰へ御園天文学センター所長金子功を推薦することに決定。参加21施設27名。
5月19日	実行委員会開催、於県文化会館。
6月14～15日	東海博昭和53年度総会開催、於名古屋博物館、熱田神宮宝物館・明治村・県陶磁資料館を見学。
11月10日	実行委員会開催、於県文化会館。
12月4～5日	愛知・三重・岐阜三県博物館協会交歓研究会(以下、三県交流会とす)開催、於県労働者研修センター(当番愛知県)。参加25施設39名。「荒木集成館の運営方針」(荒木実)、「海を守る運動」(石原義剛)、「瑞浪市化石博物館の現状」(渡辺俊典)、瀬戸陶土採掘場→瀬戸市歴史民俗資料館→愛知県陶磁資料館を見学。(岐阜県の参加により両県交換会を三県交流会に改める)
昭和54年	
1月17日	愛知県文化振興会議ならびに研修会を開催、於県文化会館。
2月22日	表彰選考委員会開催、於県文化会館。
3月14日	実行委員会開催、於県文化会館。 昭和53年度:「東西南北」No.116～123:「愛知の博物館」No.25発行、ガイドブック『愛知の博物館』を県下高校、名古屋市内小中学校、市町村教委へ配布。新加盟館園:昭和美術館・鈴木そらぼん博物館・瀬戸市歴史民俗資料館・知多市民俗資料館。
5月11日	昭和54年度愛博協総会・理事会開催、於名古屋博物館、参加22施設25名愛博協第2回表彰 功労賞 蓬左文庫囀託 織茂三郎 奨励賞 犬山城管理事務所 岩田勝巳 奨励賞 日本モンキーセンター 山川鳩彦 15周年記念表彰 御園天文学センター 金子 功 15周年記念表彰 日本モンキーセンター 廣瀬 鎮
5月12～13日	昭和54年度実行委員会の委嘱は留任。新規入会:豊橋市美術博物館・名古屋市見晴台考古資料館・蒲郡市郷土資料館。
6月21～22日	愛博協研修会開催、於東栄町御園天文学センター、テーマ:「地域社会と博物館」。
6月27日	東海博昭和54年度総会参加、於山梨県立美術館(当番山梨県)。
10月	実行委員会開催、於県文化会館。 ガイドブック『愛知の博物館』改訂版発行、1,000部。
11月12～13日	第2回三県交流会参加、於内藤記念くすり博物館(当番岐阜県)。3名研究発表。
12月12日	愛博協研修会・実行委開催、於県陶磁資料館、30名参加。
昭和55年	
1月28日	愛博協研修会・県文化振興会議共催、於熱田神宮宝物館。
2月27日	表彰選考委員会開催、於県文化会館。 昭和54年度:「東西南北」No.124～131:「愛知の博物館」No.26発行。
5月20日	昭和55年度愛博協総会・理事会開催、於知多市民俗資料館。参加25施設34名。規約一部改正。 愛博協第3回表彰 功労賞 徳川美術館 跡部佳子 功労賞 市立名古屋科学館 山田 博

年月日	事項
	奨励賞 博物館明治村 小村幸男 奨励賞 徳川美術館 佐藤豊三
6月26～27日	昭和55年度東海博総会参加、於神奈川県立博物館(当番神奈川県)。
7月31日	実行委開催。於県文化会館。
9月29～30日	第3回三県交流会参加、於三重県厚生年金休暇センター(当番三重県)。研究発表3名、伊勢神宮参拝・金剛証寺宝物館等見学。
11月5～6日	愛博協外研修開催、奈良国立博物館「正倉院展」および奈良県橿原考古学研究所附属博物館を見学。参加5施設8名。
12月4日	実行委員会開催、於県文化会館。
昭和56年	
3月3日	愛博協表彰選考委員会開催、於県文化会館。 昭和55年度:『愛知の博物館』No.27,28,29発行。大府市歴史民俗資料館入会。
4月7日	実行委員会開催、於県文化会館、愛博協総会日程、昭和56年度事業計画、愛博協研修会等。
4月30日	昭和56年度愛博協総会・理事会開催、於岩田洗心館。参加27施設32名。 愛博協第4回表彰 功労賞 市立名古屋科学館 平沢康男 功労賞 名古屋市博物館 西田躬徳 奨励賞 博物館明治村 大崎宗雄 奨励賞 知多市民俗資料館 山原紀子 新規加盟:財団法人桑山清山会桑山美術館・豊橋市地下資源館(加盟44館園)。
6月1日	ガイドブック『愛知の博物館』改訂版発行(1,600部)。
6月4～5日	愛博協研修会開催、於鳳来町開発センター・若松屋旅館。講演「設楽原決戦場について」(長篠城跡史蹟保存館館長丸山彰)、設楽原古戦場跡見学、シンポジウム「資料の保存と展示」(意見発表:豊橋市地下資源館家田健吾、ヨコタ南方民族美術館横田正臣、名古屋市博物館上村喜久子、知多市民俗資料館浅井紀子)
6月25～26日	東海博昭和56年度総会参加、於瑞浪市化石博物館(当番岐阜県)。
9月3日	実行委員会開催、於県文化会館、三県交流会実施案、『愛知の博物館』No.31、32発行について。
11月22～23日	第4回三県交流会研究会開催、於東栄町清学山荘(当番愛知県)。研究発表3名、「長流の延年(花奪祭)」(岐阜県、若宮修古館長若宮多聞)他、講演「花祭について」(前東栄町文化財委員佐々木亀鶴)、東栄町月の花祭見学、東栄町立博物館・花祭会館・ヨコタ南方民俗美術館・長篠城跡史蹟保存館の見学。
昭和57年	
2月25日	愛博協研修会、県文化振興会議と共催、於県婦人文化会館。
3月10日	理事会・表彰選考委員会開催、於県文化会館、総合日程等。 昭和56年度:『愛知の博物館』No.30、31発行。 半田市郷土資料館入会。
4月24日	実行委員会開催、於県文化会館、昭和57年度事業計画等。
4月27日	昭和57年度愛博協総会・理事会開催、於大府市歴史民俗資料館、参加30施設39名。
5月25日	愛博協第5回表彰 功労賞 荒木集成館 荒木 実 奨励賞 鳳来寺山自然科学博物館 松井 保 役員改選により、下記のとおり決定。 理事(会長) 県陶磁資料館 館長 奥田信之 理事(副会長) 奥三河御園高原自然学習村 所長 金子 功 理事 熱田神宮宝物館 館長 岡本健治 理事 荒木集成館 館長 荒木 実 理事 市立名古屋科学館 館長 佐藤知雄 理事 知多市民俗資料館 館長 竹内敏雄 理事 徳川美術館 館長 徳川義宣 理事 名古屋市博物館 館長 浅井研一 理事 日本モンキーセンター 所長 大沢 濟 理事 博物館明治村 館長 関野 克 監事 愛知県文化会館 館長 片山和夫 監事 財団法人岩田洗心館 理事長 岩田不二子 役員改選にともない、事務局も県文化会館より県陶磁資料館に移動。 事務局移転完了。
6月4日	東海博昭和57年度総会参加、於浜松市博物館(静岡県)
6月10日	実行委員の委嘱。新実行委員は下記のとおり。 県陶磁資料館 中保 進 県陶磁資料館 浅田 員由 奥三河御園高原自然学習村 金子 功 熱田神宮宝物館 山田 蓉

年月日	事項
	荒木集成館 荒木 実 市立名古屋科学館 三輪 克 知多市民俗資料館 浅井 紀子 徳川美術館 木下 稔 名古屋市博物館 安達 厚三 日本モンキーセンター 廣瀬 鎮 博物館明治村 海老沢立志 愛知県文化会館 磯野 英男 岩田洗心館 岩田 正人 愛博協事務局は以下のとおり。 愛知県陶磁資料館 三輪 昭三 愛知県陶磁資料館 峰 一臣 愛知県陶磁資料館 山田 銀一
7月2日	実行委員会開催、於県陶磁資料館、実行委の在り方・事業分担(分担は以下のとおり)等。 総務担当 三輪、岩田 会則の検討・調査企画立案 研修会担当 浅井、海老沢、荒木 企画立案実施 三県交流会担当 浅田、廣瀬 企画・広報・参加勧誘 東海博担当 全員 58年度は愛知県が当番県 編集委員 山田、磯野、安達 『愛知の博物館』その他 総括責任者 金子功、中保進
8月11日	東海博の在り方・日程、愛博協研修会日程等。15名出席。
9月8～9日	実行委員会開催、於県陶磁資料館、東海博、愛博協研修会等。11名出席。 愛博協研修会開催、於知多市民俗資料館。テーマ:「もの見せ方」、司会:明治村海老沢立志、意見発表者:市立名古屋科学館三輪克、桑山美術館桑山康幸、知多市民俗資料館浅井紀子、講演:国友俊太郎(国友デザイン研究所所長)、知多市民俗資料館・常滑市立陶芸研究所・常滑市立民俗資料館・野間大坊・南知多ビーチランド等見学。16施設27名参加。
9月22日	実行委員会開催、於県陶磁資料館、三県交流会、20周年記念事業について。11名出席。
10月4～5日	三県交流会参加、於岐阜県立博物館(当番岐阜県)。テーマ:「博物館は来館者のニーズにいかに対応しているか」、意見発表者:三重県・鳥羽水族館片岡照男、愛知県・蒲郡市郷土資料館小笠原久和、岐阜県・岐阜県博物館小野木三郎。施設見学=美濃和紙手漉場・新長谷寺・日本刀鍛錬場。
10月8日	理事会開催、於県陶磁資料館、昭和57年度事業推進状況、昭和58年度以降の基本方針、県費補助打ち替後策、規約改正(実行委員会の明文化、書記・会計の新設、会費の改訂)他。12名出席。
10月26日	実行委員会開催、於県陶磁資料館、昭和58年度事業方針案、愛博協加盟勧誘運動の実施案、県内博物館実態アンケート他。15名出席。
11月11日	加盟勧誘の依頼実施。
11月26日	実行委員会開催、於県陶磁資料館、勧誘運動推進状況、実態調査、20周年記念事業、愛博協と加盟館園との情報伝達の円滑化(事務局通信の復活)県との共催による昭和58年度愛博協職員研修会について。
12月22日	実行委員会開催、於県文化会館、昭和58年度事業計画、東海博日程等(愛知県当番)、20周年記念『愛博協20年のあゆみ』編集委員の決定について他。11名出席。
昭和58年	
1月13日	県内博物館施設実態調査の実施(～2月10日まで)
1月27日	実行委員会開催、於県文化会館、「歴史民俗資料館等の活動を考える」研究会(以下、歴史部会、とす)、20周年記念誌編集方針、東海博実施案、「東西南北」復刊第1号について他。13名出席
1月	「東西南北」復刊。通巻第132号、編集担当:山田蓉。
2月16日	実行委員会開催、於市立名古屋科学館、昭和57年度事業報告案、昭和58年度総会・表彰、歴史部会、20周年記念誌、東海博実施最終案、実態調査のまとめ方、加盟勧誘運動の報告とガイドブック『愛知の博物館』改訂版作成について他。13名出席。
2月23日	御園高原自然学習村金子功所長、「協会加盟館の意識調査」アンケート実施(4月26日調査結果および考察の発表)。
3月9日	理事会・表彰選考委員会開催、於県文化会館、昭和57年度事業報告、昭和58年度事業計画、表彰選考、ガイドブック『愛知の博物館』改訂版作成の予算措置について他。
3月17日	歴史部会第1回研修会開催、於三好町立歴史民俗資料館、22名参加。
3月23日	実行委員会開催、於県文化会館、昭和58年度総会実施最終案、20周年記念誌、愛博協表彰規定の再検討他。
4月10日	御園高原自然学習村金子功所長、「博物館の地域連絡協議会の活動一その問題点と振興策について」(『山村文化研究所報』No.4)を公表。
4月14日	理事会開催、於県陶磁資料館、昭和57年度事業報告、昭和58年度事業計画、他。昭和57年度:『東西南北』No.131～134;『愛知の博物館』No.32、No.33発行、実行委員選任。
4月26日	昭和58年度愛博協総会実行委開催、於財団法人後藤報恩会昭和美術館。

年月日	事項
	愛博協第6回表彰 功労賞 愛知県文化会館 磯野 英男 功労賞 市立名古屋科学館 後藤 久雄 功労賞 市立名古屋科学館 花立ゆき子 功労賞 徳川美術館 木下 稔 功労賞 名古屋市博物館 上村喜久子 奨励賞 熱田神宮宝物館 井後 政晏 感謝状 前愛知県文化会館館長 片山 和夫(前愛博協会長) 御園高原自然学習村の理事辞任にともなう後任理事ならびに副会長の選任、後任役員は以下のとおり。 理事 豊橋市美術博物館 館長 白井昭吾 理事(副会長) 熱田神宮宝物館 館長 岡本健治 実行委員は以下の異動をのぞき、他は留任となる。 県陶磁資料館 副館長 中保 進(辞任) 御園高原自然学習村 所長 金子 功(辞任) 豊橋市美術博物館 河合正樹(新任) 事務局担当は以下のとおり。 県陶磁資料館 課長 桜木 廉 県陶磁資料館 主査 峰 一臣 規約改正:実行委員会・事務局委嘱の明文化、書記・会計の新設、会費の改訂:1口4,000円から1口6,000円へ。新加盟館園(15館園)の自己紹介と意見交換(『愛知の博物館』No.34参照)。 新加盟館園は以下のとおり。 碧南市青少年海の科学館(碧南海浜水族館)、名古屋昆虫館、三河武士のやかた家康館、岡崎信用金庫資料館、蟹江町歴史民俗資料館、美和町歴史民俗資料館、東郷町郷土資料館、清洲貝殻山貝塚資料館、財団法人ヒマラヤ美術館、三好町立歴史民俗資料館、和紙のふると展示館、財団法人リトルワールド、一宮市教育委員会博物館建設準備事務局、常滑市民俗資料館、吉良町歴史民俗資料館(加盟57館園となる)。 5月27日 実行委員会開催、於市立名古屋科学館、東海博の最終打合せ・事務分担の決定、愛博協20年史編集案の検討他。 6月2～3日 東海博昭和58年度総会開催、於愛知県市町村職員組合保養所「レークサイド入鹿」及びリトルワールド(当番愛知県)、理事会・総会及び討論会「各県博物館協力の現況と課題」報告者:神奈川県・県立博物館中島副館長、山梨県・信玄宝物館野沢事務局長、静岡県・久能山東照宮松浦館長、岐阜県・県立博物館吉本館長、愛知県・市立名古屋科学館三輪係長、司会:廣瀬鎮。施設見学=リトルワールド・小牧市歴史館(『東西南北』No.137参照)。参加者79名。 6月23日 愛博協美術部会第1回研修会開催、於岩田洗心館、講演:「博物館運営の実際一収支バランスの適正化をめざして」(昭和美術館服部昭義事務長)。参加4施設5名。 6月24日 実行委員会開催、於市立名古屋科学館、愛博協研修会、東海博結果報告、20周年記念誌編集案他。 7月初旬 東海銀行貨幣資料館入会(加盟59館園)。 7月9日 ガイドブック『愛知の博物館』改訂版のための原稿募集はじまる。 7月15日 第2回歴史民部会開催、於常滑市民俗資料館、テーマ:「展示の方法」。 7月22日 実行委員会開催、於県陶磁資料館、研修会実施最終案他。 8月23日 実行委員会開催、於市立名古屋科学館、20周年記念誌編集案、編集委員長ほか決定(編集委員長:県陶磁資料館中保副館長、編集事務:山田蓉実行委員)、愛博協県内研修会事務分担等。 9月6～7日 愛博協研修会、於愛知県労働者研修センター、テーマ:「博物館等における教育サービスのあり方—PART1 “解説”」、意見発表者:リトルワールド鹿野勝彦、内藤記念くすり博物館青木充夫、名古屋市博物館井上光夫、岩田洗心館岩田正人、香嵐渓へびセンター杉山貞幸、三河武士のやかた家康館堀江登志実。現地研修:「和紙のふると展示館」。愛知県内博物館施設実態調査No.2実施。 9月13日 『愛知の博物館20年誌』編集委員の委嘱。 9月28日 実行委員会開催、於県文化会館、県内研修会報告、三県交流会、サロン、20周年記念誌出版の予算捻出について、「若手芸員おおいに語る」の期日及びテブ起しの担当・事例研究提出の期限等。 9月30日 愛博協加盟館園職員名簿作成のための調査開始。 10月24～25日 三県交流会参加、於名張市(当番三重県)。 10月28日 実行委員会開催、於県文化会館、20周年記念誌用実行委員討論「博物館の将来を探る」、サロン開設準備の進展状況について、事例研究のテーマ提出他。10名出席。 11月14日 実行委員会開催、於県陶磁資料館。 11月25日 第3回歴史民部会開催、於吉良町歴史民俗資料館—美術梱包の方法—。 12月10日 実行委員会開催、於市立名古屋科学館。

年月日	事項
	昭和59年 1月30日 実行委員会開催、於県文化会館。 2月20日 実行委員会開催、於王山会館、総合資料・ガイドブック改訂・20年史の状況について。 3月22日 第4回歴史民部会開催、於美和町歴史民俗資料館—民俗資料の展示の企画立案— 3月23日 実行委員会開催、於県文化会館、総会資料作製・20年史の状況について。昭和58年度:『東西南北』No.135～145:『愛知の博物館』No.34、35発行。昭和58年度新規加盟館、名古屋昆虫館他15館、計65館となる。 30周年史年表 4月24日 理事会開催、於県陶磁資料館、協会20年史、59年度事業計画、役員改選について。 5月23日 理事会・実行委員会開催、於岡崎信用金庫本店、昭和58年度事業報告、昭和59年度事業計画他。 5月23日 昭和59年度総会開催、於岡崎信用金庫本店。 愛博協第7回表彰 功労賞 市立名古屋科学館 浅井恒子 功労賞 名古屋市博物館 福本克巳 功労賞 博物館明治村 宮島静男 役員館の交替 三河武士のやかた家康館(荒木集成館辞任) 常滑民俗史料館(知多市民俗資料館辞任) 昭和美術館(岩田洗心館辞任) 実行委員の交替 愛知県美術館 坂下雅彦(磯野英男辞任) 新加盟館は以下のとおり かみや美術館、晴嵐館、中部電力電気文化会館建設事務局、渥美町郷土資料館、刈谷市美術館、名古屋海洋博物館、稲沢市扶須記念美術館。 6月2日 実行委員の委嘱、新実行委員は下記のとおり。 愛知県陶磁資料館 浅田 員由 熱田神宮宝物館 山田 蓉 三河武士のやかた家康館 堀江登志志 市立名古屋科学館 三輪 克 名古屋市博物館 井上 光夫 徳川美術館 木下 稔 日本モンキーセンター 廣瀬 鎮 博物館明治村 海老沢立志 常滑市民俗史料館 中野 晴久 豊橋市美術博物館 後藤 清司 愛知県文化会館美術館 坂下 雅彦 昭和美術館 服部 昭義 愛博協事務局は以下のとおり。 愛知県陶磁資料館 桜木 廉 愛知県陶磁資料館 峰 一臣 6月7～8日 東海博昭和59年度総会参加、於塩山市中央公民館、山梨県考古博物館他見学。 6月27日 美術部門研修会開催、於桑山美術館、テーマ:「表具の研究—その伝統的取扱いの実際と布の名称」。 6月29日 実行委員会開催、於熱田神宮宝物館。 7月31日 実行委員会開催、於名古屋市博物館。 9月12～13日 愛博協研修会開催、於名古屋海洋博物館、テーマ:「博物館等における調査研究」、意見発表者:東山植物園坂梨園長・常滑市民俗資料館中野学芸員・名古屋市博物館犬塚学芸員・伊良湖自然科学博物館大谷係長、名古屋港内施設見学、参加27名。 9月13日 実行委員会開催、於名古屋海洋博物館。 10月25日 実行委員会開催、於豊橋市勤労福祉会館。 10月25～26日 三県交流研修会開催、於豊橋市勤労福祉会館、テーマ:「博物館等におけるP.Rの実際と方法」 豊橋市地下資源館・豊橋市美術博物館見学、参加49名。 12月20日 実行委員会開催、於王山会館、昭和60年度事業計画。 2月27日 実行委員会開催、於愛知県文化会館美術館。 3月22日 実行委員会開催、於愛知県陶磁資料館。 昭和59年度:協会報『愛知の博物館』No.36～38、『東西南北』No.146～154、ガイドブック改訂増補版、協会20年史発行。 昭和60年 4月24日 理事会開催、於県陶磁資料館。 4月27日 実行委員会開催、於県陶磁資料館。 5月8日 理事会開催、於県陶磁資料館。 5月24日 昭和60年度総会・理事会開催、稲沢市保健センター。

年月日	事項
	愛博協第8回表彰 功労賞 名古屋博物館 久住典夫 功労賞 博物館明治村 長瀬秋昇 感謝状 前愛知県陶磁資料館主査 峰 一臣(前愛博協事務局)
	新加盟館 武豊町歴史民俗史料館
5月29～30日	東海博昭和60年度総会参加、於神奈川県横須賀市自然史博物館、記念艦三笠他見学。
6月26日	実行委員会開催、於熱田神宮宝物館。
7月23日	実行委員会開催、於名古屋博物館。
8月1日	「歴史系部会」研修会、於見晴台考古資料館。
8月28日	実行委員会開催、於県陶磁資料館。
9月12～13日	愛博協研修会開催、於シーサイド伊良湖、テーマ:「資料交換と展示計画の問題点」、事例発表:東山植物園中村知治・昭和美術館館服部昭義・和紙のふると展示館富樫朗・愛知県陶磁資料館浅田員由・伊良湖自然科学博物館、渥美町郷土資料館見学、参加31名。
9月12日	実行委員会開催、於シーサイド伊良湖。
9月21日	「美術部会」研修会、於昭和美術館、テーマ:「万葉植物について」他、参加20名。
10月24～25日	三県交流研修会参加、於岐阜県下呂町公民館、テーマ:「博物館機能の近代化について」、山岳考古館他見学、参加49名。
12月3日	実行委員会開催、於愛知県文化会館美術館。
1月22日	実行委員会開催、於玉山会館。 昭和60年度:協会報「愛知の博物館」No.39～40、「東西南北」No.155～161、ガイドマップ「たずねてみよう愛知の博物館」発行。
昭和61年	
4月18日	実行委員会開催、於市立名古屋科学館。
4月23日	理事会開催、於県陶磁資料館。
5月8日	理事会開催、於県陶磁資料館。
5月23日	理事会・実行委員会開催、於半田市立博物館。
5月23日	昭和61年度総会開催、於半田市立博物館。
	愛博協第9回表彰 功労賞 日本モンキーセンター 廣瀬 鎮 功労賞 博物館明治村 勝俣光盛
	新加盟館 名古屋市教育委員会文化課(美術館担当)、尾西市歴史民俗資料館、ガスエネルギー館、長久手町郷土資料室、計70館。
6月10～11日	東海博昭和61年度総会参加、於岐阜市岐山会館、岐阜市歴史博物館他見学。
6月24日	実行委員会開催、於豊橋市美術博物館。
7月22日	実行委員会開催、於市立名古屋科学館。
9月11日	実行委員会開催、於県陶磁資料館。
9月11～12日	愛博協研修会開催、於愛知県陶磁資料館、テーマ:「博物館におけるボランティア活動」、事例発表:三重県立美術館、名古屋見晴台考古資料館、半田市立博物館、愛知県陶磁資料館にて陶芸実習、マスコエ工芸美術館見学、参加39名。
10月20～21日	三県交流研修会参加、於三重県菟野町社会福祉センター、テーマ:「各博物館におけるPR活動」、日本カモンセンター他見学。
12月20日	実行委員会開催、於愛知県文化会館美術館。
2月18日	実行委員会開催、於三河武士のやかた家康館。
2月26日	「美術部会」研修会、於昭和美術館、テーマ:「外国人来館者に対する初歩の英会話」他、参加25名。 昭和61年度:協会報「愛知の博物館」No.41～42、「東西南北」No.162～166、ガイドブック「愛知の博物館」改訂版発行。
昭和62年	
4月10日	実行委員会開催、於玉山会館。
4月23日	理事会開催、於県陶磁資料館。
5月8日	理事会開催、於県陶磁資料館。
5月22日	実行委員会開催、於電気文化会館。
5月22日	昭和62年度総会開催、於電気文化会館。
	愛博協第10回表彰 功労賞 市立名古屋科学館 中島 健 功労賞 市立名古屋科学館 滝本正二 功労賞 徳川美術館 佐藤豊三 功労賞 東海銀行貨幣資料館 鬼頭晴彦 功労賞 博物館明治村 傍島光光 功労賞 博物館明治村 半田力雄 奨励賞 名古屋海洋博物館 伊藤 宏 感謝状 前愛知県陶磁資料館 主査 中島 博(前愛博協事務局)
	新加盟館

年月日	事項
	岩崎城歴史記念館、甚目寺町歴史民俗資料館、杉本美術館、名都美術館、おかざき世界子ども美術博物館、岡崎市美術館、作手村歴史民俗資料館、津具村立文化資料センター、計85館。 東海博昭和62年度総会参加、於静岡市たちばな会館。 実行委員会開催、於市立名古屋科学館。 7月28日 実行委員会開催、於市立名古屋科学館。 8月25日 実行委員会開催、於市立名古屋科学館。 9月10～11日 博物館等職員研修会開催、於蒲郡市、テーマ:「博物館における教育普及活動—講座・教室・学習会の運営—」、事例発表:名古屋博物館竹内学芸員・豊橋市地下資源館家田学芸員・博物館明治村伊藤学芸員、蒲郡市郷土資料館・蒲郡フラワーパーク見学、参加35名。 9月29日 実行委員会開催、於名古屋博物館。 10月29～30日 三県交流研修会開催、於豊田市猿投棒の手ふれあい広場、テーマ:「博物館へのアクセス—交通からみた三県博物館の連係のありかたを探る」豊田市郷土資料館、トヨタ博物館他見学、参加40名。 実行委員会開催、於愛知県陶磁資料館。 11月13日 実行委員会開催、於玉山会館。 12月15日 実行委員会開催、於熱田神宮宝物館。 1月26日 実行委員会開催、於熱田神宮宝物館、テーマ:「資料の取扱い—刀剣を中心にして—」、参加21名。 2月25日 美術館部会研修会、於土岐美濃陶磁歴史館、元屋敷窯跡等見学他、参加19名。 3月1日 実行委員会開催、於熱田神宮宝物館。 3月15日 美術館部会研修会、於昭和美術館。 昭和62年度:協会報「愛知の博物館」No.43～44、「東西南北」No.167～171「おでかけガイド—愛知の博物館」、「加盟館(園)職員録」発行。
昭和63年	
4月12日	実行委員会開催、於玉山会館。
4月27日	理事会開催、於玉山会館。
5月20日	実行委員会開催、於玉山会館。
5月20日	昭和63年度総会開催、役員改選、一宮市博物館・でんきの科学館の2理事館を追加。 理事(会長) 愛知県陶磁資料館 館長 山田五夫 理事(副会長) 熱田神宮宝物館 館長 山本文彦 理事 三河武士のやかた家康館 館長 瀧本浩成 理事 市立名古屋科学館 館長 岡田 博 理事 名古屋博物館 館長 浅井研一 理事 徳川美術館 館長 徳川義宣 理事 日本モンキーセンター 所長 河合雅雄 理事 博物館明治村 館長 関野 克 理事 武豊町歴史民俗資料館 館長 磯谷幸男 理事 豊橋市美術博物館 館長 河合正樹 理事 一宮市博物館 館長 花木為雄 理事 でんきの科学館 館長 帆高壽壯 監事 愛知県文化会館美術館 館長 鍵谷正衛 監事 昭和美術館 館長 柳沢幸輝
	愛博協第11回表彰 功労賞 名古屋博物館 安達義信 功労賞 博物館明治村 佐野 勲 奨励賞 名古屋海洋博物館 山田国雄 感謝状 前愛知県陶磁資料館 館長 日下英之 (前愛博協会長) 感謝状 前博物館明治村 部長 海老沢立志 (前愛博協実行委員)
	新加盟館 ミツカン酢の里、半田空の科学館、國盛酒の文化館、電気文化会館、メナード美術館、南知多ビーチランド、豊橋市自然史博物館、犬山市文化史料館、楽只美術館、岡崎市郷土館、計95館。 実行委員会開催、於玉山会館。 6月16日 東海博昭和63年度総会開催、於玉山会館、討論会テーマ:「ミュージアムショップについて」、事例発表:川崎市立日本民家園早野園長・博石館細野主任・静岡県立美術館野村主任・山下学芸員・名古屋美術館牧野主任・司会市立名古屋科学館三輪課長、名古屋美術館・徳川美術館見学、参加106名。 7月12日 実行委員会開催、於徳川美術館。 8月30日 実行委員会開催、於愛知県美術館。 9月8～9日 博物館等職員研修会開催、於尾西勤労青少年福祉センター、テーマ:「博物館・美術館における展示効果」、事例発表:豊橋市自然史博物館家田学芸員・市立名古屋科学館三輪課長・徳川美術館四辻学芸員・尾西市歴史民俗資料館伊藤学芸員・一宮市博物館毛受学芸員、尾西市歴史民俗資料館・一

年月日	事項
9月30日	宮市博物館見学、参加49名。 実行委員会開催、於でんきの科学館。
10月25日	実行委員会開催、於愛知県陶磁資料館。
11月25日	実行委員会開催、於名古屋博物館。
12月20日	実行委員会開催、於王山会館。
1月24日	実行委員会開催、於熱田神宮宝物館。
2月17日	美術館部会研修会、於昭和美術館、テーマ:「絵画(日本画)の画材」他、参加37名。
3月1日	理事会・実行委員会開催、於王山会館。
3月23日	歴史民俗部門研修会、於名古屋博物館、テーマ:「甲冑の取扱い」他、参加23名。 昭和63年度:協会報「愛知の博物館」No.45~47、「東西南北」No.172~175、「おでかけガイドー愛知の博物館」発行。
平成元年	
4月13日	実行委員会開催、於王山会館。
4月25日	理事会開催、於王山会館。
5月19日	実行委員会開催、於王山会館。 愛博協第12回表彰 功労賞 名古屋科学館 西森健資郎 功労賞 博物館明治村 宮崎正巳 感謝状 前熱田神宮宝物館 学芸員 岡田芳幸(前愛博協実行委員)
	新加盟館 森村記念館、トヨタ博物館、一色学びの館、古川美術館(仮称)、知立市歴史民俗資料館、衣の民俗館、名志苑美術館、INAX窯のある広場資料館、計98館。
6月13~14日	東海博平成元年度総会参加、於富士吉田市民会館。
6月23日	実行委員会開催、於名古屋科学館。
7月21日	実行委員会開催、於名古屋博物館。
7月27日	歴史民俗部門研修会開催、於東海銀行貨幣資料館、テーマ:「時代判定基準としての貨幣」、参加26名。
8月22日	実行委員会開催、於名古屋科学館
9月7~8日	博物館等職員研修会開催、於豊橋勤労福祉センター、テーマ:「博物館・美術館の展示効果」、事例発表:名古屋博物館井上芸係長・豊橋市自然史博物館井澤学芸員・豊橋市地下資源坂本学芸員・おかざき世界子ども美術博物館荒井学芸員・熱田神宮宝物館野村学芸員、豊橋市自然史博物館・豊橋市地下資源館見学、参加46名。
9月20日	実行委員会開催、於熱田神宮宝物館。
10月20日	実行委員会開催、於名古屋博物館。
11月9~10日	第37回全国博物館大会の共催、於電気文化会館、でんきの科学館、名古屋科学館、名古屋美術館、大会テーマ「生涯学習と博物館Ⅱーその発展のための現状と問題点ー」講演・分科会・全国博物館会議・パネルディスカッション・施設見学を開催。
1月29~30日	三県交流研修会参加、於伊勢市三重県厚生年金休暇センター、テーマ:「開かれた博物館・受身でない博物館」斎宮歴史博物館他見学。
11月28日	実行委員会開催、於愛知県美術館。
12月20日	実行委員会開催、於王山会館。
1月24日	実行委員会開催、於熱田神宮宝物館。
2月23日	実行委員会開催、於でんきの科学館。
3月2日	美術館部門研修会、於昭和美術館、テーマ:「イタリア・ルネサンス美術」他参加50名。
3月9日	自然科学部門研修会、於名古屋科学館、テーマ:「科学系博物館に求められるもの」他、参加35名。
3月23日	実行委員会開催、於愛知県陶磁資料館。 平成元年度:「愛知の博物館」No.48~49、「東西南北」No.176~179、「おでかけガイドー愛知の博物館」、「ガイドブッカー愛知の博物館」、「加盟館(園)職員録」発行。
平成2年	
4月13日	実行委員会開催、於王山会館。
4月20日	理事会開催、於王山会館。
5月17日	実行委員会開催、於王山会館。
5月17日	平成2年度総会開催、役員改選、岡崎市郷土館・豊橋市自然史博物館選出。於王山会館。 愛博協第13回表彰。 功労賞 日本モンキーセンター 池上千城 功労賞 博物館明治村 伊佐治勉 功労賞 名古屋科学館 伊藤 洋 功労賞 名古屋博物館 高田 伸 功労賞 熱田神宮宝物館 山本文彦

年月日	事項
	感謝状 前愛知県陶磁資料館 館長 山田五夫(前愛博協会長)
	新加盟館 真清田神社宝物館、イズマン温故倉、醸造「伝承館」、師勝町歴史民俗資料館、安城市歴史博物館、春日井市道風記念館、計103館。
6月12~13日	東海博平成2年度総会参加、於横浜美術館、神奈川県立神奈川近代文学館他見学。
6月22日	実行委員会開催、於名古屋科学館。
7月25日	実行委員会開催、於でんきの科学館。
7月27日	歴史民俗部門研修会開催、於東海銀行貨幣資料館。
8月30日	実行委員会開催、於でんきの科学館。
9月6~7日	博物館等職員研修会開催、於サンパーク犬山、テーマ:「博物館の資料収集と研究」、事例発表:博物館明治村中野学芸員・豊橋市自然史博物館家田学芸員・ヨコタ博物館横田館長・古川美術館杉浦学芸員、日本モンキーセンター・犬山市文化史料館・国守犬山城見学、参加155名。
9月20日	実行委員会開催、於愛知県美術館。
10月20日	実行委員会開催、於熱田神宮宝物館
10月4~5日	三県交流研修会開催、於知多美浜簡易保険保養センター、テーマ:「観光地の中での博物館ー観光施設化の功罪ー」INAX窯のある広場資料館・園盛酒の文化館見学、参加73名。
11月20~21日	歴史民俗部門研修会、於名古屋博物館、テーマ:「博物館資料の写真撮影について」他、参加28名。
11月28日	実行委員会開催、於名古屋博物館。
11月20日	実行委員会開催、於王山会館。
1月22日	実行委員会開催、於熱田神宮宝物館。
2月26日	実行委員会開催、於愛知県陶磁資料館。
3月1日	美術部門研修会、於昭和美術館、テーマ:「世界に発言する日本美術」他、参加47名。
2月7日	自然科学部門研修会、於日本モンキーセンター、テーマ:「愛知県内の哺乳動物の問題を考えるー特にニホンザル、ネズミについてー」他、参加31名。
3月22日	実行委員会開催、於名古屋科学館。 平成2年度:協会報「愛知の博物館」No.50~52、「東西南北」No.180~183、「おでかけガイドー愛知の博物館」、ガイドマップ「あいちの博物館みてるき」発行。
平成3年	
4月16日	実行委員会開催、於ちからまち会館。
4月19日	理事会開催、於ちからまち会館。
5月22日	実行委員会開催、於ちからまち会館。
5月22日	平成3年度総会開催、於ちからまち会館、協会設立30周年記念事業委員会を設置し、記念事業の検討を始める。
	検討委員会 委員長 会長 (愛知県陶磁資料館) 副委員長 副会長 (熱田神宮宝物館) 委員 理事 (名古屋科学館) 委員 理事 (でんきの科学館) 委員 理事 (名古屋博物館) 委員 監事 (愛知県文化会館美術館)
	検討チーム チーフ 三輪委員 (名古屋科学館) メンバー 浅田委員 (愛知県陶磁資料館) メンバー 武田委員 (熱田神宮宝物館) メンバー 三上委員 (でんきの科学館) メンバー 種田委員 (名古屋博物館) メンバー 木本委員 (愛知県文化会館美術館) メンバー 事務局 (愛知県陶磁資料館)
	愛博協第14回表彰 功労賞 一宮市博物館 岩野見司 功労賞 博物館明治村 小川重幸 功労賞 日本モンキーセンター 浅井義信 功労賞 日本モンキーセンター 伊藤光太郎
	新加盟館 弥富町歴史民俗資料館、豊田市民芸館・陶芸資料館、一宮町歴史民俗資料館、計106館。
6月13~14日	東海博平成3年度総会参加、於岐山会館(当番岐阜県)。
6月25日	実行委員会開催、於でんきの科学館。
7月23日	実行委員会・記念事業検討チーム検討会開催、於名古屋科学館。
8月30日	実行委員会開催、於名古屋科学館
9月5~6日	博物館等職員研修会開催、於岡崎市勤労福祉会館、テーマ:「外からみた博物館」事例発表:武豊町歴史民俗資料館友の会田島副会長・岡崎市教育委員会社会教育課太田係長・名古屋商科大学附属高等学校長畑教諭・愛知県埋蔵文化財センター森課長補佐・安城市歴史博物館・おかざき世界子ども

年月日	事項
	博物館見学、参加81名。
9月25日	実行委員会・記念事業検討チーム検討会開催、於愛知県美術館。
10月23日	実行委員会開催、於愛知県陶磁資料館。
10月17～18日	三県交流研修会参加、於グリーンピア恵那、テーマ:「生涯学習と博物館」 博石館・青郷記念館・苗木遠山史料館見学。
11月22日	実行委員会開催、於名古屋市科学館。
12月27日	実行委員会・記念行事検討チーム検討会開催、於ちからまち会館。
1月22日	歴史民俗部門研修会、於名古屋市博物館、テーマ:「普及事業におけるコンピュータ利用について」他、参加15名。
1月31日	実行委員会・記念事業検討チーム検討会開催、於熱田神宮宝物館。
2月25日	実行委員会・記念事業検討チーム検討会開催、於でんきの科学館。
2月14日	自然科学部門研修会、於名古屋市科学館、テーマ:「科学系博物館におけるコンピュータ利用について」、参加33名。
2月28日	美術部門研修会、於昭和美術館、テーマ:「彫塑作品について」他、参加40名。
3月25日	実行委員会・記念事業検討チーム検討会開催、於名古屋市科学館。 平成3年度:協会報「愛知の博物館」No.53～55、「東西南北」No.184～187、「おでかけガイド—愛知の博物館」発行。
平成4年	
4月10日	実行委員会開催、於ちからまち会館。
4月24日	30周年記念事業検討委員会・理事会開催、於ちからまち会館。
5月22日	実行委員会開催、於ちからまち会館。
5月22日	平成4年度総会開催、役員改選、鳳来寺山自然科学博物館選出、於ちからまち会館。
	理事(会長) 愛知県陶磁資料館 館長 山田敬二
	理事(副会長) 熱田神宮宝物館 館長 岡地幸雄
	理事 一宮市博物館 館長 小川 守
	理事 岡崎市郷土館 館長 板倉幸治
	理事 知立市歴史民俗資料館 館長 羽佐田弘
	理事 でんきの科学館 館長 寺沢安正
	理事 東海市立平洲記念館 館長 吉川 夫
	理事 徳川美術館 館長 徳川義宣
	理事 豊橋市自然史博物館 館長 高須 温
	理事 名古屋市科学館 館長 岡田 博
	理事 名古屋市博物館 館長 清水 武
	理事 日本モンキーセンター 所長 河合雅雄
	理事 博物館明治村 館長 村松貞次郎
	理事 鳳来寺山自然科学博物館 館長 松井 保
	監事 愛知県美術館 館長 浅野 徹
	監事 昭和美術館 館長 柳沢幸輝
	愛博協第15回表彰
	功労賞 東海銀行貨幣資料館 工藤洋久
	功労賞 日本モンキーセンター 小林秀重
	功労賞 博物館明治村 平岡秀夫
	功労賞 博物館明治村 宇野光男
	感謝状 前愛知県陶磁資料館 主査 原 誠 (前愛博協事務局)
	新加盟館
	愛知県立芸術大学資料館法隆寺金堂壁画模写展示館、日本独楽博物館、計110館。
6月11～12日	東海博平成4年度総会参加、於静岡たちばな会館(当番静岡県)。
6月26日	実行委員会開催、於でんきの科学館。
7月22日	実行委員会開催、於名古屋市科学館。
8月27日	実行委員会開催、於でんきの科学館。
9月3～4日	博物館等職員研修会開催、於愛知県半田勤労福祉会館、テーマ:「地域と博物館」事例発表:窯のある広場資料館神谷館長・鳳来町立鳳来寺山自然科学博物館松井館長・美和町歴史民俗資料館鎌倉芸員・常滑市民俗資料館中野学芸員、南知多ビーチランド・杉本美術館見学、参加49名。
10月2日	実行委員会開催、於熱田神宮宝物館。
11月11日	実行委員会・検討チーム検討会開催、於名古屋市科学館。
11月26～27日	三県交流研修会参加、鳥羽水族館新館、テーマ:「展示における視聴覚機器のはたす役割」、鳥羽水族館・海の博物館見学。
12月17日	実行委員会開催、於愛知県美術館。
1月26日	実行委員会開催、於熱田神宮宝物館。
2月10日	自然科学部門研修会、於豊橋市自然史博物館、テーマ:「植物誌データベース」、参加23名。
2月17日	歴史民俗部門研修会、於名古屋市博物館、テーマ:「和服の取扱い」他参加26名。
2月25日	美術部門研修会、於昭和美術館、テーマ:「名古屋の文化は大根文化」他、参加43名。

年月日	事項
3月4日	実行委員会開催、於徳川美術館。 平成4年度:協会報「愛知の博物館」No.56～57、「おでかけガイド—愛知の博物館」発行。
平成5年	
4月15日	実行委員会・30周年記念事業チーム会議開催、於ちからまち会館。
4月21日	実行委員会・30周年記念事業チーム会議開催、於ちからまち会館。
4月23日	30周年記念事業委員会・理事会開催、於ちからまち会館。
5月21日	実行委員会・30周年記念事業チーム会議開催、於ちからまち会館。
5月21日	平成5年総会開催、於ちからまち会館、協会設立30周年記念事業を実施するため事業委員会を設置する。
	事業委員会
	委員長 愛知県陶磁資料館 館長 山田敬二(会長)
	副委員長 熱田神宮宝物館 館長 岡地幸雄(副会長)
	委員 名古屋市科学館 館長 樋口敬二(理事)
	委員 でんきの科学館 館長 寺沢安正(理事)
	委員 名古屋市博物館 館長 清水 武(理事)
	委員 愛知県美術館 館長 浅野 徹(監事)
	検討チーム
	チーフ 愛知県陶磁資料館 浅田員由(実行委員)
	メンバー 名古屋市科学館 佐伯平二(実行委員)
	メンバー 熱田神宮宝物館 武田定雄(実行委員)
	メンバー でんきの科学館 大島明男(実行委員)
	メンバー 名古屋市博物館 松本博行(実行委員)
	メンバー 日本モンキーセンター 水野礼子(実行委員)
	メンバー 愛知県美術館 木元文平(実行委員)
	メンバー 愛知県陶磁資料館 浅野 徹(事務局)
	愛博協第16回表彰
	功労賞 博物館明治村 後藤義雄
	功労賞 日本モンキーセンター 辻 雅名
	功労賞 ヨコタ博物館 加藤公子
	感謝状 前愛知県陶磁資料館 館長 亀井誠治(前愛博協会長)
	新加盟館
	佐織町中央公民館歴史民俗資料室、津島児童科学館、豊川閣寺寶館、はとギャラリー冬青書屋、計112館。
6月24日	実行委員会・30周年記念事業チーム会議開催、於豊橋市自然史博物館。
7月6日	実行委員会・30周年記念事業チーム会議開催、於ルブラ王山。
7月6～7日	東海博平成5年度総会開催、於名古屋市ルブラ王山、講演「愛知県美術館の再出発」愛知県美術館浅野館長、古川美術館・愛知県美術館・名古屋港水族館見学。111名参加。
8月3日	実行委員会・30周年記念事業チーム会議開催、於名古屋市科学館。
9月2～3日	博物館等職員研修会開催、於鳳来町山びこの丘新館研修棟、テーマ:「僻地における博物館活動」事例発表:ヨコタ博物館加藤職員・香嵐溪ヘビセンター杉山園長・設楽町奥三河郷土館鈴木館長、鳳来町立鳳来寺山自然科学博物館・設楽奥三河郷土館・ヨコタ博物館見学、参加69名。
9月3日	実行委員会・30周年記念事業チーム会議開催、於鳳来町山びこの丘新館研修棟。
11月10日	実行委員会・30周年記念事業チーム会議開催、於名古屋市博物館。
11月26～27日	三県交流研修会開催、豊橋市自然史博物館、研究協議:「これからの博物館—友の会・ボランティア活動—」事例発表:(岐阜県)飛騨の山権館相木学芸員・(三重県)三重県立斎宮歴史博物館久保学芸員・(愛知県)徳川美術館小池普及課長、田原町博物館・豊橋市二川宿本陣史料館見学、参加98名。
12月10日	実行委員会・30周年記念事業チーム会議開催、於名古屋市科学館。
1月12日	実行委員会・30周年記念事業チーム会議開催、於熱田神宮宝物館。
2月9日	歴史民俗部門研修会、於熱田神宮龍影閣、テーマ:「刀剣の取扱い」、参加40名。
2月24日	美術部門研修会、於昭和美術館、テーマ:「版画(木板)等の知識と取扱い・実技」他、参加43名。
2月16日	自然科学部門研修会、於名古屋市科学館、テーマ:「科学館における地学教育—地球を知るための環境教育の実例について」、参加21名。
3月9日	実行委員会・30周年記念事業チーム会議開催、於熱田神宮宝物館。
3月9日	博物館実習に関する加盟館及び関係大学担当者の座談会、於熱田神宮宝物館、テーマ:「博物館実習の現状と今後のあり方」、愛知学院大学・日本福祉大学・愛知大学・トヨタ博物館・名古屋市博物館・豊橋市美術博物館・常滑市民俗資料館・参加39名。
	平成5年度:協会報「愛知の博物館」No.58～59、「おでかけガイド—愛知の博物館」発行。
	退会 香嵐溪ヘビセンター、加盟館計111館

※平成6年～15年の年表については、P22～25の別表およびCDにある「年表」を参照して下さい。

愛知県博物館協会 ～10年のあゆみ

II

- ・研修会
- ・子どもと博物館研究会
- ・『いこまい!! 愛知のミュージアム展』 顛末記
- ・ホームページ研究会
- ・この10年の加盟館
 - 切支丹遺跡博物館
 - 高浜市やきものの里かわら美術館
 - はるひ美術館
 - 西尾市岩瀬文庫
 - 七宝町七宝焼アートヴィレッジ
 - サイクルギャラリー・ヤガミ自転車資料館
 - 世界のタイル博物館
 - 尾西市三岸節子記念美術館

研修会

トヨタ博物館 学芸員 宗沢 清美

ここでは、平成6～15年度(1994～2003年度)までの10年間に開催された、愛知県博物館協会(以下、愛博協)の主活動である各研修会の実績を項目毎にまとめ、特徴を記している。「愛知県博物館協会～10年のあゆみ」(別表①)では時系列で見る活動記録としてまとめているのに対し、当該項での「研修会一覧」(別表②)では、各研修会に取り上げられるテーマの推移から、その時々学芸員が重要視している点や美術館・博物館(以下、美・博物館)に求められている事、またそれらを取り巻く環境状況を見ることができる。

1990年代には次々と新設館が開館した。その背景には1980年代後半の好調な経済傾向もあるが、バブル経済の崩壊後人々は「生き方」自体をみつめ直すようになってきたのではないかと。学校教育の改革に伴う子供との関わり、生涯学習、地域交流(サテライト化)などが謳われ、ハンズ・オン、マインズ・オン、さらにユニバーサル、バリアフリーなどが注目されるようになった。性別・年齢・地域・障害など、あらゆる「境界」を取り払い、心に伝える活動が必要だと見直され、美・博物館にその役割が担われていることが伺える。

尚、「40年史」では各研修会の詳細は記載していないが、その内容などは「愛知の博物館」(年2回発行)をご覧頂きたい。また、昭和59～平成3年度(1984～1991年度)までの研修会記録は「愛知の博物館(No.57)」平成4年(1992)12月10日発行、に掲載されている。

(1) 「研修会年表」 (別表②):

愛博協では「職員研修会」、「自然科学部門」「歴史民俗部門」「美術部門」での部門別研修会、「総会(講演会)」、「東海地区協議会総会」、「東海三県交流研修会」の7つの研修会が開催されている。それらを【年度/参加人数】【テーマ】【講演者】の軸でまとめており、この10年間の傾向によって、テーマ毎に基づく学芸員の興味度合いが伺える。

(2) 職員研修会

キーワード: 「子ども」「システム」「万博」

平成14年(2002)の総合学習の導入や授業科目の改訂、週5日制など、学校教育が大きく変わった。1990年代より、それに先がけ子供への普及活動、博学連携、地域交流などが行われ研修会でも取り上げられた。さらに愛博協では自館の中だけに留まらず、加盟館で団結して活動し、平成11年(1999)には「子どもと博物館研究会(以下、子博研)」を発足して研究会や他館調査などを実施してきた。平成13年(2001)には「あいち子ども体験ミュージアム事業『あいち子どもミュージアムキャラバン』」として県内学芸員で構成した6つのワークショップを実施した(事項「子どもと博物館研究会」に詳細記載)。また、平成13年(2001)には愛博協加盟館で企画展示した「いこまい!!愛知のミュージアム展」を開催(事項「いこまい!!愛知のミュージアム展」に詳細記載)。平成14年度(2002)には子博研で「伝えるということとは?～学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ～展」を企画開催しワークショップを実施した。

一方、この10年間にOAシステムの開発やインターネットが急速に普及した。それらは美・博物館にも大きく関わり、所蔵品管理を帳票シートにて手記入していたものから所蔵品管理システムや検索システム、インターネットによる情報公開など、資料管理の簡便性や機能性、国内外に向けた情報発信がなされるようになった。愛博協でも平成14年(2002)にはホームページを立上げ、各館情報発信や愛博協内連絡掲示として活用している(事項「ホームページ研究会」に詳細記載)。

また、2005年に愛知県で開催される万国博覧会「愛・地球博」を前に18～19世紀に始まった内国博覧会や万国博覧会など、美・博物館の基礎である「博覧」の歴史を振り返った。「博覧会」という情報発信の場、大量の人々が集まる交流やその効果などを考え、21世紀初の万国博覧会開催を愛博協として何ができ、どうPRしていくかなどが議論された。

(3) 部門別研修会

(ア) 自然科学部門：

キーワード；「フィールドワーク」
「保存(標本)」

フィールドワークでは主に奥三河地方を中心に天体、地質、植物などの観察が行われた。現地調査だけでなく資料収集が実施され、その保存方法など身近な材料を使用した標本作りや樹脂を利用した植物標本作りなども合わせて行われた。研修会参加者には、中学校などの教師の方々も見られ、フィールドワークでの教育指導方法や普及活動方法などを専門家と教育者の間でも活気的な意見交換がなされ、有意義な研修会であったことが伺える。

(イ) 歴史民俗部門：

キーワード；「地域交流」「保存(修復)」
「ワークショップ」

民俗学の基本であるフィールドワークの調査方法や無形文化の芸能など、地域文化の伝承やその記録方法などがテーマに挙げられた。歴史民俗は地域との深い密接が重要である分野。現物を用いた教育が効果をなすため、ワークショップや学校展示はもとより、学芸員が教師と連携し授業カリキュラムに参画したり、博学合同授業など、積極的な内容の活動事例が報告された。さらにシステムを利用した分かりやすく楽しいワークシートやワークブック作りなど、学芸員が日頃知恵を絞っている印刷技術などの情報交換が行われた。印刷技術は今後さらに進化していくことが伺え、学芸員によってはシステムを駆使し制作～製本を行うなど、リードタイム短縮に繋がるうれしい情報も得られた。

また、保存では民具などの立体物の保存方法や古文書などの紙資料の修復方法などが取り上げられた。資料に適切な保存方法、より良い状態で未来に続けていく修復方法など、資料と直に接する学芸員の目と技術を養う内容は効果的であり有意義な研修であったことが伺える。

(ウ) 美術部門：

キーワード；「保存(保護・取扱い)」
「展示」「データシステム」

2005年の臭化メチルの全廃に向けてその代替駆除法や害虫管理など、薬剤の情報と共に、実態把握など日々の観察の必要性が取り上げられた。絵画・彫刻・陶芸では保存・梱包方法、展示方法や収蔵庫環境、資料の取扱いなど、専門業者を講師に迎え改めて正しい知識を持つとしようとする姿勢が伺えた。

美術部門でもシステム関連が取り上げられた。「ドキュメンテーション」のシステム化や標準化など、帳票管理からシステム化へ、資料単体別から標準化へと管理方法の簡便化、

合理化が構築され、さらにシステム化によって情報公開や検索要求にも対応していくことで展示企画や教育普及にも活用できることが、学芸員の注目するテーマとして取り上げられた。

(4) その他の講演会（総会、東海地区協議会 総会、東海三県交流研修会）

「総会（講演会）」：

キーワード；「美術館・博物館に求めること」
総会では多方面の方々による講演がなされ、美・博物館に求めることが述べられた。美・博物館は都市や社会に開かれ境界線を無くすことが必要であり、それはまた館側だけでなく、市民も積極的に参加していくべきであると唱えられた。

「東海地区協議会総会（講演）」：

キーワード；「活気」「交流」

東海地区（愛知県、岐阜県、静岡県、神奈川県、山梨県）協議会総会での講演は大学やマスコミ、評論家など各界の有識者による講演がなされた。震災における文化財救援や地域との交流、市民参加、地元作家の推進など、学芸員は市民と交流し地域を含め核となって活動し活気ある館づくりをしていくことが重要であると唱えられた。

「東海三県交流研修会」：

キーワード；「活気」「21世紀の博物館」

東海三県（愛知県、岐阜県、三重県）交流研修会ではテーマ毎に各県の代表館による事例が発表され、一様に「活気」が根底に流れた内容となっている。調査研究や展示構成の工夫は基より、精力的な広報、魅力あるイベントなどいかに館に出向いてもらい作品を見てもらうか、館内外の人々との積極的な交流など、将来を見通したアクションが必要であることが述べられた。

(5) 総評

この10年間では「教育普及」「システム」が二本柱のようにテーマが組まれていたことが伺える。一方的な発信だけでなく、人々との交流を以って作品や歴史に触れてもらおうとする姿勢、心と心で伝えることの重要性が注目される。

また、美・博物館といえども公私立の経営母体の違いや専門分野など様々であり、日常業務によって交流範囲がおのずと限られてしまいが、「研修会」は情報交換の場として、さらに横の繋がりを広め深める有意義な場となっている。40年間の諸先輩方の歴史を踏まえ、今後50年、60年へと歴史を繋げて活気ある活動になっていくことを願っている。

別表①

平成6(1994)年
6月6日

①総会/電気文化会館 (参加:67館、115名)

- (1) 会長挨拶: 山田敬二氏(愛知県陶磁資料館館長)
- (2) 第17回表彰

功労賞	日本モンキーセンター	主任	高井正夫氏
功労賞	三河武士の館家康館		松葉八十美氏
功労賞	博物館明治村	主任	横井欽也氏
功労賞	博物館明治村	管理リーダー	吉田貞治氏

(3) 愛知県博物館協会 役員及び実行委員名簿

役職名	館(園)名	代表者名	備考	実行委員名
理事	愛知県陶磁資料館	館長 山田敬二	会長	浅田員由
〃	熱田神宮宝物館	館長 岡地幸雄	副会長	武田定雄
〃	一宮市博物館	館長 小川 守		毛受英彦
〃	岡崎市郷土館	館長 成田守彦		荒井信貴
〃	蟹江町歴史民俗資料館	館長 北川鉄裕		伊藤和彦
〃	知多市民俗資料館	館長 伊藤昭正		新美博英
〃	知立市歴史民俗資料館	館長 羽佐田銀弘		近藤文枝
〃	でんきの科学館	館長 寺沢安正		大島明男
〃	徳川美術館	館長 徳川義宣		小池富雄
〃	豊橋市自然史博物館	館長 古山保夫		井澤伸忠
〃	名古屋科学館	館長 樋口敬二		佐伯平二
〃	名古屋博物館	館長 清水 武		松本博行
〃	日本モンキーセンター	園長 小寺重孝		水野礼子
〃	博物館明治村	館長 村松貞次郎		中野裕子
〃	鳳来寺山自然科学博物館	館長 松井 保		加藤貞亨
監事	愛知県美術館	館長 浅野 徹		木本文平
〃	昭和美術館	館長 柳澤幸輝		海野嘉代
事務局	小川嘉彦	愛知県陶磁資料館副館長		
	浦山正幸	〃 庶務課長		
	村瀬 寛	〃 庶務課長補佐		
	浅埜 勲	〃 庶務課主査		

(4) 30周年記念式典

記念講演: 講師 川村恒明氏(国立科学博物館館長)、テーマ:「文化の時代と博物館」
記念表彰:

ヨコタ博物館	館長	横田正臣氏
日本モンキーセンター	園長	小寺重孝氏
名古屋科学館	学芸課長	三輪 克氏

記念史発行:「愛知県博物館協会30年史」 B5版、90頁、1,000冊、非売品

②理事会(計1回実施)

③実行委員会(計7回実施)

9月1~2日

④職員研修会/津島児童科学館

⑤部門別研修会

(ア) 自然科学部門/名古屋市東山動物園

テーマ:「伊藤圭介翁一人とその資料について」東山動物園における資料整理について/参加:30名

(イ) 歴史民俗部門/名古屋博物館

テーマ:「民俗・民具の調査法」/参加:49名

(ウ) 美術部門/昭和美術館

テーマ:「表装具変遷と取り扱い」(琳派の絵画)博物館・美術館における温湿度計の知識と取り扱い
「アーマシールド(ガラスの強化膜)について」/参加:55名

⑥東海地区協議会総会/KKR甲府 ニュー芙蓉

講演:「地域における博物館の役割」/参加:69館、115名(内愛知県 26名)

⑦東海三県交流研修会/岐阜市(第19回)

⑧協会発行者

- (1)「おでかけガイド-愛知の博物館」春・秋計2回、(2)協会報「愛知の博物館」No.60~61

⑨加盟館

- (1) 退会1館、(2)新規加盟館5館:新美南古記念館、高浜市やきもの里から美術館、船橋楽器資料館、豊橋市二宿本陣資料館、豊川市桜ヶ丘ミュージアム

平成7(1995)年
5月18日

①総会/ルブラ王山(参加:64館、88名)

(1) 会長挨拶: 福田清彦氏(愛知県陶磁資料館館長)

(2) 第18回表彰

功労賞	春日井市道風記念館	主任	落合 哲氏
功労賞	東海銀行貨幣資料館	前館長	下田光延氏
功労賞	日本モンキーセンター	飼育第一担当主任	棚橋 篤氏
功労賞	博物館明治村	管理リーダー	市野一雄氏
功労賞	博物館明治村	管理リーダー	村瀬忠男氏
功労賞	鳳来寺山自然科学博物館	前館長	松井 保氏
功労賞	野外民族博物館リトルワールド	主任研究員	高橋 貴氏

(3) 愛知県博物館協会 役員及び実行委員名簿

役職名	館(園)名	代表者名	備考	実行委員名
理事	愛知県陶磁資料館	館長 福田清彦	会長	浅田員由
〃	熱田神宮宝物館	館長 岡地幸雄	副会長	武田定雄
〃	一宮市博物館	館長 小川 守		毛受英彦
〃	岡崎市郷土館	館長 成田守彦		荒井信貴
〃	蟹江町歴史民俗資料館	館長 北川鉄裕		伊藤和彦
〃	知多市民俗資料館	館長 伊藤昭正		新美博英
〃	知立市歴史民俗資料館	館長 羽佐田銀弘		近藤文枝
〃	でんきの科学館	館長 寺沢安正		大島明男
〃	徳川美術館	館長 徳川義宣		小池富雄
〃	豊橋市自然史博物館	館長 古山保夫		井澤伸忠
〃	名古屋科学館	館長 樋口敬二		佐伯平二
〃	名古屋博物館	館長 清水 武		松本博行
〃	日本モンキーセンター	園長 小寺重孝		水野礼子
〃	博物館明治村	館長 村松貞次郎		中野裕子
〃	鳳来寺山自然科学博物館	館長 松井 保		加藤貞亨
監事	愛知県美術館	館長 浅野 徹		木本文平
〃	昭和美術館	館長 柳澤幸輝		海野嘉代
事務局	小川嘉彦	愛知県陶磁資料館副館長		
	浦山正幸	〃 庶務課長		
	村瀬 寛	〃 庶務課長補佐		
	浅埜 勲	〃 庶務課主査		

②理事会(計2回実施)

8月30~31日

③実行委員会(計7回実施)

④職員研修会/豊川閣寺宝物館

⑤部門別研修会

(ア) 自然科学部門/豊橋市自然史博物館

テーマ:「走査型電子顕微鏡についての基礎」/参加:23名

(イ) 歴史民俗部門/名古屋博物館

テーマ:「[和本]の種類と修復実習」[資料の取扱い・梱包入門]/参加43名

(ウ) 美術部門/昭和美術館

テーマ:「展示物の諸吊下金具及び安全対策」[近年における美術界の回顧・展望]
「東洋美術品の変遷及び学術的役割」

⑥東海地区協議会総会/神奈川県立歴史博物館

講演:「地域政策について」/参加:74館、112名(内愛知県 24名)

⑦東海三県交流研修会/三重県(第20回)

⑧協会発行者

- (1)「おでかけガイド-愛知の博物館」春・秋計2回、(2)協会報「愛知の博物館」No.62~63、

(3)「東西南北特集号」[広瀬鎮さんのおもいで]

⑨加盟館

- (1) 退会1館、(2)新規加盟館1館:七宝町郷土資料館

平成8(1996)年
5月23日

①総会/ルブラ王山(参加:63館、84名)

(1) 会長挨拶: 福田清彦氏(愛知県陶磁資料館館長)

(2) 第19回表彰

功労賞	尾西市歴史民俗資料館	前館長	足立重喜氏
功労賞	博物館明治村	管理リーダー	加藤正之氏
功労賞	日本モンキーセンター		亀谷勝司氏
功労賞	愛知県美術館	前美術課長	坂下雄彦氏
感謝状	熱田神宮宝物館	前文化課長	武田定雄氏
感謝状	でんきの科学館	前館長	寺沢安正氏
感謝状	愛知県陶磁資料館	前主査	浅埜 勲氏

(3) 愛知県博物館協会 役員及び実行委員名簿

役職名	館(園)名	代表者名	備考	実行委員名
理事	愛知県陶磁資料館	館長 福田清彦	会長	浅田員由
〃	熱田神宮宝物館	館長 岡地幸雄	副会長	副野 均
〃	一宮市博物館	館長 小川 守		久保節子
〃	岡崎市郷土館	館長 稲垣正弘		内藤高玲
〃	美和町歴史民俗資料館	館長 横井 実		鎌倉洋志
〃	常滑市民俗資料館	館長 山本博光		中野晴久
〃	知多市歴史民俗資料館	館長 羽佐田銀弘		近藤文枝
〃	でんきの科学館	館長 鈴木達雄		水野明雄
〃	徳川美術館	館長 徳川義宣		小池富雄
〃	豊橋市美術館	館長 兵東政夫		高橋洋充
〃	名古屋科学館	館長 樋口敬二		佐伯平二
〃	名古屋博物館	館長 清水 武		松本博行
〃	日本モンキーセンター	園長 小寺重孝		水野礼子
〃	博物館明治村	館長 村松貞次郎		中野裕子
〃	鳳来寺山自然科学博物館	館長 横山良哲		加藤貞亨
監事	愛知県美術館	館長 浅野 徹		木本文平
〃	昭和美術館	館長 柳澤幸輝		海野嘉代
事務局	中村 眞	愛知県陶磁資料館副館長		
	浦山正幸	〃 庶務課長		
	村瀬 寛	〃 庶務課長補佐		
	新川代二	〃 庶務課主査		

②理事会(計2回実施)

③実行委員会(計9回実施)

④職員研修会/一宮勤労福祉会館(参加:81名)

⑤部門別研修会

(ア) 自然科学部門/鳳来寺山自然科学博物館

テーマ:「フィールド調査」/参加:22名

(イ) 歴史民俗部門/武豊町中央公民館歴史民俗資料館

テーマ:「鉄から鉄器へ(製鉄と鍛冶の技術)」/参加:40名

(ウ) 美術部門/昭和美術館

テーマ:「性差の心理学」「ワシ、鷹から得る博物学」及び「博物館の使命」

「色彩学」展示施設との調和と「ブラックマッド(写真、ネガフィルム、スライド等の専用整理ファイル)について」[取藏品の保護シートについて]/参加:39名

⑥東海地区協議会総会/岐阜県美術館

講演:「活気ある博物館となるために」/参加:72館、118名(内愛知県 25名)

⑦東海三県交流研修会/労働者研修センター

第21回 テーマ:「これからの博物館」ユニークな博物館活動」/参加:67名(内愛知県 40名)

⑧協会発行者

- (1)「おでかけガイド-愛知の博物館」春・秋(700部×2回)、

(2) 協会報「愛知の博物館」No.64~65(30,000部×2回)、

(3)「東西南北」(400部×1回)

⑨加盟館

- (1) 退会1館:半田空の科学館、(2)新規加盟館3館:岡崎市美術館、

ルイス・C、ティアナー美術館、史料館 八丁味噌の郷、

平成9(1997)年
5月27日

①総会/ルブラ王山(参加:58館、75名)

(1) 会長挨拶: 中村 眞氏(愛知県陶磁資料館館長)

(2) 第20回表彰

功労賞	愛知県陶磁資料館	主任学芸員	浅田員由氏
功労賞	日本モンキーセンター	飼育第一担当主任	今井幸七氏
功労賞	熱田神宮宝物館	前館長	岡地幸雄氏
功労賞	名古屋博物館	前館長	清水 武氏
功労賞	岡崎市郷土館	業務員副主任	中田綾子氏
功労賞	名古屋科学館	技師	服部俊二氏
感謝状	愛知県陶磁資料館	前館長	福田清彦氏

(3) 愛知県博物館協会 役員及び実行委員名簿

役職名	館(園)名	代表者名	備考	実行委員名
理事	愛知県陶磁資料館	館長 中村 眞	会長	佐藤一信

〃	熱田神宮宝物館	館長 小串和夫	副会長	千秋季頼
〃	安城市歴史博物館	館長 天野鴨保		近藤義行
〃	一宮市博物館	館長 尾関良英		久保植子
〃	岡崎市美術博物館	館長 中根鎮夫		荒井信貴
〃	でんきの科学館	館長 内山俊一		新美治男
〃	徳川美術館	館長 徳川義宣		小池富雄
〃	常滑市民俗資料館	館長 山本博光		中野晴久
〃	豊橋市美術博物館	館長 河合康道		高橋洋充
〃	名古屋科学館	館長 樋口敬二		佐伯平二
〃	名古屋市博物館	館長 光森進助		犬塚康博
〃	日本モンキーセンター	園長 小寺重孝		水野礼子
〃	博物館明治村	館長 村松貞次郎		中野裕子
〃	鳳来寺山自然科学博物館	館長 横山良哲		加藤貞亨
〃	美和町歴史民俗資料館	館長 榎井 実		鎌倉崇志
〃	愛知県美術館	館長 浅野 徹		木本文平
〃	昭和美術館	館長 柳澤幸輝		海野嘉代
事務局	長谷川和彦	愛知県陶磁資料館副館長		
	峰 一臣	〃 庶務課長		
	村瀬 寛	〃 庶務課長補佐		
	新川代二	〃 庶務課主査		

- ②理事会 (計1回実施)
 ③実行委員会 (計9回実施)
 ④職員研修会/サンピア岡崎
 テーマ:「展示と展示手法」/参加:53名
 ⑤部門別研修会
 (ア)自然科学部門/名古屋市科学館
 テーマ:「アプスタインーションについて」/参加:17名
 (イ)歴史民俗部門/一宮市博物館
 テーマ:「活きている博物館～歴史系博物館のこれから～」/参加:60名
 (ウ)美術部門/エコバル名古屋
 テーマ:「環境保全および美濃焼について」/参加:29名
 ⑥東海地区協議会総会/サンピア浜松
 講演:「寿命と芸術-博物館の果たす役割」/参加:61館、95名(内愛知県 24名)
 ⑦東海三県交流研修会/ぎふ長良川ハイソ
 第22回 テーマ:「地球」/参加:81名(内愛知県 23名)
 ⑧協会発行者:
 (1)「おでかけガイド-愛知の博物館」春・秋計2回、(2)協会報「愛知の博物館」No.66-67、
 (3)「東西南北」1回
 ⑨加盟館
 (1)退会3館:豊橋市地下資源館、三河武士のやまた家康館、岡崎市郷土館、
 (2)新規加盟館1館:産業技術記念館

- 平成10(1998)年
 5月28日
 ①総会/ルブラ王山 (参加:58館、83名)
 (1)会長挨拶:中村 眞氏(愛知県陶磁資料館館長)
 (2)第21回表彰
- | | | | |
|-----|------------|--------------|-------|
| 功労賞 | 日本モンキーセンター | 動物飼育担当技術リーダー | 佐藤正雄氏 |
| 功労賞 | 半田市立博物館 | 前館長 | 立松 宏氏 |
| 奨励賞 | 博物館明治村 | 係長 | 鈴木照子氏 |

(3) 愛知県博物館協会 役員及び実行委員名簿

役職名	館(園)名	代表者名	備考	実行委員名
理事	愛知県陶磁資料館	館長 中村 眞	会長	佐藤一信
〃	熱田神宮宝物館	館長 二橋一彦	副会長	千秋季頼
〃	安城市歴史博物館	館長 天野鴨保		峯村 敏
〃	岡崎市美術博物館	館長 芳賀 徹		荒井信貴
〃	甚目寺町歴史民俗資料館	課長 斎藤宗久		内山伸也
〃	でんきの科学館	館長 内山俊一		新美治男
〃	徳川美術館	館長 徳川義宣		小池富雄
〃	豊橋市自然史博物館	館長 近藤洋一		長谷川道明
〃	名古屋市科学館	館長 樋口敬二		佐伯平二
〃	名古屋市博物館	館長 光森進助		犬塚康博
〃	新美南古記念館	館長 榎原義夫		遠山光嗣
〃	日本モンキーセンター	園長 小寺重孝		水野礼子
〃	博物館明治村	館長 飯田喜四郎		中野裕子
〃	尾西市歴史民俗資料館	館長 鶴岡龍二		小林弘昌
〃	鳳来寺山自然科学博物館	館長 横山良哲		加藤貞亨
〃	愛知県美術館	館長 長谷川三郎		木本文平
〃	昭和美術館	館長 柳澤幸輝		海野嘉代
事務局	長谷川和彦	愛知県陶磁資料館副館長		
	堤髪孝彦	〃 管理部長		
	峰 一臣	〃 庶務課長		
	村瀬 寛	〃 庶務課長補佐		
	大羽二郎	〃 庶務課主査		

- ②理事会 (計1回実施)
 ③実行委員会 (計11回実施)
 ④職員研修会/半田勤労福祉会館
 テーマ:「科学館におけるインターネット利用」/参加:49名
 ⑤部門別研修会
 (ア)自然科学部門/スターフォレスト御園
 テーマ:「冬の屋外観察と指導法」/参加:23名
 (イ)歴史民俗部門/名古屋市美術館
 テーマ:「博物館・美術館ワークショップの今」/参加:60名
 (ウ)美術部門/愛知県美術館
 テーマ:「美術館の保存」/参加:80名
 ⑥東海地区協議会総会/ルブラ王山
 講演:「博物館活動における市民参加」/参加:78館、110名(内愛知県 46名)
 ⑦東海三県交流研修会/神宮会館
 第23回 テーマ:「博物館考～内から外から」/参加:80名(内愛知県 19名)
 ⑧協会発行者:
 (1)「おでかけガイド-愛知の博物館」春・秋計2回、
 (2)協会報「愛知の博物館」No.68-69、
 ⑨加盟館
 (1)退会2館:鈴木そらばん博物館、ルイス・C.ティファニー美術館、

平成11(1999)年
 6月3日

- (2) 新規加盟館4館:尾西市三岸節子記念美術館、
 あいち健康の森 健康科学総合センター健康科学館、大一大美術館、大口町歴史民俗資料館

- ①総会/アイリス愛知 (参加:63館、88名)
 (1)会長挨拶:中村 眞氏(愛知県陶磁資料館館長)
 (2)第22回表彰
- | | | |
|-----|-----------|-------|
| 奨励賞 | 名古屋市東山植物園 | 横山 進氏 |
| 感謝状 | 昭和美術館 | |

(3) 愛知県博物館協会 役員及び実行委員名簿

役職名	館(園)名	代表者名	備考	実行委員名
理事	愛知県陶磁資料館	館長 中村 眞	会長	佐藤一信
〃	熱田神宮宝物館	館長 二橋一彦	副会長	千秋季頼
〃	安城市歴史博物館	館長 天野鴨保		近藤義行
〃	岡崎市美術博物館	館長 芳賀 徹		荒井信貴
〃	甚目寺町歴史民俗資料館	課長 斎藤宗久		内山伸也
〃	でんきの科学館	館長 牧野督治		喜田幸男
〃	徳川美術館	館長 徳川義宣		小池富雄
〃	豊橋市自然史博物館	事務局 加藤洋一		長谷川道明
〃	名古屋市科学館	館長 樋口敬二		佐伯平二
〃	名古屋市博物館	館長 宮澤明倫		犬塚康博
〃	新美南古記念館	館長 榎原義夫		遠山光嗣
〃	日本モンキーセンター	園長 小寺重孝		水野礼子
〃	博物館明治村	館長 飯田喜四郎		中野裕子
〃	尾西市歴史民俗資料館	館長 鶴岡龍二		小林弘昌
〃	鳳来寺山自然科学博物館	館長 横山良哲		加藤貞亨
〃	愛知県美術館	館長 長谷川三郎		深山孝彰
〃	昭和美術館	館長 柳澤幸輝		海野嘉代
事務局	村瀬 寛	愛知県陶磁資料館庶務課長		
	大羽二郎	〃 庶務課主査		
	宮島理恵	〃 庶務課主事		

- ②理事会 (計2回実施)
 ③実行委員会 (計10回実施)
 ④職員研修会/尾西グリーンプラザ
 テーマ:「新世紀へ向けての博物館」/参加:53名
 ⑤部門別研修会
 (ア)自然科学部門/東栄町 古戸の風穴
 テーマ:「洞窟の自然観察」/参加:19名
 (イ)歴史民俗部門/名古屋市博物館
 テーマ:「博物館におけるコミュニケーション-来館者調査と展示評価調査-」/参加:62名
 (ウ)美術部門/愛知県美術館
 テーマ:「美術館危機の時代<不況対策>」/参加:70名
 ⑥東海地区協議会総会/山梨厚生年金会館
 講演:「武田信玄人気の秘密-公としての戦国大名」/参加:56館、78名(内愛知県 18名)
 ⑦東海三県交流研修会/あいち健康の森
 第24回 テーマ:「マルチメディア時代の諸問題」/参加:68名(内愛知県 34名)
 ⑧協会発行者:
 (1)「おでかけガイド-愛知の博物館」春・秋計2回、
 (2)協会報「愛知の博物館」No.70-71
 (3)「東西南北」1回
 ⑨加盟館
 (1)退会1館:名古屋昆虫館(準備室)
 ⑩特記
 (1)「子どもと博物館研究会」発足

平成12(2000)年
 6月6日

- ①総会/名古屋国際会議場 (参加:54館、72名)
 (1)会長挨拶:宮澤明倫氏(名古屋市博物館館長)
 (2)第23回表彰
- | | | |
|-----|---------|-------|
| 功労賞 | 名古屋市博物館 | 安達厚三氏 |
| 功労賞 | 名古屋市科学館 | 内藤晴枝氏 |

(3) 愛知県博物館協会 役員及び実行委員名簿

役職名	館(園)名	代表者名	備考	実行委員名
理事	名古屋市博物館	館長 竹内 正	会長	犬塚康博
〃	熱田神宮宝物館	館長 二橋一彦	副会長	千秋季頼
〃	愛知県陶磁資料館	館長 藤田和俊		佐藤一信
〃	稲沢市荻須記念美術館	館長 後藤都夫		日野幸治
〃	岡崎市美術博物館	館長 芳賀 徹		天野幸枝
〃	武豊町歴史民俗資料館	館長 石川 昇		奥川弘成
〃	でんきの科学館	館長 牧野督治		喜田幸男
〃	徳川美術館	館長 徳川義宣		小池富雄
〃	豊田市郷土資料館	館長 安藤 勇		松井孝宗
〃	トヨタ博物館	館長 山本厚夫		鈴木忠道
〃	豊橋市美術博物館	館長 藤井 隆		高橋洋充
〃	名古屋市科学館	館長 樋口敬二		佐伯平二
〃	博物館明治村	館長 飯田喜四郎		中野裕子
〃	鳳来寺山自然科学博物館	館長 横山良哲		加藤貞亨
〃	弥富町歴史民俗資料館	館長 榎田 厚		伊藤隆彦
〃	愛知県美術館	館長 長谷川三郎		深山孝彰
〃	昭和美術館	館長 柳澤幸輝		海野嘉代
事務局	堤 時啓	名古屋市博物館		
	鈴木知之	〃		
	早川彰夫	〃		
	佐藤行雄	〃		

- ②理事会 (計1回実施)
 ③実行委員会 (計9回実施)
 ④職員研修会/豊田市美術館
 テーマ:「学校と博物館-2002年総合学習の導入にむけて-」/参加:62名
 ⑤部門別研修会/愛知県美術館
 (ア)自然科学部門/名古屋市科学館
 テーマ:「博物館職員等パソコン教室」/参加:20名

平成13年3月1日 (イ) 歴史民俗部門/博物館明治村
 テーマ:「博物館資料の修復・保存・活用」/参加:34名

平成13年2月16日 (ウ) 美術部門/愛知県美術館
 テーマ:「ドキュメンテーションの今」/参加:34名

7月11～12日 ⑥東海地区協議会総会/横浜美術館
 講演:「絵とき 開港と横浜」/参加:69館、92名(内愛知県 13名)

10月31日～11月1日 ⑦東海三県交流研修会/長良川市
 第25回 テーマ:「21世紀を迎える博物館」/参加:58名(内愛知県 16名)

⑧協会発行物
 (1)「おでかけガイド-愛知の博物館」春・秋計2回、
 (2) 協会報「愛知の博物館」No.72～73

⑨加盟館
 (1) 新規加盟館3館:美術の森、名古屋ホストン美術館、名古屋港水族館

⑩特記
 (1)「いこま!!愛知のミュージアム展」説明会・企画委員会開催
 (2)「子どもと博物館研究会」

平成13(2001)年 5月8日 ①総会/名古屋博物館 (参加:59館、91名)
 (1) 会長挨拶:宮澤明倫氏(名古屋博物館館長)
 (2) 表彰無し
 (3) 愛知県博物館協会 役員及び実行委員名簿

役職名	館(園)名	代表者名	備考	実行委員名
理事	名古屋博物館	館長 竹内 正	会長	田中青樹
〃	でんきの科学館	館長 宮地清美	副会長	真野博美
〃	愛知県陶磁資料館	館長 篠田和俊		佐藤一信
〃	熱田神宮宝物館	館長 二橋一彦		千秋季頼
〃	稲沢市荻須記念美術館	館長 後藤郁夫		日野幸治
〃	岡崎市美術館	館長 芳賀 徹		浦野加穂子
〃	武豊町歴史民俗資料館	館長 石川 昇		奥川弘成
〃	徳川美術館	館長 徳川義宣		小池富雄
〃	豊田市郷土資料館	館長 畔柳寿文		松井孝宗
〃	トヨタ博物館	館長 山本厚夫		鈴木忠道
〃	豊橋市美術館	館長 藤井 隆		高橋洋充
〃	名古屋科学館	館長 樋口敬二		佐伯平二
〃	博物館明治村	館長 飯田喜四郎		中野裕子
〃	鳳来寺山自然科学博物館	館長 横山良哲		加藤貞亨
〃	弥富町歴史民俗資料館	館長 稲垣 厚		伊藤隆彦
〃	愛知県美術館	館長 長谷川三郎		深山孝彰
〃	昭和美術館	館長 柳澤幸輝		加藤香葉子
事務局	堤 時啓	名古屋博物館		
〃	藤田博康	〃		
〃	大坪眞人	〃		
〃	佐藤行雄	〃		

⑫理事会(計2回実施)
 ⑬実行委員会(計9回実施)
 ⑭職員研修会/稲沢市勤労福祉会館
 テーマ:「美術館・博物館における「連携」」/参加:46名

⑮部門別研修会
 (ア) 自然科学部門/鳳来町
 テーマ:「中央構造線沿いの岩石露頭の見学と資料採集」/参加:12名

平成14年2月15日 (イ) 歴史民俗部門/武豊町中央公民館
 テーマ:「地域・住民と博物館、資料館」/参加:16名

平成14年2月14～15日 (ウ) 美術部門/愛知県美術館
 テーマ:「鑄造彫刻作品の収蔵・展示と鑄造管理の在り方について」/参加:20名

6月7～8日 ⑥東海地区協議会総会/高山市民文化会館
 講演:古代飛騨文化の特質/参加:52館、87名(内愛知県 14名)

8月2～3日 ⑦東海三県交流研修会/伊勢シエホテル
 第26回 テーマ:「博物館と学校-総合的な学習の時間の事例から」/参加:103名(内愛知県 21名)

⑧協会発行物
 (1)「おでかけガイド-愛知の博物館」春・秋計2回、
 (2) 協会報「愛知の博物館」No.74～75

⑨加盟館
 (1) 退会1館:蒲郡ファンタジー館、
 (2) 新規加盟館2館:サイクル・ギャラリー・ヤガミ、鍛造技術の館

⑩特記
 (1)「いこま!!愛知のミュージアム展」開催
 会場:名古屋博物館 [7月14日(土)～9月2日(日)]
 (2)「愛博協ホームページ」説明会(9月27日・於名古屋科学館)
 (3)「子どもと博物館研究会」

平成14(2002)年 6月20日 ①総会/愛知県美術館 (参加:56館、76名)
 (1) 会長挨拶:宮澤明倫氏(名古屋博物館館長)
 (2) 第24回表彰

功労賞	名古屋科学館	交換士	齋藤謙子氏	
役職名	館(園)名	代表者名	備考	実行委員名
理事	愛知県美術館	館長 長谷川三郎	会長	深山孝彰
〃	でんきの科学館	館長 宮地清美	副会長	喜田幸男
〃	愛知県陶磁資料館	館長 戸塚理人		佐藤一信
〃	熱田神宮宝物館	館長 二橋一彦		佐竹俊郎
〃	一宮市博物館	館長 馬場康雄		久保禎子
〃	大府市歴史民俗資料館	館長 杏名 勝		小島美智子
〃	岡崎市美術館	館長 芳賀 徹		浦野加穂子
〃	津島児童科学館	館長 佐藤吉泰		吉田富子
〃	徳川美術館	館長 徳川義宣		小池富雄
〃	豊田市郷土資料館	館長 畔柳寿文		天野博之
〃	トヨタ博物館	館長 山本厚夫		鈴木忠道
〃	豊橋市自然史博物館	館長 糸魚川淳二		藤原直子
〃	名古屋博物館	館長 竹内 正		田中青樹
〃	博物館明治村	館長 飯田喜四郎		中野裕子

(3) 愛知県博物館協会 役員及び実行委員名簿

〃	鳳来寺山自然科学博物館	館長 横山良哲		加藤貞亨
〃	昭和美術館	館長 柳澤幸輝		普天間公美
〃	名古屋科学館	館長 樋口敬二		佐伯平二
事務局	堤 時啓	名古屋博物館		
〃	鈴木知之	〃		
〃	早川彰夫	〃		
〃	佐藤行雄	〃		

12月5～6日 ⑫理事会(計1回実施)
 ⑬実行委員会(計8回実施)
 ⑭職員研修会/名古屋博物館
 テーマ:「[共通検索]など博物館における資料情報共有システムについて」/参加:41名

平成15年2月2日 ⑮部門別研修会
 (ア) 自然科学部門/みのかも文化の森
 テーマ:「2,000万年の森の痕跡を訪ねる」/参加:8名

平成15年2月18日 (イ) 歴史民俗部門/豊田市産業文化センター
 テーマ:「民俗芸能と古文書修復についての講演と実演」/参加:38名

平成15年1月18日 (ウ) 美術部門/名古屋美術館
 テーマ:「ターナ・ウエルトン 女史(駐名古屋米領事)を迎えてのインタビュー
 『応援しています! 日米の美術館と私』」/参加:30名

7月4～5日 ⑥東海地区協議会総会/静岡県立美術館
 講演:「東アジアの茶文化」/参加:91名(内愛知県 16名)

10月24～25日 ⑦東海三県交流研修会/産業技術記念館
 第27回 テーマ:「参加体験型展示。事業の現状と展望」/参加:57名(内愛知県 29名)

⑧協会発行物
 (1)「おでかけガイド-愛知の博物館」春・秋計2回、
 (2) 協会報「愛知の博物館」No.76～77

⑨加盟館
 (1) 新規加盟館4館:ノリタケの森クラフトセンター、ワールの工房博物館 テキスタイル館、
 三河武士のやかた家康館、岡崎市郷土館

⑩特記
 (1) 子どもと博物館研究会
 「伝えるということとは?～学芸員が贈る子どもたちへメッセージ～」展
 開催・会場:一宮市博物館 [平成15年1月11日～2月23日]
 (2)「愛博協ホームページ」開始

平成15(2003)年 6月26日 ①総会/愛知県美術館 (参加:69館、74名)
 (1) 会長挨拶:市川政憲氏(愛知県美術館館長)
 (2) 第25回表彰

功労賞	愛知県陶磁資料館	学芸部長兼学芸課長	浅田員由氏
功労賞	設楽町奥三河郷土館	前館長	鈴木登美夫氏

(2) 愛知県博物館協会 役員及び実行委員名簿

役職名	館(園)名	代表者名	備考	実行委員名
理事	愛知県美術館	館長 市川政憲	会長	深山孝彰
〃	でんきの科学館	館長 宮地清美	副会長	喜田幸男
〃	愛知県陶磁資料館	館長 川上 實		佐藤一信
〃	熱田神宮宝物館	館長 二橋一彦		佐竹俊郎
〃	一宮市博物館	館長 小野田雅一		久保禎子
〃	大府市歴史民俗資料館	館長 杏名 勝		小島美智子
〃	岡崎市美術館	館長 芳賀 徹		浦野加穂子
〃	津島児童科学館	館長 相川卓巳		吉田富子
〃	徳川美術館	館長 徳川義宣		並木昌史
〃	豊田市郷土資料館	館長 畔柳寿文		伊藤直子
〃	トヨタ博物館	館長 山本厚夫		鈴木忠道
〃	豊橋市自然史博物館	館長 糸魚川淳二		藤原直子
〃	名古屋博物館	館長 竹内 正		長谷川葉子
〃	博物館明治村	館長 飯田喜四郎		中野裕子
〃	鳳来寺山自然科学博物館	館長 横山良哲		加藤貞亨
〃	昭和美術館	館長 柳澤幸輝		普天間公美
〃	名古屋科学館	館長 樋口敬二		佐伯平二
事務局	木本文平	愛知県美術館企画普及課長		
〃	奥村 正	〃	業務課課長補佐	
〃	森 明美	〃	業務課課長補佐	

⑫理事会(計1回実施)
 ⑬実行委員会(計8回実施)
 ⑭職員研修会/博物館明治村
 テーマ:「博物館と博物館」/参加:81名

⑮部門別研修会
 (ア) 自然科学部門/豊橋市自然史博物館
 テーマ:「使える植物標本入門講座」/参加:15名

平成16年2月18日 (イ) 歴史民俗部門/一宮市博物館
 テーマ:「印刷技術の歴史とこれら～博物館におけるこれからの記録づくり～」/参加:39名

平成16年2月27日 (ウ) 美術部門/トヨタ博物館
 テーマ:「美術工芸品の梱包及び展示技法について」/参加:22名

7月16日 ⑥東海地区協議会総会/愛知芸術文化センター
 講演:「マスメディアと博物館・美術館」/参加:58館、69名

11月12～13日 ⑦東海三県交流研修会/大垣市スイビアセンター
 第28回 テーマ:「元気の出る博物館活動」/参加:54名(内愛知県 16名)

⑧協会発行物:
 (1)「おでかけガイド-愛知の博物館」春・秋計2回、
 (2) 協会報「愛知の博物館」No.78～79

⑨加盟館
 (1)退会1館:ヒマラヤ美術館、(2)新規加盟館4館:七宝町七宝焼アートヴィレッジ、
 西尾市岩瀬水庫、はるひ美術館、菩提樹館

研修会一覧

役職等は当時のもの。記載順序は発表順序に準ずる。

職員研修会

平成6年(1994)/33名

【博物館の相互協力】

師勝町歴史民俗資料館 市橋芳則氏
佐織町中央公民館歴史民俗資料室 石田泰弘氏
伊良湖やしの実博物館 森下徹氏

【親しまれる博物館をめざして】

新美南吉記念館 遠山光嗣氏
ぎょぎょランド赤塚山公園管理室長 白井勝氏
高浜市やきもの里かわら美術館 天野卓哉氏

【コンピューターを利用した博物館資料の情報化】

愛知県美術館 鮎井秀伸氏
一宮市博物館 久保禎子氏

【展示と展示手法】

東海市教育委員会 社会教育課 立松彰氏
名古屋市科学館 佐伯平二氏
岡崎市美術館 杉本育子氏

【科学館におけるインターネット利用】

NTT第3営業部システム担当 佐伯平二氏
名古屋市科学館 榎原義夫氏

【新世紀へ向けての博物館】

トヨタ博物館 久保禎子氏
知多市歴史民俗博物館 高見沢明雄氏
東海市立平洲記念館 熊崎康文氏

【学校と博物館～2002年総合学習の導入にむけて～】

名古屋市立如意小学校 教師 中條幸治氏
安城市立二本木小学校 教師 神谷友和氏
幸田町立萩谷小学校 教師 野本欽也氏

【美術館・博物館における「連携」】

「いこまい!愛知のミュージアム展」の事例 田中青樹氏
名古屋市博物館 田中青樹氏

【子どもと博物館研究会】の事例

一宮市博物館 久保禎子氏
「アミューズ・ビジョン研究会」の事例 杉本育子氏
刈谷市美術館 杉本育子氏

【共同企画展「個人美術館散歩」の事例】

稲沢市立荻須記念美術館 山田美佐子氏

【博物館の情報戦略：資料情報の提供と共有】

東京国立博物館情報課 課長 高見沢明雄氏
「生涯学習における共通牽引システムについて」 熊崎康文氏

【博覧会と博物館】

「名古屋博覧会と龍影閣」 飯田喜四郎氏
博物館明治村 館長 飯田喜四郎氏

【明治萬国博覧会】展

博物館明治村 中野裕子氏
「博物館と博覧会」 糸魚川淳二氏

【明治期の陶磁器と博覧会】

愛知県陶磁資料館 仲野泰裕氏
「博覧会による近代技術の振興と明治村に残る産業遺産」 馬淵浩一氏

【モノづくりの記録と博覧会】

名古屋市博物館 井上善博氏
「明治政府による工芸指導」 服部文孝氏

【博覧会と都市の表象】

一現代産業芸術国際博覧会と1925年のパリ」 岡崎市美術館 千景真智子氏

【博覧会の政治学】

東京大学社会学部教授 吉見俊哉氏

部門別研修会

(ア)自然科学部門

平成6年(1994)/30名
「伊藤圭介一人とその資料について」 横山進氏

【東山植物園における資料整理について】

東山植物園 岡島徳岳氏
平成7年(1995)/23名
「走査型電子顕微鏡についての基礎」 上謙良一氏

【フィールド調査】

鳳来寺山自然科学博物館 館長 横山良哲氏
平成9年(1997)/17名

【プラスティーションについて】

東京大学医学部標本室 吉田 稯氏
「教育・展示用の標本作製について」 三宅康之氏

【川崎医科大学現代医学教育博物館】

坂本由美氏
仁科幸子氏

平成10年(1998)/23名

【冬の屋外観察と指導法】

豊橋市自然科学博物館 館長 横山良哲氏
平成11年(1999)/19名

【洞窟の自然観察】

豊橋市自然科学博物館 館長 横山良哲氏
鳳来寺山自然科学博物館 館長 横山良哲氏

【博物館職員等パソコン教室】

名古屋市科学館 館長 横山良哲氏
平成13年(2001)/12名

【中央鉄道線沿いの岩石露頭の見学と資料採集】

鳳来寺山自然科学博物館 館長 横山良哲氏
平成14年(2002)/8名

【2,000万の森の痕跡を訪ねる】(フィールドワーク)

平成15年(2003)/15名
「標本の作り方 雑草束植物編」 藤原直子氏

【標本の作り方 キノコ編】

鳳来寺山自然科学博物館 館長 横山良哲氏

【植物を展示するための手法】

(イ) 歴史民俗部門 平成6年(1994)/49名
「民俗調査法」 伊藤良吉氏

【民具調査法】

名古屋市民俗研究会 代表 伊藤良吉氏
「民具の調査法」 藤田雅彦氏

【「和本」の種類と修復実習】

名古屋市博物館 下村信博氏
「資料の取扱い・梱包入門」 笹木繁光氏

【特別展「木曾」企画から展示まで】

名古屋市博物館 榎田二郎氏
平成8年(1996)/40名

【鉄から鉄器へ(製鉄と鍛冶の技術)】

大同工業大学 名誉教授 横井時秀氏
安城市歴史博物館 学芸係長 斎藤卓志氏

【活きている博物館～歴史系博物館のこれから～】

日本モンキーセンター 野野礼子氏
内藤記念くすり博物館 水野貞子氏

【国際博物館会議CIDOC委員会によるコレクション・ドキュメンテーションの標準化動向】

科学技術館企画開発部次長 水嶋英治氏
平成13年(2001)/20名

【鑄造彫刻作品の収蔵・展示と鑄造管理の在り方について】

台東区立朝倉彫塑館 村山万介氏
碓山美術館 千田敬一氏

【博物館・美術館ワークショップの今】

大塚康博氏 藤原優子氏
名古屋市博物館 館長 横山良哲氏

【「アート・ドキュメンテーションあれこれ」】

愛知県美術館 鮎井秀伸氏
「国際博物館会議CIDOC委員会によるコレクション・ドキュメンテーションの標準化動向」 科学技術館企画開発部次長 水嶋英治氏

平成6年(1994)/115名

【「アート・ドキュメンテーションあれこれ」】

愛知県美術館 鮎井秀伸氏
「国際博物館会議CIDOC委員会によるコレクション・ドキュメンテーションの標準化動向」 科学技術館企画開発部次長 水嶋英治氏

平成14年(2002)/76名

【「アート・ドキュメンテーションあれこれ」】

愛知県美術館 鮎井秀伸氏
「国際博物館会議CIDOC委員会によるコレクション・ドキュメンテーションの標準化動向」 科学技術館企画開発部次長 水嶋英治氏

※CDにある「年表」も参照して下さい。

子どもと博物館研究会

<発足から経過>

平成14年度から学校完全5日制の開始にともない、文部省は「全国子どもプラン(緊急3ヵ年戦略)」を策定、これに基づき生涯学習局社会教育課が平成11年3月1日付で「親しみ博物館づくり事業」の募集をおこなった。

一方、各美術館・博物館では、展示やワークショップなどにおいて子ども向けプログラムが数多く実施され、さまざまな試みや研究がおこなわれるようになった。

そこで、こうした現状と理論の双方を踏まえ、実施可能な子ども向けプログラムを創出することを目的として、平成11年(1999)、愛知県博物館協会内に、「子どもと博物館研究会」を発足する。

活動としては、子どもと博物館の多様な

徳川美術館
企画情報部係長 加藤啓子

かわり方を分析し、歴史・科学・自然・美術といったさまざまな分野の枠組みや個々の組織・行政体の既存概念を越え、新しい総合的な博物館・美術館と子どものかかわりを模索するため、定期的研究会、ニュースリリースの発行、見学会などである。

さらに、平成12年度文部科学省委嘱「親しみ博物館づくり事業」で「あいち子ども体験ミュージアム事業」、平成14年度文化庁芸術拠点形成事業で「伝えるということとは? ～学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ～」を実施した。



実施報告

○研究会

1. 第1回研究会

日にち：1999.7.2 会場：名古屋市博物館
発表／「民俗展示におけるハンズ・オンとマイ
ンズ・オン」
一宮市博物館学芸員 久保禎子

2. 第2回研究会

日にち：1999.8.20 会場：あいち健康の森健康
科学総合センター健康科学館
発表／「子どもの目、子どもの心」
金城学院大学教授 若林慎一郎

3. 第3回研究会

日にち：1999.9.9
会場：尾西市グリーンプラザ
発表／「緑陰教室」
熱田神宮宝物館 大原和生
「夏休み歴史教室」
徳川美術館学芸員 加藤啓子
「やきものはっけんでん」
愛知県陶磁資料館学芸員 佐藤一信

4. 第4回研究会

日にち：1999.10.8 会場：愛知県陶磁資料館
発表／「自分史の中の<こどもと博物館>」
名古屋市博物館学芸員 犬塚康博
「この夏の子ども向け企画をご紹介します」
愛知県陶磁資料館学芸員 佐藤一信
一宮市博物館学芸員 久保禎子

5. 第5回研究会

日にち：1999.3.24 会場：一宮市博物館
発表／「『99イタリア・ポローニャ国際絵画原画
展』における一時保育くおとなが楽しむ
ポローニャ展」について」
高浜市やきもの里かわら美術館学芸員
橋本久美
「親しみ博物館づくり事業の報告」
徳川美術館学芸員 加藤啓子
「見学会の報告-キッズプラザ大阪」
岡崎市美術博物館学芸員 天野幸枝

6. 第6回研究会

日にち：2000.6.16 会場：名古屋市博物館
発表／木場一夫「自然研究と路傍博物館」を読む
名古屋市博物館学芸員 犬塚康博

7. 第7回研究会

日にち：2000.12.22 会場：名古屋市博物館
キャラバン1～5 報告会

8. 第8回研究会

日にち：2001.8.2 会場：名古屋市博物館
各館子ども向け企画の情報交換

9. 第9回研究会

日にち：2002.1.30

10. 第10回研究会

日にち：2002.5.15 会場：愛知県美術館

11. 第11回研究会

日にち：2003.1.30 会場：徳川美術館
今後の子どもと博物館研究会の進行方法について

12. 第12回研究会

日にち：2003.7.17
各館子ども向け企画の情報交換

○ニュースレター「children & museum」

1. 創刊号 (1999.9.9)

「C&M研究会はじまる C&Mの目的と方法」
研究会報告
「はじめての“こども美術館”企画日誌」
愛知県陶磁資料館学芸員 佐藤一信



「コラム」

尾西市歴史民俗資料館学芸員 小林弘昌
「きょうと国際子どもミュージアム行ってきた記」
名古屋大学大学院人間情報学博士課程(後期)宮下十有
「博物館教育プログラムのひとつの方法」
名古屋市美術館学芸員 伊藤優子
「子どもと博物館小史1 木場一夫・棚橋源太郎・児童博物館」
名古屋市博物館学芸員 犬塚康博

2. 第2号(2000.3.25)

「<こどもと博物館>の今までとこれから」
名古屋市博物館学芸員 浅野弘子
「ワークショップの実績、現在、これから」
徳川美術館学芸部普及課 加藤啓子
「～ひと夏の経験～に参加して」
高浜市やきもの里かわら美術館学芸員 橋本久美

3. 第3号(2001.8.15)

2001年子ども向け企画実施報告
(刈谷市美術館、トヨタ博物館、稲沢市荻須記念美術館、豊橋市美術博物館、徳川美術館、名古屋ボストン美術館、愛知県陶磁資料館、一宮市博物館)

○刊行物

1. 「昭和9年の『コドモと博物館』」

名古屋市博物館学芸員 犬塚康博

2. ファクスレター-CEMA1(2000.7.11)

「どろんこやきものたんけん隊ミニレポート」

名古屋市博物館学芸員 浅野弘子

ファクスレター-CEMA2(2000.8.31)

「漁師は海のお魚博士ミニレポート1」

岡崎市美術博物館学芸員 天野幸枝

ファクスレター-CEMA3(2000.9.7)

「漁師は海のお魚博士ミニレポート2」

岡崎市美術博物館学芸員 天野幸枝

ファクスレター-CEMA4(2000.12.22)

「わたしのパリはコレ!ミニレポート」

豊橋市美術博物館学芸員 高橋洋充

○見学会

第1回 1999.11.5

キッズプラザ大阪

第2回 1999.12.4

斎宮歴史博物館・いつきのみや歴史体験館

第3回 2002.3.30

愛知県児童総合センター



○刊行物への投稿

- 1. 「博物館研究」
- 2. ミュゼ

○ホームページ

開始:2000年
2003年愛知県博物館協会のホームページに統合

○平成12年度文部科学省委嘱

「親しむ博物館づくり事業」
「あいち子ども体験ミュージアム事業」

1. あいち子どもミュージアムキャラバン

(愛知県博物館協会加盟館園から5館をピックアップし、館園種・分野を超えた県内公募の子どもの体験・見学キャラバンである。)

・どろんこやきもの探検隊

会場:愛知県陶磁資料館他

日程:7.9、8.5・6、9.9、10.14・22、11.5

参加者数:<野焼き>小中学生30名、
<大窯>小中学生20名

・わたしのパリはコレ!

会場:稲沢市荻須記念美術館

日程:11.11 参加者数:小学生16名

・漁師は海のおさかな博士

会場:豊橋市細谷海岸

日程:8.10 参加者数:小学生28名

・焼く・煮る・炊くは食の基本!

会場:安城市歴史博物館

日程:11.11・12・25・26

参加者数:小学生19名

・編む・織る!縄文・弥生の布!

会場:藤橋村歴史民俗資料館・一宮博物館

日程:10.22・1.27・28

参加者数:11組24名の親子

・キャラバン総集編 ～火焰土器とアンギンを見に行こう!～

会場:十日町市博物館、新潟県立歴史博物館
参加者数:小中学生9名、保護者5名

2. 子ども向け事業実態調査

愛知県博物館協会加盟123館園を対象に、子ども向け事業に関する現在までの実績、将来の予定、各館園および各事業の政治・経済・思想的背景等を調査。

3. 報告書『あいち子ども体験ミュージアム』の刊行

1、2の事業の結果報告をし、さらにそれら进行分析、展開させて、新たな展示企画・ワークショップのあり方を提示するために作成。

○平成14年度文化庁芸術拠点形成事業

「伝えるということは? ～学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ～」

1. 展示 会場:一宮市博物館

会期:2003.1.11～2003.2.23

・普及部門「伝えるということ」

・考古部門「貝塚からわかる縄文時代の食べもの」

・陶芸部門「現代のやきもの作者からのメッセージ」

・美術部門「絵のこころ・絵の道具」

・歴史部門「伝える手段(てでて)」

・民俗部門「民具(みんぐ)と話そう」

・自然部門「自然と人のかかわり」

2. ワークショップ

・民俗部門「つくって遊ぼう!」

会場:一宮市博物館

日程:2003.1.12 参加者数:480名以上

・陶芸部門「さわって、感じて、作ってみよう!」

会場:一宮市博物館

日程:2003.1.19 参加者数:84名

・歴史部門「おてがみ道場・江戸時代の遊び」

会場:一宮市博物館

日程:2003.1.26 参加者数:197名

・考古部門「縄文人になろう!」

会場:一宮市博物館

日程:2003.2.2 参加者数:254名

・美術部門「いろんな絵の具をたしかめてみよう!」

会場:一宮市博物館

日程:2003.2.9 参加者数:26名

・遊び部門「おしゃべりなロープ」

会場:一宮市博物館

日程:2003.2.16 参加者数:164名

・ワークショップ総集編

会場:一宮市博物館

日程:2003.2.23 参加者数:354名

・陶芸部門「さわって、感じて、作ってみよう!」

会場:愛知県陶磁資料館

日程:2003.2.9 参加者数:10組23名

・自然部門「ひな祭りのひし餅をつくろう」

会場:鳳来寺自然科学博物館

日程:2003.3.2 参加者数:25名

・考古部門「体験!弥生生活」

会場:豊橋市自然史博物館

日程:2003.3.23 参加者数:60名

3. 報告書『伝えるということは? ～学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ～』の刊行



「いこまい!!愛知のミュージアム展」 顛末記

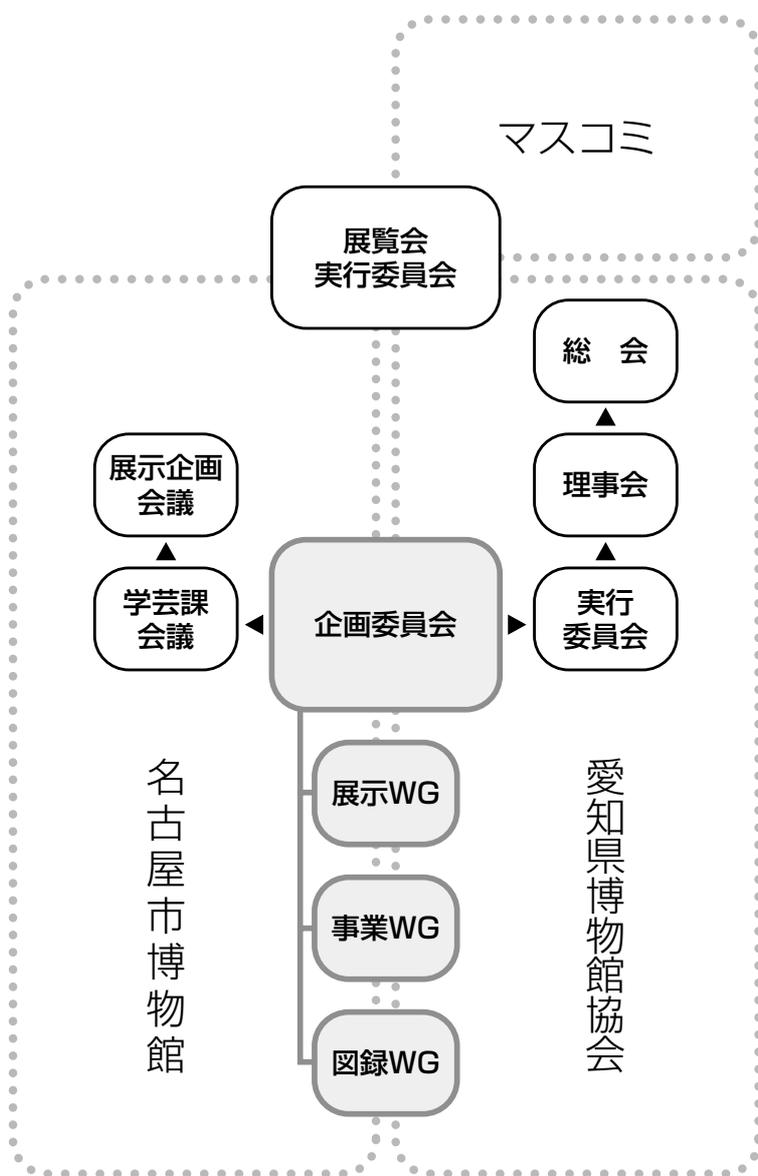
これは、2001年7月14日から9月2日まで、名古屋市博物館で開催した「いこまい!!愛知のミュージアム展」に関する報告である。

まずお断りしておかなければならないのは、この稿を田中が書くのがふさわしいかどうかは分からない、ということである。当展

は、当初名古屋市博物館の学芸員が企画した。しかし彼は展示が予定されていた前年の末から休職し、事情により退職に至った。名古屋市博物館としてはその後を水谷学芸係長(当時)が引継ぎ準備を進めていったが、彼も4月1日付けで他館へ異動することとなった。その後を引き継いだのが、およそ8年ぶりに名古屋市博物館へ帰ってきた田中である。この展示について、外側から見聞きはしていたが、内容については無知であった。引き継いだとき、オープン予定日までに残された日には3ヶ月あまり。田中が行ったことはただ無事にオープンさせることだけであり、当初の理念を実現するということは二の次にせざるを得なかった。このことは、当初から当展にかかわった愛知県博物館協会の方々には、さぞもどかしいものであっただろう。ただお詫びするしかない。拙稿で理念や発端にふれるとき、第三者的な書き方になることがあるとすれば、以上のような事情のためとご理解いただきたい。

さて、「いこまい!!愛知のミュージアム展」はもちろん名古屋市博物館単独の展示ではない。愛知県博物館協会と名古屋市博物館、それに朝日新聞社が共催した、実験的な展示であった。運営体制については左図をご覧ください。このような企画が立てられたのは、県内の博物館が連携してひとつの展示を創りたいとの思いであった。そのモデルになったのは愛博協の歴史のなかにあるふたつの展示、1969年の「愛知の博物館展」(市立名古屋科学館)と1970年「レッツゴーミュージアム展」(名鉄メルサ6階通路)である。当時は博物館の市民権が徐々に認められつつあったころ。博物館そのものの存在価値を市民に対してアピールすることが必要な時代であった。そのあとは、博物館ブーム、美術館ブーム、さらには水族館ブームなるものが到来したが、愛博協として共同の展示を行うことはなかった。

「いこまい!!愛知のミュージアム展」は愛博協実行委員会に集まる学芸員の間で発案され



たものである。平成12年6月の愛博協総会で推進が議決され、各館へ呼びかけることになった。愛博協加盟の各館園から特徴的な博物館活動を持ち寄り、愛知の博物館のガイダンスとすると同時に博物館の多様な有り様を紹介することをめざし、所蔵資料を紹介する展示だけでなくワークショップや体験学習等での参加も可能、最低限寄稿(図録に掲載)での参加をと呼びかけられた。それにもとづいて、企画委員会は展示、事業、図録の三つのワーキンググループを組織した。その結果、実際に参加したのは75館園(分館2含む)で、それぞれの特徴を表す資料、551件1160点を展示した。展示以外にも体験学習やサイエンスショー、公演など盛りだくさんで、事業だけの参加も2館あった。展示と同様に各種事業も博物館の特色を示すものとして重視したからである。また、「寄稿での参加」とは、展示図録代わりのガイドブックに掲載する意味である。当時加盟していた127館(分館2含む)すべてを取り上げたガイドブックは、株式会社ミュゼの発行で『愛知のミュージアム公式ガイドブック』として実現した。展示の入館者は10,479人。愛博協のお祭りとしてはもう少

し入って欲しかった。しかし、この展示の収穫は館園が相互に受けた刺激と思われる。特に他館の事業やギャラリートークのやり方など、結果としてノウハウを盗ませてもらうような感覚であった。

先にふれた1969年の「愛知の博物館展」と1970年「レッツゴーミュージアム展」で重要な役割を果たしたであろう広瀬鎮氏は、1972年発行の『博物館は生きている』において次のように述べている。博物館は「それぞれ植物園、動物園、天文台、水族館、歴史館、郷土館といった形で特色をもっているのですから、役割を分担し合って、それぞれの施設の欠けているところを助け合いながら一体となって活動しますと、ちょうど一つの総合博物館のような博物館活動ができるのです」。幸か不幸か愛知県には博物館法で規定している総合博物館がいまだにない。それをおいても特色を持つ館園が増えるほど連携の重要性も増す。「いこまい!!愛知のミュージアム展」で試みられた連携の模索は、愛博協内でその後も続けられている。たとえば別途報告されるであろう「子供と博物館」においては、より緊密なコラボレーションが実現されているはずである。



ホームページ研究会

名古屋市博物館 学芸員 松村 冬樹

趣旨と発足までの経緯

1998年頃から広く普及しはじめたホームページ(以下ウェブサイト; WebSite、またはサイトと表記する)公開の風潮のなかで、多くの博物館・美術館等(以下博物館)が自身のウェブサイトの公開を始めた。愛博協加盟館もほぼ半数弱がウェブサイトを公開していたものの、検索にかからないサイトも数多く存在した。なかでも所属自治体の各部署のプランチ(枝)として深い階層におかれていたサイトはかなり検索困難な状況にあった。

インターネット社会では情報発信が均等・平等化されるなどという楽天的な見解に反し、情報を発信できる環境の有無や、階層的な検索容易度の差という明らかな「情報格差」がうまれつつあった。愛博協の組織理念としてはすべての加盟館が共に発展することであり、県下の博物館情報を一元的に縦覧できるポータル(一覧)サイトの公開は、「情報格差」を埋める手段となり、博物館界の共栄に寄与できると考えた。

2001年3月、愛博協実行委員会にその旨の趣意を提案し、事項承認を得た。発起人は、名古屋市科学館・佐伯平二、徳川美術館・小池富雄、一宮市博物館・久保禎子、岡崎市郷土資料館・伊藤久美子、豊田市郷土資料館・杉浦裕幸、名古屋市博物館・松村冬樹の6名。

たたき台としての趣旨(目的)は、

- 1 博物館界のIT化の推進
- 2 愛知県に位置する各博物館施設の紹介・広報手段として利用

の2項目をうたった。その具体的な内容は、

- 1、いわゆるポータルサイトとして、加盟125館を含む県下160館の各サイトとリンクすることで、所在地、アクセス、開館時間、料金、展示内容などが一元的に検索できること。
- 2、地域別に県内の博物館を検索できること。
- 3、展覧会や各種事業の情報のリアルタイム検索ができること。

を目標とした。さらに、

- 1、自前ウェブサイトを持たない館の代替措置を考える。
- 2、掲示板による情報交流。利用者と各専門学芸員との交流やリファレンスの場として機能させる。

ことも盛り込んだ。

その後、この趣意書は同年5月8日の愛博協理事会・総会で承認をうけ、「愛博協ホームページあり方検討委員会(あり方委員会)」として正式な発足となった。名称の変更は、ウェブサイトの必要性もふくめて検討する意向の表明であり、加盟館の理解協力を得るためのしきり直しでもあった。この時点から、実務に詳しい名古屋市科学館・小塩哲朗、東海市平洲記念館・近藤直樹の参加を得た。

公開までの紆余曲折

事務的な手続きの一方、(株)アドホック、(株)ニホンディスプレイの好意と協力により、試作サイトをテスト公開した。あり方委員会では、ホームページの運営や保守維持にかかる負担を最小限にすべく、(株)ニホンディスプレイが運営する「ドット.MUSEUM」(博物館イベント情報)と相互補完するウェブサイトの展開を基本として進める方向性を確認した結果である。

2001年9月、名古屋市科学館において、この試作サイトのテスト公開と協力依頼の説明会を開催し、同時にアンケートも実施した。その結果、賛同・条件付き賛同は加盟125館中95館、反対は0館であった。この結果を受け、リンク集の充実、非加盟館の登録、「ドット.MUSEUM」への登録要請、自前サイトを持たない館への臨時代替ページ作成等々、サイトの本格運用への動きを加速させることとなった。

一方この時期、愛知県生涯学習課から平成14年度(2002年度)立ち上げ予定の「学びネットあいち」への協力依頼があり、「愛博協ホームページ」のまとまった情報を生かす方向で検討が始まった。しかしこの協力関係は、「学びネットあいち」の公開時点で明らかとな



った休館日情報がないという致命的な欠陥や、当方に還元される更新情報が提供されないといった違約により立ち消えとなっている。

同年12月20日には、「愛博協ホームページ」の魅力を増すべく、新たなコンテンツの開発をめざし「子ども夢基金」への補助金申請をおこなった。この申請は残念ながら認められなかったものの、ウェブサイト上で提供できる魅力的なコンテンツのアイデアは各館のサイトで生かされることとなった。

2002年1月1日、「愛博協ホームページ試行版」を一般公開した。ドメインはnihondisplayの下にぶらさがったままであったが、県下160博物館の情報を一元的にリンクしたサイトが立ち上がったわけである。

公開後の進展

2002年に「愛博協ホームページ試行版」の公開にこぎつけたものの、業者のサイトにぶらさがっている状況では、「愛博協ホームページ」の理想の実現にはほど遠いことから、独自ドメインの取得とサイト領域の確保が急務となった。5月の総会で10万円の予算化が承認され、はれて独自ドメインwww.aichimuseum.jpを取得した。

「ドット.MUSEUM」との関係は、展覧会情報を選択した時点で「ドット.MUSEUM」へリンクするという2層構造で対処した。「ドット.MUSEUM」は当初からに多大なご支援をいただいたサイトというだけではなく、リアルタイムの展覧会情報の発信サイトとして、愛博協では不可能な情報提供システムを構築し運営している。それゆえに今後とも良好な関係を保っていきたいと考えている。

2003年には予算が20万円となり、ウェブサイトの手直しや新たなページの創設、日常メンテナンスを業者委託できるようになった。それに伴い、関係者向きの告知板の新設

や「子どもと博物館研究会」の活動報告などをサイト上で公開した。

将来の課題

当初6割程度であった自前ウェブサイトの公開率は今や9割以上となっている。以前は市役所の教育委員会のさらに下の階層の教育施設の1ページにすぎなかったサイトが、独自ドメインをもち情報公開をおこなうようにもなってきた。

こうした状況下での「愛博協ホームページ」はどうあるべきだろうか。当初目的の「情報格差」は表面的には解消した。しかし、現実にはあらたな「情報格差」をうみだしてはいないだろうか。自前ホームページの充実度はアクセス数に如実に反映する。その充実には職員の不断の努力が必要となる。その負担に耐えられないサイトは「愛博協ホームページ」でも救えない。昨今の市町村合併による加盟館の統廃合の可能性もある厳しい状況の中で、積極的な変革がなければ、早晚「愛博協ホームページ」自体も存在意義がなくなる。当初の目的を達成し、新たな目標がみえないプロジェクトは廃止も含めた見直しが当然であろう。しかし、立ち上げ当初の理念までも霧消してしまっていないのだろうか。

発足当時から「愛博協ホームページ」の運営や、サイト上での新たな可能性を探る有志を募ってきたものの、未だ意欲的な申し出はない。「愛博協」という業界組織力を再活性化するためにも、自分の仕事に全力投球も結構だが、博物館界全体に役立つ？仕事をする余裕はないだろうか。このサイトを、自分の夢や理想を実現させる場として利用し、活性化させる気概をもった若い関係者に委ねたいというのが、現在の偽らざる心境である。

そろそろ、新しい酒を新しい革袋に詰める時期ではないだろうか。

信仰の大切さに思う

切支丹遺跡博物館

江戸幕府が少しずつ基盤を確立しつつある今から340年程前の話。尾張にはキリシタン(切支丹)宗徒が長崎に次いで多くいたことを知る人は少ないだろう。ご存じのように、豊臣秀吉はバテレン追放令を出し、二代將軍徳川秀忠は禁教令を全国に拡大することにより、キリシタン伝道に努めた者たちを検挙し、処刑を始めた。寛文元年(1661年)以来、数多くのキリシタンが尾張北部の諸村から検挙され始めると、名古屋東別院裏手付近にあった刑場「千本松原」でキリシタン宗徒二百余人が斬罪に処された。キリシタンに寛大であった尾張藩二代藩主徳川光友は当初、幕府に反発していたが、結局幕府の圧力に負け、二千人余りのキリシタン全員を処刑せざるを得なかった。名古屋城中にも多くのキリシタンがおり、万物の創造神を最高の主君と崇めつつ、同様の精神で忠実に働いていた彼等の冥福を祈るためか、光友はこの刑場を土器野(かわらけの、現在の西春日井郡新川町)に移し、刑場跡に清涼庵を建立し、彼等の菩提を弔った。後にこの庵は1686年に栄国寺と改められた。栄国寺は西山浄土宗(京都粟生の光明寺が総本山)のお寺であるが、以来宗派を問わず、刑死者の菩提を弔わっている。私はこの寺で生まれた。

キリシタンは明治6年の切支丹禁制の高札が撤去されるまで、二百年以上の間、迫害に耐え、隠れキリシタンとして信仰を守り抜いた。私も一僧侶であるから、普通の人と比べて信仰は深いと思っているが、彼等の信仰の深さにはただただ敬服せざるを得ない。ほんの少し前までは、一家には必ず、おじいさんやおばあさんがいて、仏壇があり、子どもは小さいうちから先祖を敬う習慣ができていた。しかし、核家族化した現代では仏壇のある家は少なく、身内で死を経験する機会が少なくなっている。私は、生命の尊さを経験する一番よい機会は葬式だと思っており、年長者との同居があれば、小さい子どもを虐待死させるような悲惨な事件は少なくなると思う。神や仏を敬う心、両親や子どもを慕い、尊敬する心を持ち続けることが大切だと日々考えている。しかし、現在では、なかなかお寺にお参りに来る人は少なく、一家でおばあちゃん一人がお参りに来るのが普通である。できれば、子供の小さい頃から共に寺に来てもらいたいものである。小さな子供の時から信仰心を養うことが、先祖の大切さ、ひいては人の命の大切さを養うことができると思う。

栄国寺の境内には当時の文化、歴史等を収蔵した切支丹遺跡博物館があり、その展示物を見るとキリシタンの信仰の深さを感じ、また踏み絵・マリア観音をはじめとする貴重な200点余りの品々からは、その当時の弾圧の激しさを偲ばせる。仏教とキリスト教が融合した特殊な環境にあるためか、キリスト教の信者の方も外国の方々もたくさん拝観にみえる。ありがたいことに、数年前、名古屋キリスト協会の方々に刑場跡に石碑を建立していただき、大変感謝している。

キリシタンに関する小説を多く残した遠藤周作もかつて栄国寺を訪れた。彼の作品「男の一生」の最後の部分に栄国寺の様子が書かれてあるので、ご興味のある方は一度お読み下さい。

愛知県博物館協会に加盟して思うこと

高浜市やきものの里かわら美術館

高浜市やきものの里かわら美術館は平成7年10月7日に開館し、平成17年には開館10周年を迎えようとしています。振り返ってみますと、特色ある美術館運営を目指しながらも、試行錯誤を繰り返す10年間でした。愛知県博物館協会とのおつきあいは、その歴史の中では約4分の1程度でしかありません。今さらながら愛知県博物館協会の存在の重みを実感せずにはられません。

さて、かわら美術館と愛知県博物館協会との関わりをみると、最初は熱心なものではありませんでした。開館してからの数年は館運営を軌道に乗せることで精一杯であり、愛知県博物館協会への関心は低く、総会への出席や各部門別の研修会への参加も怠りがちであったことは否定できません。

しかし、そのかわら美術館が具体的に愛知県博物館協会と向き合うようになったのは「子どもと博物館研究会」がスタートしてからといえるでしょう。かわら美術館は子ども向け事業の方向性を模索している中、この研究会と出会いました。研究会の活動に参加し、その成果を学ぶことによって、かわら美術館はワークショップなどの事業展開にかかるノウハウを獲得することができました。このノウハウの獲得は学芸員のみならず、他の事業を担当する職員意識にも良質な影響を与えることにもなりました。他の加盟館との交流も活発化してネットワークも拡充し、かわら美術館の大きな財産とすることができました。子どもと博物館研究会の関係各位に改めてお礼申し上げたいと思います。

今、子どもと博物館研究会について思い巡らせることは、愛知県博物館協会加盟館のそれぞれが抱く問題意識をぶつけあい、発展させあい、事業展開の方向性を見出し、それを各館の職場に還元させていくステージであったことです。

将来また、このように何らかのテーマをもとに研究会を立ち上げて活動を進めていくことは現実的ではないかもしれませんが、しかし、愛知県博物館協会が今後も、加盟館にとって相互に触発されて刺激しあえる、そのような魅力あるステージであり続けてほしいと切に願うのは、かわら美術館だけではないはずです。

愛知県博物館協会に加盟して思うこと

はるひ美術館

「一緒にワークショップをしましょう。」

稲沢市荻須記念美術館の山田さんと、高浜市やきものの里かわら美術館の橋本さんからお声が掛かったのは平成14年も押しつまった11月のこと。当時開館3年目の小さな町立美術館にはどうしてそんなことが可能なのかよく解らなかつたのだが、一宮市博物館を中心とした4館を会場に、ジャンルを越えた19館の学芸員が展示とワークショップを持ち寄り、展示会を構成していくということだった。そして子どもと博物館研究会と一宮市博物館の共同企画による「伝えるということとは？～学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ」の企画展に向けて美術部門の準備が始まった。橋本さんが中心となってワークショップのプログラムを準備され、刈谷市美術館の松本さんが加わって内容を検討し、顔料の鉱石をハンマーで砕くという力技まで駆使して準備をおこなった。展示作業当日は、自然・考古・歴史・陶芸・美術の各部門の学芸員が各チームに分かれ、美術部門は4館の4人の学芸員で展示をおこなった。他館の学芸員と一緒に展示をすることは初めてだったが、楽しく展示方法や知識を得ることができた。展示作業も終盤となりホッとして周りを見渡すと、佐分真の油彩の前に鹿の剥製という稀に見る光景が広がっていた。また、会期中開催されたワークショップには各館が情報や知識、材料を提供し合い、単独では思いもつかないことや不可能なこともカバーし合って実現することができた。山田さんのリード、松本さんの行動力、橋本さんの子どもたちの心を惹きつけた実技指導。すべてが新鮮で刺激的だった。全体の規模から考えるとほんの一部分に過ぎないが、この企画に参加することができたことは貴重な経験であった。

残念ながら子どもと博物館研究会はこれをもって活動を休止しているが、美術館・博物館の相互協力によって、様々な企画が開催されることで新たな魅力を発信していけるのではないだろうかと思っている。

愛知県博物館協会に加盟して思うこと

西尾市岩瀬文庫

西尾市岩瀬文庫が愛知県博物館協会に加盟させて頂いたのは、昨年、つまり平成15年のことである。と申し上げると「えっ、今ごろ？」と驚く方もおられるかもしれない。岩瀬文庫の嚆矢は古く、明治41年に西尾市内の実業家・岩瀬弥助が創設した私立図書館としてスタートした。8万冊をこえる貴重な古書籍を無料公開し、また音楽堂、公会堂を備えた地域の文化センターでもあったが、昭和20年の三河地震と戦後の混乱によって建物の殆どを失い、管理も西尾市へと移された。幸い煉瓦造りの書庫(現在国の登録有形文化財)と蔵書は無事であったため、その後は市立図書館内の一室が文庫閲覧室となり、研究者のためにひっそりと閲覧に供されてきた。

膨大な所蔵品(蔵書)がありながらも、展示公開する施設がない。また一般市民には馴染みにくい(読めない)古書籍である。こうした特殊な状況から、岩瀬文庫は長らく「西尾の文化的象徴」と言われながらも、市民の間では図書館とも博物館ともしれぬ実体感のない、また「敷居の高い」存在であった。蔵書の保存管理にかかる費用全てが西尾市民の税金で賄われているものの、市民が恩恵を受けることは殆どなく、管理する職員もこうした市民の好意的無関心に甘えて来たともいえる。

しかし近年、市民の知識欲、学習欲はより貪欲になり、学校教育の場でも地域の歴史的文化的財産への関心が高まり、岩瀬文庫が「象徴」で済む時代は終わった。平成15年4月、西尾市岩瀬文庫はより市民に親しまれ、活用される文庫となるために、日本の書物文化を学び、体験する常設展示室、岩瀬文庫の多彩な蔵書を紹介する企画展示室を新設して「古書のミュージアム」として再出発し、晴れて県博物館協会のお仲間へも加えて頂いた。館の人員は少なく、経験も未熟。来館者の伸び悩みや、市民との距離がなかなか縮まらないなど、悩みや焦りは尽きないが、この2年間に協会の研修会に度々参加させて頂き、研修の内容もさることながら、他館の方々も日々同様な危機感と戦っていること、果敢に新たな試みを行なっていること、また当文庫に対する具体的なご助言などを伺うことができ、非常に心強く、有り難く感じている。

博物館としてまだまだひよっこである西尾市岩瀬文庫へ、どうぞ皆さんの暖かいご指導ご鞭撻をこれからも宜しくお願い申し上げます。

愛知県博物館協会に加盟して思うこと

七宝町七宝焼アートヴィレッジ

七宝町七宝焼アートヴィレッジは、170年余の歴史と伝統を有し、平成7年には「尾張七宝」として伝統的工芸品に指定され、人々に親しまれてきた「七宝焼」について「見て」「触れて」「学んで」「体験する」ことができる施設です。平成16年4月1日に一部をオープンし、10月1日に展示室を開設して全館開いたしました。当館は、展示室に加え、七宝焼職人の実演をみることが出来る動態展示、七宝焼製作を体験することができる体験教室を備えています。

新しく館を開設するという事は、何事も初めての事ばかりで不安もありました。館をよりよいものにしていくためにも、オープン後ではなく早い時期から他の博物館と交流をはかることが必要と考え、愛知県博物館協会には開館準備段階の平成15年4月に加盟しました。まだ数えるほどですが、協会の研修会・視察見学等に参加させていただき、他の加盟館の展覧会への取組みやボランティアとの関わりを拝見し、自館の展示や活動に活かすことができたと感じています。

私どもは、開館前から事業には携わっていましたが、経験も浅く、まだまだ学ぶべきことがたくさんあります。協会の研修会等は、博物館相互の情報交換や、展示に関する知識・技術の向上にはとてもよい機会です。当館は、展示資料としては七宝焼とその関連資料を主に扱いますが、今後企画展等で七宝焼以外の美術工芸品などを取り扱うことも想定されるため、七宝焼に限らずさまざまな資料の取扱い方法を身につける必要があります。幅広い分野の資料の取扱いや梱包方法等の実技、効果的な展示、展示解説の仕方、先進的な取組みをされている館の事例紹介などを今後も研修に取り入れていただき、知識・技術の習得機会の充実を期待します。今後も協会を活用させていただき、協会を通じて学んだことを博物館活動に活かしていくことができるよう努力していきたいと考えています。

愛知県博物館協会に加盟して思うこと

サイクルギャラリー・ヤガミ自転車資料館

私共サイクルギャラリー・ヤガミ自転車資料館は180年以上の歴史ある自転車に関し、関係品と共に50年以上に渉って蒐集した古い自転車中心にディスプレイして一応公開しています。

来訪見学者は私共の業態成行から業界人中心で一般公開とは云え諸都合で電話予約制としお互い都合のよい日取に公開しております。

折角博物館協会に加盟していますので展示場内更に整備し展示品のディスプレイ方法をもっと公衆向に改善して広く歓迎出来る様にしたいと思っています。

先輩皆様のご指導を頂戴出来れば幸いです。

愛知県博物館協会に加盟して思うこと

世界のタイル博物館

世界のタイル博物館は、故山本正之氏のコレクションを中心とした展示で、タイル文化を発信している日本で唯一のタイル専門の博物館です。当初は、地元製陶所の窯家屋を整備してオープンした「窯のある広場・資料館」で600点余りを展示公開していましたが、1997年山本氏も念願だった現在の博物館を建設し、約6000点のコレクションのうちの1000点と独自資料による展示が実現しました。世界中のタイルを蒐集して、その歴史を解き明かそうとした山本氏の意志を継承し、現在では常設展と年2回の「技術と歴史」展、年1回の特別展でタイルに関連した展覧会を開催するほか、現代陶芸作家のオブジェによる「やきもの新感覚シリーズ」の企画展を毎年2月から10月まで月替りで開催しています。

住宅のタイル離れが進んで、今の若い人や子供たちはタイルと初めて出会って、長い歴史を持つ世界の色鮮やかな装飾タイルの美しさに感激しています。海外旅行をしてきた人たちは、展示されているタイルが懐かしい思い出となって、仲間と旅行で見てきた光景をダブらせてみています。「技術と歴史展」のシリーズでは近代日本のタイルを取上げて展開中ですが、戦前の懐かしい或いは風格を感じさせるビル外壁のタイルをじっくりと見ていく年配の方もいます。このように、来館される人々は、タイルと出会い、対話してさまざまな価値を見出ししていきます。

現在、企業博物館として社会貢献を推進するためにも、新しい取組みを進めています。従来の見学型から参加型・双方向コミュニケーション型の活気ある施設として充実させ、常滑とその近隣を含めた地域の活性化の核としての役目を担っていこうと考えています。今、住宅や食生活の中で、自然や自然素材にこだわる欲求が高まっており、土や木などの素材が建築雑誌で大きく取上げられるようになっていきます。そのため、今後はやきものの原点であり、自然素材でもある「土」を大きなテーマとして施設を充実し、展開していく予定です。

愛知県博物館協会に加盟して思うこと

尾西市三岸節子記念美術館

1998年秋、尾西市に三岸節子記念美術館が開館しました。市内小信中島の三岸節子(旧姓 吉田)の生誕地跡に美術館が建設されました。市制35周年記念、40周年記念の年に三岸画伯の展覧会を市内で開催してきたことをきっかけとし、美術館建設の計画が起り、この後作品の収集、館の建設工事を経て、開館に至りました(市町合併により2005年4月1日付で一宮市三岸節子記念美術館となる)。

実家の破産、19歳で画家三岸好太郎と結婚、女性洋画家としてデビュー、三人の子の母、29歳で好太郎と死別、以降女性洋画家として活動、終戦後初めての個展を東京で開く、女性画家協会の発起人、女性洋画家として初めての文化功労者になるなどその一生は、波乱に満ち満ちたものでした。その生き様は女性たちの中に印象深く、三岸節子の油絵ファンのみならず、節子本人のファンが館の来館者として大きな後押しをしてくださっています。

館は、開館以来、節子の展覧会はもとより同時期に活躍した片岡球子、秋野不矩など女性の作家たちとの作品展などを開催しています。また、北海道にある道立三岸好太郎美術館とも全国唯一の夫婦それぞれの美術館として交流を計っています。

県博物館協会には加盟して7年ほどです。私どもの館の活動は、まだまだ足が地に着いたものではありません。各館の活動情報を手軽に得ようとすると、インターネットなどに頼りがちになります。情報の往来が発達して、全国の類似各館の中での連絡が独自に取れるようになり、反面、県単位博物館協会の機能が曖昧になってきているところがみられます。各館に共通する問題を克服し、いかに協会全体の発展、しいては各館の充実につなげていくのが課題であるように思えます。

各研修会などで県博物館協会加盟館がもつ課題を話し合い、経験ある先輩がおいでになる各館からご教示を受け、意見を持ち寄り、話し合い、自館の優れている点は伸ばし、改良すべき点を克服していくことで、この時代を春の始まりに変えていきたいと考えています。冬の時代の途切れない水脈として営々と活動する協会であることを願ってやみません。

III これからの博物館

これからの博物館への期待

- これからの博物館
- これからの博物館、10の指標
- 40年の成果と期待される役割
- 少年少女よ、やって来い
- 博物館の心理的基盤と将来像
- これからの博物館に思うこと
- 新しい価値観を生むミュージアム

これからの博物館

徳川美術館 館長 徳川 義宣



「愛知県博物館協会40年史」を刊行するに當って筆を執れとの依頼を受けて、聊か驚いてゐる。「なんで私が」と思ったのだが、思ひ回らしてみると私より年配の館長はをられないのか、少なくとも古株はをられないと知った。40年前と言へば1964年、つまり昭和39年となると、私は當時の徳川美術館館長熊沢五六氏に伴はれて發足第1回の集まりにも、美術館担当理事として出席したのかも知れない。

その頃の會場は愛知県文化會館だった。初代の文化會館長であった祖父徳川義親が館長を辭めて間もない頃だったと思ふ。メンバーは10館内外かせいぜい10数館だったろう。愛知県文化會館には1階にホールや劇場があり、貧相な樂屋があり、食堂があり、圖書室があり、県立美術館1室があって主に地元の画家の作品が展示されてゐたと思ふ。2階は美術館と言ふより催し物の貸し會場でギャラリー数室より成つてゐた。

徳川美術館は徳川林政史研究所と並んで財團法人徳川黎明會の一事業機関であり、本部は研究所と共に東京目白にあって、私は財團の専務理事として美術館事業担当理事でもあったから、通常は東京の本部勤務で名古屋には用事のある度にやって來ることにしてゐた。だから地元での日頃のお付き合いは専ら熊沢館長に任せてゐたので、協會の例會にも毎年出席してゐたわけではなく、なにか他にも美術館で用事があった時に兼ねて出席してゐた程度だったと思ふ。本來65歳だった定年に延長を重ねて勤めてもらつてゐた熊沢五六館長も昭和51年3月17日には80歳に達し、いくらなんでもこれ以上はとの辭意は請けないわけに行かず、やむを得ず美術館業務監督の責にありながら後任者を育てそこなつた私が、その年の4月から館長を兼務することとなった。

以來當協會の例會にもなるべく出席すべく務めたが、日本博物館協會、全國美術館會議、全國文化財保存連盟等々、全國単位の會議や學會にも出席する機會が大幅に増える始末となつて、當協會の例會への出席率はあまり向上してゐない。

ところでこの小稿執筆に當って与へられた題は「これからの博物館」であり、それをテーマに展望や抱負などを書けとの會長よりの御下命である。このテーマは全國美術館會議でも度重ねて論じられてゐるし、特に日本博物館協會は文部科學省の指示だか行政下請けだかで幾たびとなくアンケートだのフォーラムだのを實施している。おそらく當協會のメンバーの方々も経験を同じくしてをられ、耳や目に胼胝ができてをられるであらうから、その繰返しは避けてむしろ疑問や危惧を述べてみたい。

展望や抱負とは「斯くあるべき、あればよい、あるとよい」と言つた論にとかく終始しがちである。それらは

口にし易く耳にも入れ易い。だからいくらでも挙げられるし述べ始めれば盡きることはないだらう。アンケートやフォーラムを構へた行政側にとっては誘導した通りの回答や路線が仕上がつて來る。

理想論ばかりではなく、流石に次には「そのためには、How to」との質問も設けられてゐる。ところがその回答はよく言へば理想的、悪く言へば非現實的、中間をとつても抽象的であつて常に具体性に欠けてゐる。なるほど、博物館と一括りにすると自然系・人文系、科學館・天文台・動物園・植物園・水族館、歴史・西洋美術・東洋美術・日本美術・考古・古美術・現代美術・個人作家等々とあまりにも多岐に亘つてゐる具体的な質問や課題を設定することが極めて困難だからだらうと察しはつく。だがその結果アンケートやフォーラムやシンポジウムでの議論も、また総花的な成果しか得られず、行政側にとっては「民主的な手続きや議論を盡くした」との形式が整つたことになる。その繰返しで「これからの博物館」の展望や抱負を述べ得たり、或は知り得るものだらうか。

従來の國立博物館は獨立行政法人となつた。だがその土地・建物・設備・博物館資料などは國有のままだから、それらの運轉・維持・更新等の費用は依然として國費で賄はれる。都道府県立、市町村立の公立博物館の設置や運営経費は一部國からの補助金、大部分は地方財政資金によって賄はれてゐる。平成16年3月28日の産経新聞に掲載された都道府県立美術館56館の収支比率の平均値は、支出100に対して収入は18.57であると言ふ。しかもこの支出100のなかには建物・設備等の資産維持費や更新費、人件費は算入されてをらず、それらの費用は博物館や美術館費用とは別會計だとのことである。この様な會計制度の下では館としての經營意識が生まれるはずも育つはずもないだらう。文部科學省が作成し日本博物館協會が實施してゐるアンケートやフォーラムは、これらの公立機関の經營を念頭に置いて行なはれてゐる例が大半であらう。

一方、私立博物館の大半は財團法人立である。その収入の大半は設立時に寄付された基金からの果實によるのが原則であらうが、戦争や經濟變動によって基金を失つた財團、基金はあつても利息収入が當ての十分の一以下となつて経費を賄へなくなった財團續出の有様である。しかも政府は閣議で公益法人、即ち財團法人と社團法人とを廢して「非營利法人」と改称し、従來の税制上の優遇措置は一旦全廢する方針を打ち出してゐる。公立博物館とて三位一体の財政改革によって、經營團體として自立を促される方向にあるはずである。

これからの博物館、10の指標

豊橋市自然史博物館 館長 糸魚川淳二

21世紀に入って四年あまり、社会の動きの速い中で、博物館も激動の時代を迎えている。大綱化・弾力化という、大きな指標が示されてはいるが、わかりにくい側面をもち、それぞれの博物館がどのように対応したらよいか、とまどうことが多いように見える。博物館に関わって30年、現場のことを多少とも知っている一人として、これから、博物館がどのように活動していったらよいか、指標となる10の項目を考えてみた。



1. 基礎力——「もの」・人・お金

博物館の入館者数と関連ある重要な項目として常勤職員数と運営費がある、といわれる。さらに、もっとも基本的な要素である「資料」を加えて、基礎力とする。利用者数だけが活動の目安でないことはいうまでもないが、多くの人びとの利用によって、博物館が活気づくことは確かである。この基礎力をつくることをまず考えたい。

2. 活動のスタイル

日本に4000館、広くとらえれば7000館はあるということであるから、その形は多様である。それぞれの館の活動のスタイルも当然多様なものになってくる。4つの基本的な活動、収集・保存、調査・研究、展示、普及をどのように、具体的に展開するかは、各館の考えによる。広くか深くか、ひとつの選択はこのあたりにあろう。展示におけるハンズオンの重視、普及活動の博学連携などは拡がる活動の例である。

3. ミュージアム・サービス

かつての、見せてあげる、教えてあげるの時代は終わった。現在は利用者の立場にたつての博物館づくり、運営が問われる時代である。単に迎合的に、市民サービスをするのでなく、博物館がいかに面白いのか、役立つかを理解してもらう活動が望まれる。例えば、展示ひとつを見ても、多様な来館者に対する対応が必要であろう。ユニバーサルデザインはハード面だけでなく、形は違うが、ソフト面にも必要であろう。

4. 組織トップの認識

公立館であれば知事・市町村長、私立館であれば理事長・社長などが博物館をどのようにとらえておられるか、例外はあるだろうが、認識が十分でないのが現状ではないだろうか。しかし、現代はトップの意志が強く働く時代である。その意向ひとつで存否が問われることがあるのは東京都の近代文学博物館、高雄自然科学博物館の例を見るまでもなく明らかである。運営についてはもっと多くの例があるだろう。博物館の真の意義を理解・認識し、評価を新たにしてもらうことが、これより先、より必要になってくると思われる。

5. 学芸員のやる気・資質・知識

博物館の活動の中心は学芸員である。本来の専門分野

の仕事のほかに、博物館特有の仕事が加わる。この、違った側面をもった活動を限られた時間の中でこなすにはまず、やる気がなければならない。多方面にわたって、適応できる資質も重要である。「私は向きません」ではすまされないのである。さらに、情報化が進む中で、現在的な知識を吸収することも求められている。大変なことはわかっている。しかし、学芸員がこれをやらないことには活気ある博物館とはならないだろう。

6. 機構トップの実行力

機構トップというのは博物館を実際に運営する立場でのトップ、という意味である。日本の博物館の場合には館長とは限らない(非常勤の館長には権限がないことが多い)。特殊な仕事を多く含んでいる学芸活動を理解し、把握し、多様な側面をもつ博物館を運営しなければならないという、難しい職務である。しばしば、理解されにくい活動を上司に納得させなければならない。さらに、市民に対するサービスが第一と、考える姿勢が必要となる。適する人材をもとめたい。

7. 事務的運営

博物館は一つの機関であるから、本来の機能を発揮するためには、確かな運営が必要である。雑務とさえ呼ばれる、多様な仕事に対して、事務・技術方の職員の果たす役割は大きい。出先とか、腰掛けと考えずに、博物館の仕事は面白い、といった対応をして欲しい。

8. 独自性と柔軟性

すべてのことにおいて、現代ほど自由な時代はないと考えられがちだが、決してそうではない。いろいろな形の制約に満ちているといっても、過言ではない。自由な社会であるからこそ、さまざまな要求が出てきて、それが逆に制約を生むことさえある。そうした制約の中で、博物館は独自性を持ち、自由で柔軟な活動をするのが望まれる。博物館活動の根源である二つの側面、研究と教育は自由度が高いほど、よい効果を上げることができる。

9. サポーターの力

周りにいて、博物館を支えてくださる人たちにはいろいろな形がある。友の会の会員、ボランティアの方たちはもっとも身近な人たちである。博物館とこれらの人たちの関係は一方的でなく、お互いに助け合い、理解しあうものである。さらに広く、博物館を理解していただく方がた、博物館へ来てくださる方たちもサポーターである。これからもっと環をひろげたいものである。

10. 人気——社会的評価

博物館の評価にはいろいろあるが、ここでいう評価は硬い意味でのそれではない。あえて人気としたのは、一般市民に博物館がどのように見られているか、という意味だからである。利用者の立場からの目は鋭い。「市民の立場に立って」が博物館に求められている。

40年の成果と期待される役割

博物館明治村 館長 飯田喜四郎



経過と成果——明治村は建築を中心として関連する資料を保存し展示する博物館です。欧米文明の影響を受けた近代建築は幕末から造られはじめ、明治時代に本格化しますが、この流れは少しずつ変化しながら昭和前期まで続きました。明治村の展示建造物はそれを反映していません。この近代建築は太平洋戦争末期の無差別爆撃により大量に破壊されました。辛うじて戦災を免れたものも、1960年頃に始まる高度経済成長期に、国も地方公共団体も救済の手を差し延べないままに、各地で破壊され消滅の危機に見舞われました。この建築を移築して救済し、保存したのが明治村です。

価値を落とさないように古い建物を丁寧に解体して運搬し、必要な修理を加えて再建するには、新築よりも遙かに多くの資金が必要です。移築する建物にはそれにふさわしい環境と、ゆっくり観賞できる広い敷地が必要です。60以上の建造物が散在し、長い距離ではありませんが、明治時代の機関車や市内電車が走る100ヘクタールの広大な敷地は、市街地に準ずる電気や給排水等の設備を備えた苑地として整備しなければなりません。再建された建物は風雨に晒されるので、館内の展示品よりも多額の維持費が必要です。

明治村は1965年に開館しましたが、多くの人々の共感を得たのでバブル経済破綻までの27年間に3400万名が入館しました。バブル破綻後、入館者は前年比で10パーセント減という厳しい状況が10年間も続き、年間入館者数は破綻前の三分之一に減りました。展示建物の増加も企画展の開催も、入館者の減少を止められません。博物館は入館料で運営されるので、最大の支出である人件費も大幅に圧縮し、解体建物の再建は勿論、展示建物の修理も延期して不況の乗り切りを計りました。幸い入館者は昨年度から僅かですが増加し始めたので、展示建物の修理と解体保管中の建物の再建の見通しがたてられるようになりました。

明治村開設当時、重要文化財として國が保護する近代建築は全国で僅か17棟で、重要文化財建造物全体の1パーセント以下でした。明治村開設によって近代建築の価値が見直されて各地で保存されるようになり、現在では重要文化財全体の約9パーセントに達しました。60を超える明治村の展示建造物の中、10棟は重要文化財、1棟は愛知県有形文化財、残る建造物はすべて登録文化財です。

これらの建造物は入鹿池に望む約40ヘクタールの範囲に分散しています。広い村内の案内や展示建物の説明を担当してくれるのは、90名近いボランティア・ガイドの方々です。ボランティアの中には技術者として活躍された方もおり、その経験を生かして機械館で動態展示を担当して戴いています。また建物の住人として入館者を招き入れ、案内して下さる方もいます。展示建物の中には開放に不適切なものもありますが、入館者が自由に出入りできる範囲をできるだけ広げたいと考えています。

期待される役割——絵画・彫刻は勿論、物理・化学・地理等の基礎知識も高等学校までに修得しますが、建築については工業高校の一部を除けば、全く触れられません。しか

し建築は内外ともに生活環境を形成する最も重要な要素です。建物の内部は居住者や使用者しか知らない空間ですが、博物館に移築されて初めてそれがいかに巧みに構成され、どのような工夫が凝らされているかがわかり、この知識は現代の内部空間を豊かにする手がかりになります。建物の外観は都市景観を形成する主要素なので、その居住者・使用者以外の第三者にも関わります。昭和前期までこの点はよく認識されており、金沢監獄正門や岩倉変電所(何れも明治村)のような建造物でも、第三者に眺められることを考慮して洗練された外観に造られています。

1920年代末の西欧では、建築に要求された機能を徹底して合理的に追求し、装飾をすべて排除して比例により調和のとれた建築の創造を目指す、近代主義と呼ばれる流派が主流になりました。長い経験と厳しい訓練を積んだ感性豊かな建築家であって、初めてこの方法を用いて優れた作品を造ることができます。それは精妙な比例に基づくのですが、外観は無装飾の単純な建築のように見えます。

戦争中の耐乏生活と戦後の貧困生活の影響もあって、無装飾で実用一点張りの建築しか造れなかった昭和30年頃の未熟な建築家にとって、近代主義はデザインの貧しさを弁護する隠れ蓑になりました。その後の高度経済成長期にも経済効率を最優先する無表情なビルが建てられ続けました。都市景観を形成するという認識は商業ビルで特に不足するものがありますが、庁舎・校舎・集合住宅のような建築でも十分ではありません。戦前と戦後におけるこの認識の差は、同じ用途の建物を比較すると歴然としており、建築の社会的役割がいかに軽視されているかがよくわかります。

私たちの建築文化は蓄積された過去の文化の上に成立しています。近代主義はすべての過去から断絶して新しい建築文化の創造を標榜し、各地に画一的な建築物を造らせ、味気ない都市景観を残しました。時として見応えのある個性的建築に出会うことがあります。しかし残念ながらこれらの力作が集まったとしても、地方都市にまだ残っている古い町並みや西欧都市の古い街区のように、潤いのある暖かい都市景観を形成するとは思われません。後者の町並みや街区を構成する建築は、一つ一つは名建築ではありません。それぞれ個性的なうえ、さらに洗練された共通性を持っているので、全体として調和のとれた建築群となります。

この共通性は一つの基本形式を長期にわたって反復し、洗練させたものですが、現代建築は個性を特に強調するのでその共通性がありません。

それに加えて僅か50年前の高度経済成長期に始まった目まぐるしい変化を求め、使い捨てを礼賛する大量消費の悪習が建築にも波及し、日本の現代建築は欧米にも見られない異常に短い寿命で改築されています。このようないくつもの事情が重なって、現在のように画一的で味気ない都市景観が形成され、更新されています。

過去の建築文化の上に造られた明治村の建築は、伝統的建造物や町並みと共に、貧困になってしまった現代建築を再び豊かにする有力な手がかりの一つになるものです。この建築に親しんで戴いて、一人でも多くの方が豊かで潤いのある生活環境を要求するようになることを期待しています。

少年少女よ、やって来い

岡崎市美術博物館 館長 芳賀 徹

最近は、どこの美術館・博物館に行っても、館長さんや学藝員との間ですぐに話題になるのは、「客の入り」である。つまり、一つの展覧会への来館者数の増減の問題である。国公立の館では、とくに近年、行政側からの館の運営とその効率に関する評価がきびしくなっているから、この「入り」の問題に各館は一喜一憂することとなった。国公立だからといって、昔のように超然と、あるいは平然と構えていることはできなくなった。



各館が、来館者のなかでも今後とくに工夫をこらしてふやしてゆきたいと考えているのは、各地域の小中学校の生徒たちである。美術館・博物館の側から見れば、小中の生徒たちは数の上でももっともよくまとまった大きな顧客層たりうるし、質の上でももっとも自由で想像力の活発なよい観客となりうるはずだ。少年少女の側から見ても、美術館・博物館は、毎日の学校生活のルーチンからしばし解放されて、ものめずらしい建物のなかで、未知の美術品や文化遺産に直接に触れて、一気に広大な時間空間への視野をひろげ、非日常の世界への想像力を躍らせることができる施設だ。「ゆとり教育」が奨励されようと廃止されようとかかわりなく、美術館・博物館は、小中学校教育の、さらに高校、大学の教育の、絶好のエクステンションの場でありうるはずだ。

館と、少なくとも地域の小中学校との、相互の利益のためにも、両者の間の提携とまではいなくても交流を、今後是が非でも促進しよう。それが多くの美術館・博物館のいまの最大の願いであり、課題である。私たちの岡崎市美術博物館の場合も、もちろんその例に洩れず、市の有識者に参加して頂いている運営協議会の席では、ほとんど毎回のように一時間余りもこの問題が討議されている。

それでもなかなか埒があかず、小中校生の来館数が伸びなやんでいるのが現状だが、これは私たちの館のような地方都市の小規模施設の場合に限らず、東京や大阪の大規模な国立の館でさえ打開しかねている問題であることを、私は、その独立行政法人評議員の一人として最近知った。

岡崎市は人口約40万、徳川家康の生誕の地ということ誇りにしている比較的保守的な気分の強い中位都市である。平成16年の統計では、市立小学校は計42校あり、生徒総数2万3千人余、中学校は18校、生徒数1万2千人余、両者合わせて3万4千余人の少年少女が在籍していることになる。ところが、そのうち、平成16年度(平成17年3月まで)に、私たちの岡崎市美博に来館してくれたのは、小中生合わせて2800人ほど、全来館者数の5パーセント少々にすぎない。そのなかには、学校から教員に引率されて来館した生徒の数も含まれるが、これが

なんとわずかに5校(小学校4校、中学校1校)、引率教員延べ21名、生徒数368名というさびしさである。

この現状はなんとか打破しなければならない。実は私たちは、ただ来館者の数が向上すればよいなどと考えているのではまったくない。私たちはほんとうに、心底から、私たちが工夫し苦勞もして仕上げた展示を、あの元氣な子供たちに面白がってもらい、一部分でもよいから驚いたり不思議がったりしてもらい、彼らの心のうちに文化と歴史への好奇心の小さな火をともらせたいと願っているのだ。

この願いはいよいよ強く、私はついに先日、岡崎市美術館長として市内の小中高校の校長先生たちに直接に直訴の手紙を送ることとした。以下は、本年4月1日付けで発送したその手紙である。強い願望があるゆえの悩みの一証言として、ここにほぼ全文を引いておこう。

(前略)

新年度の開始に際し、岡崎市美術博物館としましては、本館の活動に対して先生方に今後一段と積極的なご協力をお願いいたしたく、今回はじめて直接にお手紙をさしあげることといたしました。

御存知のとおり、本館は自主企画、他館との共催企画、また館藏品展示などを織りまぜて、年間に七本ほどの美術、文化史両面にわたる展覧会を催しております。いずれも十分に周到な研究と計画にもとづき、かなりの予算額を当てて行なわれ、岡崎市の文化水準の向上に寄与すること少なからざる催し、と私どもは自負しております。

さいわい、毎回多くの市民の来館を得て、私たちのなによりのはげみとなっておりますが、そのなかで私たちがいつも一番残念に思っておりますのは、市内の小・中・高の学校の生徒たちの来館がいちじるしく低調であるということです。

たとえば、平成16年度は、昨年4月の平賀源内展から本年2～3月の興福寺国宝展にいたるまで、七つの展覧会を通じて、全入館者約5万人に対し小・中学校生徒の入館(市内校生徒はすべて無料)はわずか2700名ほどにすぎませんでした。しかも引率の先生が1名ないし5名つきそって団体として来られた数となれば、さらに極端に少く、わずかに6校(うち市外1校)の小中校の390名にすぎません。(中略)

これを私たちはたいへん遺憾に思い、もったいないとも思い、本館の運営協議会の委員の方々にもいつも状況改善の策をめぐって議論して頂いております。旧年度の例でいえば、平賀源内展や興福寺の鎌倉仏像展というまでもなく、シュールレアリズムのマン・レイの作品展でも「驚きの浮世絵」展でも、あるいは藤井達吉の作品展でも、小学校低学年生にとってさえ難し

いなどというものではまったくありません。かえってそれぞれに生徒たちの活発な想像力をよびおこし、学校だけでは得られない非日常の世界への目ざめをうながし、人間というものの複雑さとその歴史の面白さに気づかさせる絶好の学習の機会であったと、私たちは考えております。

先生方にも、学校教育において美術博物館の果たしうる大切な役割についてさらに深く御理解賜わって、全校の年次教育計画のなかに何回かの美博訪問をぜひとも正式に組み入れて頂きたく、ここにあらためて切にお願い申しあげる次第です。館としましては、美術・歴史にわたる資料の調査・研究と収集・展示をもちろん第一の責務として自覚し、この面でさらに勉強してゆきますが、もう一方の市民および青少年啓発の活動をもそれに劣らぬ重大な喫緊の責務の一つと考えております。そのためには展覧会についての広報や展示現場における生徒さんたちへの平易明快な説明と応答、学校と館の間のバスの便などについても、今後一段と工夫と努力をかさね、市の助力をも得て、学校と美術博物館の間の交流・協力の関係をいっそう強めてゆきたいとひたすら願っております。

先生方におかれましては、私たちの意のあるところをなにとぞお汲みとり下さり、今後いよいよのお力添えを賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

先生の一そうの御健勝と御活躍をお祈りいたします。
(以下略)

文中にもあるように、私たちは生徒たちが美博のせつかくの展示を見に来ないのは、彼らのためにももったいないと思っている。子供を招きたいからといって子供たちに迎合するような展示はいっさい考えず、つねに質の高い展示を求めつづけてはいるが、それを小学校、中学校むけに平易明快に解説し、どこか一点、一角だけでも面白がらせたり、「なるほど」とうなづかせたりする工夫は、いくらでもできる。その工夫と訓練をすることが、これからの学藝員のもっとも大事な任務の一つだとさえ考えている。

さいわい、右の直訴の手紙に対して、すでにいくつかの問い合わせもあったという。各学校の校長や教頭の先生のみならず、学年主任とか、美術、社会、国語、理科系の担任の先生たちとも、順番に面談して、学校内の難しい事情をいろいろとうかがうことも必要だろう。学校と館の間を1回に40名ぐらいずつ乗せて1日に何回かシャトルするチャーター・バスについても、市の財政担当部局とその費用について交渉をつづけるが、館の側でも展示経費の不可欠の一部として捻出できないこともないのかもしれない。

まだまだ実務上の問題はあ。学校側とともに工夫を

かさねて、美博館内に少年少女たちの輪がいくつもできて、たのしげなさざめきがいつも聞こえてくるような日々が早く来ることを、心から切に願っている。その少年少女たちこそ、これからの日本を世界に向かって押し開き、この国をさらにも想像と創造の力に富んだ国としていってくれるにちがいない人たちなのだから。

博物館の心理的基盤と将来像

財団法人岩田洗心館 館長 岩田 正人

愛知県博物館協会創立40周年おめでとうございます。おもいかえせば、わたくしが愛博協実行委員を拝命してうごきはじめていたのが愛博協20周年記念事業企画のおりであったわけですから、なにもしないうちにわたくしも馬齢だけは重ねてしまった、というところでしょうか。で、このたび、その馬齢をもって博物館の将来に関する一文を寄稿させていただけることになりました。しばらくおつきあいいただければ幸いです。

こういうばあい、わたくしは常に初心にかえるということを考えます。原理論に立脚しなおすわけです。以下はそのすこしばかり端折った議論です。

博物館には「博物館の三大機能」といわれる①収集、②保管、③展示があり、これら以外にも、研究教育機関、健全娯楽というような「公共の福祉」の一端をになっているという位置づけがあります。

ところで、博物館ができあがってきた歴史をななめに見ますと、博物館の三大機能が、①コレクター趣味、②追憶乃至懐旧の情、③見せびらかすことの醍醐味、といった心理的基盤をもっているようにおもえてきます。①コレクター趣味の現代的形態としては「オタク」心理、でしょうか。②は情報フェティシズム、③はスノビズムとかブランド志向、といったことがそれらの現代的発現形態とおもわれます。

さて、博物館内部人としては、数世紀をかけてピュアなものにされてきた博物館の存在意義をなんとかまもりそだててゆきたい、が、現時点でのわたくしの感想から申しますと、すくなくともわが国における博物館については、電子情報に席卷されて図書館の付設機能くらいになってゆくか、でなければアミューズメントパーク化する、という「ややさびしい」近未来像になり、つまり、②の情報フェチや健全娯楽の方向はあてにならないどころかもっとも強力な敵方戦力である、ということになります。

ところで、①および③の心理は、現代的発現形態においては、自己の存在証明、というかたちに収約できるところまで煮詰まってしまったような感があり、博物館の設立ラッシュがあった一回り昔の状況をふりかえりますと、当時、博物館が設立主体にとって究極のところもっていたかもしれない意義が、これに重なって見えてきます。

他方、SF文学の先鋭なファンをもって自認するわたくしのSF読書歴に関するところ、博物館や図書館といったいわゆる「モルグ」（身元不明等の死体の保管所）の一種と了解されているらしいこれらの施設・機関が、その知や史資料を未来へ無事におくりとどける保管伝達機能によって高貴なものとしてされている作品にしばしば遭遇し、感動します。あるいはまた、中国歴代王朝が、天下を平定したと自認するにいたるやただちに、散佚した文

化財や文献史資料の結集編纂整理をおこない、次なる荒廃期にそなえて重要諸文献の複数コピー制作や編纂結果の版行等をおこなった、ということに感動します。そこには、これらの文化財や史資料が、未来人や民族自身の出自と存在の証明であり存在理由であることが、示されているようであり、博物館についての先行者である西欧の経験が、つまるところ、博物館を「モルグ」だとしたとすれば、それは、十分に考慮すべき事態であり、それは、時代の荒廃期にすら遺存する本質ではないか、と反省すべきであろう、と考えます。

つまり、現代は、博物館にとって、その根本機能を純化していきのびるべき不遇の時代であり、収集保管研究という「未来への伝達に必要な諸機能」に集中すべき時代が当分つづくのではないか、ということであり、きわめて退嬰的な、とはいえ、そこには、設立主体にとっても、博物館内部人にとっても、また、存在証明の必要を感じる人々にとっても、立脚基盤となりうるものがある、本来、博物館とはそのような孤立をおそれないものであった、というのも、連帯すべき世界は、常にその将来のなかにとどまっているものだったのだから、ということで擱筆とします。ご一覽ありがとうございました。

これからの博物館におもふこと

昭和美術館 副館長 服部 昭義

最近の社会情勢は「改革」と「展望」という論がキャッチフレーズとして世の中を飛び交っている。人間の生活向上の為、作られた学問、芸術、宗教、科学という「文化」は、様々な歴史の変遷を経て今日の形態となっている。改革論は賑やかに国務を中心に連日報じられている。文化施設の博物館も新世紀に入り、更に改革の波に対応せざるを得なく、見直しの修正論が日夜検討されている。



人類が耕した「知」は人間形成上、最も教育が重要な課題となっている。文化を育み、人情豊かに社会に貢献するには、人材教育は不可欠といえる。教育は状況に応じ弾力的に対応する方向が望まれている。その人間形成上育成するには自然と日本独特の文化が普遍的に確立されている地域や、自然の美と人工の美が融合されて適正に調和している地域などの豊かな自然環境などが望ましい条件としている。

育成された「知」が地域性の文化から始まり無限に拡大している。従来の文化に対する固定概念を変える方向性の組織文化を先ず内部から改革する方針が望ましく、また、定まった来館者の対応策を不卒の自由なる来館者の方向性などを原点に戻り努力すれば一層効率的な面が浮上してくる。博物館自体本質的に充実すれば、きっと来館者は、日常生活空間(居住空間)を文化施設(博物館)に求めて心身を解き放し、「知」も加わり真実の自己志向の形態に替わり、博物館に対し、継続性が発生し、地域性の地域文化の向上に新たな掘り起こしが予測されてくる。

これらの地域では必ず各分野の博物館等の文化施設が存在している。その地域性に焦点をおいたとき都市開発の余波を直に受けている現状となっている。

例として次の通りとなっている。

国土開発→植林伐採→植物剥離→表土変化→保水機能の変化→土砂流出→土砂災害→粉塵→展示品の変化＝露出展示の影響 野外博物館

国土開発→大気汚染負荷増→大気汚染→美術館・博物館の変化＝理想空間の維持変化及び危機感の発生

国土開発→切土・盛土→流状変化→自然景観(池)の変化＝博物館・美術館の景観の破壊

国土開発→風照の変化→害虫の繁殖＝博物館・美術館の収蔵庫の薫蒸の増加

国土開発→排水負荷増→廃棄物処理負担増→公共負担増＝博物館の入館料の変更

など美術館・博物館にとってその影響は複雑化し甚大になっている。プラスでもありマイナスの両面を持っているが、文化施設の本来の目的完遂の為、適正な改善改良策に迫られている。

日本の文化は幅広く海外で評価され19世紀以来、浮世絵、根付、絵画、彫刻、工芸、建築、ファッションなど日本文化の真髓を学び取られている。それは人間の知性と感性が心の神経を揺り動かしている。これらをどの様に日本の文化を更に位置付けるのか、模索の連続としている。

私達は常日頃、何事も疑問を持たず習慣や年中行事に対応している。又自己欲求追求の根源は、文化に対し、博物館や美術館の企画展・特別展常設展など鑑賞している。様々な人々の暮らしぶり含めてその意図や遠い他国の影響が少なからずあったり、先祖から脈々と受け継がれてきた英知が潜んでいた部分を解明されたりしている。

学識の「知」は何人にとっても「負」にならない。鑑賞に疑問を招くことは素晴らしい事につきる。

20世紀から21世紀へと時代は移り、博物館の収蔵品は、横一列方式の従来方式から一変している。企画の種類から展示の構成、展示機器のハード面から、情報伝達の為の作成法などのソフト面まであらゆる点で革新されている現在となっている。

日本でもコンピュータ時代の到来となり、仕事から家庭教育、そして在宅教育まで進み、IT機器を到底無視できない時代となっている。

- ①情報の貯蔵、検索などのファイル管理
- ②金融関係のクレジット、
小切手等銀行事務の家計管理
- ③予算管理の財務計画
- ④銀行との連動での支払事務の事務の一環
- ⑤デジタルコンピューター連動による情報収集(展示案内含む)に伴う情報確保サービス体制
- ⑥自己発展、自己啓蒙のプログラム、学習等の自己開発や趣味
- ⑦買物等の在宅ショッピング
- ⑧自己の体質や体力管理など健康管理
- ⑨画題スケッチ、作曲、編曲
- ⑩思考力の向上、教育など
- ⑪日常生活上のコントロールの為の操作や
防犯上の管理

未来形であった対応は現実となっている。今日の博物館では①⑥⑩⑪はすでに組み入れられ対応されている。20世紀後半に著しく発展した改革能力やもの造り能力のような企業の組織能力は事前に合理的に察知し計算された計画性があり累積的に形成されている。

「創発」は創発性の強いものとして改めて予測されたものでなく創発的プロセスでもなく、又、意図されたものでもなく、事後結果、創意工夫という変化に替わるものとなっている。コンピュータ時代であるので人知を超えたもので錯覚でもなく、大きなシステムの中の一つの要素であるので、システム全体の挙動や構造を計画や制

御は基本的に不可になっている。個々の人間は、ローカルな関係を超越するグローバルな視点や意図を計画にもとづく「自己決定」を為し得る主体である。「創発」を理解し、観察・分析・模造的な再発、創出する時点から、新たな創発現象を計画、意図を人為的に進める時代突入となっている。

博物館の展示では、現代は理性の重要性から少し離れて感受性を強く押し出した感性の時となっており、さらに鑑賞をも盛り込まれている。一般的に「美学の時代」で、これら情報社会の中、いままでの理性的中心主義から美意識中心主義となっている。

ニコライ・ハミルトン(20世紀初期)の著である「美学」の邦訳書では充分丹念に確認すべき事態が重要であると記している。ハミルトンの「美学」が多くの人々に愛読されず、読書するのには値が低いという事、もしかしたら現代に不適應という価値観が生じてしまっているのか。しかし、「分かりきった事」を丹念に確認した「美学」は今後のいや現在進行形の現代、未来形に果たして変化するのであろうか。これからの博物館(美術館)の持つべき「在り方」「未来の姿」「展望論」を論ずるとき、新しい物が出て来たとき、何も新しい事が新鮮で世に訴える事が全て正しいという保証はいくら周囲を捜しても無い。この論点から言うと基本的コンセプトを持つ社会的美意識的展示、観光、地域性など理念上からも主体をもって運営を図るならば社会的適正な事項の消極的な“従”中心であった事実が全ての展示を広域空間的な発想として取り入れられ総合的にハミルトンの「哲学」や教養が常に先行することが、これからの博物館の指針として21世紀の新時代の要請に答えられるのではないのでしょうか。

新しい価値観を生むミュージアム

鳳来町立鳳来寺山自然科学博物館 館長 横山 良哲

筆者は、思わぬ縁で現在二つの博物館の館長を勤めさせていただいています。

一つは住職をしている鳳来町の医王寺の医王寺民俗資料館で、先代が40余年にわたって収集した地元の民俗資料を中心に展示しています。

もう一つは、鳳来町立の鳳来寺山自然科学博物館で東三河、特に奥三河の地質、植物、動物、菌類を展示しています。

前者が14年目、後者が9年目になりますが、はからずも民俗資料館の方は平成12年の庫裡新築にあわせて、自然科学博物館は地震に対する耐震工事にあわせて平成14年にリニューアルしました。

博物館の展示物の一時的な移動、その後の再展示は、ずいぶんと体力を要する仕事であることが良くわかりました。

民俗資料館の再展示は、地元の歴史、民俗に理解の深いもと学校の先生(山田慶氏)をお願いをして、山田氏の想いにあわせて個性を出して展示していただきました。

年代、分野ともかなりのばらつきのある内容ですので、見学の方が自分の好みにあわせて頭の中で再編成して見ていただければと願っています。

こちらは寺の付属施設ですので、地域の小中学校の総合学習、口コミで伝わって訪ねてこられた熱心な方、古い農



具、織物の切れはしを集めた縞帳、戦争に関わるものなどの研究をされる方などに、そっと無料開放をしています。

それに対して、鳳来寺山自然科学博物館の方はぜひ大勢の見学者に訪ねて来ていただきたく、耐震工事に伴うリニューアルを賀とし、かなり手を入れました。

しかし館の開かれた昭和38年当時に比べると、展示のみの時代から人々の求めるものは大きく変わってきたようです。

加藤貞亨学芸員も10余年前より館の情報提供に意を注ぎいくつかの効果を上げてきています。

一つが鳳来町全戸(約4,000戸)に年6回配布される「はくぶつかんだより」です。

最初は回覧だったのですが、親しみやすい文章とやわらかな線のイラストが、もう博物館には足を運ばなくなったような年配の方に大人気で、町に対しても博物館の存在価値を高めたようです。

イラストだけでなく文章も手書きというのも、「はくぶつかんだより」に対する親近感を増しているようです。

続いて昭和51年に発足し、細々と続いてきた「博物館友の会」に手を入れました。

自然に理解が深く、熱心な方たちを役員に迎え、加藤学芸員と役員が車の両輪となって楽しい友の会行事を増やし会員の情報交換の場となる会報「瑠璃山」(ちなみに鳳来寺山の最高峰の名)を発行しています。

対談

- ・今、美術館を語る
- ・今、美術館を語る
- ・子どもたちに実験の楽しさを伝えたい
- ・対話のある博物館づくりを目指して
- ・お客様とともに歩む
- ・これからの美術館・博物館のあり方
- ・博物館人の来し方、行く末
- ・ハングリーであれ 人が博物館をつくる
- ・鳳来寺山自然科学博物館 開館40周年を迎えて
- ・博物館、来し方行く末
- ・モノにこだわり、モノと人の思いをともに残す
- ・発信する役割…学芸員がつなぐもの
- ・地域の人が集まる場所を目指して
- ・田原市博物館 ー開館10周年を迎えてー
- ・企業の美術館として、優れたコレクションで社会に貢献
- ・神社の博物館 昔・今そして未来へ
- ・「ミュージアム・マネージメント」の視点をもて

博物館・美術館の今を語る

今、美術館を語る

佐藤：今日は愛博協の思い出をお聞きするのではなく、将来展望をお聞きしたい。特にそれぞれの館だけでなく、この地域、そして美術館界を引っ張ってこられた方々としてのお話をお聞きしたいと思っています。この10年ぐらいのお話しと今後の展望、さらに20代30代の学芸員にアドバイスをいただきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

1. 今一番心配していること。市町村合併、エージェンシー化、指定管理者制度など

木本：まず、今一番心配していることは、地域の博物館が市町村合併によって美術館・博物館がどうなっていくのか、という問題。愛知県から道州制に変わるかもしれないという領域の問題。県立の美術館は無くなるかも知れない。10年先にはどうなるのか。尾西市と一宮市の合併、美術館運営の点で心配。橋本さんの高浜市も同じですね。

橋本：はい、碧海市ですね。

神谷：広域の問題。県として全県をどう捉えるのか。例えば、そこの存在している地域には広報するけれども、他の地域には広報出来ているのか。県立美術館として何が出来るのか。地域の美術館として小さな美術館と大きな美術館は特徴なり特色をどう出していくのか。愛知県はほどほどの大きさなので愛知県美はいい位置にあると思います。それぞれの大きさの役割分担が必要。それをすれば良くなるのではないのでしょうか。

木本：ブロックごとの充実が大事。私立として今後の徳川さんの展開はどうですか。

小池：エージェンシー化のことは町村合併以上に大事だと思います。これはどうですか。

木本：(博物館施設について)文部科学省ははっきりと言わないが、まず愛知県立の大学の合併の話がある。大学同士の統合が進むと、次は博物館施設となるでしょう。愛知県には二つだが合併の可能性はあると思います。

神谷：(エージェンシー化について)公立美術館の民営化といったとき、出資比率をどうするのかなどの問題に加え、やはり税金でまかなうべきベーシックな部分が絶対あるはず。その上に特別展など多少利益を考える部分がある。そういう議論があると思います。(名古屋市では)いわゆる展示施設や国際展示場

などだろうけど。教育委員会に所属するところはすぐには対象にならないが、でも、迫ってくる可能性もある。

木本：独立行政法人の実体が知られていませんよ。実際には何も変わっていないね。

第3セクターでの美術館運営にも問題があるよ。横浜美術館の例など、館長の実体が無い。

神谷：今もう一つ別に、財団への単純委託から指定管理者制度へと移す方向があります。

佐藤：今日のキーワードですね。

神谷：そう、これが大変ですよ。どこの管理をまかせるのかという問題があるが、これはもっと大変。うちは教育委員会の直営だけれども。

佐藤：(名古屋市美は)教育委員会の直営ですよ。ところが愛知県美術館と陶磁資料館の場合は教育委員会ではないわけですよ。

木本：違いますね。知事部局。

佐藤：この(手許の資料みせる)『博物館研究』に文部科学省の指定管理者制度についての考え方が8月号に出たばかりですが、教育委員会が所管の場合は館長や学芸員を置くことは(教育委員会が)任命することができる。教育委員会でない場合は、簡単に言いますと、指定管理者に全て任せることが出来ると書いてあるわけですね。

神谷：博物館法にいう登録博物館が教育委員会所管というのが基本だから、知事部局のことは知らないともいうんですかね。

木本：それも本当におかしい話。愛知県美の建設のときにも教育委員会の管轄か、知事部局かという話があって、いろいろな議論があった。(中略)…むしろ知事部局で予算がダイレクトに来るのがよいという話もあった。(結論として)愛知県美術館は教育委員会に所属しないとなった。だから文部省の統計データには、愛知県立としては博物館登録・相当施設は一つもなかったですよ。今はどうなのかな。

佐藤：2003年以降は二つです。県美術館、陶磁資料館とも博物館相当施設です。

木本：(国には)いろんな恩恵があって、登録文化財制度が座礁していたでしょう。それに救いの手を伸ばしたのは、愛知県美術館でした。当時の文部省は、非常に喜んだわけですよ。それでバックアップがあった。いろんな



左から小池さん、神谷さん、木本さん



愛知県美術館企画普及課長

木本文平
(日本近現代美術)

名古屋市美術館学芸課長

神谷 浩
(日本美術)

徳川美術館学芸担当課長

小池 富雄
(日本近世文化史・漆工史)



高浜市やきものの里
かわら美術館学芸員

橋本久美
(美術)

愛知県陶磁資料館
学芸員

佐藤一信
(近・現代陶芸)



愛知県美術館
主任学芸員

深山孝彰
(日本近現代美術・日本彫刻)

背景があって、国自体が混沌としてる、迷ってる。じゃあ、と、はっと見回したら「独立行政法人」でしょ。登録施設になるのか、ならないでしょ。

神谷：僕は、やっぱり博物館の機能としては教育委員会かなという感じはしますね。名古屋市は、市長部局に文化振興室というのがあって様々な文化振興をしていて、美術館・博物館はそことは違う活動をおこなっている。

(中略)

小池：文化省管轄の大学はエージェンシー化、独法化になっているのだから、名古屋市教育委員会管轄下の市美、市博がエージェンシー化できないということはないと思う。

神谷：国が博物館やったの間違いだと思って

いる。国、本当は大学が一番やりたかったらしい。だけど大学やるっていったら、みんなうわーって反対したから、手を下ろすときに博物館、ときたという、簡単に言うところのことだと僕は思う。

木本：結局ね、処理しやすいほうからきたわけですね。

小池：それで結局、国立3館。

神谷：あれひどいよ。内容実体変わってないわけですよ。要するに人減らし、金減らしのためにやってきているだけみたいです。

木本：ただ、今、独立行政法人3館も統合されるでしょう。今、博物館連合と美術館連合があわせて一つの博物館連合という形で、また一つになっちゃうよね。

小池：文化財研究所もそうだね。

神谷：独立行政法人は、民間でもやっている

ことをその手法を取り入れてやりなさいということでしょう。美術館でいえば民間でもやっている、役所もやっている、つまり徳川美術館さんも市美もやっている。ただども収支比率ということでは、人件費などすべて含めて、市美でも10パーセントとかいう数字ですよ。それは民間で言えば、たぶん駄目なことで、倒産だよ。では、例えば(公立)病院はどうか。受ける医療は大体同じで、同じサービスを提供している。病院は民間とおなじように出来るかもしれない。研究部門を除けばだけど。でも、博物館・美術館はそういうところではないと思うんですよ。(逆に)徳川美術館さんは良く頑張っておられると思う。でも、私立美術館と公立美術館の活動でやっぱり違うところあるわけでしょう。常設展をほとんどただみたいにするとかね。それは税金で賄うところだと。

木本：義務教育と同じですよ。

小池：でも今、国立博物館は、今回の独法化で焼け太りではないかと見る向きもあるよ。

木本：補助金をもらっているんですよ。なおかつ巡回の展覧会にお金を出さないと。基本的に国の文化政策が根本的に間違っているところがある。それが地方に蔓延してくるんですよ。

佐藤：さっきの話と同じで、市町村合併があるときに県立美術館の役割があるように、当然、その上に国の役割があって、それは何なんだということですよ。

神谷：そう。西洋美術館がこどものための企画やってるでしょ。誰を対象にしているのか。国立でも国民全体に呼びかけることはできませんよ。やるならやるで、例えば実験的なことをやるとか、その成果は全国に報告するとかね。その辺が国としてどうあるべきか、県としてどうあるべきか。愛知県の場合はネットワークの核になるべきだしね。

2. 博物館はやっぱりモノ(作品・コレクション)。しかし、バランスも大事。

神谷：例えば、徳川美術館が公立であったとしたら、最後に残るのは徳川美術館だと思いますね。やっぱりコレクション。僕は博物館に16年、美術館に8年いるけれど。近頃思うのは、最後はモノだよ。

神谷：ここ20年くらいかな。友の会組織、子ども向け夏休み教室、ボランティアだとか、そういう部分がものすごい活発になってきて、良いことだけれども。そっちの方ばかりだとね。来た人が、結局、感動するのは、モノなんですよね。結局はそこだと。長いこと教育をやって突っ走ってきて、振り返るとモノと遊離していないか、といつでも反省しています。うちではね、アトリエがないのに何でワークショップをやるのかというところ、それは鑑賞のためのワークショップだと。その辺を押さえてないとね、モノがあって、モノをいかに知ってもらおうかということをおぼろげに忘れると、先っぽの部分だけで動いちゃう。そういうものが僕は気になる。…いつでもモノに引き戻すようにしていますね。今、美術館が目立つとなると、大規模な展覧会をやるか、子どもがわんさか来るとかね。でも、結局最後までものをいうのはモノだろうと、そういう意味で、徳川美術館は凄い力を持っているはずですよ。

小池：僕は、この業界全体をまたは一つの館レベルでも大きくなろうと思うと、例えてみると、ピラミッドの石積みみたいにエデュケーションも、コレクションも、リサーチも、いろんな物を積んでいかないと大きくはならない。やっぱり、バランスも大事ですよ。昔、徳川美術館はエデュケーションをやってなかった。ボランティア育成をこの10年はずいぶんやりました。今年はお前授業をやったり、やっぱり弱いところを積んで上げておくと、高いピラミッドが積み上がると思うんですけどね。

神谷：徳川美術館は今、良いモノを持っているから堂々と真ん中に登っているんです。別に名古屋市がモノを持っていないというわけじゃないですよ。すばらしい良いモノも持ってますけど、何かそれを忘れちゃうことがあるんじゃないか、と反省しなくちゃいけないってね。そういうところがちょっとあるような気がしますね。

佐藤：でも、この10年について、小池さんのお話を伺っていても思ったんですが、やっぱり、エデュケーションで、どこの美術館も弱かったじゃないですか、それをむしろ全面に出して、うちはこういうモノを持ってるん

ですよと、人を引き寄せるような活動に力をいれてきた10年で、ようやく神谷さんが言われた、モノに戻っていく。それは日博協を見ているもそうだなと。平成13年くらいから、「親しむ博物館」とか、市民参加のというのがずっときていたのですが、去年の『博物館研究』号に報告書「博物館の望ましい姿」というのがあって、第一弾は「市民と共に作る」だったんですが、二回目には「資料」に戻しましょうと。資料の取扱い、資料についてなんです。つまり、望ましい姿の中にあった市民参加やコミュニケーションについてはかなり達成されてきているが、そこでもう一回コレクションに目を向けよう、というところに協会も戻っているな、と思いました。10年かけてピラミッドの欠けた部分が積まれてきて、そこで、もう一度コレクションに戻るのかと思うのですが。

木本：やっぱり愛知県美術館も同じですね。コレクションは7千点にもなりました。量だけでなく、質も充実しました。なおかつ美術館活動でも、研究から教育活動まで、いろんなものを積極的におこなってきたけれども、それを今ひとつ外に発信しきれてない。それは、愛知県美術館というのは複合体で芸術文化センターでもあり、複合体のデメリットが出て来ている。愛知県美術館の今持っているものをいかに発信するかで、その手段として例えば教育活動とか、いろんな部分をまさに小池さんの言われたバランス良くやっていくのが一つの手法だと思っています。

神谷：県立というのは、白亜の殿堂にするか、じゃないけどそうなるんですかね、さきほど「親しむ博物館」の話が出ましたけれどもね、博物館・美術館というのは、そう親しみすぎてもらっても困る面もあると思うんです。やっぱり、ドキドキする非日常の世界だからね。そこに時々行きたくなるような気にさせる事が重要だと思うんです。

佐藤：そうですね、特にブームになってから、「親しむ」というのには、美術館がすり寄っていくのか、どういう風に(美術館が)開いていくのかというのがあると思いますね。私の体験ですと、高校生の頃、友人が宮城県美術館に、とにかくよく行ってたんですね、たとえば、ビデオアートをやってみたくて。

僕も絵を見には行ってたんですが、大学に入って学芸員実習をそこでやって初めて出会ってわかったんです。齋さんという(普及専門の)人を引き寄せる、すごい学芸員がいるっていうことに。そこでは何というか強要されていない、親しみのある美術館(博物館)があるんですね。やはり、3館(徳川・名古屋・愛知県美術館)とも歴史があって、高校生だけではなくて、いろんな関係を築かれているからこその今のお話だと思います。私は、ブームになった「親しむ博物館」にもそれなりに意味はあったんじゃないかと思いますが。ただ、その子ども、そして去年ぐらいからは高齢者、というキーワードのみを変えてというのは、もう共感できませんね…。

神谷：やはり、美術館・博物館は基本的に大人のもですよ。必要以上に子どもだけを重視することによって、大人を忘れてしまうのは違うんじゃないかと思うんです。

3. 若手学芸員へ提言。

木本：30代から40代というのは、人生で一番活動出来る時期だと思います。美術館としての信用を高め、一方で、個人としての信用を積み重ねることで、例えば愛知県美術館の場合ですと、木村定三コレクションが受贈された。やはり企画の積み重ねとか、信用の積み重ねとの結果でモノが動いてきますよ。杉本健吉さんのコレクションが入ってくるとか。そういう積み重ねの良い時期だと思いますよ。30代とかは。

神谷：さっき、僕は博物館は「モノ」だといったけれども、では学芸員は、と言われたら、どれだけ良い研究をするか、どれだけ良い展覧会をするかというのが大事でしょう、それで良い作品も集まってくるわけだし、展覧会をしようとおもったら作品が集まってくる、これが学芸員の実力ですよ。マネジメントとかあまり関係ない。どれだけ専門にこだわっているか、それを貫き通さないといけない部分があると思います。

それにモノへのこだわりね。

小池：コレクションをよく研究してね。やはり、若手に初めに言うことは、まず研究ですよ。

神谷：そこだと思うよ。あと、残るのはモノ

と活字ですよ。研究紀要に何を書いているか。どういう展覧会をやっているのか。

木本：話の発端が30代の学芸員にということだったけれど、やっぱり一番良い時間ですよ。30代40代で良く動けたことが、50代になったときに、寄贈したいとか、そういうのがいっぱいあるんですよ。

小池：館の紀要じゃなくても、雑誌でもいろんなところに書くのが、良いですよ。良い展覧会する人、良い研究論文書く人、良い作品を購入した学芸員が評価されないと。収集に対する業績の評価が一番弱いですね。

木本：全然評価されてないですよ。

小池：アメリカのように、凄いモノ買ったという人を評価するのが大事だよ。

(中略)

橋本：ちょっと話が戻るのですが、さきほどエデュケーションの話が出て、名古屋市美術館が当初に始められた頃に6年生だった子はもう20才だと思わんですが、彼らは有料観覧者としてバックしてきているんでしょうか？

小池：私の館でね、小学生の頃、受講者として来てた子が大学生になってボランティアの教える方に来ていた例があるね。戻ってきました。嬉しいね。

神谷：難しいね。具体的データは持ってはいませんが。大学生が団体で来たときに美術館に来たことがある人と聞くと、多少は手が上がるからね、小学生のときに蒔いた種が、多少はそのまま伸びているかなという気がします。

橋本：私の場合は、それを一つの目標ということでやっているんですけど。この子たちが大きくなった時にお金払って来る市民に育てますというような。

木本：戻ってくるにはもう一つの要素があるよね、やっぱりモノの力があるよね。

佐藤：それと人もですよ。

神谷：学芸員が前に出てくるのも大事だよ。今、「ワクワク、ドキドキ」をキーワードにしてるんだけど、この学芸員と会えるって言うのも非常に大きなワクワク、ドキドキだよ。

4. 愛博協の顕彰制度について

木本：愛博協として県下の美術館の仕事を見て、20代30代の若い学芸員を評価していく必要があると思いますね。奨励賞というか。

神谷：40代までだろうな。

小池：良い論文書いた、良い展覧会をやった、良い作品を収集した人、良いエデュケーションプログラムをやった人というのを表彰したいね。

神谷：「それは良い」の中には、「ユニーク」が含まれてもいいしね。

小池：地道であってもいい。

木本：展覧会も大規模でなくていい。小規模でも面白い視点を組んでやったとかね。

神谷：芸術新潮がやってたように、学芸員が選んだ展覧会ベスト5みたいなね。それ、面白いと思いますよ。

佐藤：大変いい結論になりました。愛博協で是非検討したいと思います。

木本：本当だよ。是非やってほしいね。

佐藤・橋本：今日はありがとうございました。

<インタビューを終えて>

長年に渡り愛知県を代表する美術館にて活動してこられたお三方に「美術館・博物館の今、そしてこれから」というテーマで、いくつかのキーワードに沿ってお話を聞こうと考えた。筆者の考えたキーワードは、まず美術館の直面している問題として、運営面で「エージェンシー化」「指定管理者制度」、次に普及事業全般について取り上げ、「親しむ博物館づくり事業」に代表される「子どもを対象とした事業」、滋賀県の美術館を支援する市民団体などの例を挙げて「ボランティアからNPOへ?」「市民参加のこれから」、そして、これからの美術館のために「若手学芸員への助言」、そして最後に、今後の愛知県内のネットワークを見据えて「愛博協への期待・要望」などを準備しておいた。やはり、まずはここ数年の出来事・関心事を取り上げて、それを三人の先輩方が、どう捉えているのか率直にお聞きしたいと考えたからである。

しかし、それを具体的にお話しする前に、先に木本さんから、今一番心配していることについて、と口火を切られた。まず、市

普及活動、中でも子どもを対象にした事業への考え、そして、美術館の根幹としてのコレクションと学芸員について、と堰を切ったようにそれぞれが熱く語られ、こちらが想定しなかった話題も含めて、話が続いていった。

筆者も質問を挟むのも忘れて、ただ話に聞き入り、時には、話に加わっていた。終わって振り返れば、美術館の現場で長年第一線を歩いてこられた方々ならではの、生の声を聞かせていただけたと感じている。

もう一つ、お三方のお話しの中で感じたのは、自分の所属する館をどうするかという視点と同時に、県内外の他の博物館・美術館についても、今後どうなっていくのか、そこで自分たちは何をしなければならないのか、という強い自負と責任感とをそれぞれの立場でお持ちであるということである。

インタビューさせていただいた筆者たちにとって、同じ問題意識を持ちながらも、思い至らない深さと重みのある内容だった。同じ職場内では、逆にこれほどまでにざくばらんに話しをすることはなかったように思う。他館の先輩方とこうした機会を持てることが、愛知県博物館協会という集まりの利点であると考えている。

愛知県博物館協会には、課題もいただいた。若手学芸員のバックアップを視野にいれた顕彰制度の検討である。これは、単に賞を受ける側だけにメリットがあるのではないと思う。実現すれば、推薦・審査する方々は、各館園の展示や研究、普及活動に目をくばり、そしてどんな人がいるのかと出掛けていこう。それが世代や専門を超えた新たな交流に繋がり、県内の美術館・博物館ネットワークは、よりリアルなものへと変わっていくのではないか、そんな展開を予感させられる、やりがいのある課題である。選考方法のことなど、クリアしなければならない問題も多いが、大局的な立場から、若手学芸員の育成から愛知県博物館協会の活動の活性化までをも念頭におかれての提言であると認識し、実行委員会としても真剣に取り組まなければならないと考えている。

実は、ここに掲載したのは、1時間40分のインタビューの内容の半分ぐらいであ

る。現場のトップにいる方々ならではご紹介したいお話しがまだまだあるのだが、紙面の都合で省略させていただいた部分と、過激すぎて割愛させていただいた部分もある。お話しもまだまだ尽きないところでの時間切れであった。またいつか、研修会などの場で、御三方を囲んでこの続きを聞かせていただきたいと思う。

(文責：佐藤一信)

今、美術館を語る

Q：学芸員という仕事を選んだ理由は？

父親が趣味で、とはいってもかなり本格的に絵を描いていて、絵を描く人間が近くにいたってというのは大きいだろうね。もともと命を考える仕事が好きで、高校を卒業する頃は哲学をやろうと思っていた。それが大学に入って歴史学にも関心を持ち始めて、最終的には「趣味と実益を兼ねて」ってことで美術史を選んだ。実際は兼ねられないんだけどね。大学3年の時から映画をたくさん観るようになって、一時は映画（ソ連の映画監督エイゼンシュテイン^{註1}）で卒論を書こうと思っていたくらい。結局は自分の世界観の延長線上にある時代と社会の美術を研究するのが一番いいと思って、日本の近代美術を選んだ。卒論は黒田清輝で、修論は岸田劉生を書いた。その頃にはもう、大学の研究室に残る気は全然なくて、最初から現場、美術館に行きたいと思っていた。それが1985年で、幸運なことに名古屋市美術館の準備室の募集もあって、なんとか学芸員になれた。

Q：ほぼ20年のキャリアの中で心に残ることは？

一番は、美術館の準備室に入ったことが大きい。つまり、もう開館して路線もある程度決まっている美術館に入ると、ある意味で自分を美術館に合わせていかななくてはならない。どこの美術館の学芸員もそうだけれど、自分の研究分野をそのまま仕事に生かせるなんてなかなかない。けれど準備室にいて、まだある程度自分たちの考えで方向性が決められる。そういう部分があったからよかったと思っている。例えば名古屋市美術館のメキシコ・ルネサンスのコレクションは、僕も含めて当時現場にいた学芸員の方から提案したものだった。専門家のいない分野だったので、作品の収集には苦労したけれど、日本で唯一のコレクションができたと自負している。そういう美術館の活動方針の根幹に関わる部分に関係することができたのは、準備室にいたからだと思う。あと名古屋市美術館は、日本の公立美術館の中で非常に稀有な貸しギャラリーを持たない、純粋な美術館として建ったのは非常に幸運だった。そういう意味では、名古屋市美術館は条件のいい形でスタートしたと思う。建ち上がりの時点である程度の方針

が現場から立ち上げられたってことは大きいんじゃないかなって気がする。

Q：『DOME(ミュージアム・マガジン・ドーム)』^{註2}で山田さんは「美術を見る目や時代・社会を理解する力を仕事を通じて体得した」とおっしゃっていますが、具体的にはどのようなやり方でしたか？

もちろん美術だけじゃなくて、哲学、歴史学、社会科学、文学などの本を意識してたくさん読んだ。けれども人との出会いが一番。うちの開館記念展は「20世紀絵画の展開」っていうんだけど、いろいろな美術館から作品を借りて、展覧会を構成しようという発想で準備をした。それはなぜかっていうと、展覧会の準備をする中でいろいろな美術館に、名古屋市美術館ができるってことをアピールできるし、出品交渉する中でつながりもできていく。そういう形で開館前からいろいろな美術館の学芸員とのコンタクトを持っていたというのは大きい。また幸運なことにバブルの絶頂期だったからお金があったこと。展覧会の規模も大きいものを考えられたし、展覧会準備にもお金がかけられた。僕が企画した展覧会だと、1990年に開催した「日本のシュールレアリスム1926-1945」展。調査とか研究のために全国を飛び回って、たくさんの画家や美術館学芸員と知り合った。ただ当時、僕はまだ美術館は展覧会をする場所だと思っていたけれどね。

Q：当時と今との考えの違いは？

バブルの時代を体験したからこそ、考えが変わったと思う。自転車操業のように開館から5年間くらい走り続けて、ほとんど展覧会しかできない状況だったから、これでいいのかなっていう思いはあった。もう一方で、僕は開館3年前に入って、展覧会をしない準備室の時は、仕事のほとんどがコレクションだった。入って2年目から収集の担当になって、オープンしてからもしばらくは担当していたから、この美術館に入っている9割くらいの作品には目を通して。早い段階から郷土美術の調査もしていて、最初からコレクションが大切だという思いは根底にはあった。準備室の時にコレクションする面白さも知ったし、それから意義もわかってきていて。

また「日本のシュールレアリスム」展をや

註1

セルゲイ・ミハイロヴィチ・エイゼンシュテイン：リガ(現ラトヴィア)生まれの映画監督。映画の基本的手法「モンタージュ」を理論化し、実践した。代表作には、世界映画史上最高傑作のひとつとされる『戦艦ポチョムキン』(1925年)、サイレントからトーキーへの過渡期における視覚的モンタージュの試みとされる『アレクサンドル＝ネフスキー』(1938年)、遺作『イワン雷帝』(1944年、1946年)がある。

註2

「美術館・博物館はなぜ必要か？ - 総合討議」、『DOME』、日本文教出版社、2004年、第75号、pp.27-28。『DOME』は1992年に創刊された美術館教育の雑誌。2004年10月現在、隔月刊行で第76号である。取り上げた第75号では、2004年5月8日の美術史学会、文化資源学会、兵庫県立美術館の3館共催によるシンポジウム「美術館・博物館はなぜ必要か？」が特集された。山田諭氏は、その第2部「美術館・博物館が必要なものとなるために」の報告者のひとり。一般に向けた美術館、博物館教育の雑誌は他に、『月刊ミュゼ』(株式会社アム・プロモーション発行。隔月・奇数月の15日刊行され、2004年現在で67号。)などがある。

語る

名古屋市美術館学芸員 山田 諭
(日本近代・現代美術)

聞く

刈谷市美術館学芸員 松本 育子
(美術館教育)

ったのは大きくて、作品を見つけるノウハウはその時に掴んだ。そして、展覧会で苦労して集めた作品を遺族に返してしまうとどうなるかわからない、美術館に残しておかないと、という気持ちを持つようになった。探し出す時に「戦災で焼けてしまいました」とか、「引越している間になくなってしまいました」とか、一番酷かったのは電話をかけた前日に「焼きました」というのがあって。作品は無くなるってことがよくわかった。作品を残しておかないと後々の研究も何もできない。だからこそコレクションが重要だということを、展覧会をする中でもわかったし、逆にする前から薄々感じていたからあの展覧会をしたんだとも思う。だから今までコレクションが重要な仕事と位置付けて仕事をしてきたつもり。もっと大きくいうと、美術作品という文化遺産をどう伝えていくかっていうことだよ。

それから、ちょっと話は変わるけど、「日本のシュールレアリスム」展はカタログをつくるためにした展覧会で、理由はそれまでの先輩たちは自分が集めた資料を抱え込んで見せてくれなかったから。僕がカタログで全部資料を公開してしまえば、隠している意味がなくなる。研究の姿勢を突き崩すためにあのカタログをつくった。資料も作品と同じで公になっていないと研究は進まない点では同じ。ある意味、戦略的に展覧会をやっているつもりなんだよね。

Q：山田さんの美術館のイメージは？

作品を残しておくということ。それと僕は「物」が好きなんだよね。デジタル・データとか嫌いなんだ。写真はイメージだけれど、プリントという「物」だからね。例えば、1995年に開催した「赤瀬川原平の冒険」展の時に出品した赤瀬川さんの「物」というのは作品じゃなくてもオーラを持っている。「物」が残っていないと話にならない、「物」さえあれば何とかかなという思いがあるからコレクション。

Q：全国美術館会議に美術館基準の提案を出されましたが、その後の動向は？

東海地方の美術館の学芸員が集って1年かけて議論した「日本の美術館の指針(案)」を発表してから、目立った動きはなくて残念

だけれど、指定管理者制度^{註3}とか具体的に検討しなければならぬ課題がでてきた時期が、僕が思ったよりも早く来た。それを乗り越えるためにも基準というか指針をはっきりさせなくてはならない。別に公共性がなくても管理者になれるとなると、採算が取れないところには入ってこないけれど、採算性があると思われる美術館などには大きな企業が入ってくる可能性が高い。小さな町の小さな美術館や博物館はNPO^{註4}の運営によって、採算重視ではなくて地域の施設を地域の人が使っていくことになる。僕はNPOが入ってくる小さな美術館、博物館はそれほど問題ではないと思う。NPOであるからには非営利であり公共性は高いだろうし、運営も地域密着型で活動していきだろうから。問題はそれなりの規模があって採算性があると思われる美術館に入ってくる企業の足枷をどうしていくかにある。重要なのは指定管理者を選ぶための仕様書、管理マニュアルの中にどれだけ公共性、非営利性を維持できる事項や制限を明記できるかということ。制度そのものはなかなか廃止できないから、美術館にはこういう目的や役割、使命があって、それを守って活動する限りでは、そう簡単には採算性は上がらないということを提示できるか否かが大切。だから基準というか指針に帰っていくし、美術館の目的や役割を明確にしておくことが必要だと思う。美術館が他の施設と違うのは、現在に生きる人が現在のためだけに使用する場所施設ではないということ。未来の人のためにもあるってこと。その根幹としてあるのがコレクションで、だからいつもコレクションの重要性を言っている。

一番の問題は、「美術館は展覧会をやっているところ」という一般的な美術館イメージを変えなくてはいけないということ。すべての人の意識を一度には変えられないから、僕はボランティア^{註5}さんなどの特定多数の人から美術館へのイメージを変えてもらいたいと思っている。うちのボランティアさんはガイド・ボランティアで基本は常設展のガイドをやってもらっているのだが、そのようなかたちになったのは、美術館のコレクションを知ってもらおうことが美術館への愛着につながると思ったから。美術ファンはたくさんいる

註3

指定管理者制度：地方自治法の改正により、公の施設の管理に関する制度が、「管理委託制度」(地方公共団体の管理権限下で、地方公共団体の出資法人や土地改良区などの公共団体、農協や生協等の公共的団体である管理委託者が具体的な管理の事務・業務を執行。)から「指定管理者制度」(地方公共団体の指定を受けた指定管理者が管理の代行を行う。)となる。平成15年9月2日から施行されるこの法改正により、指定を受ける者に制限がなくなり、株式会社等の民間営利事業者が管理の代行を行うことが可能となる。「公の施設」には、無論美術館、博物館等が含まれる。住民へのサービスの向上、経費の節減等を図ることが改正の目的だが、公共性の問題、利潤追求と馴染まない館活動の沈滞化、学芸員の身分保障などの課題が山積している。

註4

NPO：NPOは、「Nonprofit Organization」の略で、「民間非営利組織(団体)」と訳すことができる。利益を得て配当することを目的とする組織である企業に対し、NPOは社会的な使命を達成することを目的とした組織であるといえる。日本では、「特定非営利活動促進法(いわゆるNPO法)」が1998年12月1日に施行され、2003年5月1日改正された。

註5

ボランティア：広辞苑では、「ボランティア【volunteer】(義勇兵の意)志願者。奉仕者。自ら進んで社会事業などに無償で参加する人。」とある。本来、「志願する」という意味を核心に持っている言葉であり、「自分で考え、自己責任で行動する人」といえる。なお、NPOは「組織」の社会的な役割を意識した言葉であり、ボランティアは「個人」のスタンスを表した言葉であり、同義とはいえない。美術館のボランティアに関する文献としては、「私も美術館でボランティア」1999年12月、「がんばれ美術館ボランティア」2001年9月、がともに淡交社から発行されている。

けれど、美術館ファンは限られている。どこ
の美術館もJリーグのサポーターみたいに固
定のファンは少ないと思う。自分のひいきに
する美術館をつくってもらえるようにしてい
かないといけないから、美術館の活動に参加
してくれる人を大切にしていきたい。だから
不特定多数の人よりも特定多数の人が今は重
要だと思っている。僕よりも上の世代の学芸
員は、美術館は世界に開かれた施設だと言っ
て、あまりにも地元を目を向けてこなかった。
それが本当は「自分たちのもの」である美術
館を市民から遊離させていると思うんだよ
ね。だから地元志向はとても重要だと思う。
美術館はその地域の文化に対する責任感を
もっと持たないといけない。自分だけが世界
に開かれているだけじゃなくて、地元で根ざ
した活動を通して、どれだけの美術館ファン
を獲得できるかということが、これからの勝
負だと思う。

Q：新しい取り組みは？

大学、特に名古屋にはたくさんある美術大
学との協力関係を考えている。夏に開催した
「日本の木版画100年」展は大学版画学会と共
催した。この展覧会を開催したのも、大学と
の関係を深める必要があると考えていたか
ら。県芸、名芸、造形などの学生が展示や監
視のためのボランティアに来て、名古屋市美
術館を体験した。これによって名古屋市美術
館へのイメージが変わっただろうし、また大
学と協力して展覧会をつくったという実績から
他の美術大学との連携をもっと持って、学生
が気軽に来ることができるようシステムを
構築しなければいけないと考えている。いま
個人的に考えていることは、名古屋市美術
館には協力会というのがあって、年会費を払
うと常設展が無料、特別展の招待券が手に入
る特典がある。特別会員になると特別展の招
待券がさらに増える。だから例えば、大学の
予算で特別会員の何口かに入ってもらえば、
確実な数の招待券が送れる。そうすれば学生
たちも特別展に気軽に入れる状況が生まれ
てくる。特別展、常設展での体験が学生にと
ってもいいはずで、これから作品を創って
いく若い人たちに対しても美術館が刺激を
与えることができるだろうと思うから、具
体的に取り組もうと考えている。もちろん、
これから大

学と相談していかないといけないだけ
れど。また地域性という点で美術大学との
関係を深めていくことが、美術館として
この地域で生き残っていく非常に重要な
手法だとも思っている。今は、特定多数
のファン、サポーターを増やしていくた
めに、目立たないけれども地道にやっ
ていくしかない。できることから始め
ていくことが大切だと思う。

Q：最後に退職後になさりたい希望は？

仕事でメキシコに何度も行くようにな
って、今「遺跡病」にかかっている。遺跡
というと何でも見たくなくなるという病
気。遺跡は、日常から切り離された時空
を超えた存在としてあり、かつて人間が
生きていて文化活動を行っていた場所。
世界遺産をまわって、そんな時空の中
に自分を置いてみたい。仕事に関係す
ることでは、死ぬまでに著作と呼べる
本を出したい。ほとんど無理かもしれない
けど、河原温の「伝記」なんて書けたら
いいな。

<インタビューを終えて>

2000年末に発足した全国美術館会議美術
館基準（案）検討会（愛知・岐阜・三重）
での話し合いを通じて、山田さんの現場を
大切にしたい美術館に対する考えに触れた。
また、今春に開催されたシンポジウム「美
術館・博物館はなぜ必要か？」を文字化し
た『DOME』誌上でも、「特別展をやっ
ている場所」と一般に認識されている美術
館の本来の活動を忘れた課題提議を拝見し
ており、私自身、厳しい社会状況における
美術館の役割を再考しはじめていた時期
でもあったので、今回さらに詳しいお話
がうかがえる絶好の機会をいただいたと
感謝している。美術館には、作品や作家
の情報、資料などさまざまな知や文化を
蓄える場という役割がある。そうした美
術館の基本的理念である「コレクション」
を主軸に据えた山田さんの美術館運営
観をあらためて認識できた。そして、地
域を大切にしたい「目立たないけれど
地道に続けていく」、静かにまわりを開
拓していく姿勢には深く共感した。折し
も、プロ野球でオーナー側と選手会との
協議がなされていた時期、古田選手会
長の奮闘が紙面を賑わしていた頃にお
話をうかがい、山田選手会長？の今後
ますますの健闘を応援しつつ、自分も
美術館員として地域に貢献する道を諦
めずに模索していきたいと思う。



子どもたちに実験の楽しさを伝えたい

語る

名古屋市科学館 学芸課長 佐伯平二
(サイエンス一般)

聞く

七宝町 七宝焼アートヴィレッジ学芸員 小林弘昌
(民俗学)

ひさしぶりに科学館を訪れました。小学生時代にはよく訪れた館内は、新しくなった設備の中にも所々に古い記憶に残っているままの場所があり、とても懐かしい感じがした。

学芸課長の佐伯さんにお話をうかがってみました。

Q：同じ博物館協会という枠組みの中にあっても、科学館というのは美術館・博物館に比べて異なる部分が多い気がします。

科学館は博物館美術館とは性格が違います。本来、科学館は時代の移り変わりにしたがってどんどんリニューアルしていかなければいけないところなんです。ところが、科学館の設備というのは一つ一つがとてもお金がかかります。ものによっては家一軒分以上の費用がかかるからおいそれとは変えられないことが、私たちにとってはつらいところです。

また、以前と比べて特別展の役割も重要になってきていて、館にリピーターをよぶためには常設展に加えて魅力的な特別展を開催しなければなりません。それには、資料を集めてきてただ体系的に並べるだけでなく、体験の要素を取り入れたものでなければいけないと思います。

Q：昨夏の特別展は大変評判がよかったようです。以前の科学館はあまり特別展を大きく打ち出しているというイメージがなかったようです。

もともと特別展をやっていなかったわけじゃないんですが、以前は規模が小さかったんです。現在では、かけた費用を回収するという意識を持った展覧会をやることを心がけています。ですからどうしても入館者の数が評価の要素になります。

Q：科学館といえば体験教室をはじめとした企画ものの先鞭をつけています。

現在、館の企画はこれでもかというくらいやっていて、私自身十分把握できていないほどです。(笑) 予算カットなどもあります、

代わりにいろいろな財団や協会などとタイアップして予算を都合するので企画費用の面ではそれほど不自由はしていません。科学館の使命として、子どもたちを科学好き、理科好きにしたい、ひいてはそれが日本の科学の将来に必要なからという考えのもとに各団体に対して協力を仰いでいます。このような日本の科学の将来への使命感も含めて名古屋市科学館は日本でも三つの指に入る科学館だと思っています。

Q：今の仕事に就かれないきさつを教えてください。

学校では電子工学を学んでいたこともあって、実験が大好きです。その関係で科学館で勤めることになりました。今でも館の中の仕事だけでなく、雑誌などに実験のやり方を書いたり、地方の学校などの研修会に呼ばれて実験の解説をしたりとよく出かけていきます。忙しいですが、好きなことなので楽しみながら続けています。

Q：久しぶりに科学館を見学しましたが、生命館以外の部分には古いところもありました。リニューアルの予定はありますか？

昭和37年に天文、39年に理工館ができていたので実際、建物として耐震対策の必要性も含めて古いことは事実です。現在改築の基本構想を練っているところで、日頃から新しい物をつくるとしたらこういうものをつくりたい、変えていきたいという意識を持つようにしています。

あくまで個人的な考えですが、例えば、今までは科学をセクションごとに分けて表現していたものを、日常生活体験に即した内容から入っていけるようなテーマにしたいと考えています。そして、今以上にダイナミックで大掛かりな体験的な要素を取り入れていきたいと構想しています。

Q：これまでの愛博協と今後についてご意見を私自身が実行委員を長くやっているののでい

にくい部分もありますが、協会の活動としては、定例的なことをやっておしまいということが多くですね。もちろん組織としてはそういうものも必要だけど、例えばアンケートをとってまとめるだけでなく、協会として学校と連携する事業を積極的に展開するようなことを考えてもいいと思います。そしてそれぞれプロジェクトを組んで、その成果を研修会で発表するといった活動をするのもいいですね。

Q：退職したらやってみたいことはありますか

夢があります。今でも機会をみてすこしずつやっていますが、退職したら、いろいろな地域や学校をめぐる実験教育をしてみたいです。実験は面白いし、私の人生の原点ともいえるものです。学校教員の研修などとも言いますが、実験は、こうしてこうしたらうまくできたので終わりではだめで、むしろやってみたらうまくいかなかった。何でうまくいかないんだろうと考えさせることから始まります。これが面白いし、実験の意味があると思います。

Q：今までの仕事の中で失敗談をいただけますか。

失敗、ないんだよね。というか失敗を失敗と思わないで今まで来ました。よく考えてみても大きな失敗はないですね。たぶん自分では気がついていないだけかもしれないけれど。(笑)

様々な話題のお話をうかがっていても、とにかく前向きな姿勢が印象的でした。科学館やご自身の将来について熱っぽく語られる姿は、自分がこの世界に入った頃の博物館の先輩たちに共通していたことを思い出しました。退職後のご自分の道までもきっぱりとなんらよどみなくお話をされたところにも科学館人としての生き方が伝わってきました。実験を通して常に生徒たちとおなじ目線にたっている佐伯さんがいる今後の科学館がますます楽しみです。



対話のある博物館づくりを目指して

語る

名古屋市博物館 水谷 栄太郎
学芸課長 (考古学)

聞く

高浜市やきもの里 天野 卓哉
かわら美術館学芸員 (考古・工芸)

名古屋市博物館は昭和52年（1977）10月に開館し、県下屈指、いや全国有数の歴史系博物館として知られる。分館2館（蓬左文庫・秀吉清正記念館）を抱え、学芸員は考古、文書・典籍、美術工芸、民俗と各分野にわたり、専属の写真技師も擁するなど、その人員は20数名に昇る。

館の活動としては、年間数回の自主企画展と大規模な全国巡回の共催展を開催し、調査・研究活動については各分野でテーマを設けて行なわれ、併せて収蔵資料の充実も計り、収蔵点数は実に21万点以上に及ぶ。教育・普及活動も盛んであり、小・中学生対象の歴史教室や体験教室の開催、視聴覚教材の制作、友の会や展示解説ボランティアの運営など、その幅は広い。これらの活動の成果は、博物館日より、研究紀要、年報、インターネットホームページなどを通して公に紹介されている。

愛知県内を見回しても、名古屋市博物館ほど歴史系博物館としてベーシックにしてオーソドックスな活動を展開している館はないだろう。

この名古屋市博物館の運営を学芸課長の立場で取り組まれているのは水谷栄太郎さん。ロマンスグレーの風貌も格好良く、手にする3年ダイヤリーの手帳が印象的だった水谷さんだが、口調も穏やかに語られる「博物館・美術館の今（そして今後）」は「対話」というキーワードで貫かれていた。また、名古屋市博物館が抱える、いやどの博物館でも抱えているに違いない不安、そして愛知県博物館協会への思いも語っていただいた。

水谷栄太郎さんは昭和26年（1951）2月13日生まれの名古屋育ち。名古屋大学で考古学を専攻され、昭和52年（1977）に名古屋市博物館学芸員として採用された。

自分ほど異動が多い学芸員は他にいないでしょうね。博物館から教育委員会事務局に移って、また博物館。そして秀吉清正記念館にいて、また博物館。次に美術館にいて、

また博物館です。

学芸員として展覧会に関わった経験は実はあまりないですね。思い出深い展覧会は初めて担当した展覧会で、昭和55年（1980）3月に開催した特別展「東海の前代時代」です。まだ駆け出しの頃で、いろいろな人にお世話になって開催できました。だからこそ多くの人に見てもらいたい、このときに思いました。他には、秀吉清正記念館の2年間。ここは学芸員が1人ですから何でも自分でやらなくちゃいけない。大変でしたけど楽しかったですね。

最初の博物館での仕事は展覧会よりも資料収集の担当でした。このときのメインの仕事は「吉田富夫コレクション」の整理です。学生アルバイトと一緒にね。でも整理途中で本庁（教育委員会事務局）に異動。僕は中途半端な仕事が多いですよ（笑）。でも後任の人が展覧会にまで仕立ててくれましたから良かったですよ。

本庁勤務で埋蔵文化財行政に携わり、2度目の博物館勤務に入ったのが採用10年目の頃。その後9年間を広報普及の仕事を担当し、博物館は広く広報に努めるべきだと考えるようになったという。

名古屋市博物館も開館して10年が経過し、博物館はどういうところなのか、何をするといいのかなどといったことを広く知ってもらいたいと思うようになりました。小・中学校の先生と連携して歴史教室を開催し、友の会、ボランティア、博物館実習も担当しました。友の会の会員さんやボランティアの方は、博物館から見るとサポーターやモニターとしての役割があります。お話していると、日頃見落としていたことに気付かされることがあります。ボランティアの方はもっと積極的です。常設展示の解説ボランティアについては、僕が学芸係長のときに立ち上げました。学芸員とボランティアの方、またボランティアの方同士でお互いに話をし、勉強会を開き、お互いを理解し合うというプロセスがあり、解説ボランティアがいい雰囲気に向かいました。

対話してお互いを伝えていくことの大切さを実感しました。

博物館実習においても、学芸員になれるかどうかは別として、学生さんはせっかく博物館に興味をもって実習に臨んでいるのですから、博物館への理解者を増やそうと思って実習のカリキュラムを組むようになりました。

博物館の仕事は展覧会ばかりではなく、一般の方への情報発信、一般の方との対話を続けることは大事な仕事だ、と思うようになりました。

水谷さんは、名古屋市博物館の学芸係長を経て、名古屋市美術館学芸課長として転出され、平成15年（2003）4月から現職に就かれています。名古屋市博物館が抱える問題点や学芸課長として思っていることについてお話をうかがった。

名古屋市博物館も開館して25年以上が経ち、自分がこんなことをいうのも変ですが、古くからの学芸員は円熟期に入って、脂が乗っている感がします。自分たちがやりたい展覧会などを企画し、表現できる知識や技術が身についていると思います。しかし、現在は不景気の時代ですので、学芸員の思いに予算がついていけない現状があります。

名古屋市博物館では打合せを重ねて意思決定してきました。出発点は話し合うことだと考えています。お互いに対話することで、仕事の進捗状況もわかりますし、お互いに刺激を受けます。この打合せは大事なことだと思います。しかし、意志決定が遅くなるという欠点はありますね。また担当者が考えた企画などは、打合せの中で、どんどん修正され、変形していきます。こうなると意欲が失せてしまう可能性があります。担当者にまかせるか、古参の学芸員を加えたグループにまかせることも考えています。古参の学芸員が培ってきたノウハウを若い学芸員に引き継ぐこともできます。

今、不安に思っていることがあります。それは学芸員がモノ（資料）に向き合う時間、モノと対話する時間が取れなくなっていることです。現在、博物館は周囲から様々な要求を受け、学芸員はその対応に日々忙殺されています。名古屋市博物館の事業は、これまで

学芸員がモノと対話して得てきた知識、これまで学芸員みんなで貯めてきた貯金を下ろしては企画をしているわけです。今はこの貯金を増やすことができず、取り崩しているという状況だと思います。そのうち、企画もやっつけ仕事になってしまう恐れがあります。こうしたことは、市民の方はしっかりした仕事かどうかはすぐわかりますし、博物館から市民の方へ何も伝わっていかなくなりますね。

このような中で僕の学芸課長としての仕事は、いってみれば「翻訳業」、「いかに伝えていくか」です。学芸員の考えを外部へ翻訳して、わかりやすく伝える。逆に行政や社会からの要求を学芸員にわかりやすく伝える場合も当然あります。学芸員と市民の方々の橋渡しをする。学芸員が仕事をする環境を整えることが自分の仕事だと思っています。自分も学芸員ですからね。（笑）

博物館や美術館をめぐる現状について水谷さんはどのように考えてみえるのだろうか。

現在が厳しい状況にあることは間違いありません。名古屋市博物館の学芸員みんなは、博物館の存在意義、どのようにしたら我々の役割をわかってもらえるのか、公費を使うことの意味はどこにあるのか、といった問題意識と危機感もっています。ひとつ必要なことは個性をもつということ。この点では、美術館は可能性があるのではないのでしょうか。歴史系の博物館や歴史民俗資料館になりますと、〇〇市とか△△町と設置者は変わっても、同じような土器や古文書、民具があるだけです。しかし、地域と向き合い、地域の方々と対話を重ね、掘り起こしを進める中で、地域の特色や個性が描き出せるのではないのでしょうか。

例えば名古屋市博物館では、地域に根差した展覧会として開催した「名古屋の商人 伊藤次郎左衛門」（平成15年度）や「名古屋の漁師町 下之一色」（平成16年度）には1万人以上の方に来館いただきました。「下之一色」については地域の方々との連携・協力や名古屋市史編さん事業の反映があり、いいスタイルの展覧会になったと思っています。これからの博物館は地域との連携が必要になってくるでしょう。学芸員の立場だけでなく、市民の方の立場になってみると何かが見えて



くと思っています。

もうひとつは企画力をもつことでしょうか。今は経済的な状況のみで土俵が決められてしまい、何事も安全を見込んでばかりです。大規模にする必要はないですよ。きつい言い方になりますが、自分ひとりでもやっていくぞという気力をもち、力をつけていく必要があると思います。マスコミに頼るだけでなく、他館と連携したりしてオリジナリティを示していくことです。歌の文句ではありませんが「オンリー・ワン」でなければならないですよ。

水谷さんは名古屋市博物館の教育普及担当の時代に、愛知県博物館協会に深く関わってこられた。愛知県博物館協会についての思いもお聞きした。

僕は実行委員として愛知県博物館協会（以下、愛博協）に関わってきました。分野も規模も違う他館の方との対話は勉強になりましたし、ありがたいことだと思っています。「いこまい！！愛知のミュージアム」（平成13年度）に関わって思ったのですが、全体に声をかけて物事を進めていくことの難しさを感じます。その一方で、愛博協加盟館の若手の有志が集まって物事に取り組み、立派な成果を出しているなど感じています。

愛博協の役割のひとつとして、小規模館へのサポートがあったと挙げられますが、このことも協会だけでは支えきれないという感があります。小規模館には専門職員の配置の有無の問題があり、職員の意識にも差があります。専門職員のいない館にとっても愛博協が意義あるものになっていくにはどうしたらいいか、いまだ見出せないものがあります。

次に、市町村合併に伴う博物館・資料館の

統廃合へどのように対応していくかが今後の愛博協の課題だろうと思います。協会の存在の意義が問われることにもなるでしょう。どうしたらいいかは難しいですが、問題意識の共有化がまず必要でしょうね。具体的な事例を検討し、問題点を整理していくことからはじめなくてはならないでしょう。これに対し、愛博協が答えをすぐに用意することはできないでしょうけれども。

最後に、水谷さんにこれからやってみたいことをうかがってみた。はにかみながらも水谷さんは次のように答えていただいた。

「学芸員」としての仕事がしたいですよ。調査研究と展示がやりたいですね。他は自分で物事を考え、ポリシーをもち、地に足がついた仕事をし、生活していきたいという思いがあります。これまで条件反射的にしか仕事をしていなかったものですからね。（笑）

最後に水谷さんは「名古屋市博物館が地域の方々にとって必要な存在になってほしい」と語ってくれた。この願いは博物館にとって古くて新しいテーマに違いない。これからの博物館の生き残りは、この答えをいかに導き出すかにかかっている。水谷さんにも妙案はないだろう。しかし、人とモノに向き合い、対話を重ねることが答えに向かう第一歩だということを水谷さんは私に教えてくれた。

お忙しい中、1時間半にも渡るインタビューに対応していただいた名古屋市博物館学芸課長の水谷栄太郎さんにお礼を申し上げますと共に、筆者の力量不足から内容豊かなお話しを十分に表現できなかったことをお詫び申し上げます。

お客様とともに歩む



写真1 明治村「レンガ通り」風景



写真2 明治村 遠景



写真3 中野裕子氏



写真4 「帝国ホテル」の建物ガイドツアー



写真5 右端がボランティアガイド

昭和40年3月18日に開村した博物館明治村。江戸時代からの伝統建築に、欧米の建築様式や技術を取り入れた明治建築が入鹿池を望む広大な敷地に悠然とたたずんでいる(写真1、2)。来年40周年を迎える明治村で約20年間学芸部門をご担当され、より魅力的な館へと形作られてきた中野さん。館は企業母体で産業史も扱われ、当方も共感できることが多い為、日頃より相談慕っている良き先輩である。この取材では中野さんが考えておられている学芸員の使命について伺った(写真3)。

まず、学芸員という職業を選ばれた理由を伺う。

「もともと歴史は好きでしたが、その原点になったのが小学生の時の修学旅行。京都と奈良で大学生に案内され、その解説がとても心に残りました。通り過ぎながらの見学ではなく、しかもバスガイドさんや学校の先生でもない、大学生のお兄さんやお姉さんの優しい言葉が『歴史』との距離を縮めたのだと思います。」ご自身が大学生の時には愛知県美術館で企画展の展示監視員や、図書館でのアルバイトを経験され歴史や文学に携わる職業へと繋がられた。

卒業後は名古屋鉄道(株)に入社、博物館明治村に配属され、お客様受入れ業務を担当された後に学芸部門に移られる。学芸員はお1人だと伺っていますがお忙しいのでは？

「明治村の運営体制は『営業部門、学芸部門、施設管理部門』で学芸部門での学芸員は私1人。以前では展示企画や調査研究は東京や名古屋にある事務局が担っており、明治村側では維持管理や事務業務を行っていました。現在は明治村のみと縮小され、展示企画から維持管理、事務作業までを1人でこなす忙しい毎日を送っています。」

明治村は今年、本社から独立した別会社が運営することとなったが、人件費を含む館運営費全てを入館料で運営する体制に変わりはない。入場者数が減り、収入が減ったことによってお客様を大切に思う気持ちが強まったと言われる。普及活動を拝見しても「建物内部ガイド(特別公開)」「ボランティアガイド(拠点毎に配されている)」「予約制ガイドツアー(団体向け)」「プレミアムガイドツアー

(案内付きの電動車で巡る)」などのツアーの他にも「ガイドブック」「ワークブック(大人向けと子供向けの2種)」など、見学補足が充実している。さらに催しものが通年開催されているのも魅力の一つ。歴史に興味を持ってもらう「きっかけ」が多種用意されており、お客様が広い敷地の中で、もてあますことがないように展示に『引きこむ』趣向が凝らされている(写真4～9)。

平成8年、明治村の展示は大きく変わられたとのこと、具体的にお聞かせ下さい。

「以前の明治村では基本的には建物のみを公開し、内部を公開していなかったり、公開しても中には調度品がなかったので長年『室内装飾』をしたいと思っており提案しました。建物というものはそこに『人』が生活したり携わっています。建物をただ『箱』として見せるだけでなく、内部に息を吹き込み人の気配をさせることでお客様が、より当時の歴史的背景や生活観を楽しく理解されるのではないかと考えました。また建築物以外にも家具や調度品、錦絵などの刷物、産業機械なども収集しているので『明治村ではこんなものも保存している』とアピールもしたかったのです。」(写真10～15)

公開に先がけてどのような作業をされたのですか？

「室内装飾といってもすぐに取りかかれたのではなく、建物によっては破損箇所もありまずは修理。それと同時に所蔵資料の確認作業をしました。当時管理台帳はあったものの記録が不十分であったり、保管先も完全ではなかった。紙より頭の中で覚えるって風潮だったから(笑)。また、通常の館では収蔵庫などで一ヶ所に収めていますが、明治村ではそれぞれの建物の空き部屋などを利用し収蔵庫としているので、この資料はあそこの建物、あの資料はこっちの建物と村内を走り回りました。空調もないので埃でかぶれたこともありましたよ(笑)。」

調度品の時代考証も大変だったのではないですか？

「部屋の用途を調べ、それに相応しい展示



博物館明治村学芸員

中野裕子

(歴史学)



トヨタ博物館学芸員

宗沢清美

(歴史学・英米語学)

品を選定。開村当時は建物が移築される時に家具も一緒に運ばれてくることは稀で、所有者が変わると家具も変わってしまう。家具は戦災に遭った明治宮殿や赤坂離宮のものが多く、建物と家具のバランスが難しい。だから展示品の選定は慎重にしました。展示配置の段階では設計図の上に家具や調度品を配置して検討したり、カーテンなどは史料を基にデザインして製作しました。一連の作業は大変な反面、面白かったです。」

展示場では実際に明治時代の椅子に座ることが出来ますね。

「いかに展示品の価値や意味などが伝えられるのか、と悩みながら展示を工夫したので『明治時代の椅子だ』とあって喜ばれているお客様を見ると嬉しい。これらの作業は現在の『体験型明治村』への一歩に繋がったと思います。」より多くの方々目にしてもらう努力をされてきたことが窺える。さらに今後の使命として「建物に生活されていたり、関わったことがある方々から当時の様子などを聞き、後世に伝えていきたい」と意気込まれていらっしゃる。

次に学校教育についても伺う。小学生～大学生まで幅広く対応されているらしいですね。

「小中学校教師向けの見学下見会を行っています。その理由は校外学習で来館した先生たちは留守番をしていて見学の説明まではされないことが多い(笑)。なので『下見会』で見学のポイントや歴史を紹介すると、とても関心を持って下さり好評ですよ。」

学芸員実習も1回15名で5日間行う実習を年に2回行っていらっしゃるとのこと。合計で30名の実習をお1人で?

「学校側からの要請でもあり多い時には1度に30名を受け入れた時もあります。さすがに多かったのですが試行錯誤して現在の形になりました。」

「基本的には建築担当と一緒にいきますが、まずは館長や私による講義、文書の読み方などの実習をし、次に建築担当による移築の苦労話や実測図化を実習します。加えて実際にお客様に接してガイドをしてもらいますが、

これが非常に大きな効果を成しています。ガイドツアーでキーとなる建物や歴史などをガイドさんから教えてもらいながら勉強して覚え、次日お客様にお断りをしてガイド説明をします。これらのことは、『必死に調べて勉強することで調査研究の大変さ』『お客様に接することで伝えることの難しさ』などを経験してもらおうのですが、お客様も実習生ということで温かい目で見てくださいし、実習生にとってはお客さまやガイドさんと、逆からは若い学生と、など相互に『人とふれあう良い場』となり実習は意味ある内容になっていると思ってます。

ところで企業博物館は広報宣伝に制限があり、本社の広報部などの下、イベント重視のPRになってしまうことがある。お客様からの捉えられ方も『博物館』とも『テーマパーク』とも違う感覚であり、学芸員としては強い意識を持っていないと中途半端な状態になる。葛藤などありませんか?

「イベント重視になってしまうのは仕方ないかもしれませんが。営業部門では集客効果を考え、学芸では博物館としての役割を考えています。予算的にも『テーマパーク』は巨大な投資をもって運営しているので明治村を『〇〇ランド』などと同じ土俵で勝負させるのは難しい。それにテーマパークならお客様は与えられることだけを望むが、博物館ではお客様が主体となり展示に吸い込まれていくような感動を生むことが必要。スタッフや学芸員がお客様との距離を縮めるように、広大な敷地で行き先を戸惑っているお客様がいれば声かけをしたり(写真16~18)、歴史や展示物に興味を持ってもらうような展示方法や普及活動(写真19、20)をしています。最近ではホームページ上でも錦絵や調度品資料のデータをのせて『博物館』としてもアピールしています。」

歴史に興味が無い方もいらっしゃるのでは? 研究内容をそのまま展示できるとは限らない。

「若かった時は格調のある展示が良いことだと憧れたりもしたけど、結局、お客様に見てもらえなかったり理解してもらえなければ意味がないことがわかった。例えば、今、昭



写真6 ガイドブック、ワークシート、館内案内など、種々用意されている。



写真7 運転手がガイドをしながら村内を巡る



写真8 騎馬警官も登場



写真9 乗員の興味や年齢などに応じて楽しくガイドする車掌



写真10 「学習院長官舎」の内部



写真11 「京都中井酒造」の内部



写真12 同上。商人層の食事例が展示。



写真13 「夏日漱石住宅」。入室すると「我輩は猫である」の冒頭が音声で流れる。



写真14 「歩兵第六聯隊兵舎」の内部



写真15 「シアトル日系福音教会」の内部

憲皇太后の企画展を開催しているが、高くおさまっていると客層に合わない。親しめたり、なるほどなどと思うような展示の工夫や資料の選定が必要。」

公立館が地域に根ざしているように、企業館は社会全体に貢献する姿勢を見せなければならない。迎賓対応や企業PRとしての役割があったり、敷地が大きければ観光的な要素で見られるのではないかと？

「迎賓対応や広報PRももちろん要求されますし、団体客やイベント目当てに来館される方々など、客層は本当に様々です。館長を始め営業部門や館内スタッフなどと連携して対応していますが要は館を楽しんでいただくことが大切だと思ってます。また、名鉄が明治村を設立した精神を忘れずにいなければならないと思ってます。」

なるほど、企業としてはマーケットに合わせたモノづくり(提供・サービス)が重要であり、その考え方を博物館にシフトするならば、客層に合わせた展示や普及をすることでお客様から求められる館になっていくことなのであろう。

ともすれば学芸員の業務は「博物館」として直接的に評価されてしまう。さらに館内でも評価基準や方向性が違うことはある。

「ベクトルが合う合わないってあるけど、それぞれの方向性があるんじゃないかと思えますよ。人にはそれぞれの良さがあり、良いところ、良い考えを受け入れることが必要。入館者数や展示内容の質など、内部での評価、外部からの評価と捉えられ方は様々ですけど、基本はお客様に喜んで頂けることが大切なのではないかと行き着きます。ただ、他館の例ですけど『館のコンセプト』や『創業者の精神』を忘れることなく館員全てに浸透されている所を見た時は感銘しました。芯となる『精神性のベクトル』は合っていないといけな思考えます。」

中野さんのお人柄からか『人』を大切にしている心遣いが窺えるが、話の随所に飯田館長のお人柄の良さも口にされた。館長はガイドツアー終了時間を見計っては現れて追加の説明をされたり、学芸員実習や建築、デザイ

ン関係の学生さん達を受け入れる時には「学問の研究は後進を育てることも大切」との思いで、熱心に説明されていらっしゃる。その姿勢から「博物館とは」「学芸員とは」という根底の意識を忘れずにいられるとのこと。中野さんの良き理解者でもあられ、他館への借用交渉や館内で問題があっても的確なアドバイスのよって切り抜けてこられたそう(写真21)。

愛博協について伺う。明治村は愛博協理事館であり、中野さんは実行委員としても長く関わっておられる。以前の活動を含めて今後期待することは？

「学芸員が1人しかいないので勉強不足の不安などはありますよ。なので学会や研修会、勉強会などには積極的に参加したり、人脈を増やす努力は怠らないようにしています。愛博協の研修会にもよく参加しました。」

「愛博協は40年間熱い思いを抱いた先輩学芸員たちが築いてきた会であり、色々教えられました。その時代時代で人の熱意に温度差はありますが、小さい力を大きな力にしていく良い場だと思います。ただ最近の研修会はテーマに少し堅苦しさを感じます。以前参加したことがある美術部門研修会では専門の異なる4~5名の講師によってバラエティに富んだ内容でした。皆で食事する機会も多くあり、気軽に交流できる雰囲気も良かったです。理論的な研修会は学会や日博協などに譲り、愛博協は横の繋がりを作ったり、若い学芸員が気軽に参加できる場として活発になっていくことを願います。」

最後に中野さんご夫婦揃って学芸員でもあり家庭内での様子も伺った。ご主人は良きお父さんでお嬢様とよく美術館や博物館に行かれているとのこと。お坊ちゃんも旅行中にイサムノグチの彫刻に会われ心良く触れる機会があり興味を持たれたという。

「明治村に？プライベートではもちろん小さい頃から連れてきていますが、先日、子供の小学校で校外学習があったけど私達の地域では『国際理解』がテーマなので明治村ではなく、隣のリトルワールドに行ったの(笑)。」

「子供を通して教えられることは多く、美

術館・博物館でも子供は興味を持つことがあっても、偶然居合わせた他の来館者から不愉快なことを受けたりすると拒否反応を起こしてしまう。だから、子供などは特にリラックスして見る環境が大切であり、厳しい監視ではなく優しく見守って、さらには物に触れたりできれば興味を持つと思う。」

「また、昨今バリアフリーなどといいますが、ベビーカーや車椅子の斜路がきつい所やトイレのおむつ替え台などは経験してみても不便さを感じました。そういう目線で明治村のお客様対応でも生かしていきたいですね。」(写真22、23)

<インタビューを終えて>

インタビューを終え、当然のことながら『お客様あつての博物館』であることを強く感じた。館を訪れるお客様の興味の度合いは様々だが、資料との掛け橋になるのが学芸員の役割。一方的にはならずお客様の目線で捉えていくことが大切であり、その中で学芸員の持ち味を表現していくことが大切だと改めて感じた。明治村は経営母体から独立され、事務側では今後の運営や方向性などが少なからずも変化していくだろうとおっしゃっていたが、ご自身が例に出されたように館全体が『揺るぎない信念を持つこと』、『後世に繋げていくことが使命であること』は、どの館にもあてはまることなのではないだろうか。



写真19 「小泉八雲避暑の家」。1階には「駄菓子屋 八雲」がある。



写真20 「呉服座」。2004年には芸人による公演が開催。



写真21 飯田館長による説明案内



写真22 車椅子やベビーカー用のスロープ



写真16 「京都七條巡査派出所」。警官に扮したガイドが村内地理を説明



写真17 展示建物を番地付けし、「丁目」で位置区分を示している。



写真18 方向案内。建物群に合わせた風見鶏風装飾にも工夫が見られる。



写真23 同上

これからの美術館・博物館のあり方

愛知県博物館協会が発足して今年で40年。今回40年史の作成にあたり、岡崎市でおかざき世界子ども美術博物館、岡崎市郷土館、岡崎市美術博物館をめぐり、長年にわたって非常に幅広い活躍をされている岡崎市美術博物館の荒井さんにこれまでの活動やこれからの博物館・美術館のあり方についてお話を伺った。

—荒井さんは学芸員として美術から考古、展示から文化財保護まで、幅広い仕事をこなしていますが、これまでで特にがんばってきたことを教えてください。

まずは子ども美術博物館時代(おかざき世界子ども美術博物館のこと)。美術なんて何やっていいか全然わかりませんでした。でも自分の子どもに何をしたいかを考えれば子どもに対する視点は持てるから、展示する作品と子どもの間にどうやって立とうかを考えました。それでまず最初にやったのは、美術館の絵の高さを10cmずつ下げること。その上で子どもはどのようなものに興味を持つのか、どんな動きをするのか観察しました。美術史に関しては専門の嘱託の先生がいたから、絵の評価や解説はその人に任せて。僕はその人の話をベースに、自分なりにどう作品を解釈し直すか、子供たちにどんなふうにアピールするか、ってことを考えるようにしたんです。

—美術館の活動で得た子供の興味を引き出すコツは？

子どもの動きを見ていて、子供って導線ないんだな、というのが分かった。順路に沿って見ていくのがいいのか、それとも自分の好きな作品をまず見つけてもらうのいいのか、どっちが子どものための美術館として大事なのか。興味が無いのにただ順番に見ていくのでは子どもも面白くない。それでも順番に見せたいならそれなりの方法があるんじゃないかと。それでどうしたかという、これはぜひ子どもに見せたい、っていう絵のそばに監視員を置いて、子どもが来たら声をかけてくれるように頼んでね。それでこの絵どう思う？ っていうふうに応答してもらおう。そうやって子供の興味を引き出すのが大切。

こうするのが子どもにとっていいだろう、って大人が決めてしまうのはダメ。

流木で虫を作る人の作品を展示する機会があって、その虫を壁面いっぱいに表示したことがありました。これは子ども喜ぶぞって期待したんだけど、みんなフーン、で終わってしまう。それでどうしたかという、名付け親カードっていうのを作って、この中の虫に名前を付けようってやってみたんす。天井近くの結構高いのもあったから、僕はいつも竹竿持って立ってました。名前を付けよう、ということになると、自分でどれが気に入ったかって探すわけですよ、それで気に入った虫に対して名前を付ける。ぼくはあれがいい、って。「何ていう名前？」「へんてこ虫」とか。その名前と自分の名前を紙に書かせて、虫の横に貼っておくんです。そうすると子どもはまず自分の気に入ったものを探そうとする、次にその印象を自分で表現するようになるわけです。そうしていると、今度は子どもが親を連れてきて報告するんです。あれ僕が名前付けたんだよ、って。あの時は一日中竹竿持って館内まわってました。学芸員が。この経験は何年か後には子どもの造詣展のヒントになったから、そういう意味ではとても子どもについて勉強になったいい経験でもあったわけです。

—それではこれまでの仕事での1番の苦労話を教えてください。

最初の展示の時(開館特別企画展「天使と天女」平成8年)。民間会社に企画やマネジメントを委託したんだけど、もう謝罪めぐりだった。民間のプロデューサーに任せて、民間会社の名前ですべて作って資料貸してくれてお願いしたから、資料の所蔵者から主催はどこなんだっていう話になって、そんな書類で資料を貸せると思うのだからってさんざん怒られました。それでもう全国謝り行脚。今だにおまえの所の最初の展示会の時は、って怒られることもあります。その他は特に大きなミスもないし、まあまあ順調。

—現在の美術博物館に移動してから仕事はみんなに助けられ順調だと語る荒井さん。今の仕事上の悩みはないですか？

語る

岡崎市美術博物館学芸係長 荒井信貴
(考古学)

聞く

安城市歴史博物館学芸員 平岩里張
(歴史・民俗学)



荒井さん 岡崎市美術博物館にて
「写真を撮ると魂が抜かれる」と言ってなかなか写真を撮らせてくれませんでした。

お客の入りがちよっと寂しい。岡崎市民が35万に対して来館者が年間6～7万人だから、市民の20%しか入っていない。特にうちは市外から来る人が多いから。市民に認知されていないっていうことはまだまだ弱い。うちは名古屋市美術館と違って、金曜日と日曜日はお客さんがいなくなるのが一番早い。ここは来るにも不便な所だから。金曜日じゃなくて「コン曜日」なんて言ってるくらい(笑)。

—それでは市民の来館者を増やすために今岡崎市美術博物館で特にやっていることがありますか？

チラシを小中学校に配っている。1人1枚ずつ。どこまで効果があるかは難しいけど。基本的には子供、それに子供を持つ親に認知してもらうためにやっています。子供にはチラシを日常的にもらうことで美術博物館でこういう活動をしているっていう認知を与えたい。ここは絶対に子供だけでは来られない所だけど、いずれ成長してから一回行ってみようかな、っていうことがあってもいいと思っています。これは効果がなくても続けていきたいと思うんです。活動をアピールするっていう面では必要だと思うから。

—小中学生全員にチラシを配っていると大変な数が必要ですが、チラシを配るだけではあまりアピールできないのでは？

チラシを子供たちに配るにしても、間に入る人達の問題がある。ただ配ると、(子供に向かって)今度いい展覧会やるから見に行けよ、面白いぞ、と言ってくれる先生がいるのとは大きな違いがある。だから今一番やらなきゃいけないこととしては、その間(に入る人)を何とかしなくちゃとは思っています。

以前現代日本画の展示をやった時(「現代の日本画 その冒険者たち」平成15年)、チラシに会田誠の絵を使った。裸の女の子の絵なんだけど、教育委員会からクレームがついて、回収しようか、って話になったんだけど、学校ではその時点ですでに子供に配られてた。だから何も考えず、何の興味も持たずに子供に渡してるんだっていうのがはっきり分かった。回収するっていても先生方がもう配っちゃってるんだから、どうしようもない。

だからその先生たちにまずアピールするのが大事だと思う。今のところはやっと始めたばかりですけど。

—学校への対応については難しいところだと思います。1対1ならやりやすいけれど、100人一度に来てもらうとひと通りの話しかできません。

子供が80人いても興味を持って見てくれる子供はわずか。その興味を持って学芸員に声をかけてくれる子をどうやって伸ばすかが大事。それに子供たちがどれだけ人数いても、常に1対1の関係を保つようにすること、そうするとそこから信頼関係が出てくる。



流木で作られた虫たち
おがき世界子ども美術博物館にて
荒井さんが竹竿を持って走り回りました。

—全員に話をしながら、子供たちのそれぞれの反応をできるだけ見逃さないようにするわけですね？

それともう1つ大きいのは、(博物館は)学校じゃない場になる、っていうこと。ここでは学校の教室とは違った序列ができる。だから教室での人間関係を白紙に戻した状態でいられる。その状態で引き出せるものを引き出していき、っていうのが大事だと思います。教室では音楽が得意な子、国語が得意な子ってあるけど、博物館なら学校教育とは違う領域で、誰でも興味を示せば相手してもらえる形ができる。そういうのが大事だと思います。学校という社会とは違う社会があり得るといえることがあってもいいんじゃないかと。

アメリカではエデュケーターとして博物館教育のプロがいるけど、日本ではやっと最近みんながやり始めてきた。こういうことは本当に真剣に考えなきゃいけないことだと思うんです。あとはこれを博物館側がやるか、学校の先生と協力して、先生方にもできるようにしてあげるのかを考えていく必要があると思います。

—最近の学校は博物館への問題丸投げが目立ちます。学校で指導を受けないせいか、もらった課題をそのまま持ってくる子供が

多い。学芸員として、どのように対応するべきだと思いますか？

岡崎市美術博物館の場合、学校の課題で一番多いのが徳川家康について知りたい、というもの。そういう場合、僕だと、家康について何を知っているか聞いて、図書館で本を調べるように言う。まず自分で調べてから次に何が必要か考えてもらう。

最近気になるのがキャプションのルビの話。博物館全般に言えることだけど、「誰にでも分かる展示」っていうのを目指してるところがたくさんある。その一例が漢字にルビをふること。何でこんな漢字にっていうものまでルビがふってある。でもそうやって漢字に読み仮名書くよりは、隣に漢和辞典でも置いておいたほうが教育になるんじゃないか、って思うことも多いんです。結局、今の人

たちにすごくあわせてるって気がします。現代ではテレビなんかで一方的に情報が与えられる。こちらの主体性がなくても情報が得られる。でも博物館の資料も、美術館の絵も見ようとしなければ見えないんですよ。ただ情報としてあるだけ。例えば「大古墳展」で、鏡が

並んでいたら、なぜこんな鏡があるんだろうって思い始めるところから知識がはいってくるわけでしょう。そういう主体的な関わりというものが欠如してきている。漢字の読み方が分からなければ自分で調べればいい。なぜそれでクレームをつけられなきゃいけないのか、最近疑問に思い始めています。博物館というところは楽しみながら学べる、という話になるけど、楽しいっていうことと楽っていうこととは別だと思ってるんですが。

——ルビがふってあってそれを読んだとしても情報は得られるけど学んだことにはならないということですよね？

そう。それは主体的に学ぼうと思わなければ学べない。主体的に学ぼうという人間なら、読めない漢字があった時どうしようって考えるはずだと思います。そんな時は聞けばいい

と思うんですが。うちの監視員は展示について聞かれたら答えられるように勉強してもらっていますから。彼女たちは学芸員以上にお客さんに近いところで接しているわけだから、第1段階をやってもらう。彼女たちに答えられないことは学芸員が出ることにしています。聞くことで初めて主体性がうまれる。最初から全部答えがあったら自分の中に残りにくい。だから博物館がテレビみたいに情報を垂れ流しにしているのは生涯学習とか教育っていう観点から考えると、それでいいのかな、って気にしています。博物館に求められる教育的配慮っていうのは何なのかって。今お客さんがすごく贅沢になってる。博物館がどういうところで、自分たちはどういうスタンスで見にきたらいいんだらうかって考えさせることが抜けちゃってる気がします。確かに気楽に行くこともあるだろうけど、それで何か疑問を持って、それを持って帰って自分で解決して、もう一度博物館に来てもらう、そうやって何回もやり取りができるのも大事なことなんじゃないかなと思います。

——確かに、当館でも展覧会ごとに必ず1度は「読めない」という苦情を受けます。私は、キャプションのルビは、固有名詞についてはふったほうがいいと思うんです。読めない、それで終わってしまうことも多いと思います。読める、ということが今荒井さんがおっしゃった主体性を持って資料を見るとっかかりになると思うので。岡崎市美術博物館では読みにくいか見にくいとアンケートに書かれたらどう対処しますか？

アンケートに「読めない」って書かれた時に、じゃあ我々は読みやすくすればすむという話なのか。相手に対して漢字の勉強をしましょう、というのも論法としてはある訳です。だから博物館側もお客さんに何かを求めてもいいのではと思っています。そういうのも教育的配慮じゃないかって。だから簡単な字にはルビはふらない、かわりに難解な字にはしっかりルビをふる、というやり方もあるんじゃないか。結局は館としてどういう姿勢でいくかだと思います。こうは言うものの、実際は世間に合わせて一生懸命ルビをふっていませんが。



「平賀源内展」のチラシ
この時は子ども用を作りました。
効果のほどは？



「大古墳展」会場内
岡崎市美術博物館にて

—今後の仕事上の希望があれば教えてください。

入館者がもっと増えてくれるといいと思っています。でも客が入るか入らないかはあくまで結果論。色んなものをきちんとやってみて、その結果として現れるかどうかというレベルでしかない。学芸員サイドが人を入れるために、流行りを追いかけて展示をしたら絶対にダメだと思います。お客さんに親しまれやすい物やそのニーズに応える展示をすることは大事なことで、その結果として入館者が増えることもいいと思う。学芸員は自己満足で展示をやっているわけじゃない。いいものを多くの人に見せたいと思ってわざわざ借りてくるわけだから、少しでも多くの人に見てもらいたいって思うのは当たり前。その努力が欠けてしまったら、それこそ学芸員の自己満足になってしまう。だからいつも入館者を増やしたいと思っています。少なくとも税金納めてる人には、いいものを見て、元をとって欲しいと思います。

—それではちょっと目先を変えて個人的なことをちょっとお聞きします。聞きたい人が多いと思うので。荒井さんが学芸員という仕事を選んだ理由は何だったんでしょう？

実際に資料を見ることができること。学芸員になる前、旧石器の研究をやっていたんですけど、この地方には資料が少なく、なかなか実物資料を見る機会に恵まれなかったんです。それでもきちんと腰をおちつけて実物資料にとりくんでみたいと思ったから今の仕事を選んだんです。でも結局は、発掘調査の現場現場の生活が長く続き、美術博物館ができると美術展もやれと。

—愛博協の思い出があれば教えてください。

愛博協30年史作っていた頃のこと。岡崎市郷土館担当で実行委員をやっていて、あの頃は月1度発掘現場を休んで名古屋に行ける、骨休めの日だった。でも愛博協としては大変な時で、事務局と大喧嘩して、愛博協の実行委員会がお流れになったこともあった。経費の書類が出せないって言われて、そんな経費の書類も出せないところでやってられるか、って。あの時は過激だったな。

—荒井さんの「座右の銘」があれば教えてください。

例えば、図録を書くのに2～3冊の本を読んでまとめることなら学芸員でなくてもできる。学芸員なら、その中にいかに自分の論理を持ち込めるかが大切。学芸員は学芸員らしい文章を書けないと。その努力せずして学芸員はありえない。だから「学芸員はやってなんぼや」

—それでは最後に、大先輩から愛博協の後輩たちへ、アドバイスをお願いします。

①分からない時は正直に聞く。常に謙虚に。できないものを肩肘はっても仕方がないし、勉強だと思えばどんなことだって聞ける。頭を下げるところは下げる。自分が何がわからないかを自覚して、たくさん情報の釣り糸を垂らしておけば、必ず1つや2つはくいついて教えてくれる人がいる。

②学芸員は好きなことから始まる。ただし、周囲、特に事務方は好きで仕事をしているわけではないということを十分気にとめておくことが必要。いかに周囲を味方していくか、それが大切。学芸員の論理は事務方には通用しないことが多い。特に展覧会はいかに理不尽でも資料を貸す側の論理がすべてだから、それを事務方にきちんと説明してわかってもらう努力が必要だと思う。

<インタビューを終えて>

今回のインタビューにあたっては、それほど長い時間とは思わなかったが、軽快な語り口ながら終始荒井さんの知識と経験の豊富さ、信念からくる語り口に圧倒されてしまった。それらのことがこの紙面上に少しも反映されていないとしたら、それはすべて書き手すなわち聞き手の力量不足によるものである。今回お話を聞きながら強く感じたのは、荒井さんは常に岡崎市美術博物館はどうあるべきか、その学芸員として何をすべきか考えて行動しているのだな、ということである。今博物館は長引く景気の低迷や観覧者の価値感の多様化の中で改めてどうあるべきか見直すことを迫られている。人の問いに容易く揺らぐことのないように、機会があれば考え、実行していきたいと思う。

博物館人の来し方、行く末



立松さん

昔はよかった、という人は多い。
では、今と昔でいったい何が変わったというのだろうか。最近の博物館を取り巻く情勢は厳しいと言われるが、では昔は厳しくなかったのか？学芸員としてまだ5年目の私に、昔の話はどのように聞こえるのだろうか。

1974(S49)年開館の東海市立平洲記念館とともに歩んでこられた立松館長、1966(S41)年からモンキーセンターにおられる水野学芸員とともに、40年にわたる愛博協の活動の多くに前半を支え、協会を育てられた方である。まずは、お二人から、愛博協の創生期を牽引された日本モンキーセンターの廣瀬鎮先生の思い出を手がかりに、往事の雰囲気をつかってみた。その中からふたつを紹介したい。

「ちんさんは、とても筆まめでしたよ。」「そう。会った後に下さる挨拶状が、本人の帰宅よりも先に家に届いているくらいだった！」E-Mailという快適なツールがある現在でも、そんなことができる人はまずいない。その無数のハガキが、いかに多くの人を振り向かせ、つなぎ止めたかが想像された。もちろんモンキーセンターに届く子どもからの手紙にも、よく返事がかかれていたそうだ。

現在では、そのような手紙やハガキがモンキーセンターと利用者の間でやりとりされることはほとんどないそうだ。インターネットの利用とはやはり違うと、水野さんは言われた。それを言い換えるように、「足でかせいで身につける経験が、大切だと思います。」とつづけられた。廣瀬先生の手紙の話は、お互いに顔の見える関係の存在を象徴しているのだと思う。足でかせげ、という言葉は、そのような人とのつながりを培うようにと、私に向けられた言葉であったと受け止めている。

「廣瀬先生の立ち上げた会は数知れないね。」「きっかけをつくるのが上手い方でした。」初期の愛博協の活動、例えば最初は数人の集まりであった研修会などの、生き活きと機能していた様子がかがわれた。最初のころの研修会では、キャプションの書き方などの極めて実践的な話題が中心だったそうだ。見習うべき隣の館も、パソコンもプリンターも、手

軽に使える出力業者もなかった時代に、直接書き方を議論できる場がどんなに有意義であったことかと、想像される。

勤務時間外を使った学芸員有志の懇談会についてもうかがった。遠く三河の参加者を変えることもあり、38回まで続けられたという。今は途絶えがちな県下の学芸員間のつながりが、懇談会という形で実現していたことを、うらやましく感じた。

懇談会については、愛博協30年史でもその規約や経緯が述べられているが、加盟館職員が日常的に、気楽に雑談できる場が欲しいという動機で会が始まったという。今の学芸員にも同じ欲求を抱えている人は少なからずいるはずだ。

思い出に語られる会はいずれも手弁当の有志の集まりであった。なぜ、同じことが今はできないのか？愛博協を取り巻く状況の変化に伴って、今はまだみえないが、なにか違う仕組みが必要なのだろう。私が知っている40年目の愛博協は定まった形をもった組織として自立しており、特定の個人の力が会を動かす時期は過ぎている。廣瀬先生のような、人と場をぐいぐいコーディネートしてくださる中心人物は、待ちこがれても、現れてはくれないように思う。

昔と変わったのはどんなところだろうか。

立松さんは、「ほんの少し前まで、今とは比べものにならないほど、博物館と学芸員は社会に認められていなかった。」と言われた。そんな中で、愛博協もとい博物館の活動がすすめられていたころは、道のないところを自分たちで進んでいく困難や責任、そして楽しみを、関わっていた学芸員一人一人が、存分に感じておられたことと思う。

それに対して今は、「もうすっかり“できあがっている”現状がある。」現在愛知県下にはたくさんの博物館があって、最初から学芸員として人が雇われており、その社会的地位は昔よりも格段に安定している。

若手の学芸員には、今でも地位が十分認められていないと感じている人が多いと思う。しかし改めて、「準備された椅子にすわって雇われている感覚では、発想が雇用主の町の範囲からでていく機会すら少ないでしょう。」



東海市立平洲記念館館長 **立松 彰**
(考古学)

日本モンキーセンター学芸員 **水野 礼子**
(動物園教育)



豊橋市自然史博物館学芸員 **藤原直子**
(植物学)

と指摘されれば、たしかにその通りである。一サラリーマンである公立館の学芸員は、無自覚なまま、狭い視野から脱する機会がないままにいるということかもしれない。そして、もくもくと自分の勤め先でサラリーマンをしていても、何も問題は起こらない。各自の専門分野では、必要に応じて、学会・調査研究あるいは展示企画を通じた、他館とのやりとりもある。

しかし、同じ愛知県の博物館のあいだで情報をやりとりする機会は、愛博協という組織がなければ極端に減るのではないだろうか。立松さんは、「こんなにたくさん人がいる(130も加盟館がある)んだから、いろいろできるんじゃないかと思う。」と言われた。具体的には全体的な情報の交換・行事案内や実務レベルの情報交換などの機能を挙げられた。これからの博物館経営のためには、館の専門分野を越えた協力の可能性や、新しいアイデアのやりとりは重要ではないだろうか。各館の予算や学芸員個人のゆとりがない今こそ、愛博協という組織が情報交換の機能を維持してくれることに意味があるのではないだろうか。

昔と変わった点として、この「資金と学芸員の時間に余裕がない」という話題からは割られない。

水野さんからは、「モンキー友の会」について夢のような話をうかがった。「子どもの頃常連だった人が、幹事になってくださった。」「観察会には、バスを連ねて出かけたものだった。」…モンキーセンターの設立の翌年1957(S32)年に発足した「モンキー友の会」は、最盛期には1,000人をこえる会員を擁した。「友の会の方から学んだことはほんとうに多い。」というお言葉は、会員の方との豊かなつながりがあったことを思わせる。しかし、センターの人員減少の果てに、創刊以来45年続いた友の会の雑誌「モンキー」は、2002年の298号をもって休刊となっている。後発だが同じ自然史系の館の学芸員として、現実の困難さを改めて思い知った。

我々を取り巻く現状が変化している反面、学芸員が心におくべきこととして語られたも

のは、不変のものと感じられた。

立松さんも水野さんも、別々の会話のなかで同じ「要はヒトだと思ふ。」という言葉が使われた。博物館を活かすも殺すも学芸員個人の意識や能力次第であるということか、あるいは学芸員間や学芸員と利用者との人のつながりが博物館の活動を支えるということか。おそらくいろいろな思いが、「要はヒト」という言葉に込められていたと思う。立松さんは、社会教育課への異動によって、17年間にわたる長期間、平洲記念館を離れておられる。しかし、「博物館の基本」を私に語られたときに、そのブランクは全く感じさせなかった。「実物を集め、調べて、展示普及する。モノがあってそれをいかに目の前の来館者に伝えるか」というところが、原点です。」自己紹介の次に私に言われたのは、このことだった。

水野さんは、ビジターセンターをお一人で預かっておられるという身動きの難しい条件でお勤めだが、そんな中、のこす在职期間で一番気になるのは「資料の整理」だと言われた。サルに関する貴重な生物資料を案じておられた。モノを預かるという学芸員の仕事は、展示や普及とちがってアウトソーシングが不可能な、最後まで博物館が守らねばならない仕事ではないだろうか。

私は今回お話をうかがうのに先立って、廣瀬鎮著「博物館は生きている」を手にとった。私が生まれる以前の1972(S47)年に出版された本だが、そこで語られている博物館像、博物館への思いは、今、私が読んでもまったく違和感を感じないものだ。

そこで働くプロという形で博物館と出会ってしまった私たちは、先の長い、昔と同じ道を、今も歩いているのだと思う。



水野さん

ハングリーであれ 人が博物館をつくる

豊橋市自然史博物館は昭和63年に開館、平成4年に全国でも珍しい自然史博物館、動物園、植物園、遊園地の複合施設として新たに整備された豊橋市動植物公園(のんほいパーク)の中にある。館の開館時から今日に至る17年間、館とともに歩んでこられた松岡敬二学芸員にこれまでの活動の軌跡と今後の展望について伺った。

Q：豊橋市自然史博物館では、展示以外にも計画学習や学習教室、自然史講座(出前授業)など多彩な活動をされていますが、館の活動で心がけていることを教えてください。

A：館の活動は、博物館法に基づく登録博物館ですので、博物館の基本的活動である調査研究、教育普及、資料の収集、調査が条例にもうたわれています。その中で、教育普及を行なうとともに、調査研究の成果である研究報告や資料集も出しています。当館は子ども連れが多く、また市の施設である以上多くの人に利用して頂く必要があるため、教育普及のウエイトが大きくなっています。講座などの普及行事が多いため、博物館活動の中では教育普及活動が目立っていますが、それを支えるにはやはり資料収集や調査研究が必要です。

Q：学芸員が研究活動を行いやすいように館として対策をとっていますか。

A：年の初めに年間計画と今年度のテーマを各学芸員に提出してもらい、できるだけ研究や学会発表に結びつけるようにしています。また市

の事務事業評価には調査研究事業も含まれていて、研究論文、普及書、新聞記事などすべて発表1回につき1点として、これを積み上げてその点数を目標に設定しています。研究活動が事務事業にリンクすれば励みになるは

ずです。今は各種の研究業績がすべて1点ですが、内容に合わせて点数を変えていくのが今後の課題です。学芸員も調査研究にも力を注ぎ、知的蓄積をして欲しいと思います。

Q：こうした学芸員の日頃の資料の収集や研究活動の成果が、様々な活動につながっていくのですね。活動の1つ、教育普及活動について教えてください。

A：豊橋では市内の小学4年生を対象に「計画学習」を行い、この他総合学習や遠征に合わせて来館する学校もあるし、出前授業も実施しています。「計画学習」は市教育委員会として「わくわく科学教室の手引き」という学習計画のフォーマットが出来ています。「出前授業」は週5日制の対策として数年前から積極的に取り組むようになりました。各学芸員が2・3のテーマを設けていますが、事前に先生と打ち合わせをして、目的に合わせて内容を調整しています。小学校と中学校では学習内容が違い、小学校だと低学年と高学年でも違うので、対象に合わせた授業する必要があります。それに1回の授業で子どもたちの心までは把握できません。子どもたちの反応に合わせて授業をするのは難しいですね。でも続けることで学芸員も工夫を重ねて成長するし、学校と博物館の関係も成長してくると思います。

Q：他に学校との連携を強めるための対策をとられていますか。

A：市内小中学校の理科と美術の先生による研究委員会があり、年に3回、学校との連携や博物館の展示について協議して頂いています。当初は館の提案に意見を頂く位でしたが、数年前に活動内容について要綱を整理して、学校との連携や利用者増を含めて協議して頂くことを主な目的として、先生方にも任期の2年以内に一定の成果をあげる認識をもって活動をして頂いています。現在2件のワークシートと化石、植物、骨格の貸し出しセットが完成し、学校の利用促進に繋がる方法を検討中です。また館の情報は一方的に学校に情報を流しただけでは、あまり反応がありませんが、委員の先生からは直接館に問合せがあったり、委員の中に理科部会の担当者が入って



ユニバーサルデザインを採用し、リニューアルした古生代展示室。上段は学術的解説のある大人向け展示、下段は触れる標本などハンズオンの展示やイラストを用いた分かりやすい子供向け解説を採用、親子で楽しめる展示を目指した。



豊橋市自然史博物館主幹学芸員

松岡 敬二
(古生物学)



岡崎市美術博物館学芸員

浦野加穂子
(歴史)



いと、部会で宣伝してもらえます。学校との連携を考えるなら、現場のリーダーを引き込むと良いですね。

Q：教育普及活動の一環でしょうか、松岡さんは「進化のカルタ」を作られていますね。

A：カルタは、夫婦の趣味が高じたものです。コレクションは結構な量になっていて、2004年のお正月には松岡コレクションで「新春のカルタ展—犬棒からポケモンまで—」を豊橋市二川宿本陣資料館で開催しました(笑)。

「進化のカルタ」は、高校の生物や地学の授業で使ったり、館で原画展を開催したり、この分野の教育普及に少しは貢献したと思っています。カルタの中でも「コナンドイルが夢見た失われた世界」はこんなものまで入れてと言う人もいますが、馴染みが無いものを普及していくという面があって、私はこういうのが気に入っています。皆が好きそうな題材を選んで、各時代をできるだけ均等に入れることも心掛けて作るのはなかなか難しい。最初に作ったものなので、今回はもっと良いものを作りたいですね。

Q：予定はありますか。

A：豊橋市政100周年のカルタを作ろうかと。自然史だけではなく、様々な分野の人が集まって、新たな人の輪をつくりながら、豊橋の新しいカルタを作りたいと思っています。

Q：館の活動の大きな事業としては、2004年4月29日に古生代展示室がリニューアルOPENしました。今回のリニューアルの特色を教えてください。

A：まず事前にアンケート調査を行いました。来館者の特性を把握せずにリニューアルしても人は来てくれませんから。その結果、リピーターが来館者の7割を越えること、階層は子供や親子連れが多いが、意外に60歳以上の高齢者も多いことがわかりました。これをうけて、まず幅広い年齢層に対応したユニバーサルデザインを取り入れました。自然史ということで、可能な範囲でハンズオンの技法を取り入れたいし、今まで収集した標本類もできるだけ展示したい。リピーターの人達に何度でも展示を楽しんで見て頂くために、

資料の量だけでなく質にもこだわり、映像、模型、子供用の解説など1つの資料をいろいろな見方ができるように工夫するなど欲張ってやりたいことを詰め込んだ、というのが今回の特徴かな(笑)。

Q：来館者の反応はいかがですか。

A：次の中生代リニューアルに生かすため、すぐにアンケートをとりましたが、97.6%が大変良い又は良いと回答しています。資料数を以前の約10倍の546点にして、多すぎたかなと心配していましたが、ちょうど良いが7割以上

を占めているし、低い所はハンズオンの展示やイラストを用いた分かり易い解説を付けた子供向け、高い所は学術的な解説の大人向けというユニバーサルデザインの展示方法も90%以上が良いと答えているので成功したと思います。ただ面白かった展示を質問したところ、狙いとしていた所が意外と伸びず、反省しています。来館者の要望としてはここだけで見られる展示や復元した模型、映像やクイズなどの体験展示の比率が高いので、こうした要素は引き続き取り入れていこうと思います。

また、今回はプロポーザルという方法で業者選定をしましたが、この方法では業者はパートナーであって、協議しながらより良い展示を作っていくことができるので、考えていた80%位は実現できました。このアンケートのデータも製作者に渡して、改善点を次に生かしていく取り組みを始めています。協議ができるというのがプロポーザルの大きな利点ですね。

Q：今回は増築もされています。通常のリニューアルより苦勞されたのでは。

A：広さは273㎡で、以前の約2倍になっています。近年、古生代・先カンブリア時代の



「進化のカルタ」。松岡さんのお気に入りは「コナンドイルが夢見た失われた世界」。しかしどれも思い入れがあるので1つに絞るのは難しいとか。

「わくわく科学教室」

豊橋市内の小学4年生を対象とし、自然科学に関心を持つ機会を与えることを目的とする。実験学習(微生物観察・電池の学習)、プラネタリウム(以上は必須)、野外観察、地下資源館展示学習、フロア展示学習、自然史学習の学習内容を5つの学習コースに分け、学校ごとに選択する。視聴覚教育センター、地下資源館、豊橋市自然史博物館にて実施し、自然史博物館では、大型映像観覧、特別企画展・常設展見学、収蔵庫見学などを行っている。

「進化のカルタ」

松岡敬二・孝子夫妻が編集、読み札を作成し、古生物の復元画なども手がける画家、小田隆が絵札を描き、奥野カルタ店より2001年に発行された。解説書付。日本古来の遊びであるカルタを通して自然科学のおもしろさや地球の歴史について興味関心を抱いて欲しいとする「進化のカルタ」の構想から5年、松岡夫妻の趣味であるカルタの収集を通じて知り合った、カルタの老舗・奥野カルタ店の店主、奥野伸夫氏の協力により発行の運びとなった。小田隆氏は今回リニューアルされた古生代展示室のイラストも担当している。

研究の進歩が著しく、これが地球の歴史上重要な時間であることを強調しながら、学術的な理由を上層部にも理解してもらうために膨大な説明資料を作り、何度もかけ合いました。資料作成のために自費で随分本を買いましたし、シンポジウムなどで最新情報を得るなど、そうした研究の積み重ねの上で実現した展示です。

Q：今回のリニューアルを終えて、博物館のリニューアルの必要性についてどう思われますか。

A：多くの博物館で問題なのは開館後のことです。建物や展示もそうですが、人の補充も多くの場合はされないで、その後あまり発展しない。作りっぱなしで、老朽化して終わってしまうことが多いですね。それをいかに財政難の中でリニューアルするか、学芸員が意識を持って活動することが重要だと思います。

Q：館の活動には学芸員の意識が大きく関係します。松岡さんは学芸員の将来について、どうお考えですか。

A：学芸員の身分は、博物館法が施行された頃からでていた改善すべき点が、現在も根本的には変わっていないと思います。学芸員は専門的な職員であっても、位置づけでは行政職であり、行政マンとしての活動を常に問われます。行政の中でエネルギーを保つのは難しいですが、若い時に抱いていた疑問や希望を考え続けて、役職についた人がそれをどれだけ改善できるかにかかっているのではないのでしょうか。最初は身分の改善には博物館を変えれば良いと思っていましたが、実際は簡単なことではないことがわかりました。指定管理者制度などは、地方自治法の改正をしらぬまま直面する課題となっています。結局学芸員がそれぞれの館で、専門的な職員として、市民にも十分に認められる活動しながら、地位を築いていくしかない気がします。入場者数が多いということは市民に認知されているということで、利用が少ないとコスト的には説得力が無いのも事実です。博物館法にある活動を確保しながら、いかに市民に必要な活動ができるかを個々が緊急性を持って考える

べき時代になっていると思います。

Q：最後になりましたが、若い世代にメッセージを

A：私は先生に「ハングリー精神であれ」と盛んに言われました。今の人たちは初期の頃よりは条件が良くなっているのに、原点に立ち返って、ハングリーな気持ちで、研鑽を積み、常に危機意識を持ちながら、新たなことに積極的に取り組んで欲しい。フォーマットがあることは誰でもできるので、未知なものに対してトライし、いかにステップアップできるか、挑戦して欲しいですね。博物館を良くするには施設や予算状況にもよるけれど、結局はそこにいる人だと私は思います。それぞれが切磋琢磨して、1+1が3にも5にもなるように努力して、博物館を守り、発展させていって欲しいと思います。

＜インタビューを終えて＞

あらゆる人が活用でき、何度でも訪れたい展示を目指した今回の豊橋市自然史博物館のリニューアル。その計画は、豊橋市の基本構想・基本計画に盛り込まれており、今後も残る展示室が順次リニューアルされる予定だという。自治体の財政状況が厳しい現状で、リニューアルが市の主要施策にあげられるのは、まさに市民や行政が館の日頃の活動を評価している証といえよう。しかしリニューアルも企画展示や教育普及活動もすべて学芸員の日頃の収集や研究活動の蓄積があってこそ成り立つものである。ハングリーな精神で、常に自ら研鑽を積み、新たなことに挑戦して欲しいと話し、実際にそれを今回リニューアルという形で実践している松岡さんにお話を伺って、あらためて日頃の調査研究活動の重要性を感じた。

鳳来寺山自然科学博物館 開館40周年を迎えて

語る

鳳来町立鳳来寺山 加藤 貞亨
自然科学博物館学芸員 (自然)

聞く

徳川美術館企画情報部係長 加藤 啓子
(教育普及)

昭和38年、鳳来寺山の自然を愛する人々の熱意によって、愛知県初の自然科学博物館が開館した。今年めでたく40周年を迎えた鳳来寺山自然科学博物館の歩みと未来について、学芸員の加藤貞亨さんにお聞きしました。

〈加藤さんについて〉

Q：加藤さんはきのこの専門家とお聞きしましたが、館での専門はなんですか？

…なんと東京で過酷なサラリーマン生活を経験してきた加藤さん。いつかは生まれ育った鳳来町に戻ろうと思っていた時、博物館で欠員があると聞き、迷うことなくUターン。大学の専門は違っていても、子どもの頃から慣れ親しんだ鳳来寺山の自然は体が覚えており、館の三本柱である、鉱物・植物・動物について一から学ぶ必要があったとのこと。特に「きのこ」への興味が深く、自らの専門とされました。加藤さんは子どもの頃、父親と出かけたきのこ狩りで、形・色など多種多様なきのこを発見する楽しさを実感し、きのこに興味を持ったそうです。

Q：博物館は地学、植物、動物と分野が多岐に渡っています。各学術委員がいらっしゃいますが、学芸員は加藤さんひとりで、館の収蔵品の管理・展示をされるには苦労も多いと思います。どのような点が大変ですか？

A：博物館の職員は館長、学芸員1名、臨時職員2名の4名。この4名で、展示、教育普及、資料の収集と保存、調査研究・報告、友の会運営、来館者対応、清掃等の日常業務を行っているため、特に収集と保存、調査研究に対する時間と人の確保が出来ない。少人数での博物館運営に対し、学術委員および友の会の皆さんの協力は不可欠です。

Q：加藤さんが赴任されてから発刊が始まった手書きの「はくぶつかんだより」はとても好評です。どうすればそのようにイラストが描けるのですか？

A：友の会会員への手紙として、始めました。「手書き」は少々こだわっています。活字はきれいだが、読まれないことも多い。「手書き」なら、イラストや文字のレイアウトから強調したいことや、自分の思いを表現することができます。刊行は不定期ですが、今年度中に100号達成を目標としています。

Q：加藤さんにとって鳳来寺山の魅力はなんですか？

A：赴任して16年がたちますが、山に入ると「こんなところにきのこが」と発見したり、未だ、入ったことのない谷もあったり、まだまだ知らない自然があり、楽しみです。同じ場所でも時間や季節で違う顔をみせるので、自然はすばらしい。

Q：来館されたことのない方へメッセージをどうぞ。

A：実物にまさるものはない！ぜひ、「町ごと屋根のない博物館」というように博物館はじめ鳳来寺山の自然にふれてほしい。

〈鳳来寺山自然科学博物館での活動について〉

Q：きのこの特別展では、パネルではなく本物の新鮮なきのこの採取し、展示すると聞きました。自然相手の展覧会ですが、そのための苦労を教えてください。

A：展示用のきのこは職員だけでなく、友の会会員できのこ好きなメンバーが週末を利用して採取して、持ってきてくれます。いずれのきのこも約3日で展示に耐えられなくなるので、協力して補充しています。やはり、自然の生き物なので、その年の天候によって発生が少なく、採取できないのではとヤキモキすることもあります。

Q：少ないスタッフでがんばっていらっしゃいます。顧問や学術委員の協力は不可欠ですが、人間関係の苦労とか楽しさとかありますか？

A：17名の学術委員は博物館に深い愛情を持



っていらっしゃいます。展示だけでなく、観察会では講師として指導いただいています。収蔵品の分類や収蔵なども手伝ってくれます。特に、現在は横山館長はじめ職員の意欲的な展示・企画を学術委員は快く応援してくれます。信頼関係も強く、とてもよい関係です。

植物に関しては11年かけて収蔵標本の分類・整理ができましたが、鉱物や動物、きのこなどはまだ分類および整理が出来ていません。湿度・温度調整ができる大きな収蔵庫がないのが悩みです。

〈鳳来寺山自然科学博物館での
教育普及活動について〉

Q：近年、月1回以上のワークショップを開催され、年々参加者も増え、毎回内容も充実されています。その中で「これはよかった」と感動した企画はありますか？

A：まず、個人的な反省としては、講座を増やしすぎたこと。この実施回数が当たり前となり、企画・開催する側としてはきびしい。講座については、自然相手なので、同じ講座でも季節や時間で自然の変化を体験できるので、飽きることがありません。参加者の8割以上が友の会会員です。新聞等で講座開催の告知はしていません。それでも、定員を上回る状態となります。講座の情報を得るために友の会に入会される方も多いです。

〈鳳来寺山自然科学博物館と
教育現場との関わり〉

Q：平成14年度から「先生のための自然と博

物館利用講座」を実施されていますが、反響はいかがですか？ 今後、この講座の展開をどのようにお考えですか？

A：近年、小・中学校が博物館を利用する回数が減少しています。総合的学習など学校のカリキュラムが変わりましたが、先生方が博物館の利用方法を知らないように思われます。そこで、14年から8回講座を実施しました。鳳来町および東三河の教育委員会に講座の案内を出しました。小中学校の先生が対象ですが、圧倒的に小学校の先生の参加が多い。

これまでの講座の反響を確認するためにアンケートを実施し、現在集計中です。参加したかったが時間が合わなかった、時間に余裕のある夏休みに実施してほしい、などの意見がありました。反響としては、水性生物の調査法など、すぐに活用できるカリキュラムが実施されたり、小学6年生の地層の授業で、実際に博物館に見学がありました。

今後は詳細で具体的な博物館および鳳来寺山の見学方法を提示しないと、なかなか利用されないの、それらのカリキュラムを作成したい。博物館を利用した先生が次の先生に引き継ぐことがないので、毎回利用方法をPRしなければなりません。

Q：鳳来町の児童生徒を中心に教育普及活動を展開されていますが、今後の学校教育への対応をどのようにお考えですか？

A：出張教室の要請が増えています。また、学校から講座や講演の要請があれば、横山館長や学芸員が日常業務に支障のない範囲で引き受けています。

来年度は年度の初めに、鳳来町および東三河、遠州地方の教育委員会に見学1日コースとか半日コースといった具体的な博物館利用方法を行事案内と一緒に配布する予定です。

〈鳳来寺山自然科学博物館の友の会〉

Q：平成15年度は734名と多数の登録数に驚きました。案内の発送や講座の実施など運営が大変だと思います。友の会はどのように運営されているのでしょうか？

A：友の会の業務は臨時職員が担当し、受付や発送作業を行っています。会では総会を開催したり、「館長と歩く～の自然シリーズ」



や「きのこ観察」などの講座を開催するようになりました。

さらに平成15年からは「博物館協力隊」というボランティアグループが発足し、現在22名の登録があります。あくまで、博物館のペースで、当博物館らしいボランティアを養成していきたいと考えています。

Q：今後の博物館独自の友の会の活動予定はありますか？

A：平成15年からはグループ会員制を新たに導入しました。校長会やパンフレットを通してグループの入会を推進しました。

平成17年、友の会発足から30周年を迎え、記念式典を考えています。会員が増え、会員との関わりが薄くなっているように感じます。現状でいいのか、会員が希望する情報が届いているのか、会員の目的は何かなど、コミュニケーションを計りながら、これからの鳳来寺山自然科学博物館ならではの友の会の姿を考えていきたいです。

<愛知県博物館協会について>

Q：博物館は愛博協の設立当初から加盟、活動をされていますが、会議が名古屋で開催されたり、参加するだけでも苦労があると思いますが、愛博協に対して要望はありますか？

A：協会から奥三河の極小館の意見も反映するために理事館になるよう要請あり、それを受け入れ、現在に至っています。実行委員会に参加することで、他館との交流ができ、他分野の館の取り組みや情報が得られ、刺激になっています。

Q：愛博協会員の他館との共同企画を希望されますか？されるなら、どのようなことを企画したいですか？

A：これまで他館から作品を借りて展示することもなく、交流があまりありませんでした。平成14年に文化庁芸術拠点形成事業として「愛知県博物館協会・子どもと博物館研究会」の主催で、一宮市博物館において開催された「伝えるということとは？」展への参加は、展示方法や企画進行など大変参考になりました。

最近では実行委員会にも若い学芸員が出席し

ています。協会が若い学芸員の活動の発表の場を設けてはどうだろう。また、彼らが協会の活動に快く参加・交流できるように加盟館は働きかけていかなければならないと思う。

<今後の鳳来寺山自然科学博物館>

Q：家族形態も変わり、来館者・企画の参加者も変わっていると思います。不安な現代社会に対し、教育普及を通して、博物館から何か発信したいことはありますか？

A：10年前の子どもと比べて、今の子どもが変わったとは思いません。最近では仮想現実があふれているが、本物に勝るものはありません。自然に身を置き、自然を肌で感じてほしい。

Q：多くの鳳来寺山を自然を愛する人々によって作られ、受け継がれてきた博物館を維持し、後世に伝えていくのはとても大変重い任務と思います。今後の館の運営に対し、抱負をお聞かせ下さい。

A：足元の自然をしっかりと見つめ、記録し、伝えていくのが博物館の指命。博物館は建物から始まったのではなく、鳳来寺山の自然を愛する先人が博物館の必要性を感じ、設立したものです。

新城市、作手村との市町村合併の話が進んでいます。合併後、博物館の運営方法も大きく変わる可能性があります。館長および館員は博物館の発足過程やこれまでの歴史、博物館の在り方、必要性を積極的に伝えたい。

<インタビューを終えて>

地元の人々の鳳来寺山を愛する気持ちから博物館が開館し、40年間博物館を愛する人々によって、博物館が維持・運営されてきたことがよくわかりました。現在の博物館からは、横山館長や加藤さんはじめ館の運営の携わる皆さんの優しさににじみ出ていました。派手なジオラマや視聴覚機器がなくても、自然と人とのふれあいを大切にしたい、手作りの博物館らしい展示や企画が継続されることを願います。

博物館、来し方行く末

中野さんは専門が中世の考古学で、出身地である同館の学芸員になられて23年になります。地の利を生かし、かつては日本全国を席卷した陶器である常滑焼の研究を続けてこられました。各地から出土する常滑焼について意見を求める電話があとを絶たない、常滑焼研究の第一人者です。

まず、愛知県博物館協会40周年を迎えて、どのような感慨をお持ちかお聞かせ下さい。

「そうですね、私が学芸員となって間もなくが愛博協の20周年でして、そのころ私たち若手の者たちは先輩方からよく声をかけていただき、育てていただいたなあ、という思いが強いですね。今は加盟館が増えて大所帯になっていますので、なかなかそういった雰囲気は難しいでしょうね。県内の博物館施設数が増えたことで自然、各館がいわゆる専門館化して得意分野を持つことが必要となりましたし、学芸員の専門分野も個別細分化してきましたから。交流も分野別には盛んなんでしょうけれど。そうした中、協会の果たすべき積極的役割は、むしろ大きくなっているんだと思います。」

そうですね、専門を超えた広い交流は自然発生的にはなかなか難しいですものね。その意味では、協会はすでに多様な加盟館から成り立っていますので、交流活動を通じて博物館施設全体の活性化を目指さなくてはいけないのだと感じています。



ところで今お話にありました学芸員の専門化についてですが、しばしば学芸員は専門的すぎて自己満足的な展示をすることが多いと批判されることは、先行き大きな問題点だと思います。博物館が敬遠される大きな原因にもなっていると感じていますが、この点についてはいかが思われますか。

「学芸員はやはり専門性あってのものだと思います。専門性の下地がある上に展示を成り立たせることは大切だと思います。もちろん一般市民のための施設であることを考えると、研究所ではないのですから、研究だけ、専門性だけでは観覧者と乖離してしまうのでいけません。観覧者と私たち学芸員との接点は、まずは展示なのですから。その接点である展示において、展示する側の専門性をすべて発揮しようとしてしまうと、ついつい研究成果の発表会的な小難しいものになってしまうのではないのでしょうか。」

そうですね。最初の接触である展示は観覧者の知的関心をゆさぶるために開催し、観覧者を自主的で知的な活動へと導くための導入部であるところからいざなうための余裕が必要なのでしょうね。展示で披露しなかった部分の専門性は展覧会以外の博物館の活動など次なる段階で発揮することもできるわけですし。

ところで、今度はその展示においてですが、観覧者と私たち学芸員との間には基本的にはいわゆるキャプションの解説などの“文章”が仲立ちとなっていますが、果たして文字を通じて観覧者に刺激を与えることがどの程度可能なのでしょうか。伝えたいことが多くなるほど文章量が増え、かえって読んでもらえないジレンマ。

「これは皆さん感じていることだと思います。物が陳列してあって横にその物の説明がある、という従来のやりかただけでは難しいでしょうね。昔から絵巻や絵伝といったたぐいには“絵解き”という解説方法がありますが、そういう解説の仕方がなぜ人々をひきつけ、連綿と続けられてきたのかということを考えることはおおいに参考になると思います。」

その通りだと思います。物とそれを見る側との間に、文章でなく人間の存在がある。展示会場において、観覧者にひたすら「見る」

語る

常滑市民俗資料館
学芸員・副主幹

中野晴久
(考古学)

聞く

名古屋市秀吉清正記念館
学芸員

加藤和俊
(歴史学)



「読む」という能動的な行為ばかりを強いるのではなく、「聞く」という受け身で気楽な行為を通じて知的関心を喚起することも大切なのでしょうか。学芸員はもっと展示室で「語る」必要があるのではないのでしょうか。

「そう思いますね。それに、展示会の企画意図に従って限られた文章量で解説を示してしまうと、限定された見方へだけ観覧者を誘導してしまいがちです。観覧者各自の知的好奇心は多様なのですから、例えば私が常滑焼のカメを考古学的意図で陳列したときであっても、そんな私におかまいなく、美的感覚から味わい深く感じていただいてもよいと思うのです。」

確かに、展示を企画した立場からするとついつい観覧者皆さんに企画意図にそって見てほしいと思って力が入ってしまいがちですが、考えてみれば観覧者の皆さん、勉強しようと思って来られたわけではないですね。

最後に、博物館の今後に向け、いろいろ問題点をお感じのことと思いますが、いま最も心配していらっしゃることは何でしょうか？

「やはり、個々の学芸員が培ってきた蓄積をいったいどうやって後任の学芸員に継承していけばよいのか、という問題ですね。特に学芸員が一人という博物館施設では深刻だと思います。前任が異動・退職するのにあわせて交替で新任が来るという形では、物に関するデータ等、書面を通じて伝えることのできる部分の引き継ぎはできるでしょうが、学芸員として蓄積してきた知識やノウハウ、人脈といった部分を伝えられません。博物館施設の「頭脳」の部分が、職員の交替という内部事情によって一から出直しになることだけは避けたいのですが…。にもかかわらず同時進行で、博物館、特に私たちのような歴史民俗系の館にとって大切なフィールドである“地域”から日々刻々と物質的歴史民俗資源だけでなく人的な情報資源が失われていっています。いわゆる研究者顔負けの郷土史家や伝統に関心を持つ職人がどんどんいなくなり、歴史民俗系博物館は地域史におけるまさに“最後の牙城”となりつつあります。これは深刻な問題だと思います。」

まさに私たちの館のような歴史に関わる博物館は、中にいる学芸員が意識しようとしまいと、地域史・歴史に対して相対的にどんどん責任が重くなっていると思います。今日本では、地域史に限らず広く歴史全体を極めて軽視する風潮ですね。しかし地域あるいは日本の文化の根源が歴史にある以上、いずれしっぺがえしを経て見直される時期がやってくると感じています。その時、各博物館がやはり“牙城”として生き残っていかなくてははいけないということですね。

「“牙城”としての質を維持しながらね。そのためにも、学芸員には専門性が要求されると思うのです。歴史を軽視して一時的に“記憶喪失”になったとしても、物や情報がしっかり保存されていれば、記憶を取り戻すことは可能なのですからね。」

本日はたいへん勉強になりました。どうもありがとうございました。

モノにこだわり、モノと人の思いをともに残す

愛知県博物館協会40年。この10年の県内の博物館・美術館の活動を見渡すと、市橋芳則さんと師勝町歴史民俗資料館の「昭和日常博物館」の取り組みと重なる。10年前は昭和を扱うことがまだあまり行われていなかったが、10年後の今では一般的になってきた。しかし、ただ単に昭和を紹介するのではなく、モノにこだわり、モノでとことん追求する展示姿勢は、他と一線を画している。今回、市橋さんに「昭和日常博物館」の活動とその今後、加えて、地元歴史民俗資料館・郷土資料館への期待について伺った。

問：市橋さん、師勝町歴史民俗資料館の活動と言えば「昭和日常博物館」として県内はもちろん、全国的にも有名で、他の地域型の資料館とは違う、特色ある資料館となっています。また、最近では「回想法」の取り組みでも注目されています。今現在、さらに今後もこれらの活動を進めていきますか？

答：「昭和の暮らしを見つめる」ということを基本に、「昭和日常博物館」の中の1つとして「回想法」も行っています。元々回想法を博物館に取り入れたいと思っていたところ、ちょうど医療関係者からお話をいただいで。お年寄りに語ってもらいながら、企画展についての取材・聞き取りもしています。「昭和」の暮らし

しを見つめながら、「今」の暮らしを考えるヒントにし、高齢者と子どもたちが世代をこえた交流がはかれるように、両方見つめていきたいですね。

問：博物館の資料収集範囲を少し新しい時代まで広げたということですが、昭和の資料を集める中で、苦労されたことは？

答：集め始めた当初はまだ、昭和時代のモノが博物館の資料となるという認識が一般の方々にはあまりありませんでした。広報や新聞で呼びかけるといった方法もありますが、あまり効果がありません。ですのでやはり、

「展覧会でアピールする」という方法でやってきました。展覧会で展示して、こういうモノを集めているのですと訴える。旅の展覧会をした時には、ペナントが600枚程集まりました。こうした取り組みを続け、今では自然にモノや情報が集まってくるようになりました。日本全国、広範囲の資料が集まってきます。今も来てほしいと言われているところがいくつかあるのですが、ちょっと忙しくて…。行かないといけないのですが…。

問：展覧会では情景をモノで再現して、記憶に訴えるという展示方法をとっていますが、はじめからこのようにしてきたのでしょうか。自分は通常の展示をしようと思っても、欲しいモノがないことの方が多いのですが…。

答：最初からモノで再現するという方法でやっています。やはり足りないモノばかりです。でもこうすることで、足りないモノが見えてきます。その不足分を補っていくことで、生活・暮らしの記録が整っていくと考えています。暮らしというステージにあるモノを別々に切り離して見ていく方法では、取りこぼしが発生し、本当の意味での暮らしの記録、収集にはならないと考えています。

問：時代は日々進んでいます。資料収集範囲も50年代、平成へと広げていくのでしょうか？

答：昭和30年代は電化製品の普及など、人々の暮らしが大きく変化した時代で、原始・古代から直火を使って生活を送ってきたのが、電気に代わり、それは暮らしの視点からすれば産業革命を上まわる変化だと思えます。よって、その変化を記録するためにも、昭和30年代を中心に、その前後を含めて集めていきたいと思えます。暮らしの記憶を残すという意味でも、消えてなくなってしまう生ゴミ以外のモノはすべて残すというもとで進めていきたいです。その結果、昭和30年代の生活を再現する際、ゴミ箱の中身も再現することが可能となり、暮らしとはそうした細部までを含める必要があると思えます。

問：これだけ多くの資料を収蔵・管理してい



展示室には親子の会話がみられる。

語る

師勝町歴史民俗資料館学芸員

市橋 芳則
(考古学)

聞く

東浦町郷土資料館学芸員

楠 美代子
(考古学)



展示室と市橋さん

くのは大変ではないですか？資料はすべて把握しているのでしょうか？

答：大体は把握しています。集めることを止めると資料館としての機能が止まってしまうので、これからも進んでいきます。

問：モノにこだわり、モノに語らせるという考えは、考古学を学んだということが根底にあるように思われますが、どうでしょうか？

答：博物館の役割として、モノを残すことは大事なことです、モノにはやはり力があります。昭和の資料には人との関わり、思いが貼りついているモノばかりで、モノを残しながら人の思いも一緒に残していきたいです。

問：これからの師勝町歴史民俗資料館を、どのような資料館にしていきたいと思っていますか？

答：わいわい会話しながら、見て楽しんでもらえる資料館にしたいですね。楽しんでもらえる展示を行い、いろいろな世代の人が交流する場となってほしいです。展示は、「自分もこんな展示が見てみたい」と思いながらやっています。旅行に行きたいなぁと思ったら旅行の展示をしたり、子供が生まれたら子育ての展示をしたり…。自分も楽しめる展示をやっています。

問：県内にある博物館の多くは、地元の歴史民俗資料館であり、1人または数人の学芸員で運営している場合が多いと思います。このような環境のいいところは？

答：やろうと思うことがやれるところですね。すぐ動けますし。これまでも自由にやらせてもらいましたが、もちろん自由にやるにはそれなりの戦略も必要ですが、ここでなければ、昭和のモノを集めることはできなかつたと思います。常設展示も展覧会をやるごとに変化、増殖させ、10年で全体をリニューアルすることができました。

問：これからの地元の歴史民俗資料館・郷土資料館に期待することは？

答：地域の歴史や民俗を見せることはもちろん大事です。それにプラスして、館の特色が表にできるといいなぁと思います。館の特色と

いうよりその館の学芸員の顔の表情が前面に出るといった方がよいのかも知れません。ここに行けばこれが分かるとか、これについてはここに聞けとか、学芸員の興味とつながって表情がある館になってほしいです。いろいろな顔の資料館があると楽しいじゃないですか。



川の生き物を水槽に並べた夏の特別展の一角。今後は資料館の水族館化!?も計画中とか。

問：最後に、次への10年、愛知県博物館協会50周年に向けて一言お願いします。

答：高齢社会の今、愛博協の取り組みとして、高齢者に向けて何かプログラムが具現化していくといいなぁと思います。高齢者が一緒に楽しめる場の提供ができればと思います。愛博協も40歳から50歳という円熟期を迎える頃にあたって。

語り口は穏やかな市橋さん。穏やかに話されるがその奥には、活動に対する強い意思を感じることができた。思い描くビジョンがあり、それを実現させるために先を見通しながら1つ1つ形にしていく。思い付きではなく、戦略的に進めながら。また、進んでいく中でいろいろな方向にも広がっていくのであろう。そして、その積み重ねがあって今の姿があり、これからも姿を変えながら進んでいくのであろう。

市橋さんの話の中には「楽しむ」という言葉がよく出てきた。来館者に楽しんでもらうのはもちろん、自分自身も楽しみながら、ということであった。自分自身を振り返ってみると、目の前にあることに追われて、こなすことが多くなっているのではないだろうか。そんな時は、市橋さんの「楽しむ」という言葉を思い出したいと思う。

今回話を伺って、いくらモノを集めてもやはり学芸員次第だと痛感した。当然ではあるが、資料を生かすも殺すも人次第。このことを忘れずに、自分自身活動していきたいと思う。

発信する役割…学芸員がつなぐもの

仲野泰裕氏は宮崎県出身。1974年に当時の愛知県陶磁資料館開設準備担当学芸員として着任された。1978年に同館南館、翌79年に本館がオープン。同氏は全国屈指の窯業地域である尾張において近世・近代陶磁史を専門分野とし、30年にわたって当地域から陶磁史を発信する中核を担ってきた。

2004年4月より同館学芸部長兼学芸課長となられ、ご多忙の毎日だが、まずお聞きしたいと思っていたのは、陶磁資料館建設準備室当時の様子についてである。

「うーん、三日と空けずに呑みに行っていた事くらいしか覚えていない(笑)。当時の仕事は建設に伴ういわゆる一般事務が主で、オイルショック直後の時代だけになかなか進まず苦しかった。」

陶磁資料館の建設に際しては、まず猿投山西南麓古窯跡群の出土資料を生かすという課題があったという。そこで窯業の産業振興と結びつき、建設準備は商工部で立ち上がった。その後教育委員会管轄になり、南館と本館の一部をオープンさせた後、総務部、さらに県民生活部にというように、資料館の管轄はめまぐるしく変わっていく。

「オープンまでが大変だった。構想自体が大きかったから。本館オープンで終わりじゃなくて、最終段階にどう繋げていくかが大事だった。それが平成6年によくやほぼ形になったね。当初の構想の中で実現できなかったのは、研究者向けの宿泊もできる研修施設と、見本市などもできる物産館的な施設。ただ、他は何とか維持できた。」

建設時の構想とは、日本陶磁史の通史的な展開を常時紹介し、その中から随時特別展を開催する資料館を核とする、いわゆる「陶磁公苑」というイメージ。広大な敷地で、駐車場から林を抜ける散策路沿いに発掘調査された窯跡や復元古窯などを見ながら本館へたどり着くというものだった。名称も、「陶磁公苑」の中の資料館だから「陶磁資料館」に落ち着いたという経緯をもつ。現在の緑に囲まれた状況にも、「陶磁公苑」という言い方はよくあっている。

「産業振興を打ち出しているのだから、現代産

業を含めた通史」という大前提がある。その辺が通常の美術館・博物館と違うところで、とても難しい。本気で現代の最先端技術を紹介してみたことがあるが、会社に試作品を出してくれって交渉に行くと、最先端でなく3番手くらいのしか出してくれない(笑)。3番手の最先端ということで手を打たざるをえないという事がありましたね。」

特に、陶磁器産業の現況を紹介する南館展示室の今後の運営は懸案のひとつという。また、作陶体験ができる陶芸館は人気スポットの一つだが、作陶目的の来館者と展示見学者はなかなか重ならない。

「続けてお見えになる場合でも、展示は最初一回見たか見ないかで、作陶する人はほとんど見ないね。だから必ずしも相乗効果が数的には増えていかない。」

さて、愛知県陶磁資料館では、毎年復元古窯を使った焼成実験を行っている。100時間以上に及ぶ焼成の間、昼夜を問わず交代で焼成に関わるスタッフには、陶芸作家やその卵、学生、友の会ボランティアなどが大勢参加しており、幅広い人間関係によって事業が支えられている。陶芸館の技術者スタッフを含め、このような「資料館サポーター」をもつことについて尋ねてみた。

「窯焚き(復元古窯での焼成)は、ここ4年くらい焼成実験という色を濃くしてやっている。人間関係で支えられているって言うのもうだけど、同じ目的意識で結ばれているもの。ただそれを維持していくのが難しい。やっぱりお互い発展途上の人間なんでね。まあ、時々ほころびが出るよね。1~2年で異動する人はいいですけどね。毎回毎年ですから。管理しようなんて思ったら身が持たない(笑)。」

今までされてきた中で心に残っている展示はありますか。

「うん、やっぱり節目節目にあるね。特に、ビッグな展示の時は日頃来ないようなものが来るんで、勉強の機会としてはすごくいいですね。ただそれよりやっぱり、偶然興味のある分野でやれた時の方が大きいですね。例えば古い例だと、「本業焼」という展示をやったのと、「瀬戸の染付磁器」をやった時。そして中間的に御庭焼をやって全国的に視野が拡



復元古窯での焼成(平成12年)

語る

愛知県陶磁資料館
学芸部長兼学芸課長

仲野 泰裕

(近世・近代陶磁史)

聞く

名古屋市博物館学芸員

岡村 弘子

(中近世考古学・都市史)



がり、ここ数年だとやっぱり煎茶の展示かな、関連工芸を含めた深み？…最近では花器や酒器を中心にやったけど、もうちょっと予算があって目玉になるようなものが借りてこれたら、すごくインパクトのあるものになってくるんですが、その辺が難しいところですね。」

予算は削減される一方だが、だからといって展示をやらないわけにはいかない。仲野氏にとって、展覧会を企画する上で「これだけは譲れない」ところをうかがうと、

「結果的に譲るところだらけで、結局やるための妥協を重ねないと展示なんてできないじゃないですか。予算の減った分やらなくていいと割り切れば楽だけどね。そういう前提ではなく、やる以上は前向きに、やるためにはどうするかっていうところで気がつくとやりすぎちゃう(笑)。結局予算がなくてもできるじゃないとなる。そうなるとやっぱりね。」

妥協しないと、とは言うものの、そこで限界まで粘って遂行させてしまう。そんなぎりぎりの線の繰り返しでこれまで多くの展覧会を成功させてきた。最近では、予算的・立地的に限られた状況の中で、活路を開く試行を重ねている。例えば、新聞・テレビでの露出度を確保すること。特に支局の記者と頻繁にコンタクトを取り、挨拶に赴いて記事につなげる。

「最近はどうすれば紙面的に効果がある載せ方をしてもらえるかが判ってきましたね。」

仲野氏のフットワークはとにかく軽く、研究者としての活動範囲も軽く列島規模を超える。尾張における近世陶磁史の第一人者として、全国の研究発表、講演の依頼が引きもきらない。もちろん行く先々で語るの、氏のフィールドである当地域のことだ。やきもの地尾張が全国から受ける注目のまなざしを、仲野氏は一身に浴びているともいえよう。

「僕ら内部の評価は問題じゃない。外に評価してもらってなんぼの世界ですからね。内部で完結できる所とは感覚が全然違うんだよね。結果的に外からの評価によって館のイメージも高まるし、他から声がかかれば、館の職員が外部から評価を受けてるって事になるんだから、それを確実にやっていかざるを得ないと思うんですよ。資料を外から借りなきゃ展示が成立しないし、外部の評価を上昇さ

せないに対応も変わってきますよね。」

実際、仲野氏のもつネットワークは、近年特別展ごとに企画される、研究会・シンポジウムに集うメンバーに如実に反映されている。愛知県陶磁資料館では、全国レベルの研究者が集うシンポジウムが確実に定着している。学芸員にとって何が大事か。仲野氏の「外」に向かう姿勢に、その重要な要素を垣間見る思いがする。

仲野氏目から見て、博物館を取りまく環境で、ここ数年で変わったと感じることは何だろう。

「予算が減ったというのも大きいけど、お客さんが動かなくなった。可処分所得が減る中で、博物館へ行くことになるか。その辺で一番に文化事業へ足を運ぶ人が減ってきてしまっている。この地区はまだ文化的に「開発の余地」がある地域だと思うんだけど。教科書的なテーマ、例えばうちだと桃山陶とか伝統工芸・茶陶というところに入るんだけど…予算がね。同じ現代の作品でも、オブジェなどの現代陶芸というところに入らない。伝統工芸というところに入るんだよね。」

確かにここ数年、博物館施設は厳しい正念場の時代にある。最後に今後10年をみて、愛知の博物館の展望をうかがう。

「まだ4、5年はこの正念場の状況が変わらないだろうな。地域で守っていくような、うちの美術館を大事にするんだ、といった意識をもつ地域が生まれてくれば、変わっていくんだろうけど…日本ではまだまだ少ない。ここにはこの美術館が必要なんだと、そういう住民意識が作れるようになればいいと思うんですけどね。結局それが陶磁資料館がいつも言われる専門館のひとつのネックですね。一般美術に比べ、やきものを好きなのは県民の一握りじゃないか、という言い方をされるけど、やきものは毎朝、毎晩使う一番身近なものひとつとして永い歴史と文化に育まれ、現在があり、なお、その分野を広げつつある、という具合に見なおす視点が必要。」

「発信者」としての役割をつらぬいて30年。その基盤はあくまでも「陶磁資料館」であり、そのスタンスの強さがあってこそその「発信力」なのだと感じた。



展示毎に開催されるシンポジウムの風景

地域の人が集まる場所を目指して

久しぶり。懐かしい笑顔が玄関から歩いてくる。私が博物館で働き始めて17年。大学生の頃には、すでに奥川さんは「武豊の資料館の奥川さん」だった気がする。

聞いてみると「19年になるよ」。美浜町に生まれ、資料館の学芸として活動する以前も南知多町や武豊町など知多半島で発掘調査に携わっていた。という格好良いが、要するに「学生時代からふらふらと歩き回っていた。」らしい。

「学生時代から磯部幸男先生、山下勝年先生、杉崎章先生について勉強し、学芸として仕事をする前の充電期間の蓄積は大きかったと思う。いろいろな人と出会ったり、いろいろなものを見せてもらったね。これが今に生き、違和感なく仕事ができる。文化財のことに關しても、薄っぺらなことだけれど実見してきた。一番大事なことは道を知ったということ。どの道を行くとどこへたどりつくのか、どこに何があるのか。」

19年間、最も力を入れてきたのは普及活動。「私が力を注いだのは、展示ではなくて教育普及だよ。生涯学習やボランティア育成など時代の流れとしてそのときどきにあるけれども、それに逆らってはいけないと思う。公の博物館の中で、社会全体の動きの中で流れていくのは当然のこと。それをどこまで武豊という町に深みを持たせていくかが自分の力量だと思った。それと、この町の中でこの施設をどう位置付けることができるのかが自分にとっては大事だった。単に学芸の展示だけで活動が終わってしまうと、町民の目から見放されてしまうだろうということは、痛切に感じていた。そこで、どういう方向付けをするかを考えたときに、“町の人とこの資料館を作っていこう！”と思ったんだ。」

体験学習農園の話。「資料館では今、体験学習農園をつくって活動している。これはある意味、今の私の集大成。農園での活動を通して住民の方々と一緒になって、いろいろなことを目にしたり触れたりする体験から出てくる“身からわきたって”ような考え、これこそが“学んだ結果”。よくやりがちなのが、鍬を持ってきて“この鍬の使い方はこうで、この鍬はこう変化しました。”というようなやり方。私はそれをやりたくない。自然に鍬を使って、疑問を持ち、どこかの博物館に行くとする。形が違うことに気づいて、その館の学芸員に話を聞き

“ああそうなんだ、だから形が違うんだ”って納得する。



「おじいさんのアウトドア」のヒデさんとユキさん

そういうことって、関心があるから印象に残る。関心を持たせることが大事なんだと思う。だからこそ、形を作らない、野放し状態の活動の中から生まれてくるものがある。」

ボランティア。「ボランティアって言うけど、同じ考え方で一つのことを一緒になってこなしていくのは大変なこと。開館して数年たって資料館友の会活動の中から、“一緒に活動をしましょう”という人たちが出てきた。」特に機織りをやっている方々が、小学校3年生の見学の際に綿織りや機織り、むかしのおやつ体験を一緒に指導してくれる。友の会のメンバーは約60人。夏休みに体験学習教室を4コース指導するまでになっている。去年からは「むかしを伝える会」(60歳以上)というボランティアグループを設立した。60歳以下は「むかしを学ぶ会」とする奥川さんに「60歳はどっちに入るんです？」と質問すると、「そういう行政的な発言をするんじゃない！どっちでもいいんだ。」うーん、いかにも奥川さんである。

土台であって、カリスマではない。奥川さんがその場になくても、何かしらやってしまう人たちがいる。「私は見ているだけ。皆成熟している、でもそれには5年ぐらいはかかっているかな。同じ考えで子どもたちにどう向き合うか、どういうことを伝えるかを、5年かけてコミュニケーションをとりながら伝えてきた。年をとればとるほどそうだけれど、上から押しやるような言い方を子どもにしがちだけれど、子どもと同じ目線で話ができるようにすることが大事。」「奥川さんはカリスマですね」と聞いてみた。「私は頂点にいてはいけないと思う。私は下にいる。最後の支えが私。ボランティア活動は、“いいのかな？”という危ない話ばかり。私がいつも言うことは、“私が責任をとるから”。そして、“予算がないからだめだめ”では、人はついて来ない。お金がなければ、あるもので工夫しよう。」確かに口しか動かない人にはついて行きたくないのは、誰しもそうである。「私疲れると怠けるんだけど、必ずしっぺ返しに来る。気を抜くとね。例会が月曜日にあるんだけど、9:30集合を怠けて11時に行ったりすると“あんたいないからなんにもできなかったぞ！”と言われたことも…。今は私がいなくて進まないところがある。危険な場面を予知し、あるいは会合に来ない人がいたりすると自宅におしかけ絶えず皆の顔を見ていなければいけない。」

考古学を専門とする奥川さんが、民俗に染まっているようにも見える。しかし、そうではないらしい。発掘作業に携わってくれた作業員の人たちは、今や常滑や名古屋などあちこちの発掘現場に行っているそうである。「一つの発掘現場をやり

語る

武豊町歴史民俗資料館職員 奥川弘成
(考古学)

聞く

一宮市博物館学芸員 久保禎子
(民具学・考古学)



体験学習農園にて

遂げるためには、その発掘の重要性や遺跡の性格を理解しながら、一緒になって作業をしていかなければならない。ただ“ここを10cm掘ってください。”と理由もなく命令するのではなく、“こういう理由で掘っている”ということ伝えてきた。人格をもったそれぞれの良いところを、うまく調和させることが僕らの仕事。それが如実にでてくるのが発掘現場。体験学習農園も同じこと。農園で機械が壊れる、予算はない、でも直してくれる人がある。小屋も手作り。廃材置き場を見つけてくる人、組み立ててくれる大工さんみたいな人。しゃべりがうまくて広報活動をする人。いろんなタイプの人が集まっている。相談ごとをすれば百の考えがでてくる。それをひっくるめてまとめあげると生き生きとしてくる」

活動はまだまだある。「【町を歩こう会】を月1回、もう10数年やってきて、130回になる。私は7割ぐらいついて歩いてきた。」思わず「ご苦労様でした…」と言葉が出た。「設立当初100数十人で、今は60数名。そこへ参加する人は、半分ぐらいはこの町を知りたいからという人。」130回という数字に感動するとともに、「130回のコースを考えたのは誰ですか？」と尋ねた。「当初3人ぐらいで考えていた。私が考えていたのではだめだと思う。これをやったことで、自分自身もとても勉強になった。地名の由来や村のことなど、目で見ることは重要。現場に行くことが大事。」

意を得たり！「実証主義ですね、考古学ですね！」私のルーツも考古学である、相通じるものを感じた。「机の上では私は結論をよう出さん。若いうちはいいんだよね、調査研究だけで。でも、年を経ると世間が恋しくなるんだよね。」私はまだ恋しくない、若いということかな。

愛知県博物館協会の話を最後に聞いてみた。最近、総会や研集で姿をあまり見ないので。すると、「行けないんだよね」と返ってきた。確かにこれだけの活動をし、休館日である月曜日に畑に行けば、愛知県博物館協会の研修に参加する暇はなからう…。「資料館活動に加え、文化財保護。何もかもこなす、でも考え方の根幹は考古学ですか？」と尋ねると、なるほど、答えは考古学の基礎だった。「そう、体力だよ。苦労を苦とは思わない、ひどい目に遭うのがわかっていてつっぱっていくんだから。そういうバカもいてもいい。受身で仕事をしていておもしろいかなって。与えられた分を超えることができないって豊かでないよね。科学や美術、それぞれ方法も異なるし、考え方も違う。我々考古学は地に足つかないよね。そういう意味では、自然科学の人には親近感がある。鳳来寺の加藤さん(加藤貞亨さん)と自然史の長谷川さん

(長谷川道明さん)は大好きだなあ。会話が魅力的。会う人皆が魅力的だと思えた人の集まりであった愛知県博物館協会で、私はおとなしい方だった。自分を出さない、本音が出せない人が、研修会での学芸員の交流の際の本音トークで培われたものが、その後に活かされていたことが魅力的なところ。学芸が相互理解できれば、資料の収集などにしても、その性質上自分のところでは収集できないけれど、あの館に話をもっていこうとすぐに結論が出る。何でも抱え込むのではなくて。昔は展覧会をやっても、“なんじゃこれは！”って言うてくれる人がいた。これはありがたいこと。“ここがいけなかったかな”って考えられる。私もよくその言葉を言うけどね。」思わず言うてしまった。「ほんと、そうですね！」って。「嫌みを言う、聞くことは大事。それが自分の力になる。言い返すことは力になる。見る目を育てることにもなる。」昭和39年にたった11館で始まった愛知県博物館協会は、今や130館となった。奥川さんは、「組織が大きくなりすぎた。」と言う。「マニュアル社会になり、形がなければ動けない、型がなければ不安で仕方がないのだろうが、いい子になるときのタイミングを見計らってはと思う。」

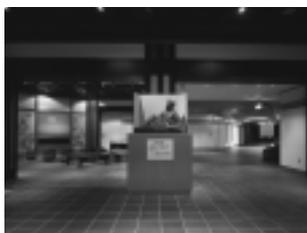
最後に。奥川さんは体験学習農園を通して、人の営みを伝えようとしているのでは思う。何事も声高に叫ぶのではなく、理論立てて行動するのではなく、“自然に集まってきて、何かして、自然に去っていく”それが良いと言う。これが奥川さんの人生観であり、人生そのものなんだろうと思った。しかし、この思想は、学芸として19年間、行政の波や考古学という学問の波を乗り越えながら得たのだと思う。「年を経ると世間が恋しくなる。」という言葉は、裏返せば「世間に見捨てられれば博物館・資料館の生き残る道はない。」ということである。「博物館があって当たり前」という博物館全盛期に学芸員になった我々の世代は、存在の意義を問いただす苦労をしていない分、理論武装も不手際で生温いところがある。今が力の出しどころであり、踏ん張りどころかもしれない。

そんな殺伐とした毎日ではあっても、自然の音を聞き、恵みを受け、美術を楽しむ、そんな余裕を心に持って仕事をしていきたいと思う。そのためにも、学問を基盤にして人付き合いがなされる学会とは異なる愛知県博物館協会の学芸員仲間には、小さなことでも気兼ねなく相談し、笑い喜びあえる楽しい仲間であると思う。今度は、そんな飲み会に、奥川さんを誘おうと思う。

田原市博物館 — 開館10周年を迎えて —



田原市博物館外観



田原市博物館内部

田原市博物館は、平成5年4月に町立の博物館として開館、平成15年8月の合併に伴い市立となり、平成15年で開館10周年を迎えた比較的近年にオープンされた博物館である。また、来る平成17年10月に予定されている渥美町との合併により渥美半島の歴史・文化の中核を担う館となることが予想される。そんな博物館の学芸員鈴木利昌氏にお話を聞いた。

Q：博物館が開館して10年が経過しましたが、開館から現在までに変わったところはありますか。

A：開館当初はとにかく登録博物館をめざしました。登録博物館(平成8年)となり、展示室の増築(平成9～10年度)が行われ、平成11年度から現在の展示室となりました。また、平成15年8月の赤羽根町との合併により市の博物館となったこと、今後は平成17年10月に予定されている渥美町との合併でも大きく変わるでしょうね。組織的には、文化財課として文化財保護業務と博物館業務とを兼務していた係から単独で博物館業務のみを行う係となったこと。このことはかなり大きいですね。県内の加盟館でもこの二つの業務を兼務している館が多いと思いますが、文化財保護業務が分かれたことにより、ある程度理想とする博物館業務ができるようになりました。それだけ市町村における文化財保護業務の仕事量が多かったということですよ。

Q：博物館の特徴を一言で教えてください。

A：大きく言えば、自治体の名前を冠した人文系歴史博物館の中に属すると思いますが、展示テーマに「渡辺崋山」という人物を取り上げているという点が大きな特徴ですね。崋山という素材は、美術・歴史という二つの観点からいっても全国的に理解してもらえる人物であり、田原の名前だけではなかなか館の存在を理解していただけない中で、この人物名を出せば、おおよその理解が得られるという点で特に恵まれていると感じています。

Q：登録博物館であるにもかかわらず、学芸員が2名というのは、体制的に少ないように感じますが、何か問題はありますか。

A：厳しい質問ですね。確かに少ないです…以前は基準として市町村立の博物館には、学芸員が6名(最低でも3名)というものがありました。現在は規制緩和の関係から館の実

状に合わせて必要な数の学芸員が配置されれば良いということになりました。そしてこのような時代の流れの中で、他の館においても学芸員が増員されたという話はあまり聞いたことがないので、実態としては学芸員が減っていったのではないのでしょうか。実際に田原市博物館が登録博物館となったのは、開館後の平成8年3月で学芸員3名という体制でした。ただ当時は、文化財保護業務も博物館で担当していましたので、現在の学芸員2名体制と比べてもかなり複雑で忙しかったという状態でした。まあ、どこの館もそうだと思うのですが、理想としては学芸員の数は多いに越したことはないでしょう(笑) いずれにしても自分としてはもう少し勉強する時間がほしいというのが本音です。そうした時間の確保という面からしても学芸員の数が多ければ助かるといった感じです。休みも取りたいですし…

Q：そんな中で様々な企画展・平常展を間断なく開催されていますが、その苦労は。

A：まず年間に企画展を3本、これは市になって増やしました。以前は2本。それ以外は平常展(展示室の展示替を伴う)を開催しています。クリエイティブな仕事をするには時間が必要です。県内外を問わず、学芸員の諸先輩方を見て、自分よりも忙しい人がいれば、その人以上にがんばらねばと現在でも痛切に感じています。また、自分が田原市博物館の学芸員として存在し、ある程度のお金も使わせてもらっているという状況下において、このことは責務だとも考えています。やれないというのは簡単だが、これだけの環境を整えてもらっている以上やらないというのは申し訳ない。「継続は力なり」ですよ。これが予算もつかないという状況ならば別ですけどね…

Q：県内で最初の市町村合併により田原市の博物館となりましたが、何か変わりましたか。

A：そうですね。企画展・特別展の数を増やしたことででしょうか。他館における展覧会の本数が財政的に厳しいという理由で徐々に減らされていくという状況の中で、増やせたということはありがたいことで、今後もこの状況を継続していきたいですね。

Q：では、今後予定されている渥美町との合

語る

田原市博物館学芸員・係長 鈴木利昌
(歴史学・美術)

聞く

渥美町郷土資料館学芸員 天野敏規
(歴史学)



鈴木利昌さん

併に伴う博物館の展開は。

A：人(人員配置)とお金(予算)がポイントでしょう。理想を言うのは簡単ですが現実はいまだ、何も言わず待っているだけではダメなので、言うことはお互いに言わないといけないうね。

Q：他の施設と比べて、財政力が豊かな田原市博物館が今できることは。

A：まずは収蔵資料(コレクション)の充実ですね。資料購入費が予算的に厳しい館が多い中での現在の状況は、田原市博物館にとって非常に有利で、今までは高くして手が出せなかった資料が、需要が少ないため、安く手に入るようになってきているんですよ。こうしたコレクションの充実によって昨年と今年には企画展「館蔵名品選」を開催し、『館蔵名品選図録』(館蔵作品を収録したCD-ROMが付録として付けられた画期的なもの)第1集、第2集が作成できたんです。また、できるだけ早い段階で第3集を出したいですね。これは財政力のあるうちでないとできない。これがどのような資料の名品図録であっても構わないのですね。

Q：では、少し視点を変えて、田原市博物館の学芸員として、今までに目指してきたことと、今後の目標は。

A：う～ん、あまりピンとこないね。自分自身では常に先が見えないというか目標が見えないんだよね。なぜなら色々な物事に対してベターはあるけどベストはないと常に考えているからかな。現状に満足することなく、さらにその上を目指すことは大事なことで、まだまだやり足りないことが多くあるということだよ。今後の目標は、一言で言えば皆が喜んでもらえるものを残すこと。それから、良い作品に巡り会うこと。とにかく良い作品に巡り会い、その作品が館のコレクションになれば最高だね。また、他館の良い作品をお借りして、自分がその作品から得た感動を来館者の方々に伝えられればそれもいいね。

Q：田原市博物館＝渡辺華山というイメージが強く感じられますが、この点について館の学芸員としてどのようにお考えですか。

A：確かに意識はしています。でも、自分自身が渡辺華山に対してまだまだわからない部分が多いので、もっと勉強しないとね。最近、華山の展覧会においても全体的にはな

く、各テーマごとの展示(肖像画・花鳥画・山水画等)にしようとしています。そのテーマの中で開催した展覧会が自分なりに一巡した時点でひょっとしたら何か見えてくるかもしれない。ただ限られた時間の中でそれができるかどうかだね。だんだん目が見えなくなってきたし…色々な意味を含んだ部分で目が見えなくなるということは、恐ろしいことだよ。老眼も含めてね(笑)。しかし、いつか目が見えなくなる時期が自分にもきつて来ると思う。「見えていたものが見えなくなる」これは、油断や妥協の気持ちが自分の中に芽生えたときにおこると思うので、今やれることはしておいたほうが良いと昔以上に強く感じています。また、自館の所蔵品であっても開くときに今もってドキドキする作品(良い作品)が何点かあるんだけど、そんな気持ちがなくなったら寂しいよね。

Q：最後に、愛知県博物館協会の思い出や今後の愛博協に望むことがあればお聞かせください。

A：最近では、愛博協主催の研修会などにあまり参加できず残念ですね。田原市博物館にとって、愛博協の加盟館と様々な情報交換・交流ができたことは本当にありがたいことでした。ただ、最近予算の関係から愛博協主催の活動(研修会等)に参加できないということが実際に(他館等に)あるのであれば、愛博協として会費の中から旅費の支給を補助するシステムをつくったらどうでしょう。すでに静岡県の博物館協会などでは行われており、これにより加盟した館どうしの交流がさらに促進され、愛博協に加盟した意味がより深まるのであれば一考の価値があるのではないのでしょうか。

取材を終えて、考えさせられたことがあった。自分自身渥美町郷土資料館に勤務して間もなく13年が経過するが、それは取材の中で鈴木さんが「自館の資料で未だにドキドキする作品がある」とのお言葉である。最近の私が果たしてそんな気持ちで自館の資料と向き合ったことがあったのだろうか。鈴木さんの言われた「目が見えない」状態になりかけていた…深く反省し、今後の活動にこの思いを活かしていきたい。

企業の美術館として、 優れたコレクションで社会に貢献

この10年間に、重要な私立美術館のいくつかが館や母体企業の経営不振から閉館に追い込まれ、コレクションの散逸も起こっている。国・公立館も相次ぐ予算・人員削減や独立行政法人化・指定管理者制度といった問題にさらされ、また経営面からだけの評価によって集客増を求められたり、管理委託か閉館かの選択を迫られているところも増えそうである。こうした状況下で美術館・博物館の存在理由を問い直し、教育普及や広報、来館者へのサービス向上などが見直されたのは良いことでもあるが、やや浮き足立った感もある揺れ動きを経て、最近では「美術館・博物館にとって大事なのはやはり作品や資料などのモノである」とか、「子供向けイベントもやるけれど、本来は大人のためのものだ」とか、「学芸員が研究に基づく展覧会や収集などを重ねて得た評価や信頼が、将来の活動のための財産にもなるのだ」といった声があらためて聞かれるようになってきている。

こうした中でメナード美術館のことを考えると、たいがいの公立館が恐れ入るほど本当に素晴らしい作品を持ち、所蔵作品をベースにした展覧会をずっと継続しておられる。また傍目からではあるが、景気の上下によって浮かれたり慌てたりといった様子も無いように見受けられる。ここに館としてのしっかりとした姿勢・方針と、村上さんをはじめとする職員の方々のお力を感じ、その実際を特に伺いたいと思いインタビューをおこなった。



深山：まずは村上さんがメナードの学芸員になられたいきさつをお伺いしますが、たしか村上さんは大学では美術でなく考古学を学ばれたんですよね？

村上：ええ。最初は作家の名前もよく知らなくて。

深山：そこから出発された村上さんの中で、どのようにして美術館像が形づくられていったのでしょうか。また転換点などはありましたか？

村上：博物館のように文化的な仕事への憧れはありましたが、そんなに勉強もしていなかったので(笑)、地元の名古屋に本社のある企業に勤めたいと考え、名古屋から全国に発信していたメナードで化粧品の仕事がしたいと思って就職試験を受けたんです。その履歴書に「学芸員資格取得予定」と書いたところ、丁度美術館をつくるのでどうかと。今年で開館17年ですが、オープン年の4月に入社して10月下旬に開館というタイミングでした。私は怖いもの知らずで「既に誰か美術の専門家がいるのだろう」と思い、会社も「若い女性なら受付とかもできるだろう」と、互いに割合気楽に考えたのではないかと。

深山：以前は受付の方々と同じ制服を着ておられましたよね。

村上：制服を脱げたのはつい最近で。で、入ってみたら学芸員も経験者もいなくて、前館長と二人で手書きの作品台帳づくりから始めました。

深山：既に作品収集はだいぶ進んでいたんですね。

村上：先にまとまったコレクションがあり、企業として社会に貢献するという考えで美術館をつくろうと。未経験の私にはこれだけ作品があったのが有り難く、貸し借りを通じて他館の皆さんから教わってきた感じです。

深山：他館から貸し出しを依頼される作品の多いことは美術館の強みになりますものね。ところで、専門家がいなかったにしては、建物もいいですね。

村上：リサーチはちゃんとしていたようです。17年使って不便なところもありますが、内装や外観など流行に乗らず、いつ建てたのかわからない、古さを感じにくい建物ですね。コレクションをベースにして、心地よく落ち

語る

メナード美術館学芸員

村上久美
(美術史)

聞く

愛知県美術館主任学芸員

深山孝彰
(美術史)

着いた空間を考えて資材やクロスなどを選んだ結果だと思います。

深山：「心地よく落ち着いた」という意味では、入館者数も丁度良い？

村上：入館者数の浮き沈みもあまりありませんね。ただ最近は常連のお客様が決まってきていて、新規が少ないのはちょっとさみしいかもしれません。

深山：開館時のことに戻って、作品の配置なども村上さんがお考えに？

村上：オープン時にはスタッフが倍になりましたので、といっても4人で学芸員は1人でしたが、みんなでいっしょに。

深山：愛知県美の準備室時代もそうでしたが、みんなで一丸になってやれる時期はいいですよ。

村上：学芸以外のスタッフは6～7年で代替わりして、いま2・3世代目です。ずっといる私などは、時々どこかが代わることで見方や考え方も変わって、気づかされることもあります。全然違う業種から配属される方は最初は難しいと思いますが、それまでも常にプロとして仕事をされているので、相手がなんだろうとやると。美術も好きになり興味を持たれて、半年くらいでペースをつかんで下さいますし、転出後も美術館巡りとかされているみたいです。美術館は、学芸員とか専門職だけのものではないと思います。その点、公立館の事務の方々々が2～3年で移られるというのは短いかもしれませんね。

深山：新任の上司が急に「改革せよ」とか言ったりしませんか？

村上：トップ(オーナー)がかわらないので、管理層が代わったからといって大きなチェンジはありません。

深山：さて、展示・展覧会の方針はどのように？

村上：当初はコレクションを常設的に、という考えでしたが、数ヶ月のちにはお客様から「違うものも観たい」という声。そこでただ中身をかえるだけでなく、展覧会名としてもわかるように。年に6本、60～70点の規模なんです。所蔵品をどう観ていただくのかということで、自分たちが「こういうテーマなら面白いんじゃないか」とか、美術史的と



いうよりも一般の人が観たいと思うようなテーマを考えて、次にそれが展覧会として成り立つか考えます。テーマによっては30点くらいがいいものもありますね。

深山：学芸員は「美術史の流れを見せる」とか考えがちですが、一般の皆さんは勉強が目的ではなく、自分の心に響く作品を求めて美術館に来られるわけで、その作品をより理解したいと思われたときのお手伝いの一つに美術史があるのかな、という気がします。それにしても、展覧会を切れ目無く続けるのは大変ですよ。

村上：毎年「もうダメ、来年はホントに何も出ない」と思うんですが、なんとか。春先か夏に決めるんですけど。

深山：展覧会をなさってきた問題点とかはおありですか？

村上：自分のやりたいことが実現できるのはいいのですが、その反面ふた月に1回だと、いくら小規模とはいっても一つのことが落ち着いてじっくりできなくて。きちんと調査し、まとめ、文章にすることができてこなかった。今では(今でも)どこかに引っかかっているのですが、なかなかできない状況です。【深山註：村上さんが芸術文化センターのアートライブラリーで調べものをされているところはよく拝見します。】最近保存の仕事も重要で、コレクションは数もジャンルも広いので

ますます……。

深山：先週までバルセロナでのピカソ展クーリエとして10日間出張されて、2日寝られない行程だったとお聞きしましたが、これまで特に苦しかった思い出などは？

村上：忘れっぽいのか、いつも次に向けて必死で、忘れちゃう。幸いなことにこれまで大きなアクシデントもありませんでしたので。

深山：どんどん忘れないと生きていかれませんよね。ではあとお悩みとかご希望としては、男性学芸員が根付くことくらいでしょうか(笑)？

村上：私たち女性だけだと、実際作品を運ぶのも大変で。でも、私などは言われたことは仕事だと思ってやるんですが……。

深山：学芸員に夢や誇りがいっぱいの人には「こんな仕事のはずではない」と思っちゃうんでしょうかね。

深山：教育活動についてはいかがですか？

村上：最初に「大人の美術館」とおっしゃいましたが、この10年を見ていて一番大きく動いてきているのは、子供への教育に皆さん力を入れておられるなど。実際のところ私は子供にはほとんど携わってなくて、学芸員ではないけれど元教員のスタッフが基本的にやっています。ただ「これは学芸員の仕事ではない」と思っているわけではなくて、色んな形でみんなが美術館に携わるということです。一方、子供教育だけが先行していくやり方には、正直言って疑問も。子供向け展覧会というのももちろんあるとは思いますが、時々子供向けの表示が目立ち過ぎていて、作品を大人が観る環境としては、ひよっとしたら行き過ぎかな、と思うこともあります。特にこの館では、環境づくりもそうですけれど、ある程度大人といますか広い年代層の人が来て、美術作品をゆっくり観て楽しんでいただく、べつに何かを学ぶとか勉強にというのじゃなくて、好きな作品を1点でもいいから見つけていただくとか、空間がいいなと落ち着いていただければ、というつもりがあるので。よく「日本人は美術館でのマナーが良くない」と言われますが、美術館や博物館に慣れていないのだと思います。欧米の人なんかは展示室でし

ゃべっていても苦にならない。日本では黙ってなくちゃいけないという感じですが、もう少しリラックスして意見を話し合える自然な空間になるためには、子供時代からの教育は大事だと思います。教育的なことしつつ、メナードとしては、大人の人が来たときに作品を自然にみられる環境を持ちたいと考えているところです。

深山：僕もこの頃は、大人と子供が別でなくて家族とか、それも大人が子供を連れてくるだけじゃなくて、子供が親を連れてきたりして自然に楽しめるようになるといいな、と思っています。

深山：最後になりますが、愛博協について何かご意見は？

村上：すみません。最近なんにも出ていなくて。けれど、バルセロナで京都国立近代美術館と長崎、彫刻の森、埼玉と5館の学芸員が揃いまして話をしてみましたら、愛知県の博物館協会はしっかりしていていいですね、と言われました。深山さんもよそから言われませんか？

深山：言ってもらえた記憶はありませんが、形式だけの集団ではないし、普段は美術館同士でばかりものごとを考えがちですが、本当に様々な館があって、それぞれ異なる立場からの見方とか、学ぶところが多いですね。では、お忙しいところありがとうございました。

<インタビューを終えて>

お話を伺い、メナード美術館さんがやりきちんとした理念のもとで環境づくりにつとめておられることが確かめられました。はじめの方でおっしゃった「社会貢献としての美術館」という考えなどは、本来行政や公立施設が当然もっていなければならないものはずで、これからの美術館・博物館のあり方にとって一つのお手本になるようにも思いました。また、お客様が美術館に何を求めておられるのか、美術館は何を提供できるのかを見定めることや、学芸員だけでなくスタッフ全員がプロ意識を持って館を運営することの大切さもあらためて感じました。

神社の博物館 昔・今そして未来へ



熱田神宮宝物館学芸員 **野村辰美**
(考古学)



徳川美術館学芸員 **並木昌史**
(日本文化史)

昭和41年(1966)開館の熱田神宮宝物館は、愛知県下でも数少ない神社附属の博物館である。国や県の指定品176点を含む、古神宝類や刀剣、和鏡、古文書、舞楽面や什器など約4000点にのぼる貴重な文化財を収蔵している。博物館の活動としては、新春の特別展をはじめとする展覧会を開催しているほか、特別展に伴う図録の発行や、熱田神宮に伝えられてきた文書を紹介する『熱田神宮史料』の編纂も続けられている。今回インタビューでお話をうかがった学芸員の野村辰美氏は昭和53年(1978)の奉職。学芸員生活の長い野村氏から、熱田神宮宝物館の歩みと現在、そして今後についてお話をうかがった。



最初に個人的なことからお伺いして恐縮です。学芸員を志望した理由は？「やはり博物館が好きだから、です。(笑)」学生時代は日本史専攻で、課外活動で考古学を学び、発掘の経験もありとか。神宮奉職後、宝物館で学んだことは多かったのでは？

「宝物館に入って、分野が広がりました。宝物館の収蔵品は、1 神宮のお祭りに使う祭器具 2 古代から現代に至る、多くの崇敬者から奉納された神宝類や奉納品 そして3 神宮や、大宮司家や神職の家に伝えられた歴史資料 の3つに分けられます。これらを調査するわけですから、さまざまな事を学びます。現在でも奉納品をお受けしており、奉納品が文化財の場合は、私達が事前に調査させていただきます。」

長年の学芸員生活の中で、大事にしていることは？「資料の持つ内側や、背景を調査することです。」現在関心のある博物館活動は？「展示・教育普及にも関心をもっています。」

今までの宝物館勤務の中で、とくに頑張ってきた活動は？

「いろいろありますが、私の場合は史料調査ですね。なかでも熱田神宮の歴史にかかわる文書典籍の調査、『熱田神宮史料』の出版が中心です。」

奉職当初は宝物館配属であったが、のちに

歴史編纂の担当へと配属替えとなり、宝物館に関する業務は「従」の立場へと変わった。「ただし全く無関係になったわけではなく、今でも展示作業や企画展の立案に加わります。」

「宝物館の職員の皆さんは、神職のお仕事も兼ねていらっしゃるのでは？」という素朴な疑問をお持ちの人も多いだろう。私もそんな疑問を持つ一人である。

「学芸員の仕事を専門にするかどうかは配属次第で、宝物館の学芸員も白衣を着けて授与所に立つことがありますし、神職の務めをしている職員の中にも学芸員の資格を持っている人がいます。私は神職の資格はもっていませんが。」とのことである。

熱田神宮宝物館は、毎年自主企画の特別展を開催される、日本各地の神社博物館の中でも数少ない館である。特別展の開催にあわせて図録も作製されている。年末から新年にかけての参拝客の多い時期に特別展を開くには、さまざまな苦労もおありのはず。

「特別展の開催は、昭和41年の開館当初からのならいす。熱田神宮名品展を始め多くのテーマ展を手がけてきました。お正月は参拝客向けの展覧会を開きます。」

元旦は朝8時の開館で、閉館は午後5時。「かつては年明けと同時に開館したらしいのですが、今ではいつもより早く開けて、遅く閉める程度です。もちろん職員は前日の夕刻から神宮に詰めていますから、のどかなお正月とは無縁です。宝物館とはいえ、神宮の行事と無関係ではあり得ません。」

お正月といえば、今年は温暖な年始のためか、熱田神宮では昨年に比べて参拝者が増えたと聞く。多くの美術館・博物館が、入館者数の減少に頭を痛めている。新春特別展の入場者数や年間の入場者数の変動はいかがでしょうか？

「神宮の参拝者は、年間800万人を数えます。そのうち1月だけで約300万人、3日だけでも280万人のお参りがあります。ところが残念なことに、宝物館の入館者はその1割にも満たないのです。それでも、一年の中で一番入館者の多いのは1月です。」

「ここ近年の入場者数は、大幅な増減はなくほぼ横ばい。」

「一月以外では、秋10・11月の入館者が多いです。あと、夏も意外に多いです。夏は大人・子供を問わず休暇がありますから、入館者も多いのです。さらに小・中学生が夏休み自由研究で、大学生がレポートで調べに来ますから、そのため、この頃では企画展は熱田神宮の歴史に関するテーマで開きました。」



宝物館のある熱田神宮文化殿の活動では、「緑陰教室」が有名だ。長い歴史をもつ子供向けの夏休み企画として広く知られている。

「7月から8月にかけての3週間に、小学1年生から6年生までを対象とした林間学校〈緑陰教室〉を開きます。今年は700名の参加がありました。そのうち5・6年生の生徒を宝物館に案内し、約一時間かけて企画展を見学してもらいました。子供が興味を持つように、わかりやすく説明するのは難しい(苦笑)。」

万博期間中の展覧会や特別企画はありますか？

「いろいろ企画を考えていますが未確定で、発表するまでには到っていません。万博を訪れる人にアピールできる展覧会を、と考えております。」

「名古屋市の観光担当に聞くと、観光スポットの絵はがきを用意している中で、人気があるのは名古屋城や熱田神宮、徳川美術館だとか。観光スポットとしても注目されているのを感じます。」当方にとっても心強い、ありがたいお話だ。「ただ、数日前に読んだ新聞記事によると、浜名湖花博の会場こそ賑わったものの、周囲は閑散としていたそうですから。」

熱田神宮宝物館の抱える今後の課題は？「たくさんあります。たとえば、名古屋市内の観光スポットで、諸外国からの観光客も多い。外国語による案内も必要になってきます」との由。

神宮を訪れる人に対して呼びかけたいことは？「見ていただきたいと思う物は？」

「単なる〈お蔵〉ではない、博物館の存在を広く知ってほしいと思います。さらに欲を言えば、気軽に来ていただき、わからないことがあれば質問していただけたら、と思っています。展示室が賑やかで、活気があるのもよいと思います。」

「熱田神宮が伝えてきた様々な文化財、なかでも刀剣を見ていただきたい。刀は日本人にとって精神的な価値をもつ存在で、単なる武器ではない。男性だけではなく、女性も身に帯びた懐剣や短刀は自分の身を外敵から守るだけではなく魔を払う意味もある。近代に

「磨刀令が出され、もはや武士の世の中とはいえないが、往古の刀匠たちが心を込め、技術の粋を尽くして作り上げた刀剣の姿を、ぜひ見ていただきたい。」

「日本各地の神社に附属する博物館のネットワークはありますか？」

「ないです。先日も神宮徴古館(三重・伊勢神宮)の方とくあるとよいですね」と話していたところですが、具体的な企画はなく、雑談の域にとどまっています。」

私がこの質問を発した理由は、この夏、京都府下の神社が所蔵する文化財を一堂に集めた「神道美術」展(京都府神道青年会主催)が京都国立博物館で開催されたのを話題にしたかったからである。由緒ある古社の多い愛知県の神社界にも刺激になったのでは、と思っていました。

「ずいぶん以前ですが、当宝物館でも「尾張五社展」を開催したことがありますし、神道美術全般をカバーしていませんが、絵馬や狛犬、仮面、銅鏡を県下の諸社から拝借して、数度にわたり展覧会を開いたことがあります。」全く知らなかったのは私の不勉強でお恥ずかしい限りである。ただ長年にわたって、調査を着実に続けてこられ、成果を展覧会で紹介されてきた宝物館の活動には、ただ敬服するのみである。

愛知県博物館協会のことで質問をします。実行委員時代の思い出を。

「実行委員は平成の初めから2年半くらいしていました。実行委員時代には、様々な人と交流することができました。実行委員をしていたときの、年3回発行の「あいちの博物館」の編集は面白かったですね。」「電気文化会館のスタッフが熱心に参加していたのが印象に残っています。実行委員以外のメンバーも協力的であったし、ユニークな人が多かった。あと明治村や犬山モンキーセンターの人も印象に残っています。廣瀬先生や中野さんのこともよく覚えています。」

「実行委員をしていたときの体験談で、今だからいえること、苦勞したこと、失敗したことなどありますか？」

「いろいろありました。忘れられない失敗



もあります。文字になって残っているので心残りですが、詳しくは触れないでおきます(苦笑)。」

最後に、これからの愛知県博物館協会に望むことは？「常に明日の博物館を考えることが重要」と力説された。

インタビューを終え、参拝客で賑わう参道を通り抜け、宝物館の展示室をご案内いただいた。うかがったお話を念頭に置いて展示を拝見しながら、作品の着実な調査研究と、その成果の公開、さらには教育普及が大切であること。いずれもごく基本的な仕事であり、博物館である以上、そのいずれもが欠けてはいけないということを痛切に感じた。

「ミュージアム・マネージメント」の視点をもて

UFJ銀行貨幣資料館(旧称は東海銀行貨幣資料館)は、昭和36年(1961)6月に東海銀行創立20周年を記念して東海銀行本店内に開設された「貨幣展示室」を前身とする。昭和55年(1980)7月に本店北側にある御幸ビル1階へ移転し、拡充された。平成14年1月、広小路通りに面したかつての東海銀行の旧本部ビル(名古屋市都市景観重要建築物)へ移転し、現在に至る。

館内には古今東西の貨幣資料およそ1万点が展示され、「お金の歴史」がわかりやすく、楽しめるように構成されている。加えて歌川広重の「東海道五十三次」や「名所江戸百景」などの浮世絵コレクションを所蔵するなど、特色ある企業博物館として名高い。愛知県博物館協会加盟館の中でも、異彩を放つ博物館だ。

いや、異彩を放っているのは、この貨幣資料館の運営に携わってきた副館長の工藤洋久さんご本人かもしれない。工藤さんは昭和29年(1954)5月24日の福岡生まれ。生粋の博多っ子を自認し、かなりのいたずら小僧だったようだ。高校生時代は文化祭で学校のグラウンドで登呂遺跡の竪穴住居を復元したり、遺跡の発掘調査に参加するなどの歴史好きであったという。大学は経済学部に進学され、昭和52年(1973)に東海銀行に就職された。

3年ほどの支店勤務を経て、前述した昭和55年の貨幣資料館の移転に伴い、館の運営スタッフに配属され、現在に至る。私は、工藤さんが「銀行員」と「学芸員」の2つの顔を使い分ける方と思い、興味をもってインタビューに臨んだ。しかし、大柄で常に背筋を伸ばす工藤さんは「いや、僕はね、銀行員、ビジネスマンですから。」と語る。銀行がもつ貨幣資料館をそこの銀行員が運営を命じられ、銀行員が学芸員というスキルを身につけて業務に携わる。工藤さんのこの姿勢は一貫している。工藤さんは銀行員のスキル・アップとして行政書士をはじめとして様々な資格を取得されている。学芸員はそのスキルのひとつに過ぎない。「企業博物館の学芸員は多かれ少なかれみなそうですよ。」と工藤さんは笑う。

銀行本店の中にあつた貨幣資料館が一般の方々の眼に触れるようになり、貨幣資料館の

有効活用が課題となってきました。広報展開や施設運営の諸問題について考えるようになってきました。悩みましたよ。企業の社会貢献活動のひとつとして施設を運営するわけですから。施設の運営ソフトについてのノウハウなんて、銀行は組織の論理として持っていませんしね。最初からイレギュラーな存在ですよ。銀行ですからハードの施設管理のノウハウはありますけどね。

わからなかったから、いろいろな博物館にお邪魔してお話をうかがいました。その頃は独身でしたから休みの日に出かけたりしてね。他の博物館は自分が休む土・日曜日でも開館していますから、これは助かりましたよ。(笑)

愛知県博物館協会に加盟したのもそのためです。銀行内では当初、加盟することへの必要性に対して疑問が少なからずありました。私は、貨幣資料館の運営ソフトのあり方を他館との交流で学ぶためにも加盟すべきだと思い、説得にまわりました。昭和50年代はね、こんな時代でしたよ。今では当たり前のことですけれどもね。

工藤さんが貨幣資料館に配属されたときには、収蔵資料の根幹は整っていた。しかし、「お金の歴史」を語る上で欠かせない資料の収集を進められ、収蔵資料の充実を図ってこられた。ヨーロッパ最古の貨幣である「リュディア王国のステーター金貨」(紀元前7世紀)などはその一例という。充実してきた資料の活用も課題になってきた。広く浅くてもいい、より多くの一般の方々に見ていただき、お金の歴史を知ってもらい、貨幣を通じて自分たちの社会生活を見つめ直す場を提供できれば——。そんな気持ちを工藤さんは強く抱き、資料館全体の運営を考える「ミュージアム・マネージメント」の必要性を痛感されたという。

当時、そのような思いをもって、私が他の博物館の学芸員さんに運営上の疑問点についてお話を聞きにいったら、事務屋が聞きに来た、という反応になるわけです。その一方で、実際の資料の取り扱い方や勉強の仕方も聞くわけです。そうしているうちに、学芸員の資格を取ったらどうだ、ということになりました

語る

UFJ銀行貨幣資料館副館長 工藤洋久^{註1}
(貨幣)

聞く

高浜市やきもの里かわら美術館学芸員 天野卓哉
(考古学・工芸史)

た。仏教大学の通信教育で資格が取得できると教えてもらい、学芸員資格を取りました。学芸員資格を取得したといっても、その片鱗がわかったぐらいが実情です。でも他館の学芸員さんの態度は変わりましたよ。

自分は研究者になろうと思って勉強してきたわけではありません。学芸員資格を取って勉強していかないと仕事になりませんから。この点が自分と他の博物館の学芸員さんと違う点です。学芸員になるための入り口と、なるための視点が異なります。特に公立博物館と大きく違うのは、組織として教育施設が必要だから博物館や美術館を設置しよう、学芸員を採用しようという発想が私たちの民間企業にはないことです。企業文化・社会貢献活動の観点から施設運営の方針が決定されると、ここにコスト意識、費用対効果の発想が限りなく求められてくるのです。あくまで本業が収益を上げないと運営できないわけですから。

博物館を設立した組織の違いが視点とか発想の違いにつながっていきます。愛知県博物館協会で大変お世話になった故廣瀬鎮先生は博物館学の講義で、博物館の運営組織の違いによる各々のスタンスの違いを学生にお話をなさっていました。廣瀬先生はその組織を大きく5つに分類し、(1)公立系、(2)宗教法人系、(3)企業系、(4)財団法人系、(5)個人系とされていました。企業系の博物館として、よく貨幣資料館にお越しいただき、講義をされていました。私も学生さんを前によくお話ししました。後で先生に学生の反応をうかがうと、「諸施設の中で君の話が一番シビアだと受け取られているよ。だから学生を連れて来るんだけれどね。」とよく言われました。(笑)

次に工藤さんに学芸員としての思い出を語っていただいた。

学芸員として一人前の仕事ができるようになるのは10年間かかると、愛知県博物館協会に教わりました。この経験値が自分でも当てはまったことに気付かされたことです。

貨幣資料館の仕事も10年が立ち、東海銀行創立50周年記念事業として『風景版画の巨匠 広重』の編集に携わり、平成3年(1991)に刊行したことです。貨幣資料館が所蔵する浮



註1
平成17年3月1日よりUFJ
銀行貨幣資料館館長

世絵コレクションを図録にまとめる仕事でした。浮世絵研究の一流の先生方に総論や作品解説をオリジナル原稿でお願いし、国内ばかりでなく海外にも配布することから英訳も併載するものでした。ある先生から「君、これは構想が大きすぎて無理だよ。」といわれました。本のサイズにも気をつかいました。本棚に飾ってもらえ、末永く利用していただけるように配慮しました。銀行全体を背負った仕事でしたから、さすがの私も胃潰瘍になりました。50周年事業など2度と経験できないことですからね。

この浮世絵コレクションは、平成3年の6～7月にかけて名古屋市博物館と東海銀行貨幣資料館が共催して特別展「広重—東海道五十三次・名所江戸百景の世界—」で公開されました。このときはおもしろかったですよ。会期中1日を残して図録は売り切れるし、普段は見かけないビジネスマンの来館が多くて、名古屋市博物館が驚いたことです。「それはそうさ、東海銀行の名前を背負った仕事だよ。」と思いました。ただし、名古屋市博物館さんにはかなりご迷惑をかけたとは思いますが。(笑)

展覧会としては、平成元年(1989)に「ルネッサンスと桃山時代の貨幣展」、平成9年(1997)には「近代紙幣の父 お雇外国人キョッソーネ没後100年展」を開催することができたことも意義あることといえるでしょう



か。このときは、愛知県博物館協会の加盟館のみなさんには大変お世話になりました。ここにこういう資料があるよ、写真原板はあそこにあるよ、一言いってもらえれば連絡とりますよ、などという多くの協力をいただくことができたことは非常にありがたく思いました。こうした経験が、平成8～13年まで東京の銀座支店の上で運営していた「銀座東海ギャラリー アート広重」に大変役に立ちましたね。

続けて工藤さんは、学芸員として視点や発想を切り替えることの必要性も説かれる。

学芸員は専門性が必要ですが、専門的であるために思わぬ見落としがあるものです。ときには違うジャンルの方に相談してみると意外な発見もあるものです。

例えば、コストについて考えてみるとまた

違った発想が生まれてきます。貨幣資料館の資料のレプリカ制作や写真撮影、借用などの依頼はよくありますが、それにかかる費用で、資料によっては良好なものが何点も買える場合があります。実際は予算の運用上、費目的に難しいところもあるでしょうが、何か違った方向性が見出せるのではないのでしょうか。狭い世界の中で物事を考えてはいけませんよ、ということです。

工藤さんは「組織」という言葉を常に強調される。どの博物館も、組織の中に位置付けられ、予算が与えられて運営されているからだ。その組織の一員としての自覚と知識を持たなければ、博物館の総合的な運営はできないし、何よりも日々の仕事が回っていかない、と工藤さんは考える。工藤さんはこうも考える。学芸員は「雑芸員」でなければ双方向的な発想はできない、と。

今の博物館・美術館の今後について、工藤さんはどう考えてみえるのだろうか。

まずは、博物館に関わる職員が、その母体組織の一員であるという自覚をもっと持つべきでしょう。館内の各セクションがお互いを尊重しあった上でね。私は〇〇だけが専門です、私の仕事は□□です、などといったセクショナリズムがあると、全体のマネジメントを行うことができませんし、質の高い仕事にもなりません。

現在は不景気で、予算も人材も潤沢に確保できるわけではありません。だからこそ、質の向上が一層求められる時代になっています。そのためには社会の変化を学んでいく必要があります。社会の変化と博物館にいる我々の意識の変化、それぞれの速さはイコールではありません。むしろ博物館の我々が追いついていけないのが現状ですね。「外」の刺激、博物館を見に来ていただく方々の社会感覚、施設を運営する上での社会感覚を学び取らなくてはならないわけです。その感覚を博物館からリサーチをかけていかなければ得られません。そうでなければ質の向上は望まれません。

また、限られた予算と人員という制約がある以上、特色を強化して弱点を補う発想が必要です。そして、何から取り組むのかという

判断の問題になってきます。民間企業だったら当たり前な行動ですよ。全体を見渡さなければ生み出せない考え方ですよ。だから私は「ミュージアム・マネージメント」、「プレイング・マネージャー」を心がけるわけです。

最後に愛知県博物館協会への思い、そして期待を工藤さんにお聞きした。

愛知県博物館協会は、私と組織を鍛えてくれた、その思いは十分にあります。私がかつて経験したように、他館との交流で刺激を受ける場に今後一層なってもらいたいと思います。私たちの世代がまがりなりにもがんばってきた(?)ように、若い方々が一所懸命がんばっていることを頼もしく思っています。若い方々が悩んでいる姿を見ていると清々しさを感じます。かつての自分を見ているなという意味ですよ。(笑)

ときにはユーモアたっぷり、ときには毒舌を交えながらお話いただいた。インタビューの途中、館内を案内していただいた折に私が「ここで貨幣の図録を販売すれば売れますよ。」と何気にいうと、工藤さんは嬉しそうに「銀行法ではね、銀行はモノを売ってはいけないんだな。知らなかったでしょう?」と教えていただいた。その笑顔は、かつてのいたずら小僧の博多っ子の笑顔そのままに違いない。

お忙しい中、お話いただいたUFJ銀行貨幣資料館副館長の工藤洋久さんにお礼申し上げますと共に、お話の内容が筆者の能力の許容量を超えてしまい、十分にまとめあげられなかったことをお詫び申し上げます。

学芸員奮戦記

- 尾西市三岸節子記念美術館／伊藤和彦
- 豊田市郷土資料館／伊藤智子
- 一宮市博物館／土本典生
- トヨタ博物館／西川 稔
- 豊橋市自然史博物館／長谷川道明
- 名古屋市博物館／武藤 真
- 一宮市博物館／毛受英彦
- 稲沢市萩須記念美術館／山田美佐子

私は地方都市にある美術館の学芸員です。学芸員は何でもこなさなくてはなりません。特に組織が小さいのでなおさらです。専門がなんであれ、与えられたミッションは成し遂げられなければなりません。そのために新たに勉強する、勉強しなおすことばかり。知識と視野が広がりありがたいことです。

さて、わが美術館はその地域においてどんな存在でありたいと思うかということについて述べてみましょう。

I・美術館のある街だということをもまず知っていただきます。

*そこには何があるのか？

*何をしているところなのか？

*入ることが出来るところなのか？ その方法は？

美術館の存在に関心のない人たちの疑問に答える必要があります。この建物が実は美術館という所ですと、とにかく周知することが必要です。

II・なぜあるの？という疑問に答えましょう。

これは美術館というものの存在の本質にかかわることになる大きな設問です。ここでは私が私的に持っている考えを述べるにとどめます。

*税金で購入した絵画を市民の方々に鑑賞していただく場所

*税金で購入した絵画を安全に保管しておく場所

これは美術館が存在している最低限の理由でもありません。しかし、これではハードウェアとしての美術館の存在理由について説明しているにすぎません。美術館のソフトウェアとしての存在理由も必要になります。

*収蔵品を鑑賞することから美術全般に関心を持つようになる。

美術の世界への第一歩がわが美術館であったというのなら本当に嬉しいことです。

「地域社会における文化の中心として美術館がある」のです。

III・スペースとしての美術館が文化の中心となるために何をなすべきでしょうか？

ここでは文化とは何かということまでは言及しません。美術や音楽をおもな範疇に考えます。

*収蔵品、作家の研究に励み、その成果を市民に発表する。

*ジャンルにとらわれることなく、美術に関する展示会を開催する。このとき市民を啓蒙しようなどとは考えないように。

*たまには学芸員の感性でちょっと危ない特別展もする。しかも失敗しないように鋭い感性で計画されなければなりません。入館者が少ないとこの手の展示は以後、当分計画できなくなる恐れがありますから。

*表現方法が違うだけで音楽も芸術。空きスペースを利用して市民が気楽に参加できるコンサートを開く。

*ここで表現され、展示されるものは質の高いものでありたいのです。そのためには学芸員にも質の高さ、教養の深さが問われることとなります。そのための研修、研究も継続的に必要です。

*空きスペースを市民の表現発表の場として提供する。

*子どもたちをはじめとして市民向けの講座を開講する。

「あそこに行けばあの絵に逢える」

いつでも気楽に訪れることの出来る、やすらぎのスペースでもありたいと思っています。

「そこにあるだけで美術館」

そんな美術館が理想です。この美術館は何処にも存在していません。私の心の中にある美術館を構成してみました。

そこにあるだけで

美術館

尾西市三岸節子記念美術館
学芸員・館長補佐
伊藤和彦
(考古学)

「塩鮎」再現の試み

豊田市郷土資料館
学芸員
伊藤智子
(歴史学)

豊田市内を貫流する矢作川。ここで採れた鮎が江戸時代、塩漬けにされて江戸の将軍家に献上されていた。この「塩鮎」を再現しようという試みが特別展「川をめぐららし」(平成14年開催)に際して行われた。きっかけは「献上塩鮎仕立方覚」という古文書におおよその作り方があった事である。さて、漬け桶を注文し、畳表を手配、天然の塩は手に入ったもののやはり、天然の鮎をそろえるのは無理。やむなく、養殖鮎50匹を塩に漬け込んだ。20日後、塩を洗って天日干しにした後、新しい塩を入れて箱詰め。献上用は渋紙で包み琉球表で上包みされ江戸へ運ばれるが、ここでは、展示用。各作業工程を撮影したパネルと共に展示することとなった。

完成した塩漬け鮎は簡単に塩抜きをして焼いてもあまり美味しいとはいえない味であった。しかしここから館でも思わぬ方向へ事態は展開した。それは豊田市にある矢作川研究所がこの試みに興味を持ってくれた事。研究所は、毎年鮎の遡上調査や水質調査に加え、「きき鮎会」を行い川による鮎の味の違いまで調査を行っている。研究所では「矢作川の鮎の食べ方に、こんな歴史があったとは」と、塩鮎の食べ方を研究

し、市内の料理店の方の協力も得て、塩抜きの方法や料理方法を試作、天然鮎と養殖鮎との味の比較も行ってくれた。こうして上手に塩抜きをすれば現在食べるおおよその魚料理はできる事がわかった。こうして特別展のオープニング時に塩鮎の雑炊が供された。

塩鮎は、塩で水分が抜けて乾燥した状態となる。展覧会后、私の個人的な興味は、この塩鮎がいつまで持つのかという点にあった。密かに保存された塩鮎は、翌年鮎釣の解禁が報じられるのを待って塩から出して食べてみた。ほぼ1年後の鮎は予想どおり美味しく食べる事ができ、十分に保存できる事もわかった。

今回の『塩鮎』再現の試みは、館の活動が他の研究機関、民間の活動とうまく結びついた一例であると思っている。



Go! m & S! m

(自問自答)

一宮市博物館
学芸員・課長補佐
土本 典生
(考古学)

今まで研究機関・教育機関と考えられてきた大学も、少子化の影響や国立大学の独立行政法人化をきっかけに、なだれを打つようにカルチャーセンター的なある種のサービス機関に変化してきている。そして市町村の発行する広報、公報の類にも、広告が掲載され、さらには駐車違反の取締りも民間に委託されるような時代となってしまった。流動化の時代の到来である。

私たちの周辺の公立博物館・美術館界でも、講演会、講座、公演、体験イベントの開催といった観覧者参加型の行事の実施や、学芸員をツアーコンと見まがうような見学ツアーの実施など、ミュージアムのアミューズメント化が顕著であるといえよう。

この背景には、指定管理者制度の導入や、嘱託学芸員という雇用形態の創出といった行政サービスのアウトソーシング化の波があり、学芸員自身の危機感、さらに言えば学芸員という職務の存在意義をかけた戦いをその中に垣間見ることができよう。

従前、学芸員の行っている業務は、世の中で忘れ去られた昔の資料を、ひっそりと後世に伝えていくというさして目立たないものであった。ところが学芸員という業務が行政の中で確立さ

れ、光があてられると同時に、今度はこうした改革のうねりと戦う必要性に迫られている。博物館の中でじっくり資料を整理・研究し、その研究成果を展示するといった前時代的な考え方では、学芸員という業務の生き残りは不可能なものと思われる。

優品を鑑賞するという機会を創り提供していくことは、博物館の責務であるが、かといって、全国を巡回するパッケージ化された展示を買って特別展と銘打って実施するのみでは何の芸も無い。確かに入館者数、あるいは経費など目に見え易い面でこうした展示の効果は大きく、その必要性は認められよう。しかしながらそれ以上に私たち学芸員に求められていることは、観覧者の皆さんに、本物を見る楽しさ、触れる喜び、本物に出会う感動を伝えることである。今一度こうした基本に立ち返った上で、博物館・美術館の存在・活動を各方面にアピールしていくことが求められているのではないだろうか。

企画展

「国産自動車誕生100年」

展を開催して

トヨタ博物館
学芸員・課長
西川 稔
(自動車史)

愛知県博物館協会40周年おめでとうございませう。

10数年前に「学芸員懇談会」という会があり、私も参加させていただいた。各館の学芸員の方々と食事をともにしながら、さまざまなテーマごとに話し合ったことが、つい昨日のこのように思い出される。思えば、忙しい毎日だったが、互いに将来の夢や希望を語り合ったものだ。テーマのひとつに確か、「21世紀の博物館活動、企画展」というのがあったと思う。この稿では、当時は遠い未来だと思っていた21世紀に実施した企画展について報告したい。

2004年(平成16年)は、1904年(明治37年)に最初の国産自動車といわれている山羽式蒸気自動車が誕生して、ちょうど100年目の節目の年であった。そこでトヨタ博物館では、これを記念して企画展「国産自動車誕生100年 日本くるま意外史」を3月30日から7月4日まで開催した。

企画にあたっては、全国に点在する日本自動車史上、きわめて希少性の高い国産車をできるだけ多数集め、一堂に展示することを目標として、これまで培ってきた全国各地の博物館や企業、主要コレクターとのネットワークをフルに活用して、粘り強く借用交渉を進めていった。各館ともそれぞ

れ館の目玉車両であり、交渉はかなり難航したが、企画に賭ける熱意を感じていただき、多くの方々のご理解を得ることができ、展示車両12台のうち、「わが国に現存する車両はこれ1台しかない」と思われる車両が6台も集まるといって、充実した展示会を開催することができた。具体的には、現存するもっとも古い国産車・アロー号(1916年大正5年)をはじめとして、ゴルハム式三輪車(1920年 大正9年 模型)、京三号トラック(1936年 昭和11年)、筑波号(1937年 昭和12年)、ニュー・エラ号(1931年 昭和6年)くろがね四起(1941年 昭和16年)など貴重な車両を展示することができた。

なお、2004年はトヨタ博物館開館15周年の記念の年でもあった。今回の企画展は自動車史の節目を飾る展示会であると同時に、トヨタ博物館が開館以来15年間、それなりに成果をあげてきたことを内外に示すよい機会となったと思う。

学芸員懇談会の「仲間」とは今でも交流が続いている。ご紹介した企画展も何人かの方に見ていただいた。つくづく人と人とのつながりが交流の原点なのだ実感している。そのような意味で愛知県博物館協会が企画しているさまざまな研修会に、積極的に参加したいものだと思っている。

豊橋市博物館等

職員研究発表会

豊橋市自然史博物館
主任学芸員
長谷川道明
(昆虫学)

豊橋市には、美術博物館、二川本陣資料館、自然史博物館そして地下資源館の4つの博物館がある。この4館の学芸員と、それに動植物公園の獣医たちが毎年年末に自主的集い、各自の一年間の調査研究成果を発表しあう会がある。「豊橋市博物館等職員研究発表会」(通称「年末発表会」)である。この発表会は、互いの調査研究活動の発展促進と交流をひとつの目的としているが、今ひとつ、学芸員等の調査研究活動の内容を広く市民や一般の市役所職員に知ってもらうことも大きな目的としている。

平成6年に自然史博物館の職員のみで始めた第1回は、発表件数6件、参加者約20名であったが、その後、他館の学芸員も参加し、昨年(平成16年)は、発表件数11件、参加者は50名となった。まだ4館の学芸員すべてが参加しているわけではないが、発表件数、参加者数とも緩やかに右肩上がり続けている。市民や、市役所の他部署の職員たちも差し入れを持って聴きにきてくれるようになった。

地方の小さな博物館では、調査研究活動が軽視されがちなのは、皆実感していることだろう。地方博物館の研究活動が低レベルで、社会に浸透しない理由を、学芸員の個人的資質や、展示

や普及活動ばかりを重要視しがちな社会、組織の問題とするのはたやすい。しかしこれが改善されない根本には、学芸員がかかっている研究に、組織(博物館の経営母体)そしてなによりも市民からのコンセンサスが得られていないことにある。自治体が経営する博物館の場合、学芸員の給料は、いうまでもなく市民、県民からの税金によってまかなわれているわけであるから、当然ながら、学芸員の研究に身勝手な(自己満足)なものがゆるされるわけがない。国や県など大きな博物館なら、こうした点はあまりみえてこないかもしれないが、市町村の博物館では、学芸員の調査研究活動に市民からの支持をとりつけることが大切である。また、博物館学芸員の調査研究内容について、市民から評価を受ける機会が必要なのである。

「平成16年度から、名古屋市博物館を地域に根ざした博物館にしよう!」、きっかけは、そんなところだったと思う。博物館が位置する瑞穂通商店街振興組合と協力してイベントを行うというのが発端であった。手始めに夏祭り。七夕飾りに願いを書いて、昔懐かしの野外映画会。風船釣りや大道芸。盆踊りも一緒に行い、それはそれは賑やかだった。実をいうと、従来、商店街と子供会が開催していた夏祭りに、新たに博物館が加わったというのが真相である。新参者の博物館が参加するには手みやげがいる。それが、七夕飾りであり、大道芸であり、風船釣りであった。七夕は天白区の竹やぶまで竹を刈りに行き、大道芸は予算がないので芸人をなだめすかし、風船釣りは学芸員はじめ職員で行った。まさに、血と汗と涙で地域に溶け込もうと努力した次第である。地域に向かって一歩、前進である。

続いて、10月には「はくぶつかんのおたんじょうび」をお祝いした。昭和52年の10月に開館した博物館は、平成16年で27歳を迎えた。誕生日を祝うため、葛飾北斎が描いた百二十畳大の大達磨の複製を庭園に広げたり、江戸時代の曲餅つきを芸人に再現してもらったり、常設展

で落語を催したりした。この曲餅の際、博物館長と商店街の理事長が双方を代表して固めの杵を入れた。博物館と商店街は義兄弟?になったのである。

ここまでくれば、後は「行け! 行け!! どんどん」である。同じ10月には特別展「祈りの道」で取り上げた熊野古道の世界遺産登録にあわせ、「ぼくたち、わたしたちの宝物」というタイトルで近隣の幼稚園児たちの絵を博物館に飾り付けた。1月は餅つき、2月はひな祭りの伝統的なお菓子のおこしもんづくりなど食べ物関係のイベントも商店街と協力して行った。さらに1月の特別展「万国博覧会の美術」では、子供たちの絵の横断幕をアーケードに掲出した。実に盛りだくさんの企画をこなしてきたものだ。

だが、この一連の仕事は、実は有志という位置づけで行われていた。そう、我々は好きでやっていただけである。この実績を手を奮戦したことで、17年度は「いきいき博物館」という名目で一連のイベントが正式な博物館の事業となった。我々の奮戦が少しは実を結んだのである。これからは、どっぴりと地域に溶け込んだ博物館になりたいものである。

義兄弟の契り

博物館と商店街

名古屋市博物館
学芸員
武藤 真
(文書・典籍)

貧しくも美しく

燃え、ていたい

一宮市博物館
学芸員・係長
毛受英彦
(歴史学・美術)

一宮・尾西地方は昔から繊維産業が盛んで、特に毛織物によって一世を風靡した。「高校三年生」でデビューした当市出身の舟木一夫が国民的歌手として人気を誇った頃には繊維工場を舞台にした映画も作られ、本当に活気溢れる若者の街であった。開館にあたっては、当然繊維の歴史を大きな柱として船出したのであるが、その後次第に斜陽産業となってしまう、寂しいことに、繊維の時代は終わった、もう織機など観たくもない、という言葉すら耳にする。おそらく日本全国どこも似たような状況であろう。日本文化の礎である農業の継承問題も深刻だが、もうこの国では先祖が築いてきた事を引き継ぐことが困難になってしまったのだろうか。

博物館建設準備事務局の発足当初から愛知県博物館協会に加盟させていただいているので、もう四半世紀近くの間この世界にお世話になっている。あの頃は博物館建設ブームがピークを迎え、当市でも、すごく豪華な博物館が建てられた。昭和62年、バブル経済崩壊直前のことである。学芸員を志す自分としては世間から注目を浴びることなど想像もしていなかったので、建築学界をはじめこれまでとは違った世界の方々が多く訪れることになり刺激的な毎日であ

った。時を経て、今は逆風が吹いている。大幅な収支落ち込み、自治体そのものがやせ細っていく中、莫大な維持費のかかる建物に住んでいるがため肩身の狭い想いをしている今日この頃である。入館者数の減少が話題になるが、毎月他館から送られてくるポスターの量を見れば一目瞭然、博物館・美術館活動はすでに私たちの行動の許容量を超えているともいえる。観る側に立っても展示会はもっと少なくてよいと思う。昔は映画を観るにも本を捜すにも街へ足を運ばざるを得なかったが、今ではパソコン1台さえあれば一応の目的は達せられるので、よそ行きに着替えたりわざわざ手間ひまかけることが敬遠される風潮である。しかし、生のものとの出会いは予測できぬ発見があり、ときめきがある。その臨場感は換え難い。以前訪れた明方村立博物館(現明宝村)の印象は今でも忘れられない。村人達の持ち寄った3万点余りの資料が廃校の教室に整然と並べられ、それらモノ達の発する存在感は都会暮らしの私を圧倒したのである。

奮戦するのは

これからだ

稲沢市荻須記念美術館
学芸員・主査
山田美佐子
(近・現代美術)

1983(昭和58)年、稲沢市荻須記念美術館開館の年に採用された私は、2005年4月に学芸員生活23年目を迎える。開館20周年を過ぎたあたりから、過去を振り返る機会が多くなったが、最も辛かった学芸員一人ぼっちの時代は遥か遠くになりつつある。人間は忘却する便利な生き物である。

市は美術館の使命を深く考えることもなくブームに乗って建設したのねという当初の怒りも、20年経つと、よくこの自治体規模で建設し直営で運営してきたなと感心するし、大学卒で資格を持つだけの学芸員を一人採用して何もかもやらせようとしたのねという不満も、一人前になるまで待ってくれてありがとうございましたと感謝に変わっている。人間、年を取ると丸くなるというのは本当である。

今、独立行政法人に引き続き、指定管理者制度という公務員減らしの方策に市町村立美術館も直面している。少子高齢化で地方財政が破綻するからという紋切り型の説明で、施設管理を丸投げするのは、地域の文化を誰が守るかという問いかけすら省略する悪しき横並びである。私たちは、市民とともに文化を育成し、発信するという博物館・美術館の使命をあらためて確

認し、経済効率の前に文化が潰えるこの危機的な局面を真剣に討議する必要はあるまいか。愛知県博物館協会も、40周年の回顧とともに、これから40年、いや100年の博物館存続を考える時である。

日々の業務の中で、時には煮詰まることもあるが、外の空気を吸って、同じ痛みを分かち合う仲間と交流すれば具体的な方策が思いついたり、見えるものが変わったりするものである。幸い愛知県博物館協会加盟館は全国的に見ても人材と情報の宝庫であり、困った時には、何でも聞けるありがたい隣人たちである。自館の仕事で手一杯のときには、実行委員を出すのも大変だと思うが、共同作業を通じて得る連帯感は何ものにも替えがたい。学芸員が「奮戦しているのが自分だけ」という徒労感に陥らず、館職員全体で、また、他館とともに愛知県博物館協会全体で奮戦してこそ現状を打破することができるのではないだろうか。私自身も、右手に学芸員の専門性、左手に地方行政の知識を掲げて、奮戦するのはこれからだと考えている。

愛知県博物館協会加盟施設一覧

※のあるものは公立の施設 平成17年3月31日現在

番号	施設名	郵便番号	住所	電話番号
《名古屋地区》				
1	名古屋市東山動植物園	※464-0804	名古屋市千種区東山元町3-70	052-782-2111
2	古川美術館((財)古川会)	464-0066	名古屋市千種区池下町二丁目50	052-763-1991
3	徳川美術館((財)徳川黎明会)	461-0023	名古屋市東区徳川町1017	052-935-6262
4	楽只美術館((財)松蔭会)	461-0001	名古屋市東区泉一丁目17-28	052-961-3578
5	愛知県美術館	※461-8525	名古屋市東区東桜一丁目13-2	052-971-5511
6	森村記念館	461-0005	名古屋市東区東桜一丁目10-18	052-971-0456
7	産業技術記念館	451-0051	名古屋市西区則武新町四丁目1-35	052-551-6111
8	ノリタケの森クラフトセンター	451-8501	名古屋市西区則武新町三丁目1-36	052-561-7150
9	大一美術館	453-0843	名古屋市中村区鴨付町1-22	052-413-6777
10	大須文庫(真福寺文庫)	460-0011	名古屋市中区大須二丁目21-47(大須観音宝生院内)	052-231-6525
11	切支丹遺蹟博物館(宗教法人 栄国寺)	460-0016	名古屋市中区橘一丁目21-38	052-321-5307
12	名古屋市科学館	※460-0008	名古屋市中区栄二丁目17-1	052-201-4486
13	でんきの科学館	460-0008	名古屋市中区栄二丁目2-5	052-201-1026
14	電気文化会館	460-0008	名古屋市中区栄二丁目2-5	052-204-1133
15	UFJ銀行貨幣資料館	460-8660	名古屋市中区錦二丁目20-25	052-211-1111
16	名古屋市美術館	※460-0008	名古屋市中区栄二丁目17-25	052-212-0001
17	名古屋城	※460-0031	名古屋市中区本丸1-1	052-231-1700
18	名古屋ボストン美術館	460-0023	名古屋市中区金山町1-1-1	052-684-0101
19	昭和美術館((財)後藤報恩会)	466-0837	名古屋市昭和区汐見町4-1	052-832-5851
20	桑山美術館((財)桑山清山会)	466-0828	名古屋市昭和区山中町2-12	052-763-5188
21	サイクル・ギャラリー・ヤガミ	466-0044	名古屋市昭和区桜山町1-15	052-853-3281
22	名古屋市博物館	※467-0806	名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1	052-853-2655
23	熱田神宮宝物館	456-8585	名古屋市熱田区神宮一丁目1-1	052-671-4151
24	名古屋海洋博物館・南極観測船ふじ	※455-0033	名古屋市港区港町1-9 名古屋港ポートビル内	052-652-1111
25	日本独楽博物館	455-0801	名古屋市港区小碓四丁目452-2	052-383-9051
26	名古屋市見晴台考古資料館	※457-0026	名古屋市南区見晴町47	052-823-3200
27	衣の民俗館	465-0064	名古屋市名東区大針1-204	052-701-7568
28	荒木集成館(財団法人)	468-0014	名古屋市天白区中平五丁目616	052-802-2531
《尾張地区》				
29	一宮市博物館	※491-0922	一宮市大和町妙興寺2390	0586-46-3215
30	真清田神社宝物館	491-0043	一宮市真清田1-2-1	0586-73-5196
31	テキスタイル館	491-0931	一宮市大和町馬引字荒木15	0586-45-5121
32	愛知県陶磁資料館	※489-0965	瀬戸市南山口町234	0561-84-7474
33	瀬戸市歴史民俗資料館	※489-0069	瀬戸市東松山町1	0561-82-0687
34	國盛 酒の文化館	475-0878	半田市東本町2-24	0569-23-1499
35	かみや美術館(財団法人)	475-0017	半田市有脇町十丁目8-9	0569-29-2626
36	半田市立博物館	※475-0928	半田市桐ヶ丘四丁目7-3	0569-23-7173
37	博物館「酢の里」	475-0873	半田市中村町2-6	0569-24-5111
38	新美南吉記念館	※475-0966	半田市岩滑西町1-10-1	0569-26-4888
39	春日井市道風記念館	※486-0932	春日井市松河戸町946-2	0568-82-6110
40	津島児童科学館	※496-0072	津島市南新開町二丁目74	0567-24-8743
41	国宝 犬山城	※484-0081	犬山市大字犬山字北古券65-2	0568-61-1711
42	犬山市文化史料館	※484-0082	犬山市大字犬山字北古券8	0568-62-4802
43	日本モンキーセンター(財団法人)	484-0081	犬山市大字犬山字官林26	0568-61-2327

※のあるものは公立の施設 平成17年3月31日現在

番号	施設名	郵便番号	住所	電話番号
44	博物館明治村(財団法人)	484-0000	犬山市市内山1	0568-67-0314
45	岩田洗心館(財団法人)	484-0081	犬山市大字犬山字富士見町26	0568-61-4634
46	野外民族博物館 リトルワールド	484-0005	犬山市大字今井字成沢90-48	0568-62-5611
47	常滑市立陶芸研究所	※479-0822	常滑市奥条七丁目22	0569-35-3970
48	常滑市民俗資料館	※479-0821	常滑市瀬木町四丁目203	0569-34-5290
49	世界のタイル博物館・窯のある広場資料館	479-0823	常滑市奥栄町1-47	0569-34-6858
50	晴嵐館(財団法人)	483-8187	江南市大海道町青木22	0587-56-3170
51	尾西市歴史民俗資料館	※494-0006	尾西市起字下町211	0586-62-9711
52	尾西市三岸節子記念美術館	※494-0007	尾西市小信中島字郷南3147-1	0586-63-2892
53	小牧市歴史館(小牧城)	※485-0046	小牧市堀の内一丁目1	0568-72-0712
54	メナード美術館	485-0041	小牧市小牧五丁目250	0568-75-5787
55	稲沢市荻須記念美術館	※492-8217	稲沢市稲沢町前田365-8	0587-23-3300
56	東海市立平洲記念館・郷土資料館	※476-0003	東海市荒尾町蜂ヶ尻67	052-604-4141
57	東邦ガス・ガスエネルギー館	476-8501	東海市新宝町507-2	052-603-2527
58	鍛造技術の館	476-8666	東海市荒尾町ワノ割1	052-603-9383
59	大府市歴史民俗資料館	※474-0026	大府市桃山町五丁目180-1	0562-48-1809
60	知多市歴史民俗博物館	※478-0047	知多市緑町12-2	0562-33-1571
61	船橋楽器資料館	482-0031	岩倉市八剣町石橋11	0587-37-5100
62	マスプロ美術館	470-0124	日進市浅田町上納	052-802-2266
63	岩崎城歴史記念館	※470-0131	日進市岩崎町市場67	0561-73-8825
64	東郷町郷土資料館	※470-0162	愛知県東郷町大字春木字西羽穴225-4	0561-38-4111
65	長久手町郷土資料室	※480-1121	愛知県長久手町武蔵塚204 長久手古戦場内	0561-62-6230
66	トヨタ博物館	480-1131	愛知県長久手町大字長湫字横道41-100	0561-63-5151
67	名都美術館((財)林美術財団)	480-1116	愛知県長久手町杖ヶ池301	0561-62-8884
68	愛知県立芸術大学芸術資料館(法隆寺金堂壁画模写展示館)	※480-1194	愛知県長久手町大字岩作字三ヶ峯1-1	0561-62-1180
69	師勝町歴史民俗資料館	※481-0006	西春日井郡師勝町大字熊之庄字御榊53	0568-25-3600
70	愛知県清洲貝殻山貝塚資料館	※452-0932	西春日井郡清洲町朝日字貝塚1	052-409-1467
71	春日町中央公民館郷土資料室	※452-0961	西春日井郡春日町大字落合字東出8-2	052-400-2700
72	はるひ美術館	※452-0961	西春日井郡春日町大字落合字八幡裏1-1	052-401-3881
73	西枇杷島町問屋記念館	※452-0045	西春日井郡西枇杷島町西六軒町20	052-502-7575
74	大口町歴史民俗資料館	※480-0126	丹羽郡大口町伝右一丁目35	0587-94-0055
75	七宝町郷土資料館	※497-0002	海部郡七宝町大字遠島字十坪119-3	052-444-2511
76	七宝町七宝焼アートヴィレッジ	※497-0002	海部郡七宝町大字遠島字十三割2000	052-443-7588
77	美和町歴史民俗資料館	※490-1205	海部郡美和町大字花正字七反地1	052-442-8522
78	甚目寺町歴史民俗資料館	※490-1111	海部郡甚目寺町大字甚目寺東大門8	052-443-0145
79	蟹江町歴史民俗資料館	※497-0032	海部郡蟹江町大字今字蟹江浦23	0567-95-3812
80	弥富町歴史民俗資料館	※498-0017	海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方731	0567-65-4355
81	佐織町中央公民館・歴史民俗資料室	※496-8011	海部郡佐織町大字諏訪字郷西456の1	0567-26-1123
82	あいち健康の森 健康科学総合センター 健康科学館	※470-2101	知多郡東浦町大字森岡字源吾山1-1	0562-82-0211
83	東浦町郷土資料館	※470-2103	知多郡東浦町大字石浜字桜見台18-4	0562-82-1188
84	杉本美術館(財団法人)	470-3232	知多郡美浜町美浜緑苑1-12-1	0569-88-5171
85	南知多ビーチランド	470-3233	知多郡美浜町奥田428-1	0569-87-2000
86	豊丘郷土資料館(美浜ナチュラル村内)	470-2414	知多郡美浜町大字豊丘字中平井1	0569-82-5321
87	美術の森	470-2401	知多郡美浜町布土半月85-1	0569-82-3500
88	武豊町歴史民俗資料館	※470-2336	知多郡武豊町字山ノ神20-1	0569-73-4100
89	醸造「伝承館」	470-2343	知多郡武豊町字小迎51	0569-72-0030

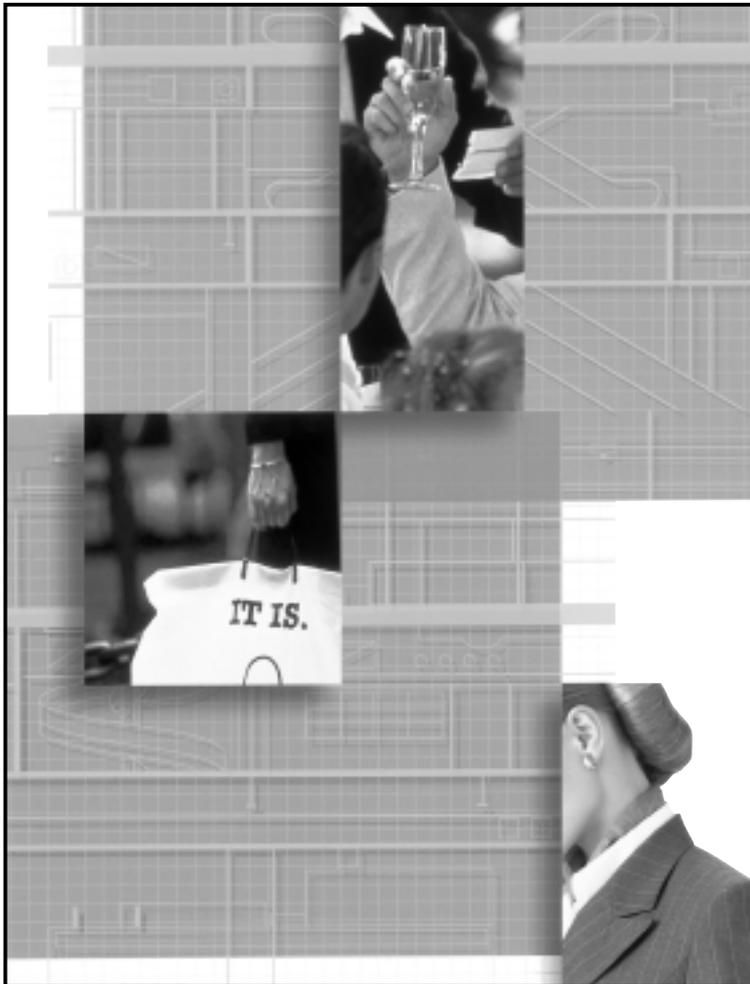
番号	施設名	郵便番号	住所	電話番号
《三河地区》				
90	豊橋市美術博物館	※440-0801	豊橋市今橋町3-1	0532-51-2882
91	豊橋市自然史博物館	※441-3147	豊橋市大岩町字大穴1-238	0532-41-4747
92	豊橋市二川宿本陣資料館	※441-3155	豊橋市二川町字中町65	0532-41-8580
93	岡崎市美術博物館	※444-0002	岡崎市高隆寺町字峠1 岡崎市中央総合公園内	0564-28-5000
94	岡崎信用金庫資料館	444-0038	岡崎市伝馬通一丁目58	0564-24-2367
95	おかざき世界子ども美術博物館	※444-0005	岡崎市岡町字鳥居戸1-1	0564-53-3511
96	岡崎市美術館	※444-0864	岡崎市明大寺町字茶園11-3	0564-51-4280
97	史料館 八丁味噌の郷	444-0923	岡崎市八帖町字往還69	0564-21-1355
98	三河武士のやかた家康館	※444-0052	岡崎市康生町561 岡崎公園内	0564-24-2204
99	岡崎市郷土館	※444-0022	岡崎市朝日町三丁目36-1	0564-23-1039
100	菩提樹館	444-2106	岡崎市真福寺町薬師寺山6	0564-45-4626
101	豊川閣寺寶館	442-8538	豊川市豊川町1	0533-85-2030
102	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	※442-0064	豊川市桜ヶ丘町79-2	0533-85-3775
103	碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館	※447-0853	碧南市浜町2-3	0566-48-3761
104	刈谷市美術館	※448-0852	刈谷市住吉町四丁目5	0566-23-1636
105	豊田市郷土資料館	※471-0079	豊田市陣中町一丁目21	0565-32-6561
106	豊田市美術館	※471-0034	豊田市小坂本町八丁目5-1	0565-34-6610
107	豊田市民芸館	※470-0331	豊田市平戸橋町波岩86-100	0565-45-4039
108	安城市歴史博物館	※446-0026	安城市安城町城堀30	0566-77-6655
109	はとギャラリー冬青書屋	445-0861	西尾市本町14	0563-56-7373
110	西尾市岩瀬文庫	※445-0847	西尾市亀沢町480	0563-56-2459
111	蒲郡市博物館	※443-0035	蒲郡市栄町1188	0533-68-1881
112	新城市設楽原歴史資料館	※443-1305	新城市竹広字信玄原552	0536-22-0673
113	知立市歴史民俗資料館	※472-0041	知立市新地町番割22-2	0566-83-1133
114	高浜市やきもの里かわら美術館	※444-1325	高浜市青木町九丁目6-18	0566-52-3366
115	一色学びの館	※444-0423	幡豆郡一色町大字一色字東前新田8	0563-72-3880
116	吉良町歴史民俗資料館	※444-0514	幡豆郡吉良町大字白浜新田字宮前59-1	0563-32-3373
117	三好町立歴史民俗資料館	※470-0224	西加茂郡三好町大字三好字陣取山44-1	0561-34-5000
118	和紙展示館	※470-0562	西加茂郡小原村大字永太郎216-1	0565-65-2151
119	設楽町奥三河郷土館	※441-2301	北設楽郡設楽町大字田口字アラコ14	0536-62-1440
120	東栄町立博物館・民芸館・花祭会館	※449-0214	北設楽郡東栄町大字本郷字大森1	0536-76-1266
121	御園高原自然学習村	※449-0201	北設楽郡東栄町大字御園字坂場119	0536-76-1491
122	古橋懐古館(財団法人)	441-2513	北設楽郡稲武町大字稲橋字タヒラ8	0536-82-2100
123	鳳来町立鳳来寺山自然科学博物館	※441-1944	南設楽郡鳳来町門谷字森脇6	0536-35-1001
124	鳳来町立長篠城址史跡保存館	※441-1634	南設楽郡鳳来町長篠字市場22	0536-32-0162
125	作手村歴史民俗資料館	※441-1423	南設楽郡作手村大字高里字縄手上35	0536-37-2211
126	ヨコタ博物館	441-1413	南設楽郡作手村大字白鳥字北ノ入15-1	0536-37-2613
127	一宮町歴史民俗資料館	※441-1231	宝飯郡一宮町一宮豊70	0533-93-3013
128	田原市博物館	※441-3421	田原市田原町巴江11-1	0531-22-1720
129	やしの実博物館(伊良湖自然科学博物館)	441-3624	渥美郡渥美町大字伊良湖字宮下3000-65	0531-35-6631
130	渥美町郷土資料館	※441-3695	渥美郡渥美町大字古田字岡ノ越6-4	0531-33-1127

愛知県博物館協会規約

- 第1条 この会は、愛知県にある博物館及びこれに類する施設を持って組織する。
- 第2条 この会は、会員相互の連絡をはかり、博物館事業の振興をはかることを目的とする。
- 第3条 この会は前条の目的を達成するため、概ね次の事業を行う。
- 1 連絡会議の開催
 - 2 研究会、研修会、視察見学等の開催
 - 3 その他必要な事業
- 第4条 この会を運営するために理事会を設ける。理事会は総会において会員より選出された理事若干名をもって構成する。
- 1 理事会は互選により会長1名、副会長1名を定める。
 - 2 この会に監事2名をおき、会計を監査する。
監事は総会において選出する。
 - 3 理事及び監事の任期は2か年とする。
 - 4 理事会の実務を補佐するため、実行委員会を設ける。
実行委員は会長が委嘱する。
- 第5条 この会の事務局は、会長の定める理事の属する施設に置き、その事務を処理するため会長が書記、会計を委嘱する。
- 第6条 この会の経費は会費及びその他収入をもって支弁する。
会費は、1口10,000円とする。但し、県立及び市立の施設は2口以上とする。その他の施設にあっては、その規模により増すことができる。
- 第7条 この会の予算、事業計画及び決算は、総会において議決承認をうけるものとする。
- 第8条 この会の会計年度は、毎年4月1日より翌年3月31日までとする。
- 第9条 この規約に定めのない事項は、必要に応じて総会で定めるものとする。

昭和39年1月16日 議決
昭和50年5月7日 一部改正
昭和56年4月1日 一部改正
昭和58年4月26日 一部改正
昭和62年5月22日 一部改正
平成3年5月22日 一部改正

※平成17年3月31日現在。



人のいる、空間。

人と人、人とモノ、人と情報が行き交う空間を創造すること。それは、私たち人を包み込むより広い環境との接点を形づくることでもあります。

丹青社は、生活者の視点にたったデザインと豊富な実績に基づく技術を両輪に、これら人をとりまく空間づくりをあらゆる面からサポート。

これからも人の五感にやさしい高感度な空間を織り上げてまいります。

調査・企画・デザイン・設計・制作・施工・監理・運営およびコンサルティング・プロデュース

- 商業・サービス空間 ■ 複合商業施設、物販・飲食店、サービス施設など
- 文化空間 ■ 各種博物館と関連施設、企業資料館、各種教育センターなど
- レジャー・アミューズメント空間 ■ テーマパーク、各種娯楽施設など
- 文化振興イベント ■ 博覧会、展覧会、文化・スポーツイベントなど
- 宣伝・販促イベント ■ 企業展示会、見本市、プロモーションイベントなど
- パブリック空間 ■ 学校、医療・福祉施設、地域・観光振興施設、駅・空港など
- ビジネス空間 ■ オフィス、ショールーム、会議施設、研修施設など
- サイン・モニュメント ■ サイン・モニュメント、オブジェ、アートワークなど

より良い「社会交流空間づくり」にむけて—。

株式会社 丹青社

東京都台東区上野5-2-2 TEL.03-3836-7221 (代表)
札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・福岡・那覇
<http://www.tanseisha.co.jp>

*ISO14001認証取得(本社設計部門・IMC事業部および丹青IDS)

高度な技術が要求される美術品輸送。



技術と真心で世界の文化遺産を扱っています。



美術品のことなら伝統ある
日本通運 中部美術品支店へ!!

TEL. 052-581-5083
FAX. 052-551-2775

このゆび、と〜まれ。



人が集まり、楽しみ、学び、商う。
そんな場面づくりに私どもは、
大正13年の創業以来、携わってきました。
情報通信技術がどんなに高度化しようと、
人と人との直接的コミュニケーションの場は、
ますます重要な役割を担うものとなっています。
どうぞ、この指にとまってみてください。
きっと新しい「感動空間」が見えてくるはずです。

- 博覧会/展示会/展覧会/イベント/セレモニー/ウィンドディスプレイ
 - 文化施設(博物館・資料館・科学館)/商業施設(店舗・ショールーム)
 - 屋内・外サイン/モニュメント/オブジェ/POP/販促ツール/印刷
 - 映像システム/映像機器・装置/情報通信システム
 - 販促・紹介ビデオ/ディスプレイ映像/CM/映画/スライド
- 企画、デザイン、設計、制作、施工、運営、メンテナンスなど業務全般

KATO STUDIO

<http://www.katostudio.com> E-mail:info@katostudio.com

株式会社 **カトウスタジオ**

〒453-0023 名古屋市中村区若宮町4-39
本 社 / TEL.052-471-3141 FAX.052-482-0820
営業部 / TEL.052-471-2201 FAX.052-482-6210
〒460-0008 名古屋市中区栄5-1-1 パークサイドビル6F
栄オフィス / TEL.052-263-6468 FAX.052-263-6428
グループ制作会社 / (有)フタバ美装 TEL.052-449-2135

心地よい展示空間をめざしています

TAIYOSHA



総合広告美術 ■ 店舗 設計・施工
 株式会社 **太陽社**

岡崎本社 岡崎市上六名4-3-1 TEL 0564-53-1515 (代)
名古屋支店 名古屋市中村区鈍池町3-52 TEL 052-481-5501 (代)

e- contact

新しい時代を拓く
技術とソリューション。



世界中のあらゆる場所でさまざまな情報に触れることのできる現代。人と人、文化と文化の触れ合いが新しい価値観を生み出すように、ITが新たなイノベーションをもたらし、高信頼の情報システムによるe-contactが、時代を切り拓いていくことでしょう。JIPは、豊富な業務知識と最新の技術で、さまざまなビジネスシーンに最適なソリューションを展開。お客様にとって、より付加価値の高い情報システムとサービスを通じ、e-contactの世界を大きく広げています。

JIP

日本電子計算

〒103-8217 東京都中央区日本橋茅場町1-8-1
お問い合わせ先 広報室 ☎03-3668-6170
<http://www.jip.co.jp/>

sign & display
Master

Total Sign Communication

看板／広告／ネオン／展示

株式
会社

マスター

〒491-0024 一宮市富士3-3-1
TEL(0586)71-6711 FAX(0586)73-9696



私たちヨツハシ株式会社は、営業力・企画力・技術力を磨き、ハイクオリティーな製品でお客様のニーズにお応えしていきます。また、ISMSとISO14001の規格に沿い、お客様からお預かりしている情報資産及び保有する情報資産を守るとともに、環境負荷の軽減に取り組むことで環境保全に努め、皆様からより一層信頼される企業になれるよう、全社をあげて取り組んでいます。

FANTASTIC WORLD
IN CREATIVE
PRINTING

地球に優しい  企業をめざして...

創り出す印刷



ヨツハシ株式会社／四橋印刷株式会社

〒501-1136 岐阜市黒野南1丁目90番地
TEL<058>293-1010(代) FAX<058>293-1007
URL : <http://www.yotsuhashi.com>
E-mail : info@yotsuhashi.com



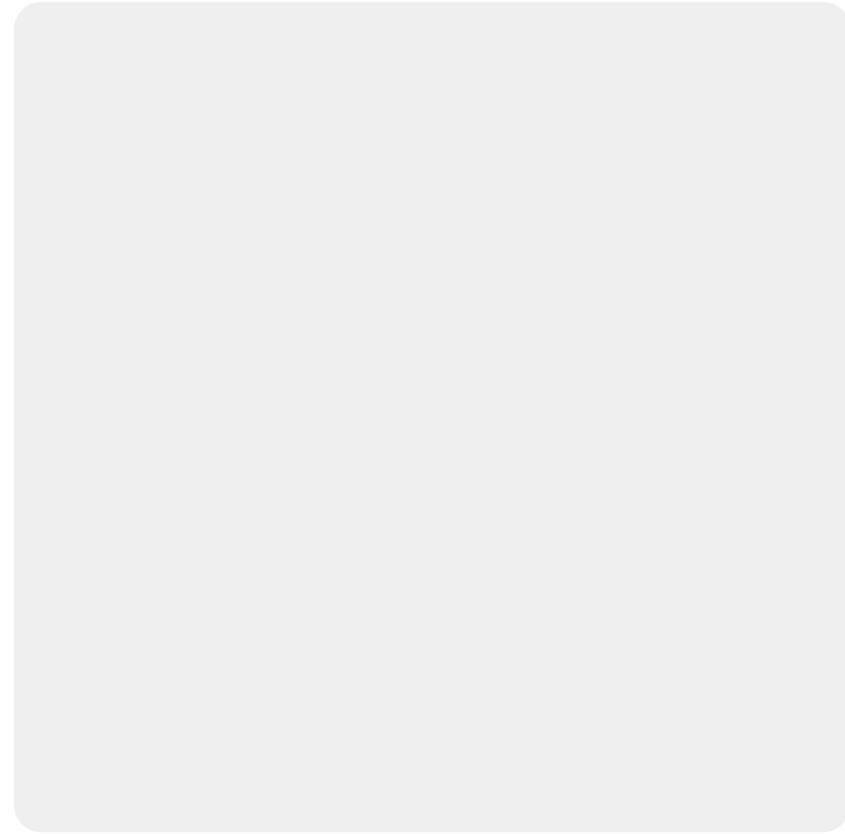
愛知県博物館協会40年史

平成17年3月31日

発 行 愛知県博物館協会
名古屋市中区栄2-17-1
名古屋市科学館内
TEL.052-201-4486

企画・編集 愛知県博物館協会

制 作 ヨツハシ株式会社
岐阜市黒野南1-90



CDの中には、下記情報が入っています。

- 愛知県博物館協会規約（平成17年 3 月31日現在）
- 愛知県博物館協会名簿（平成17年 3 月31日現在）
- 愛知県博物館協会年表（昭和37年度～平成15年度）
- 『愛知県博物館協会20年史』（昭和59年）
- 『愛知県博物館協会30年史』（平成 6 年）
- 『愛知県博物館協会40年史』（平成17年）
- 『活きている博物館』（平成12年）
- 『あいち子ども体験ミュージアム事業報告書』（平成13年）
- 『伝えるということは？～学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ～』（平成15年）